

茨城県教育財団文化財調査報告第152集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

木工台遺跡 2
(上 卷)

平成 11 年 7 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第152集

北浦複合団地造成事業地内
埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

ほっくたい
木上_{たか}台遺跡 2
(上 卷)

平成 11 年 7 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



第285号住居跡遺物出土状況



第285号住居跡遺物出土状況

序

茨城県は、鹿行地域の総合的發展を目指して、東関東自動車道の潮来～水戸間の延伸や、これを補完する国道や主要地方道等の幹線道路の整備を図っております。このため、この地域は、都市的開發の可能性が極めて高くなってきております。このような状況の中で、北浦複合団地整備推進事業が計画されたもので、その予定地内には木工台遺跡をはじめ多くの遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、平成9年4月から平成10年3月まで木工台遺跡の発掘調査を実施してまいりました。この調査によって貴重な遺構、遺物が検出され、郷土の歴史を解明する上で多大の成果をあげることができました。

本書は、木工台遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、北浦町教育委員会、北浦町開発課をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成11年7月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成9年度に発掘調査を実施した、茨城県行方郡北浦町大字内宿に所在する木上台遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成9年4月1日～平成10年3月31日
整 理 平成10年4月1日～平成11年7月31日
- 3 本遺跡の発掘調査は、調査第1課長沼田文夫の指揮のもと、調査第2班長中山忠久、主任調査員荒井保雄、高野節夫が平成9年4月1日から平成10年3月31日まで、主任調査員茂木悦男、長谷川聡が平成9年4月1日から平成9年6月30日まで、主任調査員小林孝、寺門千勝、川村満博が平成9年10月1日から平成10年3月31日まで担当した。
- 4 本遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一の指揮のもと、主任調査員荒井保雄が平成10年4月1日から平成11年3月31日まで、主任調査員高野節夫が平成10年4月1日から平成11年7月31日まで担当し、第1章、第2章、第3章第1節、第2節、第3節1、2、3、4、5、6、7、8、第4節を荒井が、第3章第3節1、4、5、第4節を高野が執筆した。
- 5 本書の作成にあたり、出土土器の編年については、北茨城市立中妻小学校教諭榎村宣行氏にご指導いただいた。
- 6 本遺跡から出土した鉄器及び鉄滓の金属学的分析については、岩手県立博物館に、炭化材分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。
- 7 発掘調査及び整理に際し、ご指導、ご協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅱ系座標を用いて区画し、木工台遺跡はX軸 = +11,560m, Y軸 = +60,400mの交点を基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。(第1図)

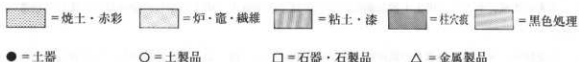
- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 堀・溝-SD 掘立柱建物跡-SB その他-SX

遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-TP

土層 攪乱-K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- (1) 遺跡全体図は縮尺500分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E N-10°-W)

なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

- (4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台(脚)径 E-高台(脚)高 F-つまみ径 G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	きたらふくごうだんちせうせいじきけつなさいせうぶんかざいのさくし						
書名	北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	木工台遺跡2						
巻次	Ⅲ						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第152集						
編者名	荒井 保雄 高野 節夫						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029 (225) 6587						
発行年月日	1999 (平成11) 年6月30日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
木工台遺跡	茨城県行方郡 北浦町大字内宿 字井戸作 1,410番地ほか	08424 53	36度 06分 06秒	140度 30分 25秒	19974001～ 19980331	21,753㎡	北浦複合団地造 成事業に伴う事 前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
木工台遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	1軒	縄文土器		縄文時代から平安時代 にかけての集落跡。特 に、古墳時代後期の集 落が中心となっている。 また、平安時代の鍛冶 工房跡が見つかってい る。
		弥生時代	竪穴住居跡	5軒	弥生土器		
		古墳時代	竪穴住居跡	101軒 上坑 1基	土師器(坏・高坏・甕・ 瓶)、須恵器(坏・坏 蓋・甕)、土製品(土 玉・紡錘車)、石製品 (紡錘車)、鉄製品(鐵)		
		奈良・平安時代	竪穴住居跡	80軒	土師器(坏・高台付坏・ 甕)、須恵器(坏・高 台付坏・坏蓋・甕・ 甕・円面甕)、土製品 (土玉・管状土錘・紡 錘車・羽口)、石製品 (紡錘車)、鉄製品(鐵・ 刀子・釘)		
		鍛冶工房跡	1軒				
		孤立柱建物跡	9棟				
		十坑	2基				
		中世	地下式竈	2基			
		時期不明	竪穴住居跡	10軒			
			上坑	392基			
			溝	18条			
			不明遺構	2基			

目 次

— 上 卷 —

序

例 言

凡 例

抄 録

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序の検討	7
第3節 遺構と遺物	9
1 竪穴住居跡	9
(第108～211号住居跡)	

— 下 卷 —

1 竪穴住居跡	397
(第213～256号住居跡)	
2 鍛冶工房跡	545
3 掘立柱建物跡及び柱穴群	547
4 土 坑	560
5 地下式堀	573
6 溝	581
7 不明遺構	586
8 遺構外出土遺物	589
第4節 ま と め	601
付 章	619

上 卷 插 图 目 次

第 1 图	木工台道踏厨边道踏分布图	6	第 34 图	第116 B 号住居踏出土遗物实测图	53
第 2 图	基本上层图	7	第 35 图	第118 号住居踏实测图	54
第 3 图	木工台道踏调查区设定图	8	第 36 图	第118 号住居踏出土遗物实测图	55
第 4 图	第108 号住居踏实测图	10	第 37 图	第119 号住居踏实测图(1)	56
第 5 图	第108 号住居踏出土遗物实测图	11	第 38 图	第119 号住居踏实测图(2)	57
第 6 图	第109 A 号住居踏实测图	13	第 39 图	第119 号住居踏出土遗物实测图	58
第 7 图	第109 A 号住居踏出土遗物实测图	14	第 40 图	第120 A · 120 C · 120 D · 120 E 号 住居踏实测图(1)	60
第 8 图	第109 B 号住居踏实测图	16	第 41 图	第120 A · 120 C · 120 D · 120 E 号 住居踏实测图(2)	61
第 9 图	第109 B 号住居踏出土遗物实测图	17	第 42 图	第120 A 号住居踏出土遗物实测图	62
第 10 图	第110 A · 110 B · 110 C 号住居踏 实测图(1)	18	第 43 图	第120 C 号住居踏出土遗物实测图	64
第 11 图	第110 A · 110 B · 110 C 号住居踏 实测图(2)	19	第 44 图	第120 D 号住居踏出土遗物实测图	65
第 12 图	第110 A 号住居踏出土遗物实测图(1)	21	第 45 图	第120 E 号住居踏出土遗物实测图(1)	68
第 13 图	第110 A 号住居踏出土遗物实测图(2)	22	第 46 图	第120 E 号住居踏出土遗物实测图(2)	69
第 14 图	第110 A 号住居踏出土遗物实测图(3)	23	第 47 图	第120 E 号住居踏出土遗物实测图(3)	70
第 15 图	第111 号住居踏实测图	26	第 48 图	第121 号住居踏实测图	72
第 16 图	第111 号住居踏出土遗物实测图	27	第 49 图	第121 号住居踏出土遗物实测图	73
第 17 图	第112 号住居踏实测图(1)	29	第 50 图	第122 号住居踏实测图	75
第 18 图	第112 号住居踏实测图(2)	30	第 51 图	第122 号住居踏出土遗物实测图	76
第 19 图	第112 号住居踏出土遗物实测图(1)	31	第 52 图	第123 A · 123 B 号住居踏实测图(1)	78
第 20 图	第112 号住居踏出土遗物实测图(2)	32	第 53 图	第123 A 号住居踏实测图(2)	79
第 21 图	第113 A · 113 B 号住居踏实测图(1)	34	第 54 图	第123 A 号住居踏出土遗物实测图	79
第 22 图	第113 A 号住居踏实测图(2)	35	第 55 图	第124 号住居踏实测图	81
第 23 图	第113 A 号住居踏出土遗物实测图	36	第 56 图	第124 号住居踏出土遗物实测图	82
第 24 图	第114 号住居踏实测图	39	第 57 图	第125 A · 125 C 号住居踏实测图(1)	83
第 25 图	第114 号住居踏出土遗物实测图	40	第 58 图	第125 C 号住居踏实测图(2)	84
第 26 图	第115 号住居踏实测图(1)	42	第 59 图	第125 A 号住居踏出土遗物实测图	84
第 27 图	第115 号住居踏实测图(2)	43	第 60 图	第125 B 号住居踏实测图(1)	85
第 28 图	第115 号住居踏出土遗物实测图(1)	44	第 61 图	第125 B 号住居踏实测图(2)	86
第 29 图	第115 号住居踏出土遗物实测图(2)	45	第 62 图	第125 B 号住居踏出土遗物实测图	87
第 30 图	第116 A · 116 C 号住居踏实测图(1)	48	第 63 图	第125 C 号住居踏出土遗物实测图	88
第 31 图	第116 A · 116 C 号住居踏实测图(2)	49	第 64 图	第126 A · 126 C 号住居踏实测图(1)	90
第 32 图	第116 A 号住居踏出土遗物实测图	50	第 65 图	第126 A · 126 C 号住居踏实测图(2)	91
第 33 图	第116 B 号住居踏实测图	52	第 66 图	第126 A 号住居踏出土遗物实测图	93

第 67 页	第126 B 号住居跡実測図①	95	第 104 页	第135 B 号住居跡実測図①	143
第 68 页	第126 B 号住居跡実測図②	96	第 105 页	第135 B 号住居跡実測図②	144
第 69 页	第126 B 号住居跡出土遺物実測図	97	第 106 页	第135 B 号住居跡出土遺物実測図①	145
第 70 页	第127 A 号住居跡実測図	99	第 107 页	第135 B 号住居跡出土遺物実測図②	146
第 71 页	第127 A 号住居跡出土遺物実測図	100	第 108 页	第136 A 号住居跡実測図	147
第 72 页	第127 B 号住居跡実測図	101	第 109 页	第136 A 号住居跡出土遺物実測図	148
第 73 页	第127 B 号住居跡出土遺物実測図	102	第 110 页	第136 B 号住居跡実測図	149
第 74 页	第127 C 号住居跡実測図	103	第 111 页	第136 B 号住居跡出土遺物実測図	150
第 75 页	第127 C 号住居跡出土遺物実測図	104	第 112 页	第136 C 号住居跡実測図	152
第 76 页	第127 D 号住居跡実測図①	105	第 113 页	第136 C 号住居跡出土遺物実測図①	153
第 77 页	第127 D 号住居跡実測図②	106	第 114 页	第136 C 号住居跡出土遺物実測図②	154
第 78 页	第127 D 号住居跡出土遺物実測図	106	第 115 页	第136 D 号住居跡実測図	156
第 79 页	第128 A・128 B 号住居跡実測図	108	第 116 页	第136 D 号住居跡出土遺物実測図	157
第 80 页	第128 A 号住居跡出土遺物実測図	110	第 117 页	第137 号住居跡実測図	159
第 81 页	第129 号住居跡実測図	112	第 118 页	第137 号住居跡出土遺物実測図	160
第 82 页	第129 号住居跡出土遺物実測図	113	第 119 页	第138 A 号住居跡実測図	161
第 83 页	第130 号住居跡実測図	114	第 120 页	第138 A 号住居跡出土遺物実測図	162
第 84 页	第130 号住居跡出土遺物実測図	115	第 121 页	第138 B・138 C 号住居跡実測図①	164
第 85 页	第131 号住居跡実測図	116	第 122 页	第138 B 号住居跡実測図②	165
第 86 页	第131 号住居跡出土遺物実測図	117	第 123 页	第138 B 号住居跡出土遺物実測図	165
第 87 页	第132 A 号住居跡実測図①	118	第 124 页	第138 C 号住居跡出土遺物実測図	167
第 88 页	第132 A 号住居跡実測図②	119	第 125 页	第139 号住居跡実測図	169
第 89 页	第132 A 号住居跡出土遺物実測図	120	第 126 页	第139 号住居跡出土遺物実測図	170
第 90 页	第132 B 号住居跡実測図	122	第 127 页	第140 号住居跡実測図	171
第 91 页	第132 B 号住居跡出土遺物実測図	123	第 128 页	第140 号住居跡出土遺物実測図	171
第 92 页	第133 号住居跡実測図	125	第 129 页	第141 号住居跡実測図	172
第 93 页	第133 号住居跡出土遺物実測図①	127	第 130 页	第141 号住居跡出土遺物実測図	173
第 94 页	第133 号住居跡出土遺物実測図②	128	第 131 页	第142 号住居跡実測図	174
第 95 页	第133 号住居跡出土遺物実測図③	129	第 132 页	第142 号住居跡出土遺物実測図	174
第 96 页	第134 A・134 B 号住居跡実測図①	132	第 133 页	第144 号住居跡実測図	175
第 97 页	第134 A 号住居跡実測図②	133	第 134 页	第144 号住居跡出土遺物実測図	176
第 98 页	第134 A 号住居跡出土遺物実測図	134	第 135 页	第145 A 号住居跡実測図①	179
第 99 页	第134 B 号住居跡出土遺物実測図	135	第 136 页	第145 A 号住居跡実測図②	180
第 100 页	第134 C・134 D 号住居跡実測図	137	第 137 页	第145 A 号住居跡出土遺物実測図	181
第 101 页	第134 C・134 D 号住居跡出土遺物 実測図	138	第 138 页	第145 B 号住居跡実測図①	183
第 102 页	第135 A 号住居跡実測図	139	第 139 页	第145 B 号住居跡・出土遺物 実測図②	184
第 103 页	第135 A 号住居跡出土遺物実測図	140	第 140 页	第147 号住居跡実測図	185

第 141 图	第148号住居跡実測図……………186	第 179 图	第160号住居跡出土遺物実測図……………236
第 142 图	第148号住居跡出土遺物実測図……………187	第 180 图	第161 A 号住居跡実測図(1)……………238
第 143 图	第149号住居跡実測図……………189	第 181 图	第161 A 号住居跡実測図(2)……………239
第 144 图	第149号住居跡出土遺物実測図……………190	第 182 图	第161 A 号住居跡出土遺物実測図……………240
第 145 图	第150 A 号住居跡実測図……………192	第 183 图	第161 B・161 C 号住居跡実測図……………241
第 146 图	第150 A 号住居跡出土遺物実測図……………193	第 184 图	第162号住居跡実測図……………243
第 147 图	第150 B 号住居跡実測図……………194	第 185 图	第162号住居跡出土遺物実測図……………244
第 148 图	第150 B 号住居跡出土遺物実測図(1)……………196	第 186 图	第163号住居跡実測図……………245
第 149 图	第150 B 号住居跡出土遺物実測図(2)……………197	第 187 图	第163号住居跡出土遺物実測図……………246
第 150 图	第150 C 号住居跡実測図……………199	第 188 图	第164号住居跡実測図……………248
第 151 图	第150 C 号住居跡出土遺物実測図……………200	第 189 图	第164号住居跡出土遺物実測図……………249
第 152 图	第150 D 号住居跡実測図……………202	第 190 图	第165号住居跡実測図……………251
第 153 图	第150 D 号住居跡出土遺物実測図……………203	第 191 图	第165号住居跡出土遺物実測図……………252
第 154 图	第151号住居跡実測図……………204	第 192 图	第166 A 号住居跡実測図(1)……………253
第 155 图	第151号住居跡出土遺物実測図……………205	第 193 图	第166 A 号住居跡実測図(2)……………254
第 156 图	第152号住居跡実測図……………207	第 194 图	第166 A 号住居跡出土遺物実測図(2)……………254
第 157 图	第152号住居跡出土遺物実測図……………208	第 195 图	第166 A 号住居跡出土遺物実測図(1)……………255
第 158 图	第153号住居跡実測図……………210	第 196 图	第166 B 号住居跡実測図……………258
第 159 图	第153号住居跡出土遺物実測図……………211	第 197 图	第166 B 号住居跡出土遺物実測図……………259
第 160 图	第154号住居跡実測図……………213	第 198 图	第167号住居跡実測図……………261
第 161 图	第154号住居跡出土遺物実測図……………214	第 199 图	第167号住居跡出土遺物実測図……………262
第 162 图	第155 A 号住居跡実測図……………215	第 200 图	第168 A 号住居跡実測図……………263
第 163 图	第155 A 号住居跡出土遺物実測図……………216	第 201 图	第168 A 号住居跡出土遺物実測図……………264
第 164 图	第155 B 号住居跡実測図……………218	第 202 图	第168 B 号住居跡・出土遺物実測図……………266
第 165 图	第155 B 号住居跡出土遺物実測図……………219	第 203 图	第169 A・169 B 号住居跡実測図(1)……………268
第 166 图	第156号住居跡実測図(1)……………220	第 204 图	第169 A 号住居跡実測図(2)……………169
第 167 图	第156号住居跡実測図(2)……………221	第 205 图	第168 A 号住居跡出土遺物実測図……………270
第 168 图	第156号住居跡出土遺物実測図……………222	第 206 图	第170号住居跡実測図……………271
第 169 图	第157号住居跡実測図(1)……………224	第 207 图	第170号住居跡出土遺物実測図……………272
第 170 图	第157号住居跡実測図(2)……………225	第 208 图	第171号住居跡実測図(1)……………274
第 171 图	第157号住居跡出土遺物実測図……………226	第 209 图	第171号住居跡実測図(2)……………275
第 172 图	第158号住居跡実測図(1)……………227	第 210 图	第171号住居跡出土遺物実測図……………276
第 173 图	第158号住居跡実測図(2)……………228	第 211 图	第172号住居跡実測図(1)……………278
第 174 图	第158号住居跡出土遺物実測図(1)……………229	第 212 图	第172号住居跡実測図(2)……………279
第 175 图	第158号住居跡出土遺物実測図(2)……………230	第 213 图	第172号住居跡出土遺物実測図……………280
第 176 图	第158号住居跡出土遺物実測図(3)……………231	第 214 图	第173号住居跡実測図……………282
第 177 图	第159号住居跡実測図……………233	第 215 图	第173号住居跡出土遺物実測図……………283
第 178 图	第160号住居跡実測図……………234	第 216 图	第174号住居跡実測図……………285

第 217 页	第174号住居跡出土遺物実測図(1)……287	第 255 页	第188 A 号住居跡出土遺物実測図……341
第 218 页	第174号住居跡出土遺物実測図(2)……288	第 256 页	第188 B 号住居跡実測図……343
第 219 页	第175号住居跡実測図……290	第 257 页	第188 B 号住居跡出土遺物実測図……345
第 220 页	第176号住居跡実測図……291	第 258 页	第190号住居跡実測図……347
第 221 页	第176号住居跡出土遺物実測図……291	第 259 页	第190号住居跡出土遺物実測図……347
第 222 页	第177号住居跡実測図……293	第 260 页	第193 A・193 B 号住居跡実測図……348
第 223 页	第177号住居跡出土遺物実測図……294	第 261 页	第193 A 号住居跡出土遺物実測図……349
第 224 页	第178号住居跡実測図……297	第 262 页	第193 B 号住居跡出土遺物実測図……351
第 225 页	第178号住居跡出土遺物実測図……298	第 263 页	第193 C 号住居跡実測図……352
第 226 页	第179号住居跡実測図……299	第 264 页	第194号住居跡実測図……354
第 227 页	第179号住居跡出土遺物実測図(1)……301	第 265 页	第194号住居跡出土遺物実測図……355
第 228 页	第179号住居跡出土遺物実測図(2)……302	第 266 页	第195号住居跡実測図……356
第 229 页	第181 A 号住居跡実測図……305	第 267 页	第198号住居跡実測図……357
第 230 页	第181 A 号住居跡出土遺物実測図……306	第 268 页	第198号住居跡出土遺物実測図……357
第 231 页	第181 B 号住居跡実測図……308	第 269 页	第199号住居跡実測図……358
第 232 页	第181 B 号住居跡出土遺物実測図……309	第 270 页	第199号住居跡出土遺物実測図……359
第 233 页	第182号住居跡実測図……311	第 271 页	第200号住居跡実測図……360
第 234 页	第182号住居跡出土遺物実測図……312	第 272 页	第200号住居跡出土遺物実測図……361
第 235 页	第183 A 号住居跡実測図(1)……314	第 273 页	第201号住居跡実測図……362
第 236 页	第183 A 号住居跡実測図(2)……315	第 274 页	第201号住居跡出土遺物実測図……363
第 237 页	第183 A 号住居跡出土遺物実測図(1)……316	第 275 页	第202号住居跡実測図……364
第 238 页	第183 A 号住居跡出土遺物実測図(2)……317	第 276 页	第202号住居跡出土遺物実測図……365
第 239 页	第183 B・183 C 号住居跡実測図(1)……321	第 277 页	第203 A・203 B 号住居跡・出土遺物 実測図……367
第 240 页	第183 B 号住居跡実測図(2)……322	第 278 页	第203 D 号住居跡実測図……369
第 241 页	第183 B 号住居跡出土遺物実測図……322	第 279 页	第203 D 号住居跡出土遺物実測図……370
第 242 页	第184号住居跡実測図……323	第 280 页	第204号住居跡実測図……372
第 243 页	第184号住居跡出土遺物実測図……324	第 281 页	第204号住居跡出土遺物実測図……373
第 244 页	第186 A 号住居跡実測図(1)……326	第 282 页	第205号住居跡実測図……375
第 245 页	第186 A 号住居跡実測図(2)……327	第 283 页	第205号住居跡出土遺物実測図……376
第 246 页	第186 A 号住居跡出土遺物実測図……328	第 284 页	第206号住居跡実測図……377
第 247 页	第186 B 号住居跡実測図(1)……330	第 285 页	第207号住居跡実測図……378
第 248 页	第186 B 号住居跡実測図(2)……331	第 286 页	第208号住居跡実測図……379
第 249 页	第186 B 号住居跡出土遺物実測図(1)……332	第 287 页	第208号住居跡出土遺物実測図(1)……381
第 250 页	第186 B 号住居跡出土遺物実測図(2)……333	第 288 页	第208号住居跡出土遺物実測図(2)……382
第 251 页	第186 C 号住居跡実測図……335	第 289 页	第208号住居跡出土遺物実測図(3)……383
第 252 页	第187号住居跡実測図……337	第 290 页	第208号住居跡出土遺物実測図(4)……384
第 253 页	第187号住居跡出土遺物実測図……338	第 291 页	第209 A 号住居跡実測図……386
第 254 页	第188 A 号住居跡実測図……340		

第 292 図	第209 A号住居跡出土遺物実測図1)···388	第 296 図	第210号住居跡実測図·····393
第 293 図	第209 A号住居跡出土遺物実測図2)···389	第 297 図	第210号住居跡出土遺物実測図·····394
第 294 図	第209 B号住居跡実測図·····391	第 298 図	第211号住居跡実測図·····395
第 295 図	第209 B号住居跡出土遺物実測図·····392	第 299 図	第211号住居跡出土遺物実測図·····396

上 卷 表 目 次

表 1	木工台遺跡周辺遺跡一覽表·····	4
-----	-------------------	---

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県は、鹿行地域の総合的發展を目指して、東関東自動車道の湘来～水戸間の延伸や、これを補完する国道や主要地方道路の整備を図っている。このため、この地域は、都市的開発の可能性が極めて高くなって来ている。このような状況の中で、北浦複合団地造成事業が計画された。

平成6年3月28日、茨城県は、茨城県教育委員会に対し、北浦複合団地造成事業予定地内の三和・内宿・成田及び長野江地区における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は、同年5月11・24日、6月23日に現地踏査、同年10月11～13日、平成7年1月24～26日に試掘調査を実施した。平成7年3月2日に茨城県教育委員会は、事業予定地内に、炭焼遺跡・三和貝塚・札場古墳群・成田古墳群・木工台遺跡・木工台古墳群・手配台遺跡及び内宿井戸作成跡が所在することを、茨城県に回答した。

平成8年1月30日、茨城県と茨城県教育委員会は、木工台遺跡(21,753㎡)の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を行った。同年2月5日、茨城県教育委員会は、茨城県に木工台遺跡を現状保存することが困難であるため、記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成9年4月1日から木工台遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

木工台遺跡の発掘調査は、平成8年10月1日から平成9年3月31日までの6か月間と、平成9年は4月1日から平成10年3月31日までの1年間の2回に分けて実施された。ここでは、平成9年度の調査経過についてその概要を記述する。

- 4月 1日から15日まで発掘調査に係わる事務処理、遺跡清掃、樹木の伐倒を行った。16日から調査区北側の畑地に7本の試掘トレンチを設定し、試掘調査を開始した。
- 5月 2日までにほぼ試掘調査を終了した。その結果、住居跡を多数確認した。6日から人力によるトレンチの拡張を行い、遺構調査を開始した。13日から調査区北部から重機による表土除去を開始した。21日には一時遺構調査を中止し、遺構確認作業を行った。
- 6月 12日に調査区北側の表土除去、遺構確認作業を終了し、18日から、方眼杭打ち測量を実施した。
- 7月 9日から調査区南側の樹木の伐倒を開始した。18日に伐倒を終了し、重機による表土除去を開始した。
- 8月 8日から調査区南側の遺構確認作業を開始し、12日に終了した。木工台遺跡の平成9年度調査区における遺構確認数は、住居跡200軒、掘立柱建物跡4棟、土坑633基、溝25条であった。
- 9月 1日から調査区南側の方眼杭打ちを実施し、引き続き住居跡の遺構調査を進めた。
- 10月 遺構調査を進め、これまでに住居跡74軒、土坑20基を終了した。
- 11月 遺構調査を進め、住居跡48軒、掘立柱建物跡1棟を終了した。
- 12月 引き続き遺構調査を進め、住居跡34軒、土坑30基、溝5条を終了した。
- 1月 引き続き遺構調査を進め、住居跡28軒、掘立柱建物跡1棟、土坑80基、溝9条を調査した。

2月 9日、「木工台遺跡の遺構、遺物について」というテーマで班内研修会を実施した。18日、航空写真撮影を行った。

23日、埋蔵文化財の啓発普及のため報道公開を行い、28日には、これまでの調査の成果をもとに現地説明会を開催した。多くの見学者が来跡した。

3月 6日、委託者に対しての報告会を実施した。19日までに補足調査を完了した。調査の結果、住居跡195軒、鍛冶工房跡2軒、掘立柱建物跡12棟、土坑394基、地下式竈2基、溝18条、不明遺構7基の遺構を検出した。安全対策を含め平成9年度予定の現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

木工台遺跡は、茨城県行方郡北浦町大字内宿字井戸作台1,410番地ほかに所在している。

北浦町は、茨城県の南東部に位置し、北は鹿島郡鉾田町に、東は北浦をはさんで同郡大洋村に、南は行方郡麻生町に、西は同郡王造町に隣接している。当町は、昭和30年に津澄村、栗村及び武田村の3村が合併して北浦村となり、平成9年10月1日に現在の北浦町となった。

当遺跡周辺の地形を概観すると、北浦湖岸近くまで延びている台地と湖岸沿いの低湿地、及び小河川によって形成された低地にはば分けられる。台地は王造町方面から潮来町方面に延びる標高35～39mの行方台地で、緩やかな丘陵を形成している。また、湖岸に面した台地の東側には支谷が樹枝状に入り組んでいる。台地の内陸部は、比較的広い台地を形成しているが、先端部分は細長く突出した舌状台地となっている。

地質は、砂鉄質の中粒砂よりなる石崎層、灰褐色のシルトからなる見和下層、黄褐色の中粒砂からなる見和上層、灰色中粒～粗粒の砂からなる竜ヶ崎砂礫層、灰白色粘土層の茨城粘土層、関東ローム層の順で堆積している。

木工台遺跡は、北浦町の北東部、北浦に注ぐ武田川の左岸標高約31～35mの舌状に張り出した台地上に位置している。当遺跡の南側の沖積低地は、水田として利用されている。水田と台地との比高は、約15mである。調査前の現況は山林と畑地である。

参考文献

- ・ 大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」1987年8月
- ・ 茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 水辺」1984年11月
- ・ 茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 磯浜・鉾田」1991年3月

第2節 歴史的環境

竜ヶ浦と北浦に面した行方台地は、北浦をはじめとした水系に恵まれており、古代から人々の生活に絶好の舞台となってきた。そのため、行方台地は縄文時代から中世にかけての遺跡が多く存在している。ここでは、当遺跡との関わりが深い縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代について述べることにする。

(1) 縄文時代

縄文時代になると県内各地に貝塚が形成されるようになり、当遺跡周辺でも15か所^①の貝塚が確認されている。貝塚をはじめ縄文時代の遺跡は、北浦に面する湖岸の台地上や武田川、山田川の両岸の台地上に多く見られる。調査が実施された遺跡として、次のような遺跡がある。森戸貝塚とも呼ばれる鬼越貝塚(5)は、昭和29年に調査され、後期の遺跡であることが判明した。^② 鷗ヶ居貝塚(28)は、昭和47年に調査され、中期から後期の遺跡であることが判明した。^③ 今山遺跡^④(31)、六台遺跡^⑤(34)、平遺跡^⑥(36)は、昭和63年から平成元年にかけて調査され、中期の集落跡であることが判明した。今山遺跡からは中期のファイヤーピットも確認されている。六台遺跡からは、中期のフラスコ状土坑が7基確認されている。また、茨城県立歴史館の学術調査^⑦によると、今山貝塚(31)は中期の貝塚、成田早川貝塚(10)は中期から後期の貝塚であるこ

とがわかった。この他には、出土遺物等により時期の判明している遺跡として、中期から後期にかけての遺跡として長野江貝塚(5)、両宿貝塚(14)、後期の遺跡として、並松遺跡(45)、後期から晩期にかけての遺跡として登呂井戸遺跡(40)、晩期の遺跡として、穴瀬貝塚(6)、大塚遺跡(29)等がある。平成8年に調査された三和貝塚(3)は、中期の貝塚と考えられていたが、出土遺物から前期前半の黒浜式の時期や前期後半の浮島式期の竪穴住居跡が確認され、前期の貝塚であることが判明した。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、包蔵地が確認されており、武田川流域と山田川流域に分布している。武田川流域には、両宿神明遺跡(50)、下山遺跡(13)等が所在し、山田川流域には、御門山遺跡(25)、南高岡平遺跡(55)、関戸遺跡(26)、古屋平遺跡(24)、中山遺跡(41)等が所在している。

(3) 古墳時代

古墳時代になると、強大な権力を有する豪族は支配者として各地に墳墓を築造するようになり、武田川や山田川流域の台地にも古墳群が形成された。武田川流域には、新橋古墳群(39)、大塚古墳群(15)、新郷古墳群(18)等がある。山田川流域には、下ンビン塚古墳群(20)、うなぎ塚古墳群(52)、1号墳のくびれ部から箱式石棺の出土が報告されている堂目木古墳群(21)等がある。堂目木古墳群(堂目木1号墳)は、箱式石棺の構造から7世紀代の古墳と考えられる。⁹⁾ そのほか、北浦西岸の台地上には礼場古墳群(2)、成田古墳群¹⁰⁾(4)がある。礼場古墳群においては、6世紀後半から8世紀初頭に築造された4基の古墳が確認され、成田古墳群では、7世紀代から8世紀初頭に築造された7基の古墳が確認されている。とりわけ、礼場古墳群第2号墳と成田古墳群第3号墳の被葬者は、遺物や主体部の形状から6世紀末葉から7世紀代の在地勢力の中でも首長的存在であったと考えられる。集落跡としては、六台遺跡、古屋敷遺跡¹⁰⁾(33)、平遺跡、今山遺跡、古館遺跡¹¹⁾(35)、風早遺跡¹²⁾(37)、炭焼遺跡¹³⁾(12)等が調査されている。

(4) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡の数は、古墳時代に比べると減少する。この遺跡としては、木工台遺跡¹⁴⁾(平成8年度調査区)(1)の他に、六台遺跡、古屋敷遺跡、平遺跡、今山遺跡、古館遺跡、平成3年に調査された菟浦沢遺跡¹⁵⁾(46)がある。木工台遺跡からは、多数の住居跡の他に製鉄関連遺構が確認されている。

※文中の〈 〉内の番号は、第 図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

(註) 参考文献

- 1) 北浦村教育委員会『北浦村文化財地図』1986年8月
- 2) 茨城県『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』1979年3月
- 3) 北浦村教育委員会『北浦村鶴ヶ居貝塚』1972年7月
- 4) 山田地区遺跡発掘調査会『今山遺跡調査報告書』1990年3月
- 5) 山田地区遺跡発掘調査会『六台遺跡調査報告書』1990年3月
- 6) 山田地区遺跡発掘調査会『平遺跡調査報告書』1990年3月
- 7) 茨城県歴史館『県内貝塚における動物遺存体の研究(3)』1981年3月
- 8) 茂木雅博『堂目木1号墳調査報告』『茨城考古学』第1号 茨城考古学会 1968年3月
- 9) 茨城県教育財団『北浦複合用地造成事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 炭焼遺跡 礼場古墳群 三和貝塚 成田古墳群』『茨城県教育財団文化財調査報告』第130集 1998年3月
- 10) 山田地区遺跡発掘調査会『古屋敷遺跡調査報告書』1990年3月

- 30 山田地区遺跡発掘調査会「古館遺跡調査報告書」1990年3月
 02 山田地区遺跡発掘調査会「風早遺跡調査報告書」1990年3月
 33 茨城県教育財団「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 木工台遺跡1」「茨城県教育財団文化財調査報告」第140集 1998年9月
 34 葛西沢遺跡調査会「葛西沢遺跡調査報告書」1991年11月

表1 周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	県 道 跡 番 号	時 代					番 号	遺 跡 名	県 道 跡 番 号	時 代					
			旧 石 器	縄 文 	弥 生	古 墳	奈良・平安 中 近 世 以 降				旧 石 器	縄 文 	弥 生	古 墳	奈良・平安 中 近 世 以 降	
①	木工台遺跡	1464				○	○	29	大塚遺跡	1419			○			
2	札幌古墳群	1478				○		30	千両山古墳群	1418				○		
3	三和貝塚	1490	○					31	今山貝塚(今山遺跡)	1437		○		○	○	
4	成田古墳群	1479				○		32	中山古墳群	1424				○		
5	長野江貝塚	1492	○					33	古塚敷(遺)跡	1428				○	○	○
6	穴瀬貝塚	1461	○					34	六台貝塚(六台遺跡)	1436		○		○	○	
7	金上遺跡	1459	○					35	古館(遺)跡	1426	○			○	○	○
8	遊聖神遺跡	1462	○					36	平遺跡	1439		○		○	○	○
9	塚原古墳群	1412				○		37	風早遺跡					○		
10	成田早川貝塚	1463	○					38	妙義台貝塚	1442		○				
11	木工台古墳群	1481				○		39	新塚古墳群	1415				○		
12	炭焼遺跡					○	○	40	戸呂井戸遺跡	1440		○				
13	下山遺跡	1466		○	○	○		41	中山遺跡	1441			○	○		
14	河宿貝塚	1465	○					42	京田古墳群	5168				○		
15	大塚古墳群	1470				○		43	袋入古墳群	5167				○		
16	松並古墳群	1417				○		44	前館遺跡	1467				○		
17	権現山古墳群	1414				○		45	並松遺跡	1434		○				
18	新堀古墳群	1471				○		46	葛西沢遺跡			○		○	○	
19	殿山古墳群	1469				○		47	清水台古墳群	1420				○		
20	ドンビン塚古墳群	1482				○		48	台山古墳群	1422				○		
21	堂目木古墳群	1483				○		49	北原古墳群	1416				○		
22	大峰古墳群	1484				○		50	肉宿神明遺跡	5174		○	○	○		
23	地蔵後古墳群	1485				○		51	塚原古墳群	1480				○		
24	占州平遺跡	1453		○	○	○		52	うなぎ塚古墳群	5166		○	○	○		
25	御門山遺跡	1454			○			53	諏訪後古墳群	1421				○		
26	関戸遺跡	1472		○	○	○		54	鬼越貝塚	1444		○				
27	御門山古墳群	1486		○		○		55	南高岡平遺跡	5164		○	○	○		
28	鶴ヶ居貝塚	1435	○													



第1図 木工台遺跡周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

木工台遺跡は、北浦町の北東部、行方台地東部の標高31～35mの台地縁辺部から南に伸びる舌状台地上に位置する。その東側には北浦が湖水を湛えている。調査区は平成8年度と平成9年度に分けられる。平成8年度は、遺跡北側の東西約240m、南北約160m、面積約20,494㎡を調査した。今回報告する平成9年度は、遺跡南側の東西約114m、南北約237m、面積約21,753㎡を調査した。現況は畑地、山林である。遺跡の南側には、内宿井戸作城跡があり、支谷を挟んで西側には、内宿館跡がある。

今回の調査によって、竪穴住居跡195軒、鍛冶工房跡1軒、掘立柱建物跡9棟、土坑275基、地下式塚2基、不明遺構2基を検出した。竪穴住居跡は縄文時代前期1軒、弥生時代中期5軒、古墳時代後期91軒、奈良・平安時代86軒、時期不明10軒である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に260箱出土した。遺物の大部分は古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器や須恵器で、竪穴住居跡の覆土及び床面から出土している。また、鉄製品のほか、羽口、鉄滓が出土する遺構も検出している。

第2節 基本層序の検討

調査区北西部（B5f4区）にテストピットを掘り、基本層序の観察を行った（第2図）。

ソフトロームはなく、表土直下からロームはすべてハードロームである。

第1層は、耕作土。厚さ約50cmで極暗褐色をしている。

第2層は、厚さ12～14cmの暗褐色のローム層で、武蔵野台地等という第1黒色帯に相当するものと考えられる。

第3層は、厚さ16～32cmの褐色のローム層で、始良Tn火山灰（AT）層が含まれる。

第4層は、厚さ20～34cmの締まりある褐色のローム層で、武蔵野台地等という第2黒色帯に相当すると考えられる。

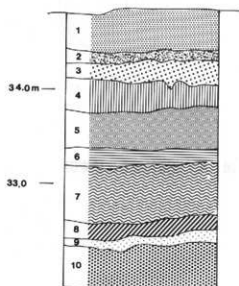
第5層は、厚さ38～56cmの褐色のローム層で、第4層より粘性が強く締まりもある。

第6層は、厚さ14～20cmの褐色のローム層で、第5層と同じく粘性・締まりとも強い。

第7層は、厚さ56～62cmの暗褐色のローム層で、粘性・締まりとも強い。

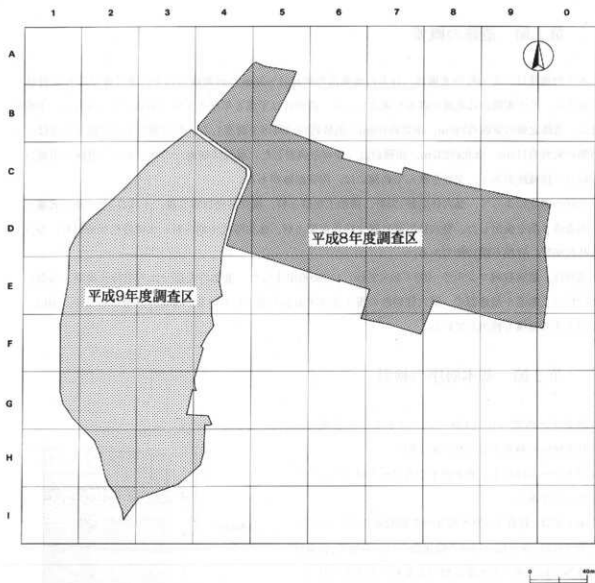
第8層は、厚さ10～18cmの暗褐色のローム層で、第7層と同じく、粘性・締まりとも強い。

第9層は、厚さ10～14cmの暗褐色のローム層で、締まりもあるが、特に粘性が強い。



第2図 基本土層図

第10層は、厚さ40～50cmの灰褐色の粘土層で、黒色の火山灰粒子を含み、粘性もあるが、特に締まりが強い。遺構は第2層上面で確認し、第3、4層を掘り込んで構築されている。



第3図 木工台遺跡調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡の遺構は、縄文時代から奈良・平安時代に至るもので、重複や建て直しも見られ、調査区の全面から195軒検出した。以下、検出された住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第108号住居跡（第4図）

位置 調査区の北部、C4b1区。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.50mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は24~32cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東壁下を除いて巡っている。上幅20~30cm、下幅6~14cm、深さ4~6cmで、断面形はじ字状である。

床 平坦で、北西コーナー部及び東壁から南壁にかけて踏み固められている。

ピット P1は長径30cm、短径26cmの楕円形、深さ46cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から吹き口部まで127cm、内袖最大幅122cm、壁外への掘り込みは79cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は耕作によって攪乱を受け、立ち上がりの状況は明確ではない。

覆土層解説

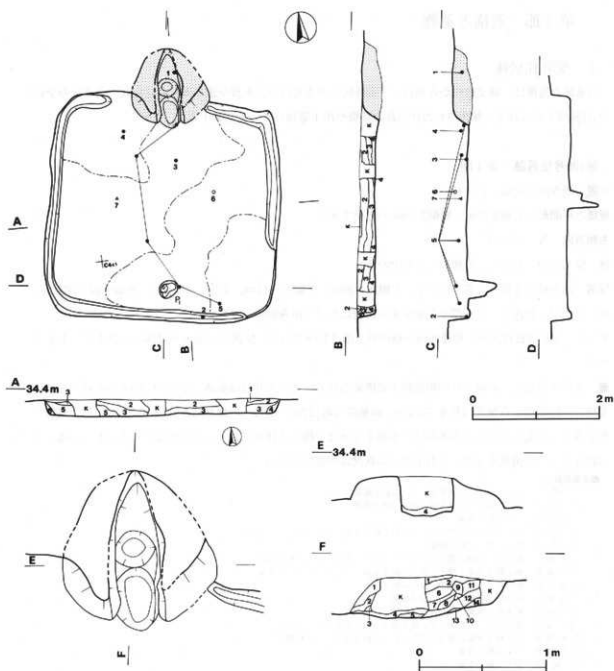
- 1 灰 褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム・粘土粒子少量、ローム中ブロック微量
- 5 暗 褐色 焼土・ローム粒子微量
- 6 暗 赤褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック・焼土・炭化・ローム粒子微量
- 7 暗 赤褐色 粘土粒子多量、焼土・ローム粒少量、ローム小ブロック微量
- 8 暗 赤褐色 粘土粒子多量、焼土・ローム粒子少量
- 9 暗 赤褐色 粘土粒子多量、ローム粒少量
- 10 暗 赤褐色 粘土粒子多量、ローム粒少量
- 11 暗 赤褐色 炭化・ローム粒少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 12 暗 赤褐色 粘土粒子多量、焼土・炭化・ローム粒子少量、炭化物微量
- 13 暗 赤褐色 ローム粒子少量
- 14 暗 褐色 ローム粒子少量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム粒少量、焼土・炭化粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・焼土粒子少量
- 4 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量
- 6 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片348点（坏片64点、皿片1点、蓋片1点、甕片278点、甌片4点）、須恵器片130点（坏片43点、蓋片12点、椀片2点、薬片73点）、土製品1点、鉄製品1点、鉄滓48.0gが出土している。覆土中層では、第5図4の須恵器環が竈付近から正位で、6の上玉が中央部東寄りから、7の鍔先が中央部西寄りから出土している。5の須恵器甌は、竈付近と中央部とP1付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。床面では、2の土師器高台付椀が南壁際から、3の土師器甕が中央部やや北寄りから出土している。竈内では、1の土師器椀が覆土下層から出土している。

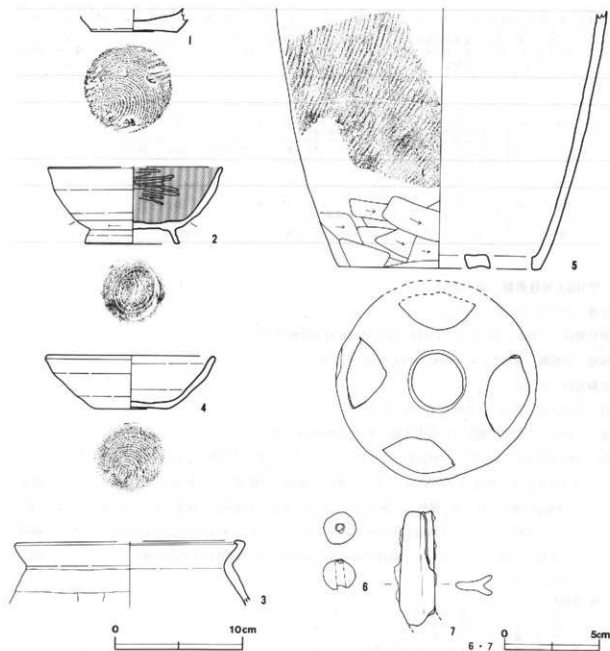


第4図 第108号住居跡実測図

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

第108号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第5図 1	碗 土器	B (1.9) C 6.8	底部片、平底。	底部回転糸切り。	石英・雲母 橙色 普通	P.4 壺内 10%



第5図 第108号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第5図 2	高台付輪 土器	A [13.8]	高台部から口縁部片。高台部はハの字状に開く。体部は内摩して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へつ磨き。体部下端回転へつ削り。高台足付け。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア におい黄橙色 普通	P 2 床面 PL106
		B 6.1				
		D 7.4				
		E 1.1				
3	釜 土器	A [18.0]	体部から口縁部片。口縁部は外反し、唇部を内側に折り込んでいる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P 3 床面 5%
		B (5.1)				
4	環 須恵器	A 13.4	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転余切り。	石英・雲母・スコリア・白色針状鉱物 明黄褐色 普通	P 1 覆土中 PL106 口縁部内面に油 脂が付着。
		B 4.2				
		C 5.8				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第5図 5	瓶 須恵器	B (20.1) C 15.9	底部から体部にかけての破片。平底。多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位の平行印き。体部下端へタテリ。内面ヘラナデ。	長石・スコリア に多い黄褐色 普通	P384 40% 覆土中 PL166 二次焼成

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
6	土 式	1.6	1.7	0.4	(3.5)	覆土中	DP1 90% PL167

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	瓶 先	(6.1)	(2.0)	1.0	(19.6)	覆土中	M1 PL179

第109A号住居跡(第6図)

位置 調査区の北部、C4f1区。

重複関係 本跡が、第109B号住居跡、第2号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.71m、短軸3.00mの長方形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 壁高は8~17cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、竈付近から中央部にかけて踏み固められている。

竈 東壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。北袖部は残存しているが、南袖部は耕作による擾乱のため壊されており、袖部の範囲だけ確認した。規模は、煙道部から焚き口部まで110cm、両袖最大幅[101]cm、壁外への掘り込みは55cmである。火床部は、床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。支脚は石を火床面に据え付け、その上に粘土をつめた土師器高台付椀と土師器杯を逆位に重ねた状態で出土している。高台付椀の高台部の粘土は、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

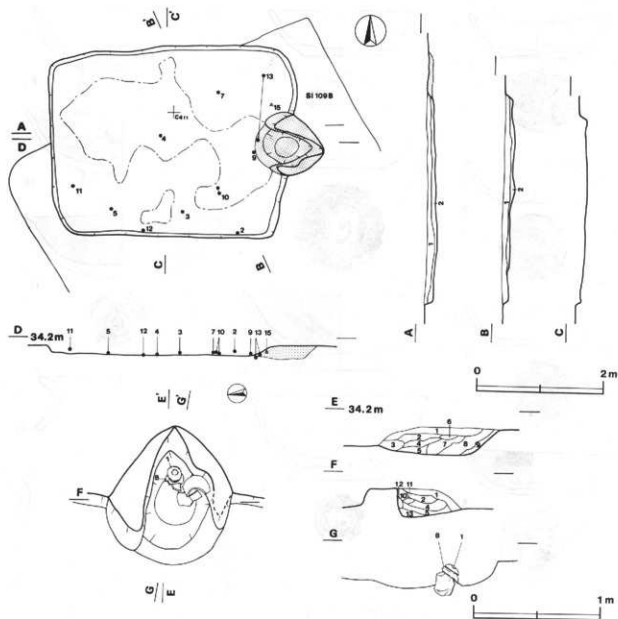
- 1 暗褐色 ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土・炭化・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量、炭化・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 6 黒褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 7 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土・炭化・ローム粒子微量
- 9 暗褐色 ローム・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 10 暗褐色 焼土・炭化・ローム粒子微量
- 11 褐色 粘土粒子少量、炭化・ローム粒子微量
- 12 暗褐色 粘土粒子少量、焼土・炭化・ローム粒子微量
- 13 暗褐色 粘土粒子少量、焼土・炭化・ローム粒子少量

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土器解説

- 1 黒褐色 焼土・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土・炭化・ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片685点(坏片126点、蓋片1点、薬片557点、小形薬片1点)、須恵器片40点(坏片22点、椀片2点、蓋片5点、薬片11点)、土製品1点、鉄製品1点が出土している。覆土上層では、第7図2の上師器杯が南壁際から斜位で出土している。覆土中層では、11の上師器高台付椀が南西側から、15の刀子が竈北袖部付近から出土している。覆土下層では、3の上師器杯が中央部南側から正位で、5の土師器杯が中央部南東よりか



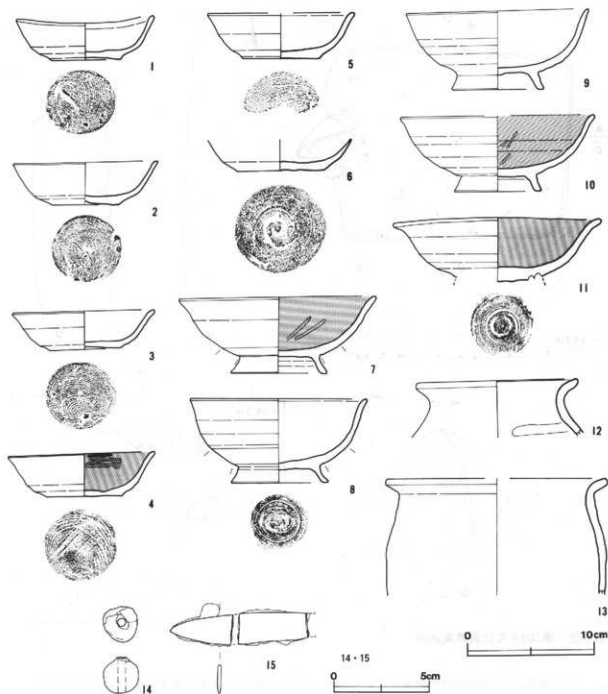
第6図 第109A号住居跡実測図

ら、7の土師器高台付椀が中央部北東寄りから逆位で、10の土師器高台付椀が南東側から逆位で出土している。床面では、4の土師器環が中央部から斜位で、9の土師器高台付椀が電付近から逆位で、13の土師器甕が北東コーナー部から、12の土師器甕が南壁下から出土している。竈内では、1の土師器環と8の土師器高台付椀が逆位で出土している。その他、覆土中から6の土師器環、14の土玉が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から10世紀中葉と考えられる。

第109A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	環 土師器	A 10.9 B 3.4 C 5.4	平底、体部は内壁して立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P5 100% 竈内 PL106 二次焼成



第7図 第109A号住居跡出土遺物実測図

図番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 2	坏 土師器	A 11.5	口縁部一部欠損。平底。体部は外 翻して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	石英・色調・焼成 にぶい黄褐色 普通	P 6 95% 覆土中 PL106
		B 3.5				
		C 5.4				
3	坏 土師器	A 11.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内 翻して立ち上がる。口縁部は外反 する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 底部回転糸切り。	長石・石英・スコ リア 明赤褐色 良好	P385 95% 覆土中 PL106 二次焼成
		B 3.1				
		C 5.4				
4	坏 土師器	A 11.6	体部から口縁部にかけて一部欠 損。平底。体部は内翻して立ち上 がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。 体部内面へツ磨き。底部回転糸切 り。内面黒色処理。	石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 7 60% 床面 PL106
		B 3.5				
		C 5.7				

採取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7種 5	坏 土 器	A 11.6	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色・普通	P 8 覆土中 二次焼成
		B 3.5				
		C 5.7				
6	坏 土 器	B (2.5)	底部から体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	石英・雲母 にふいば色 普通	P 9 覆土中 40%
		C 7.0				
7	高台付 土 器	A 15.5	体部から口縁部一部欠損。高台部はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へう巻き。体部下端回転糸切り。高台貼付け。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア にふいば色 良好	P11 覆土中 PL108 二次焼成
		B 6.1				
		C 7.6				
		D 1.5				
8	高台付 土 器	A 13.9	体部から口縁部一部欠損。高台部はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転糸切り。高台貼付け。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P12 覆土中 PL108 二次焼成
		B 6.8				
		D 7.7				
		E 1.4				
9	高台付 土 器	A 14.4	高台部から口縁部片。高台部はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。高台貼付け。	長石・石英・スコリア にふいば色 普通	P13 覆土中 PL106 二次焼成
		B 6.4				
		D 7.3				
		E 1.4				
10	高台付 土 器	A 15.3	高台部から口縁部片。高台部はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へう巻き。高台貼付け。内面黒色処理。	長石・雲母 にふいば色 普通	P14 覆土中 PL106 二次焼成
		B 6.0				
		D 6.9				
		E 1.4				
11	高台付 土 器	A 16.5	底部から口縁部片。高台部はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。高台貼付け。内面黒色処理。	石英・雲母 にふいば色 普通	P15 覆土中 PL106 二次焼成
		B (5.1)				
12	土 器	A 12.9	底部から口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英 にふいば色 普通	P17 床面 10%
		B (4.3)				
13	土 器	A 17.6	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部内・外面ナデ。	石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P16 床面 10%
		B (8.2)				

採取番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
14	土 器	1.9	1.8	0.4	(5.9)	覆土中	DP2 90% PL167

採取番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
15	刀	(7.0)	1.7	0.2	(17.8)	覆土中	M2 PL178

第109B号住居跡 (第8図)

位置 調査区の北部、C4 f1区。

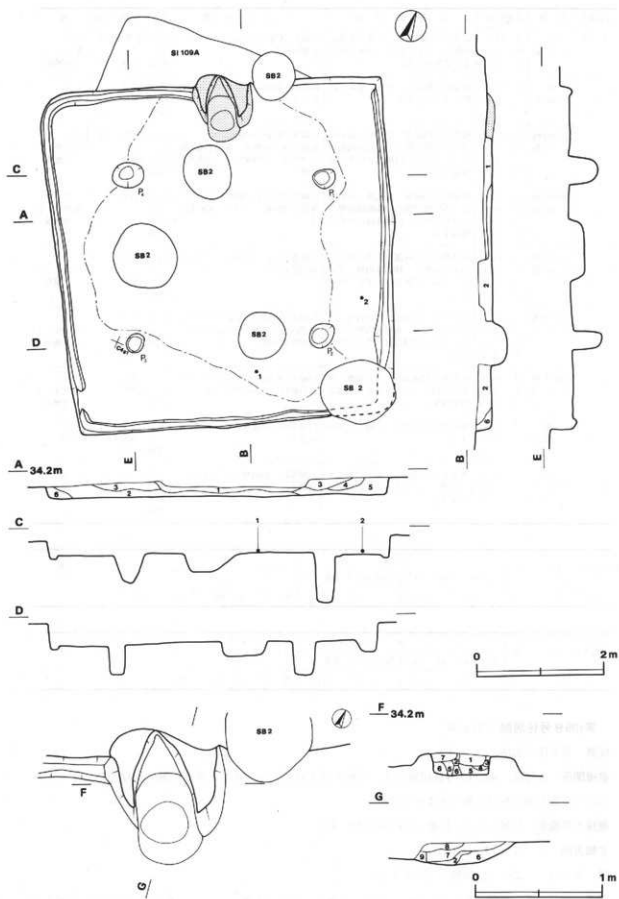
重複関係 本跡は、第109A号住居跡によって掘り込まれている。また、第2号掘立柱建物跡によって、中央部から南東方向にかけて掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.45m、短軸5.35mの方形である。

主軸方向 N-27°-W

壁 壁高は15~35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北コーナー部壁下を除いて通っている。上幅13~32cm、下幅5~12cm、深さ5~20cmで、断面形はU字状である。

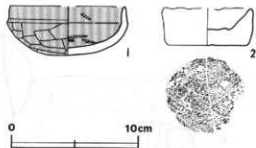


第8图 第109B号住居跡实测图

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P4は、長径30~48cm、短径24~40cmの楕円形、深さ46~80cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

竈 北西壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は煙道部から焚き口部まで108cm、両袖最大幅95cm、壁外への掘り込みは20cmである。火床部は、床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。



第9図 第109B号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 灰 赤 色 粘土中・小ブロック・粘土粒子中量、焼土中・小ブロック少量
- 2 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック中量、焼土大ブロック・粘土粒子少量
- 3 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土・粘土粒子少量、焼土中ブロック微量
- 4 灰 褐色 焼土小ブロック・焼土・粘土粒子少量
- 5 灰 褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック少量
- 6 暗 灰 色 粘土粒子多量
- 7 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック少量
- 8 極暗赤褐色 焼土中ブロック中量、焼土・粘土小ブロック少量
- 9 暗 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、粘土粒子微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土・ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 焼土小ブロック・ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム大・中ブロック微量
- 4 褐色 ローム中・小ブロック中量、ローム粒子少量
- 5 暗 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
- 6 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック中量、焼土小ブロック・ローム大・中・小ブロック少量

遺物 土師器片6点(壺片6点)が出土している。覆土下層では、第9図1の土師器坏が中央部南側から逆位で、2の手捏土器が中央部東側から逆位で出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。

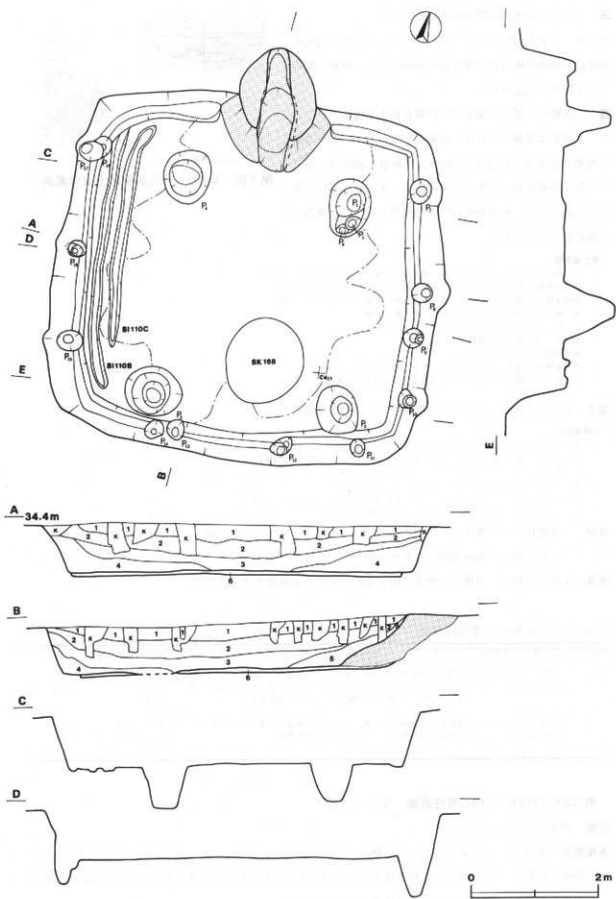
第109B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	土師器 環	A [9.2]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り後、ナデ、内面へ丸磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母 褐色 普通	P19 60% 覆土中 PL106
		B 3.9				
2	手捏土器 土師器 C	A [6.8]	底部から口縁部片。平底。突出した底部から外傾して立ち上がる。	口縁部及び体部内・外面ナデ。底部木葉痕。	石英・雲母 にふい褐色 普通	P20 80% 覆土中 PL106
		B 3.0				
		C 6.2				

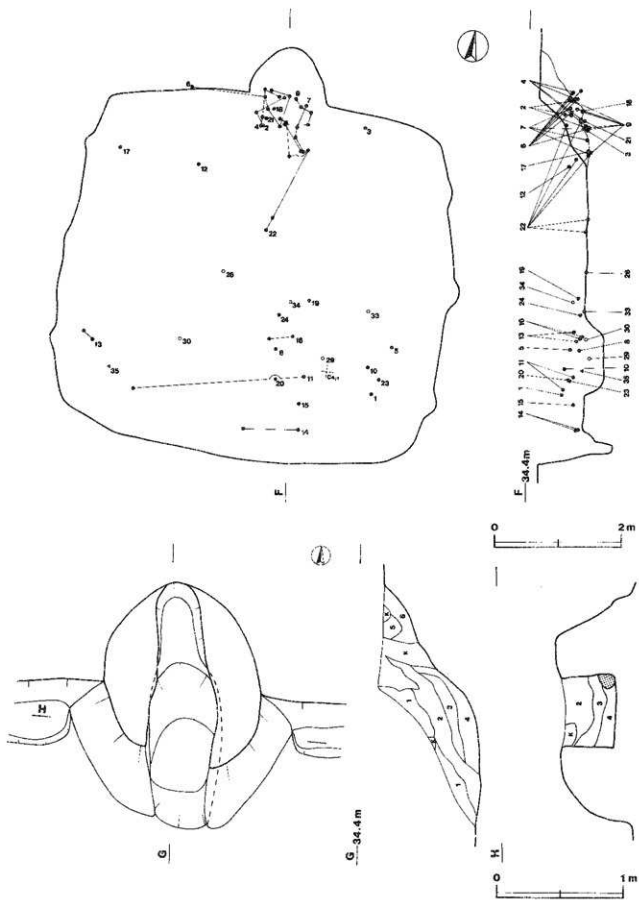
第110A・110B・110C号住居跡 (第10・11図)

位置 調査区の北部、C3i0区。

重複関係 第110A・110B・110C号住居跡は、2回の拡張が行われている。第1回目の拡張は第110C号住居跡の西壁を拡張し、第110B号住居跡を構築した段階である。第2回目の拡張は第110B号住居跡の上部に貼床して西壁を拡張し、第110A号住居跡を構築した段階である。



第10图 第110A·110B·110C号住居跡実測图(1)



第11图 第110A・110B・110C号住居跡実測图(2)

規模と平面形 第110A号住居跡は、長軸6.10m、短軸5.65mの方形である。第110B号住居跡は、長軸6.10m、短軸5.41mの長方形と推定される。第110C号住居跡は、長軸6.10m、短軸5.22mの長方形と推定される。

主軸方向 第110A・110B・110C号住居跡ともにN-0°である。

壁 第110A・110B・110C号住居跡の壁高は65～80cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第110A・110B・110C号住居跡ともに、全周している。第110A号住居跡は、上幅38～60cm、下幅8～18cm、深さ14～18cmで、断面形はJ字状である。第110B号住居跡は、上幅14～60cm、下幅4～18cm、深さ5～18cmで、断面形はU字状である。第110C号住居跡は、上幅16～60cm、下幅5～18cm、深さ4～18cmで、断面形はU字状である。

床 第110A号住居跡は、平坦で、中央部は踏み固められている。第110B号住居跡は、第110A号住居跡より2～7cm下位にあり、踏み固められた床面が検出されている。第110C号住居跡は、壁溝の検出状況から第110B号住居跡と同一床面と考えられる。

ピット 第110A号住居跡は、18か所(P1～P18)。P1～P4は、長径62～92cm、短径60～76cmの楕円形、深さ64～90cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5とP6は径40～44cmの円形、深さ74～76cmである。位置からP1の補助柱穴と考えられる。P7～P18は、径26～38cmの円形、深さ32～66cmで、壁際にある。位置から補助柱穴と考えられる。第110B・110C号住居跡のピットは検出されず厳密には不明であるが、第110A号住居跡の主柱穴P1～P4と同位置であったと推測される。

竈 第110A号住居跡は、北壁中央部に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から突き口部まで195cm、両袖最大幅176cm、壁外への掘り込みは84cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、6cmほど床面を掘りくぼめており、火熱を受け、赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。第110B・110C号住居跡の竈は、痕跡が検出されないことから厳密には不明であるが、第110A号住居跡の竈が第110B・110C号住居跡の段階から使用されていたか、同位置で造り替えが行われたものと考えられる。

覆土層解説

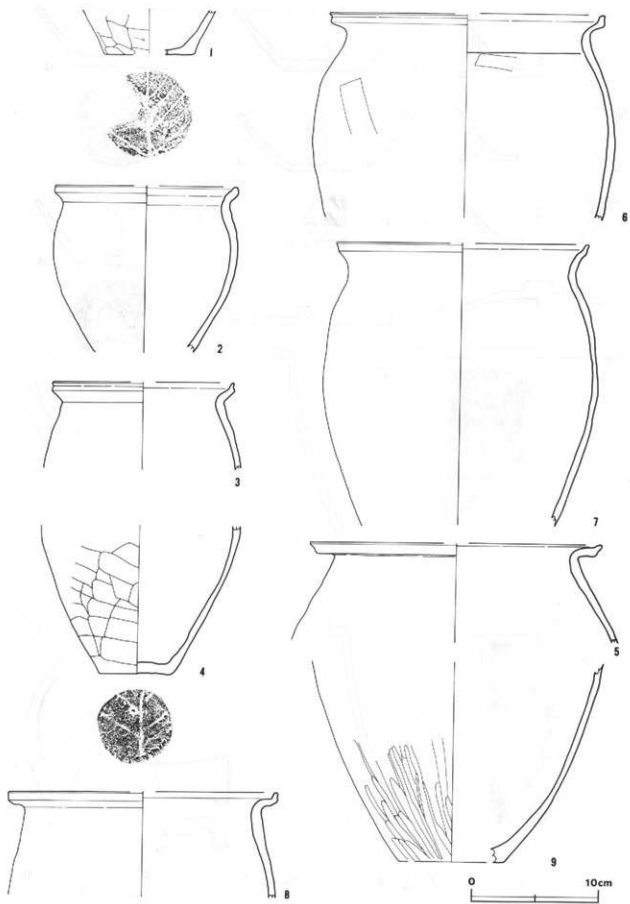
- 1 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 粘土粒子多量、焼土・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 粘土粒子少量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土・ローム小ブロック・焼土・炭化・ローム粒子微量
- 6 暗赤褐色 粘土粒子中量、ローム小ブロック・炭化・ローム粒子微量

覆土 第110A号住居跡は、5層(第1～5層)からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。第110B号住居跡の覆土は、単一層(第6層)で、ロームブロックやローム粒子を多く含むことから人為堆積と考えられる。第110C号住居跡は第110B号住居跡の床面と同じ高さと考えられるため、覆土は存在しない。

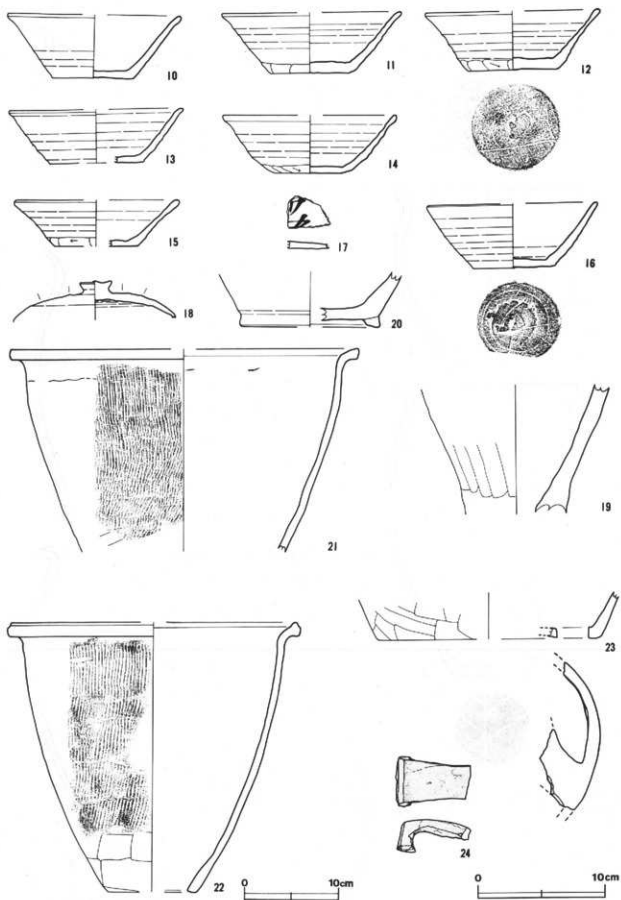
土層解説

- 1 暗褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 焼土・ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量

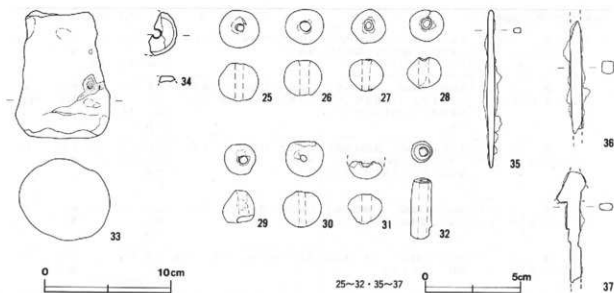
遺物 第110A号住居跡からは、土師器片1716点(坏片253点、甍片1378点、碗片84点、鉢片1点)、須恵器片908点(坏片393点、甍片466点、蓋片41点、甍片2点、飯片6点)、土製品4点、鉄製品1点、石製品1点、縄文土器片1点、鉄滓467.6g、含鉄滓252.5gが出土している。第12・13・14号覆土中層では、1の上師器甍、10の須恵器坏、23の須恵器瓶が中央部南東側から、5の上師器甍が中央部東側から、8の上師器甍が中央部南寄



第12图 第110A号住居跡出土遺物実測図(1)



第13图 第110A号住居跡出土物実測图(2)



第14図 第110A号住居跡出土遺物実測図(3)

りから、12の須恵器環が中央部北寄りから斜位で、11、15の須恵器環、20の須恵器長頸瓶が中央部南側から、34の石製紡錘車が中央部から出土している。覆土下層では、13の須恵器環が中央部南西側から、16の須恵器環、19の須恵器鉢、24の灰軸陶器平瓶把手片が中央部から、3の土師器甕が北壁際から、14の須恵器環が中央部南側から、17の須恵器環が北西コーナー部から、37の不明鉄製品が南西コーナー部から出土している。16は、逆位の状態で出土している。床面では、26の土玉が中央部から、29、30の土玉が中央部南寄りから、33の土製支脚が中央部東側から出土している。竈内では、2、4、6、7、9の土師器甕、18の須恵器蓋、21の須恵器甕が出土している。22の須恵器瓶は、竈内と中央部の床面から出土した破片が接合している。25、27、28、31の土玉、32の管状土錘、35の釘、36の鉄鎌が覆土中から出土している。第110B・110C号住居跡の遺物は細片であり、図示できるものはない。

所見 第110A号住居跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀中葉と考えられる。住居の拡張関係から、第110B・110C号住居跡の時期は、9世紀中葉以前と推定される。

第110A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	甕 土師器	B [3.5] C [7.2]	底部から体部下位片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。底部木葉痕。	石英・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P54 覆土中 5%
2	甕 土師器	A [14.4] B [13.1]	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P26 竈内 25%
3	甕 土師器	A [14.4] B [6.9]	体部から口縁部片。口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・スコリア・ 雲母 橙色 普通	P27 覆土中 15%
4	甕 土師器	B (11.8) C 5.7	底部から体部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。底部木葉痕。	長石・石英 橙色 普通	P28 竈内 PL107 15%

図版番号	器名	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 5	甗 土師器	A [23.1] B [7.7]	底部から口縁部片。体部は外反し、口縁部は強く外反する。底部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外側ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P31 覆土中
6	甗 土師器	A [21.8] B [16.1]	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反し、底部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ヘラナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P29 20% 壺内 PL107
7	甗 土師器	A [20.0] B [22.3]	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。底部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P20 15% 壺内
8	甗 土師器	A [21.4] B [8.3]	底部から口縁部片。口縁部は強く外反し、底部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P32 5% 覆土中
9	甗 土師器	B [15.8] C [8.2]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がる。	体部外面縦方向のヘラ書き、内面ナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P34 20% 壺内
第13図 10	坏 須恵器	A [13.8] B [5.1] C [8.4]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	長石・石英・スコリア・白色針状鉱物 にぶい褐色 良好	P21 40% 覆土中 PL108 二次焼成
11	坏 須恵器	A [14.3] B [4.8] C [6.4]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄褐色 良好	P38 40% 覆土中 PL106
12	坏 須恵器	A [13.8] B [4.7] C [7.0]	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて外側して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、二方向のヘラ削り。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P36 60% 覆土中 PL106 二次焼成
13	坏 須恵器	A [13.8] B [4.3] C [7.4]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	長石・石英・白色針状鉱物 にぶい黄褐色 良好	P39 35% 覆土中
14	坏 須恵器	A [13.7] B [4.6] C [5.3]	底部から口縁部片。平底。体部は外側して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部二方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄褐色 良好	P40 30% 覆土中
15	坏 須恵器	A [13.2] B [3.7] C [6.9]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄褐色 良好	P45 15% 覆土中
16	坏 須恵器	A [13.5] B [5.1] C [6.5]	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて外側して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。底部ヘラ削り。	長石・石英・白色針状鉱物 黄褐色 良好	P37 50% 覆土中 PL108
17	坏 須恵器	-	底部片。平底。	底部一方向のヘラ削り。底部外面に磨養。	長石・石英・白色針状鉱物 黄褐色 普通	P47 5% 覆土中 PL107
18	甗 須恵器	D [3.1] F [2.6] G [0.7]	つまみ部から天井部片。つまみはボタン状で、天井部は軽く丸い。	天井部内・外面ロクロナデ。天井部上段回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 良好	P48 60% 壺内 PL107
19	钵 須恵器	G [10.2]	底部から体部片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P25 15% 覆土中 PL107 二次焼成
20	長頸 須恵器	D [4.1] H [11.2] E [0.9]	底部から体部片。体部は外側して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。	石英 黄褐色 良好	P51 5% 覆土中 PL107
21	甗 須恵器	A [37.0] B [21.5]	底部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。外部外面縦位の平行叩き後、下方ヘラ削り。体部内面ナデ。	長石・石英・雲母 黄褐色 良好	P50 10% 壺内 PL107

図版番号	器種	寸法(cm)	器種の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装束	備考
第15図 22	甌 須恵器	A 21.0 B 28.6 C 19.2	胴部から口縁部片。胴部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。踵部は、上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦位の平行印。内面ヘラナデ。底部下縁へり削り。	石英・雲母 灰青色 良好	P52 15% 床面・瀝内
23	甌 須恵器	B (3.7) C 117.8	底部から口縁部片。胴部は外傾して立ち上がる。平底。多孔式。	胴部外面へり削り後、ヘラナデ。内面ナデ。	長石・石英・雲母にふい・灰色 良好	P35 5.5% 瀝土中
24	平版 灰胎陶器	-	把手片。	把手部内面へり削り、外面ナデ。灰胎輪軸。	長石 胎土色 灰白色 灰オリーブ色 青濁	P33 5.5% 瀝土中 PL106

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第14図25	土	Y	2.0	2.1	0.5	8.6	瀝土中	DP3 100% PL167
26	土	玉	1.9	2.0	0.6	6.9	床面	DP4 100% PL167
27	土	下	1.7	1.8	0.5	4.8	瀝土中	DP5 100% PL167
28	土	上	1.7	1.8	0.5	4.2	瀝土中	DP6 100% PL167
29	土	土	1.7	1.6	0.6	3.8	床面	DP7 100% PL167
30	土	玉	1.9	2.0	0.4	(6.1)	床面	DP8 90% PL167
31	土	土	(1.5)	(1.8)	0.3	(2.0)	瀝土中	DP9 35%
32	管状土器	(3.2)	1.1	0.5	(3.4)		瀝土中	DP10 80%
33	支脚	10.1	7.5	-	(95.6)		床面	DP11 90% PL172

図版番号	器種	計測値				右質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
34	粘板	(2.3)	(0.5)	(0.6)	(3.9)	粘板片	瀝土中	Q1 30% PL176

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
35	不明鉄製品	8.3	0.4	0.3	(3.5)	瀝土中	M3
36	釘	(3.2)	0.6	0.6	(8.9)	瀝土中	M4 PL179
37	鉄線	(5.8)	(1.6)	0.4	(4.4)	瀝土中	M63 PL178

第111号住居跡(第15図)

位置 調査区の北部、D4 a1区。

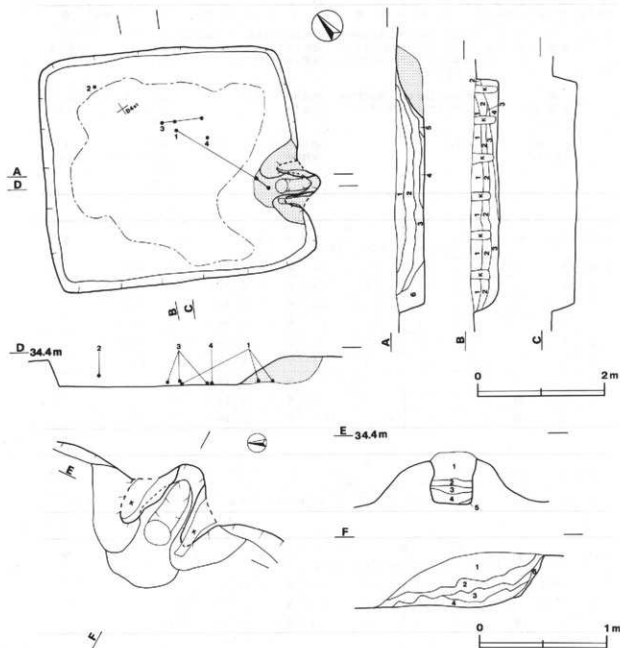
規模と平面形 長軸4.10m、短軸3.72mの長方形である。

主軸方向 N-123°-E

壁 壁高は37~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、中央部はよく踏み固められている。

竈 南東壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。両袖部は、耕作により攪乱を受け、一部残存しているだけである。規模は、煙道部から焚き口部まで106cm、両袖最大幅136cm、壁外への掘り込みは32cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。煙道部はあまり火熱を受けず、わずかに赤変している。火床部は、床面を3cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。



第15図 第111号住居跡実測図

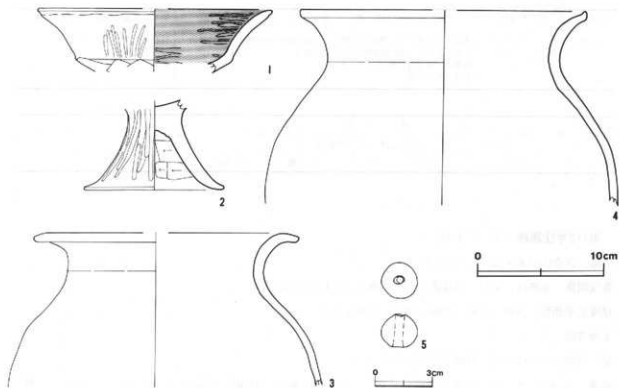
覆土層解説

- 1 褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 2 濃い赤褐色 粘土粒子多量、焼土粒子少量、焼土・ローム小ブロック微量
- 3 赤褐色 粘土粒子多量、焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 5 褐色 焼土・ローム粒子中量、ローム小ブロック・粘土粒子少量
- 6 褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量、焼土粒子微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 炭化・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量



第16図 第111号住居跡出土遺物実測図

5 灰 褐色 粘土粒子中量、炭化・ローム粒子少量、焼土粒子微量

6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片363点（坏片46点、甕片317点）、須恵器片112点（坏片51点、甕片60点、蓋片1点）、土製品1点、鉄滓8.3g、含鉄滓104.4gが出土している。覆土中層では、第16図2の土師器高坏が北コーナー部付近から出土している。覆土下層では、3の土師器甕が中央部北東寄りから出土している。床面では、1の土師器坏が中央部と竈付近から、4の土師器甕が中央部東寄りから出土している。5の土玉が覆土中から出土している。所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。古墳時代の住居跡であるが、竈が北側でなく南東壁に付設されているという点が特徴的である。

第111号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	土師器 坏	A [18.5] B (5.0)	体部から口縁部片。体部下位に稜を持ち、外反して立ち上がり口縁部に至る。端部は、上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ磨き。体部下端ヘラ削り。内面黒色処理。	雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P55 20% 床面 PL107 二次焼成
2	高土師器 坏	B (7.2) D 11.1 E 6.0	脚部から坏底部片。脚部はハの字状に大きく開く。	坏部内面磨き。脚部外面ヘラ削り後、縦位のヘラ磨き、内面ヘラ削り。	石英・雲母 褐色 普通	P57 30% 覆土中 PL107
3	甕 土師器	A [21.0] B (12.0)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は横方向に強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P58 20% 覆土中 PL107

図面番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第16図 4	甕 上部器	A [22.6] B (15.4)	体部から1輪部片。体部は内穿して立ち上がり、口縁部は外反する。輪部は、外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外両横ナデ。体部内・外両ナデ。	長石・石英・雲母に多い黄褐色 普通	P.39 床面 10%

図面番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
5	土 灰	1.8	1.9	0.5	5.2	獲 土 中 DP12	100% PL167

第112号住居跡 (第17・18図)

位置 調査区の北東部、E4 c1区。

重複関係 本跡は、第41・44号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.42m、短軸5.33mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は30~65cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー部と東壁下を除いて通っている。上幅20~34cm、下幅3~10cm、深さ4~10cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。東壁から3条、西壁から3条の間仕切溝が、中央部に向かって伸びている。東壁からの3条のうち2条は、P1とP2に向かって、西壁からの3条のうち2条は、P3とP4に向かってそれぞれ伸びている。長さ94~108cm、上幅14~24cm、下幅4~8cm、深さ6~16cmで、断面形はU字状である。南壁側中央部に馬蹄形状の高まりがある。

ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P4は、径32~40cmの円形、深さ82~92cmである。根椋と配列から主柱穴と考えられる。P5は径26cmの円形、深さ7cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は、径20cmの円形、深さ24cmであり、補助柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部に付設され、長軸102cm、短軸70cmの隅丸方形で、深さ74cm。断面形は長方形である。

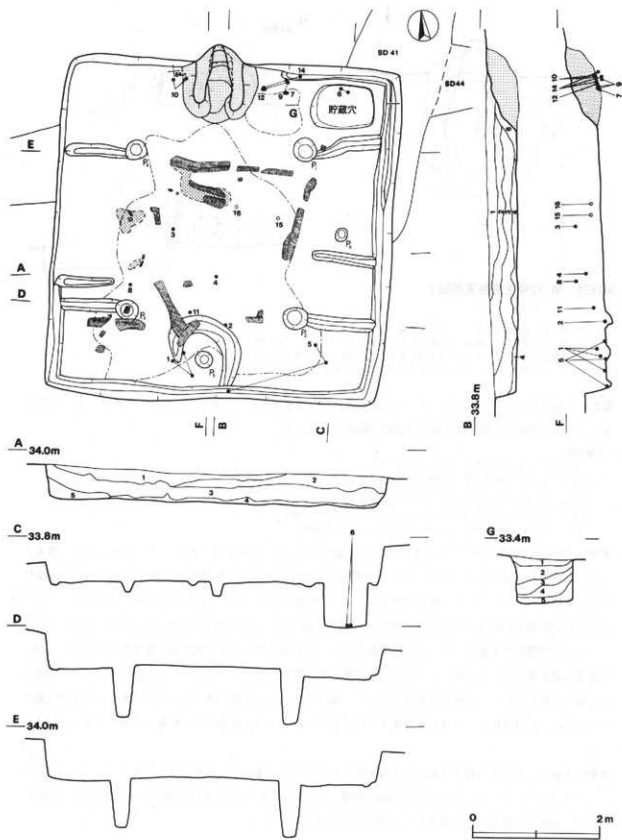
貯蔵穴土層解程

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

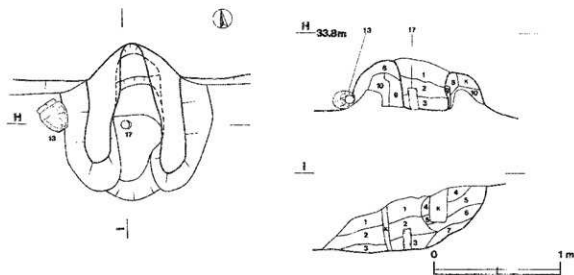
竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。両袖部の一部は、耕作により攪乱を受けているが全体的には残りがよい。天井部は崩落している。規模は、竈道部から焚き口部まで124cm、両袖最大幅119cm、壁外への掘り込みは28cmである。袖の内壁と煙道部の一部は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を5cm掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。火床部北側に、上製土脚が盛かされている。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層解程

- 1 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒中・ローム小ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土粒微量
- 3 暗 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 4 暗 褐色 焼土中・小ブロック・焼土・ローム・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム・焼土粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 6 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量



第17图 第112号住居跡実測图(1)



第18図 第112号住居跡実測図(2)

- 7 暗 褐色 粘土粒子多量、ローム粒子微量
 8 暗 褐色 炭化材・炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
 9 暗褐色褐色 焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化・ローム粒子少量、焼土・ローム小ブロック微量
 10 暗 褐色 焼土中ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化ローム粒子少量

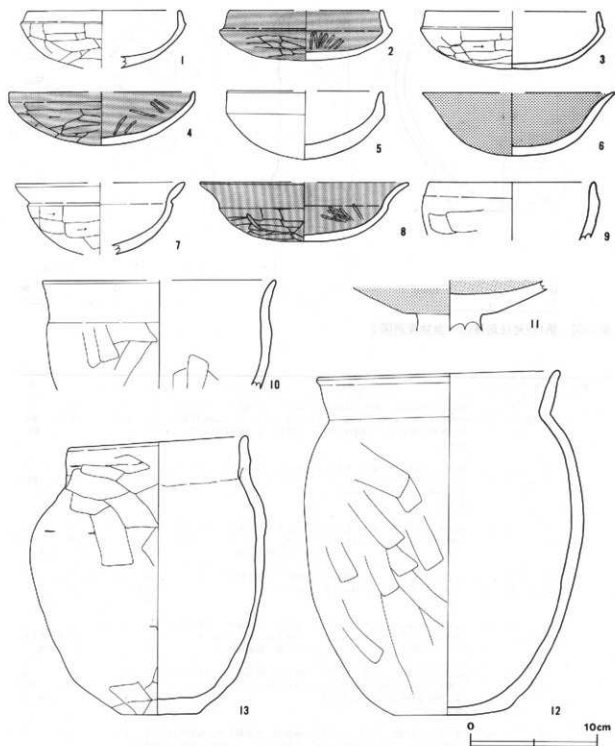
覆土 6層からなり、ローム小ブロックを含み不自然な堆積を示していることから、人為堆積と考えられる。また、中央部の覆土下層に焼土塊や炭化材が検出されている。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子多量、焼土・炭化粒子微量
 2 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック微量
 3 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
 4 暗 褐色 焼土・炭化粒子中量、ローム・焼土粒子少量
 5 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
 6 暗 褐色 粘土粒子少量、ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量

遺物 土師器片345点（坏片73点、甕片272点）、須恵器片14点（坏片7点、甕片7点）、土製品3点、縄文土器片1点、鉄滓1.4gが出土している。第19・20図覆土上層では、3の土師器坏が中央部から、8の土師器坏が中央部東側から出土している。覆土中層では、4の土師器坏、15の上下、16の管状土甕が中央部から、11の土師器奇坏が馬蹄形の高まり付近から出土している。床面では、2の土師器坏が馬蹄形の高まり付近から正位で、5の土師器坏が南東コーナー部と南壁際から、7の土師器坏、9の土師器碗が竈東袖部付近から、12の土師器甕が竈東袖部付近から横位で、14の土師器甕が北壁際から出土している。1の土師器坏は、P5付近の床面と覆土下層から出土した破片が接合している。竈内では、10の土師器鉢、13の土師器甕、17の土製支脚が出土している。13は横位で、17は火床部奥から出土している。6の土師器坏は、貯蔵穴の覆土下層から出土している。

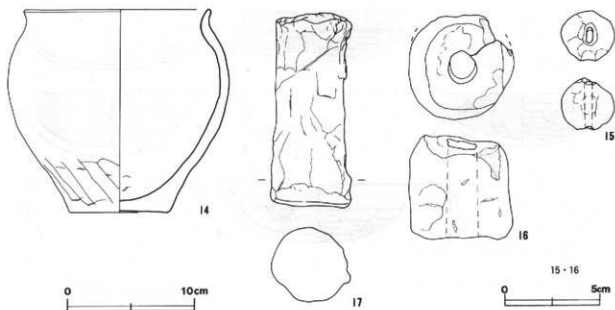
所見 本跡は、中央部の覆土下層に焼土塊や炭化材がみられ、床面が火熱を受けて赤変していること、その上にローム小ブロック・ローム粒子を含む層が堆積していることなどから、焼失後埋め戻されたものと思われる。時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。



第19図 第112号住居跡出土遺物実測図(1)

第112号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	坏 土器	A 12.1 B (4.5)	底部から口縁部片。丸底。体部は内埋して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線を待つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ開り、内面ナデ。器面荒れ。	雲母にふい黄褐色 普通	P 61 60% 床面 PL107



第20図 第112号住居跡出土遺物実測図2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 2	坏 土師器	A [12.1] B 4.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面放射状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	長石・雲母にふい黄褐色普通	P386 60% 覆土中・床面 PL108
3	坏 土師器	A [13.9] B 4.7	底部から口縁部片。丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	雲母・スコリアにふい赤褐色普通	P62 70% 覆土中 PL108 二次焼成
4	坏 土師器	A [14.9] B 4.3	底部から口縁部片。丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母・スコリア黒色普通	P63 50% 覆土中 PL108 二次焼成
5	坏 土師器	A [12.4] B 5.3	底部から口縁部片。丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母明赤褐色普通	P64 65% 床面 二次焼成
6	坏 土師器	A [15.3] B 5.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内増気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。器面刻線。	長石・石英・雲母橙褐色普通	P65 40% 貯蔵穴内PL107 二次焼成
7	坏 土師器	A [13.5] B (5.7)	底部から口縁部片。丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア明赤褐色普通	P66 40% 床面 PL107 二次焼成
8	坏 土師器	A [16.5] B 4.6	底部から口縁部片。丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	長石・雲母黒褐色普通	P67 20% 覆土中
9	碗 土師器	A 13.1 B (4.6)	体部から口縁部片。体部は内増気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	石英・雲母赤褐色普通	P68 40% 床面 二次焼成
10	钵 土師器	A [18.6] B (8.6)	体部から口縁部片。体部は内増して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ヘラナデ。	長石・雲母・スコリア赤褐色普通	P69 30% 床面・甕内 二次焼成
11	高 土師器	B (4.0) E (1.2)	坏底部片。坏部は下方に段を持ち、直線的に立ち上がる。	坏部外面ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。内・外面赤彩。	長石・石英・雲母明赤褐色普通	P70 30% 覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19回 12	土 師 器	A 19.3	底部から口縁部片。平底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外側に張り出し、外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツクリ後、ナデ。内面ナデ。器底削離。	長石・石英・雲母・スクリア にぶい棕色 普通	P71 70% 床面 PL108
		B 27.5				
		C 9.0				
13	土 師 器	A 14.1	底部から口縁部片。平底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直線的。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツクリ後、ナデ。輪切み痕。器底削離。	長石・石英・スクリア 赤褐色 普通	P72 65% 器内 PL108
		B 22.2				
		C 3.2				
第20回 14	土 師 器	A 14.8	底部から口縁部片。平底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツクリ後、ナデ。内面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい棕色 普通	P73 50% 床面 PL108
		B 16.0				
		C 7.8				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考		
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
15	土 師 器	2.8	2.8	0.5	17.4	覆上中	DP13	100%	PL167
16	管状土師器	5.5	5.5	1.5	(130.7)	覆土中	DP14	60%	P1170
17	土師器	13.4	6.3		(530.8)	器内	DP15	96%	PL172

第113A・113B号住居跡（第21・22回）

位置 調査区の東部、E4e1区。

重複関係 当初、1軒の住居跡として調査したが、4か所の主柱穴のすぐ外側にもそれぞれ柱穴が掘られていることから、外側の柱穴のものを第113A号住居跡、内側の柱穴のものを第113B号住居跡とした。両住居跡の対応する主柱穴の位置は、ほぼ南北方向に20～40cmしか離れていないこと、第113B号住居跡の竈の痕跡、壁溝、踏み固められた床面などが検出されないことから、第113A号住居跡は、第113B号住居跡の建て替えの可能性が高い。また、両住居跡が、第114号住居跡の南西コーナー部を掘り込んでいる。

規模と平面形 第113A号住居跡は、長軸6.11m、短軸6.00mの方形である。第113B号住居跡の主柱穴は、第113A号住居跡の主柱穴より内側であるため、少し小規模であった可能性がある。

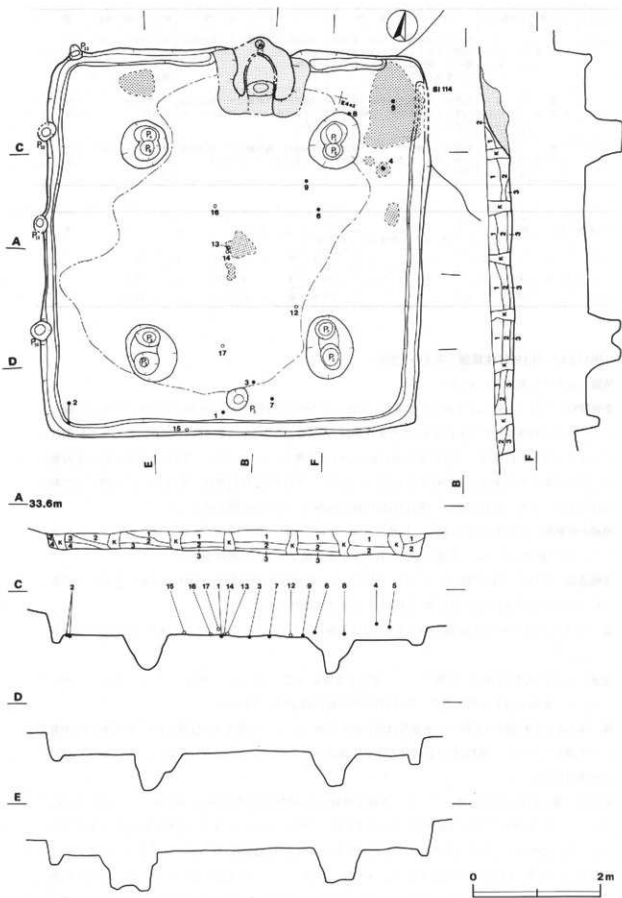
主軸方向 第113A号住居跡は、N-11°-Wである。第113B号住居跡の主軸方向は厳密には不明であるが、主柱穴の位置から第113A号住居跡とほぼ同じである可能性がある。

壁 第113A号住居跡の壁高は45～67cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。第113B号住居跡の壁高は確認されていない。

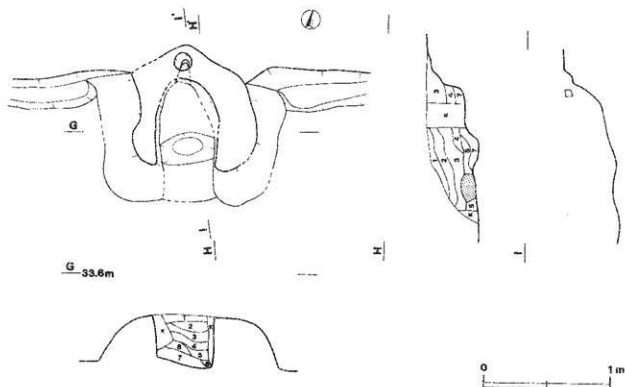
壁溝 第113A号住居跡は、北東コーナー部壁下を除いて差っている。上幅16～34cm、下幅6～20cm、深さ8～20cmで、断面形はじ字状である。第113B号住居跡は確認されていない。

床 第113A号住居跡は平床で、中央部は踏み固められている。中央部は、長径117cm、短径92cmの不整形円形に赤変硬化している。第113B号住居跡の床面は検出されなかったことから、第113A号住居跡とほぼ同じ高さの可能性が高い。

ピット 覆土の状況と位置からピットの所属を判断した。第113A号住居跡は、9か所(P1～P5、P10～P13)。P1～P4は、長径68～78cm、短径40～44cmの楕円形、深さ52～60cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径34cmの円形、深さ30cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P10～P13は長径24～32cm、短径20～28cmの楕円形、深さ16～24cmであり、性格は不明である。第113B号住居跡は、4か所(P6～P9)。P6～P9は、長径72～76cm、短径40～50cmの楕円形、深さ50～58cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。



第21图 第113A·113B号住居跡实测图(1)



第22図 第113A号住居跡実測図

竈 第113A号住居跡は、北端中央部に砂混じりの褐色粘土で構築されている。竈の一部は、耕作により攪乱を受けているが、煙道部の遺存状態はよく、煙出しも確認された。規模は煙道部から突き口部まで24cm、両被覆人幅42cm、壁外への掘り込みは24cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。第113B号住居跡の竈は厳密には不明であるが、第113B号住居跡の竈としても使用された可能性がある。

覆土層解程

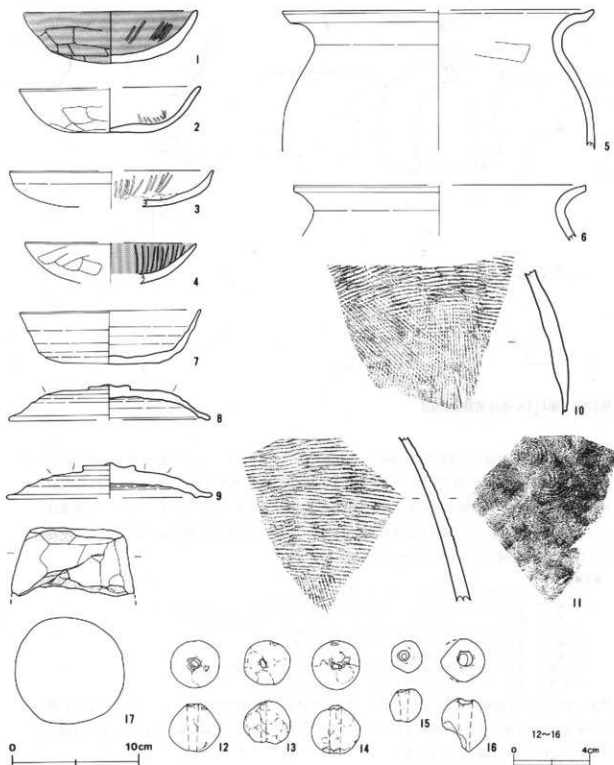
- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒少量
- 2 暗褐色 炭土粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 無彩色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 5 無彩色 焼土中ブロック少量、焼土小ブロック・炭化・ローム粒少量
- 6 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土中ブロック少量、焼土小ブロック・焼土・ローム粒少量、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土中・小ブロック少量、焼土・炭化・ローム・粘土粒少量

覆土 第113A号住居跡は4層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。また、中央部の覆土下層から赤変した軟土塊や炭化材が検出されている。第113B号住居跡は、床面が第113A号住居跡の床面と同じ高さと考えられるため、覆土は存在しない。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 無彩色 ローム小ブロック・ローム粒少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化・ローム粒少量、炭土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 無彩色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量

遺物 第113A号住居跡では、土師器片488点（坏片106点、甕片381点、甌片1点）、須恵器片80点（坏片28点、碗片2点、甕片40点、壺片10点）、土製品6点、縄文土器片2点、鉄滓42.9g、含鉄滓72.2gが出上している。遺物は、北東コーナー部と中央部南側に集中している。覆土上層では、第23図4の土師器坏が中央部東側から、5の土師器甕が北東コーナー部から出土している。覆土中層では、17の土製支脚が中央部南側から出土している。



第23図 第113A号住居跡出土遺物実測図

覆土下層では、6の土師器甕が中央部東側から、8の須恵器蓋が中央部北東側から、9の須恵器蓋が中央部北東寄りから、12の土玉が中央部南東寄りから出土している。床面では、1の土師器杯が南壁際のP5付近から逆位で、2の土師器杯が南西コーナー部から、3の土師器杯、7の須恵器杯がP5付近から、13、14、16の土玉が中央部から、15の土玉が南壁際から出土している。10は須恵器甕の体部片で、横位、斜方向、縦位の順で平行叩きが施されている。11は須恵器の体部片で、外面横位の平行叩き、内面同心円当てで具痕が施されている。

第113B号住居跡からは、遺物は出土していない。

所見 床面中央部は、赤変硬化し、赤変した粘土塊や炭化物が検出されたことから、第113A号住居跡は焼失家屋と考えられる。第113A号住居跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から8世紀前半と考えられる。第113B号住居跡の時期は、第113A号住居に建て替えられていることから、8世紀前半より若干前と推定される。

第113A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏 土師器	A 13.8	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ。内面へつ磨き。内・外面黒色処理。器面瓦れ。	雲母・スコリアにふい褐色普通	P74 50% 床面 二次焼成
		B 4.1				
2	坏 土師器	A 14.4	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。	長石・スコリア明赤褐色普通	P75 30% 床面
		B 3.6				
3	坏 土師器	A 16.2	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ。内面放射状のへつ磨き。内面折頭状。	長石・雲母・スコリア褐色普通	P76 30% 床面
		B 2.8				
4	坏 土師器	A 13.6	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ。内面放射状のへつ磨き。内面黒色処理。	雲母・スコリアにふい褐色普通	P77 10% 覆土中
		B (3.2)				
5	甗 土師器	A 24.6	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。踵部は、外上方につまみあげられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ。内面へつ磨き。	長石・石英・雲母・スコリアにふい赤褐色普通	P79 5% 覆土中
		B (11.1)				
6	甗 土師器	A 23.0	頸部から口縁部片。口縁部は外反し、踵部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母にふい褐色普通	P80 5% 覆土中
		B (4.4)				
7	坏 須恵器	A 14.3	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へつ削り。	長石・石英・雲母灰青リージュ色良好	P82 65% 床面 PI.108 二次焼成
		B 4.4				
		C 7.6				
8	甗 須恵器	A 16.0	口縁部からつまみ部片。つまみは扁平なボタン状である。天井部は低く、口縁部内面に短いかえりが付く。	口縁部、天井部内・外面ロクロナデ。天井部上段回転へつ削り。	長石・雲母・スコリアにふい黄褐色良好	P83 40% 覆土中 PI.108
		B 2.9				
		F 3.3				
		G 0.5				
9	甗 須恵器	A 16.3	つまみ部から口縁部片。つまみは扁平なボタン状で、天井部は低く丸い。口縁部は外反し、内面に短いかえりを持つ。	口縁部、天井部内・外面ロクロナデ。天井部上段回転へつ削り。	長石・石英・雲母にふい黄褐色普通	P84 35% 覆土中
		B 2.8				
		F 4.1				
		G 0.6				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	土 玉	2.5	2.6	0.7	13.5	覆土中	DP16 100% PL167
13	土 玉	2.3	2.4	0.3	10.8	床面	DP17 100% PL167
14	土 玉	2.5	2.5	0.6	11.8	床面	DP18 100% PL167
15	土 玉	1.8	1.6	0.6	4.3	床面	DP19 100% PL167
16	土 玉	2.8	(2.3)	0.8	(9.6)	床面	DP20 60%
17	支 脚	(5.6)	(9.8)	-	(422.4)	覆土中	DP21 10%

第114号住居跡（第24区）

位置 調査区の東部，E 4 d 2 区。

重複関係 本跡は，第113A・113B号住居跡によって西コーナー部を掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.88m，短軸4.68m の方形である。

主軸方向 N-31°-E

壁 壁高は17~36cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，中央部は踏み固められている。

ピット 4か所（P1~P4）。P1~P4は，径20~28cmの円形，深さ48~66cmである。規模と配列から土柱穴と考えられる。

貯蔵穴 西コーナー部に付設され，長径94cm，短径64cmの楕円形で，深さは40cm，断面形はU字状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム大・小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量，炭化粒子微量

竈 北東壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，煙道部から焚き口部まで101cm，両袖最大幅122cm，壁外への掘り込みは22cmである。火床部は，火熱を受けて赤変硬化している。土製支脚が，火床部の中央部北西寄りに置かれている。煙道部は外傾して急に立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 粘土粒子多量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
- 2 にぶい赤褐色 粘土粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子多量，粘土粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土・炭化粒子微量

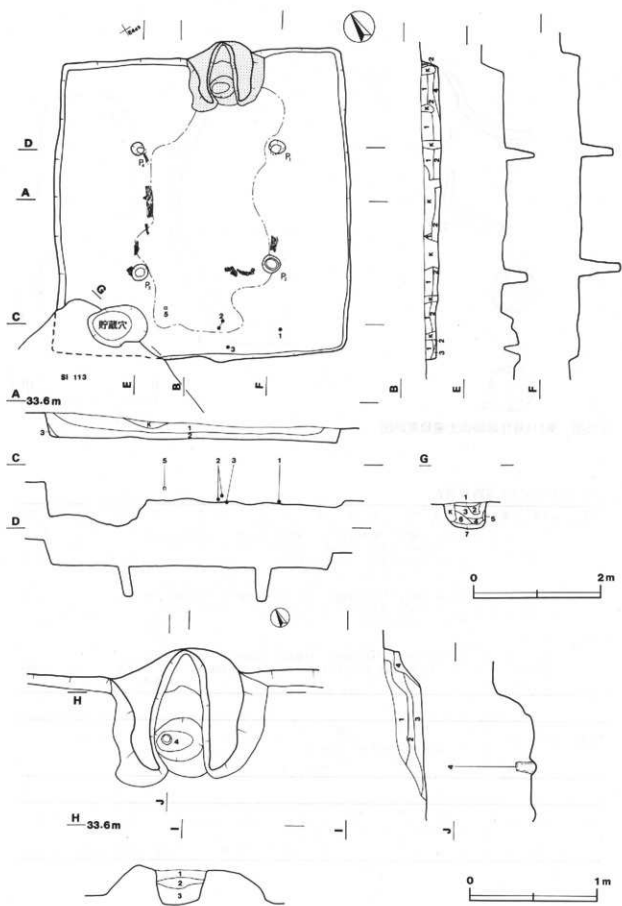
覆土 4層からなり，ロームブロックを多く含み，人為堆積と考えられる。また，P2~P4付近の覆土下層に炭化材が検出されている。

土層解説

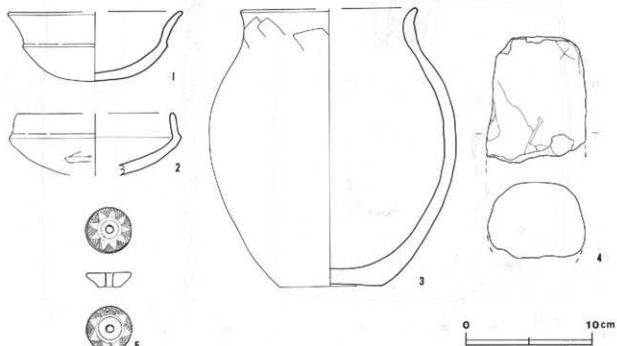
- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化物・炭化・ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム・粘土粒子少量，焼土・炭化粒子微量

遺物 土師器片73点（坏片7点，甕片66点），須恵器片5点（甕片5点），土製品2点，石製品1点が出土している。遺物は，南側に集中している。覆土上層では，第25区2の土師器環が中央部南側から，5の石製紡錘車が西コーナー部貯蔵穴付近から正位で出土している。覆土下層では，1の土師器環が南コーナー部付近から，床面では，3の土師器甕が南西壁際から，竈内では，4の土製支脚が出土している。1，4は正位で，3は横位で出土している。

所見 覆土下層に炭化材がみられること，覆土中にロームブロックやローム粒子を多く含む層が堆積していることから，本跡は，焼失後，埋め戻されたものと考えられる。時期は，遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。



第24图 第114号住居跡实测图



第25図 第114号住居跡出土遺物実測図

第114号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第25図 1	坏 土師器	A [13.8] B 5.4	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反し、肩部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。器面荒れ。	石英・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P85 40% 覆土中 二次焼成
2	坏 土師器	A [12.2] B (4.8)	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。器面荒れ。	石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P86 30% 覆土中 二次焼成
3	罍 土師器	A [14.0] B 22.0 C 8.0	底部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。外面へラ削り後、ナデ。器面割離。	長石・石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P87 60% 床面 PL108

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
4	支脚	(10.0)	(7.9)	-	(460.1)	窟内 DP23	40%

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
5	紡錘車	3.6	1.2	0.6	20.7	滑石	覆土中 Q2 線形 100% PL176	

第115号住居跡（第26・27図）

位置 調査区の中央部、F3h3区。

重複関係 本跡は、第3・5・7号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸10.05m、短軸9.00mの長方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は25~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅16~36cm、下幅4~12cm、深さ6~12cmで、断面形はJ字状である。

床 平川で、中央部は踏み固められている。

ピット 6か所（P1~P6）。P1~P4は、長径104~124cm、短径84~118cmの楕円形、深さ84~102cmである。

規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径70cmの円形、深さ86cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は長径98cm、短径52cmの楕円形、深さ52cmである。位置から、P5の補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。

規模は、煙道部から吹き口部まで152cm、両袖最大幅122cm、壁外への掘り込みは55cmである。火床部は、床面を32cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰褐色 粘土粒子中量、焼土小ブロック・焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土・ローム・粘土粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 明褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化・粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 6 褐色 粘土粒子少量、焼土少量、炭化粒子微量

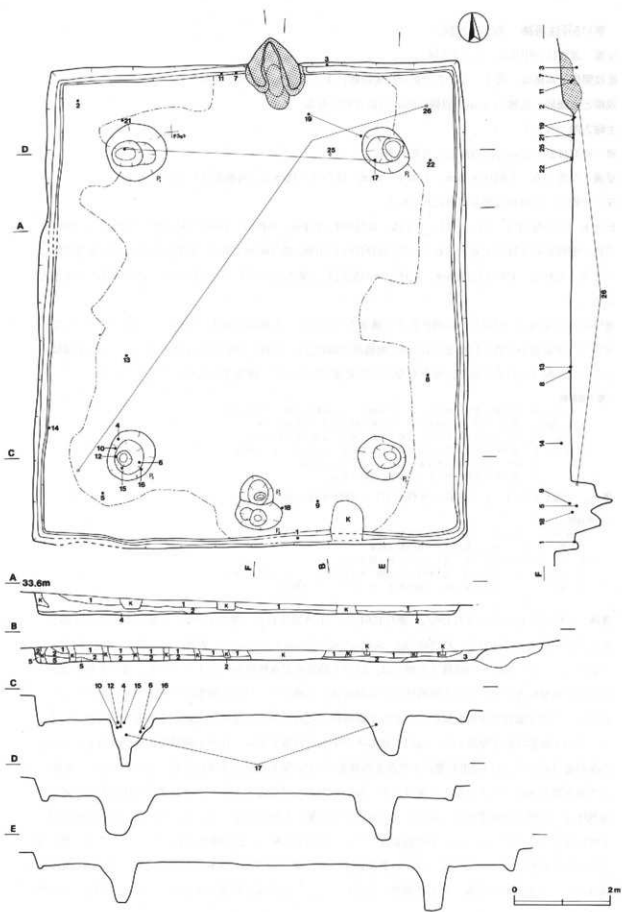
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

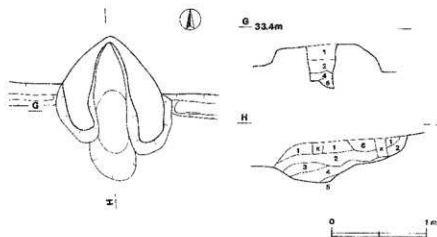
- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化・粘土粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片1754点（坏片190点、甍片1564点）、須恵器片14点（甍片14点）、土製品3点、石製品2点、鉄製品2点、縄文土器片27点、鉄滓86.9g、含鉄滓256.5gが出土している。遺物は、北壁側と南壁側とピット内に集中している。第28・29図覆土中層では、14の土師器片が西壁際から出土している。覆土下層では、8の土師器片が東壁付近から、9の土師器片が中央部南側から逆位で、11の土師器片が北壁際から出土している。床面では、1の土師器片が南壁際から、2の土師器片が北西コーナー部から、5の土師器片が南西コーナー部から、7の土師器片が北壁際から、13の土師器片が中央部西寄りから、18の土師器片が南壁付近から、19の土師器片が東壁付近から、21の須恵器片が中央部北西側から、22の須恵器片が東壁付近から、25の上玉が北東部から、26の土製支脚が南西コーナー部と北東コーナー部から出土している。1、2、5は正位で出土している。3の土師器片は、北壁下の壁溝内から出土している。P3の覆土上層からは、4、6、10、12、15の土師器片、16の土師器片が出土している。17の土師器片は、P1、P4内の覆土上層の破片が接合している。その他、覆土中から20の土師器ミニチュア片、27の石製紡錘車、28の鎌、29の不明鉄製品が出土している。23は須恵器片の体部片で、外面格子叩き後、カキ目調整が施されている。24は須恵器片の体部片で、外面に格子叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺物の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



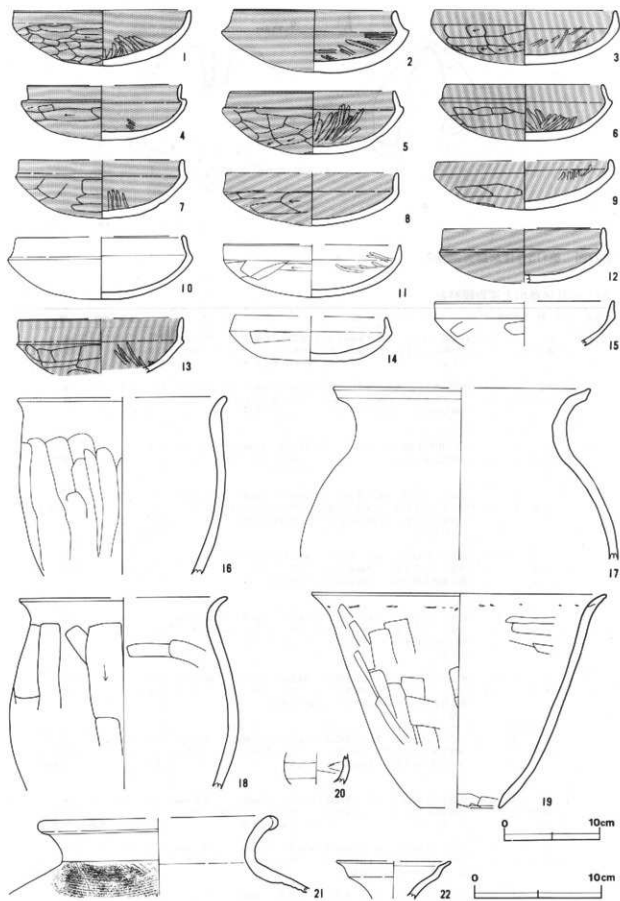
第26图 第115号住居跡実測图(1)



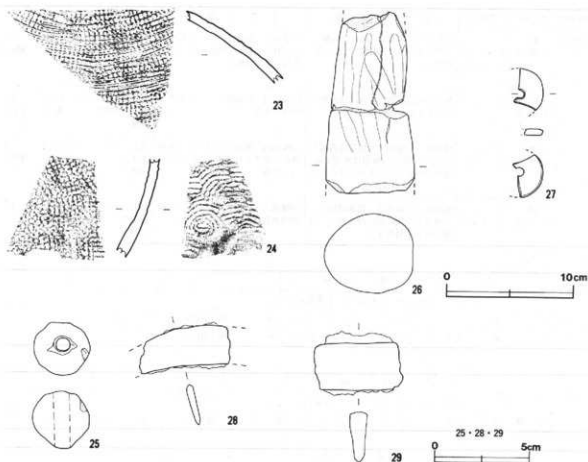
第27図 第115号住居跡実測図(2)

第115号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・産地	備考
第28図 1	坏 土器器	A 14.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 彎気味に立ち上がり、口縁部は直 立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り後、ナデ。内面へつ磨き。 内・外面黒色処理。	雲母・スコリア にふい褐色 普通	P88 床面 PL108
		B 4.5				
2	坏 土器器	A 12.8	体部一部欠損。丸底。体部は内彎し て立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な線を持つ。口縁部は内傾す る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り後、ナデ。内面へつ磨き。 内・外面黒色処理。	石英・雲母・スコ リア にふい褐色 普通	P89 床面 PL109
		B 5.0				
3	坏 土器器	A 14.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り、内面へつ磨き。内・外 面黒色処理。	雲母 にふい赤褐色 普通	P90 明溝内 PL108
		B 4.1				
4	坏 土器器	A [12.3]	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 彎して立ち上がり、口縁部との境 に明瞭な線を持つ。口縁部はわず かに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 へつ磨き、外面へつ割り後、ナデ。 内・外面黒色処理。	長石・雲母・スコ リア にふい褐色 普通	P91 ピット内PL108
		B 4.4				
5	坏 土器器	A 12.9	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部との 境に明瞭な線を持つ。口縁部は内 傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り、内面へつ磨き。内・外 面黒色処理。	長石・雲母 にふい褐色 普通	P92 床面 PL108
		B 5.0				
6	坏 土器器	A 12.5	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部との 境に明瞭な線を持つ。口縁部は内 傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り後、ナデ。内面へつ磨き。 内・外面黒色処理。	長石・雲母 黒色 普通	P93 ピット内PL108
		B 4.6				
7	坏 土器器	A [13.9]	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部との 境に線を持つ。口縁部はわずかに 内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り後、ナデ。内面へつ磨き。 内・外面黒色処理。	石英・雲母 灰褐色 普通	P94 床面 PL108
		B 4.6				
8	坏 土器器	A [12.6]	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎気味に立ち上がり、口縁部との 境に明瞭な線を持つ。口縁部は直 立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り、内面ナデ。内・外面黒 色処理。	石英・雲母 にふい褐色 普通	P95 覆土中 PL109 二次焼成
		B 4.1				
9	坏 土器器	A 113.8	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部は 短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り後、ナデ。内面へつ磨き。 内・外面黒色処理。	石英・雲母・スコ リア にふい褐色 普通	P96 覆土中 二次焼成
		B 3.9				
10	坏 土器器	A 13.4	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部との 境に線を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り、内面ナデ。器面割離。	石英・雲母・スコ リア にふい褐色 普通	P98 ピット内 二次焼成
		B 4.9				
11	坏 土器器	A [14.0]	底部から口縁部片。丸底。体部は 内彎して立ち上がり、口縁部は直 立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ割り、内面へつ磨き。	石英・雲母・スコ リア にふい褐色 普通	P97 覆土中 二次焼成
		B 4.2				



第28图 第115号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第115号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 12	坏 土師器	A [12.8] B 4.3	底部から口縁部片。丸底。体部は内壁して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ削り後、ナデ。内・外面黒色処理。	雲母・スコリア にふい褐色 普通	P 99 25% ビット内
13	坏 土師器	A [13.0] B (4.3)	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母 黒色 普通	P 101 20% 床面
14	坏 土師器	A [12.0] B 3.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内壁味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	雲母 にふい赤褐色 普通	P 100 25% 覆土中 二次焼成
15	坏 土師器	A [14.2] B (3.5)	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。	石英・雲母・スコリア にふい褐色 普通	P 103 10% ビット内 二次焼成
16	甕 土師器	A [26.6] B (14.0)	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへラ削り、内面へラナデ。	石英・雲母 にふい褐色 普通	P 104 10% ビット内
17	甕 土師器	A [20.4] B (13.3)	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は外反する。胎部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。器面刷毛。	長石・石英・雲母・スコリア にふい褐色 普通	P 105 15% ビット内
18	甕 土師器	A [16.4] B (15.2)	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへラ削り、内面へラナデ。	石英・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P 106 10% 床面

採取番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第29例 19	飯 土 師 器	A 31.1 B 22.7 C 18.6	底部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。黒灰式。	口縁部内・外面傾ナテ。体部外面へラ削り、内面へラ削り後、ナテ。底部内面へラ削り。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P107 50% 床面 PL109
20	ヒコフツ 土 師 器	B (2.5)	体部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面傾ナテ。体部内・外面へラ削り。	長石・石英・雲母にふいふ赤褐色 普通	P108 40% 覆土中 PL108
21	粥 炊 器	A (19.0) B (6.1)	体部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。底部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナテ。体部外面上位ウキ目調整、内面同心円当て具痕。	長石・石英・雲母 黄灰色 良好	P112 10% 床面 PL108
22	湯 炊 器	A (9.0) B (3.0)	頸部から口縁部片。頸部は長く、口縁部との境に弱い段を持つ。口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面ロクロナテ。口縁部内面自然釉。	長石・石英 黄灰色 良好	P113 10% 床面

採取番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量(g)		
第29例 26	土 師 器	3.0	2.0	0.8	22.4	床 面	DP24 100% PL157
26	土 師 器	(14.4)	(7.0)	-	(610.3)	床 面	DP25 80%

採取番号	器 種	計 測 値				土 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
27	粘 土 師 器	(2.3)	0.5	0.7	(5.8)	粘 板 岩	覆 土 中 Q3	30% PL176

採取番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
28	土 師 器	(4.3)	2.0	0.4	(10.7)	覆 土 中	M6 PL177
29	不明鉄製品	(4.7)	2.0	0.9	(38.4)	覆 土 中	M7

第116A・116C号住居跡(第30・31図)

位置 調査区の中央部、F 2 g 8 区。

重複関係 当初、1軒の住居跡として調査したが、4か所の主柱穴のすぐ外側にもそれぞれ柱穴が掘られていることから、外側の柱穴のものを第116A号住居跡、内側の柱穴のものを第116C号住居跡とした。両住居跡の対応する主柱穴の位置は、ほぼ東西方向に20～30cmしか離れていないこと、第116C号住居跡の窓の痕跡、壁溝、踏み固められた床面などが検出されないことから、第116A号住居跡は、第116C号住居跡の建て替えの可能性がある。また、両住居跡が、第116B号住居跡の南西壁を掘り込んでいる。

規模と平面形 第116A号住居跡は、長軸7.00m、短軸6.68mの方形である。第116C号住居跡の規模と平面形は不明であるが、第116C号住居跡の主柱穴が第116A号住居跡の主柱穴より内側であることから、少し小規模であったと思われる。

主軸方向 第116A号住居跡は、N-12°-Wである。第116C号住居跡の主軸方向は厳密には不明であるが、主柱穴の位置から第116A号住居跡とはほぼ同じである可能性がある。

壁 第116A号住居跡の壁高は43～70cm、ほぼ垂直に立ち上がる。第116C号住居跡の壁高は確認されていない。

壁溝 第116A号住居跡は全周する。上幅18～36cm、下幅6～14cm、深さ7～14cmで、断面形はし字状である。第116C号住居跡は確認されていない。

床 第116A号住居跡は、平坦で、中央部は踏み固められている。第116C号住居跡の床面は、第116A号住居跡の床面の下部から確認されなかったことから、第116A号住居跡とはほぼ同じ高さの可能性がある。

ピット 覆土の状況と位置からピットの所属を判断した。第116A号住居跡は13か所（P1～P4、P9～P17）。P1～P4は、長径60～84cm、短径32～72cmの楕円形、深さ54～78cmである。規模と配列から土柱穴と考えられる。P9～P12は、長径38～60cm、短径32～52cmの楕円形、深さ20～54cmである。位置から、補助柱穴と思われる。P13～P17は、長径28～52cm、短径16～30cmの楕円形である。位置から、壁下に設けられた補助柱穴と考えられる。第116C号住居跡は4か所（P5～P8）。P5～P8は、長径34～70cm、短径15～65cmの楕円形、深さ58～76cmである。規模と配列から土柱穴と考えられる。

竈 第116A号住居跡は、北壁中央部に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで203cm、両袖最大幅151cm、壁外への張り込みは91cmである。袖の内壁は火熱を受けて赤変しているが、煙道部はほとんど赤変していない。火床部は、床面を6cmほど張りくぼめており、火熱を受けて赤変変化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。第116C号住居跡の竈の灰跡が検出されないことから、第116A号住居跡の竈が第116C号住居跡の段階から使用されていたか、同位置で塗り替えが行われた可能性がある。

埋土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子多量、炭土・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒中量、ローム・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化・粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
- 5 暗褐色 焼土粒子多量、炭土・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 粘土粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒少量、炭化・ローム粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 9 に近い赤褐色 焼土中ブロック・焼土・炭化・ローム粒子少量、焼土大ブロック微量
- 10 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量

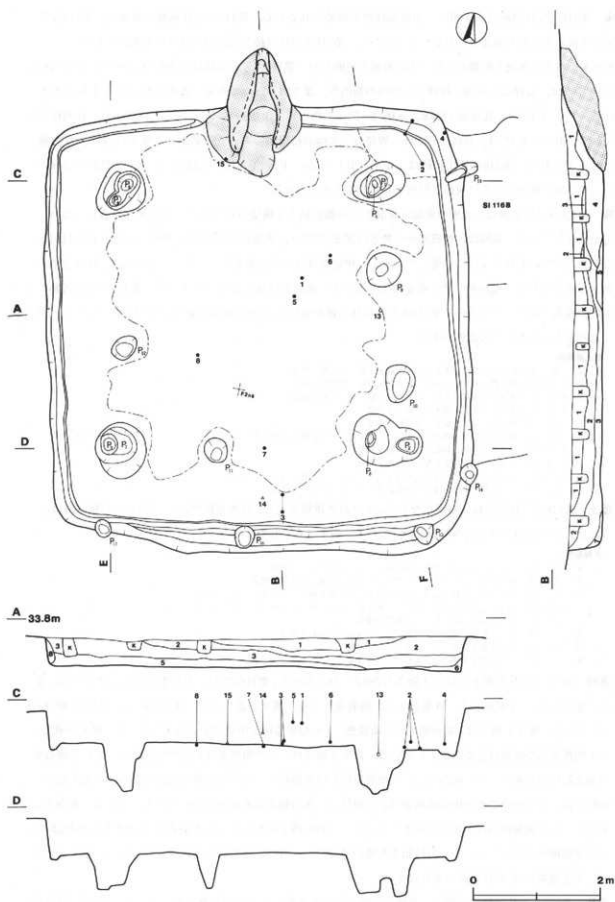
覆土 第116A号住居跡は8層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。第116C号住居跡は、第116A号住居跡の床面と同じ高さと考えられるため、覆土は存在しない。

土層解説

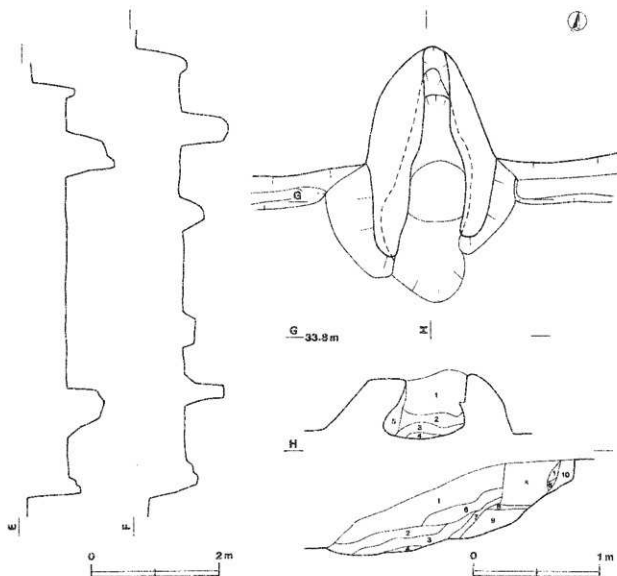
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 に近い赤褐色 焼土粒子中量、炭化・ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

遺物 第116A号住居跡からは、土師器片780点（坏片103点、甕片677点）、須恵器片42点（坏片27点、甕片9点、蓋片6点）、土製品2点、鉄製品1点、銅製鏡片1点、縄文土器片2点、鉄銚306.5g、含鉄洋769.8gが出土している。覆土上層では、第324Ⅰの上師器甕、5の須恵器坏が中央部から出土している。覆土中層では、14の不明鉄製品が南壁付近から出土している。覆土下層では、3の須恵器坏が南壁付近から、2の上師器甕、4の須恵器坏が北東コーナー部から、6の須恵器坏が中央部から、13の土玉が中央部東寄りから出土している。床面では、7の須恵器蓋が中央部南寄りから逆位で、8の須恵器蓋が中央部から出土している。竈内では、東袖部から15の銅製鏡片緑部細片が出土している。その他、覆土中から9の須恵器蓋、10の須恵器長頸瓶頸部片、12の土製紡錘車が出土している。11は須恵器甕の体部片で、外面に同心円叩きが施されている。胎土に炭母を含む。須恵器第116C号住居跡の遺物はない。

所見 第116A号住居跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から8世紀前葉と考えられる。第116C号住居跡の時期は、第116A号住居跡に建て替えられていることから8世紀前葉より若干前と推定される。



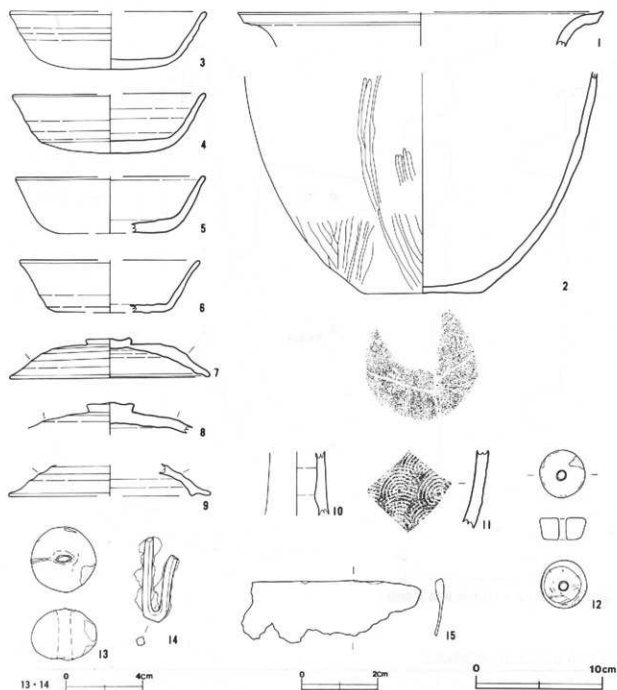
第30图 第116A・116C住居跡実測图1)



第31図 第116A・116C住居跡実測図②

第116A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・装飾	備考
第32図 1	土師器 土師器	A 129.0 B (2.7)	口縁部片・口縁部上に縁を持ち、 深部は外上方につまみ上げられて いる。	口縁部内・外面軟ナテ。	石黄・雲母 にふい黄褐色 青濁	P123 腹土中 5%
2	土師器 土師器	B (17.4) C 9.2	底部から体部片。平底。体部は内 裡して立ち上がる。	体部外面硬位のヘラ磨き。内面ナ テ。底部木製痕。器面荒れ。	長石・石黄・雲母 にふい黄褐色 青濁	P124 腹土中 36%
3	土師器 土師器	A 15.6 B 4.6	底部から口縁部片。平底。体部は 直線的に外傾する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。 底部回転ヘラ切り。	長石・石黄・雲母 にふい黄褐色 青濁	P113 腹土中 PL109 二次焼成
4	土師器 土師器	A 15.3 B 4.8	底部から口縁部片。平底。体部は 直線的に外傾する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。 底部回転ヘラ切り。	長石・石黄・雲母 灰黄色 良好	P115 腹土中 PL109 70%
5	土師器 土師器	A 18.0 B 4.5 C 8.3	底部から口縁部片。平底。体部は 外傾し、口縁部はわずかに外反す る。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。 底部回転ヘラ切り。	長石・石黄・雲母 灰白色 青濁	P117 腹土中 二次焼成 30%



第32図 第116A住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第32図 6	坏 須 器	A [14.3]	底部から口縁部片。平底。体部は外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面口クロナテ。底部回転ヘラ切り。	石英・雲母 灰白色 良好	P118 30% 覆土中
		B 4.2				
		C [10.0]				
7	蓋 須 器	A 15.8	口縁部からつまみ部片。天井部はドーム状をしている。やや扁平なボタン状のつまみが付く。口縁部内面に短いかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。内面口クロナテ。	長石・石英・雲母 灰色 良好	P119 80% 床面 PL109
		B 3.2				
		F 3.6				
		G 0.5				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32回 8	蓋 須恵器	B (2.6) F 1.3.7] G 0.8	天井部からつまみ部片。扁平な板 宝珠状のつまみが付く。	天井部外面回転ヘラ削り・内面ロ クロナデ。	石英・スコリア 増沢黄色 良好	P120 40% 床前 二次焼成
9	香 須恵器	A [16.0, B (2.6)	口縁部から天井部片。天井部は ドーム状をしている。口縁部内面 に短いかえりが付く。	天井部外面回転ヘラ削り。口縁部 内・外面ロクロナデ。	長石・石英・雲母 灰色 良好	P121 10% 遺土中
10	長須 須恵器	D (5.0)	頸部片。頸部は直立の気味に立ち上 がる。	頸部内・外面ロクロナデ。	長石 灰色 良好	P125 10% 遺土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
12	土製鉢鉢	3.7	1.8	0.6	26.2	遺土中	DP28 100% PL171

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
13	土 正	2.7	3.4	0.6	28.2	遺土中	DP27 100% PL167

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
14	不明鉄製品	(4.5)	0.4	0.1	(7.2)	遺土中	M8
15	銅製鏡	(1.0)	(4.7)	0.2	(4.5)	庭内	M48 PL179

第116B号住居跡(第33図)

位置 調査区の中央部、F2g0区。

重複関係 本跡が、第9号不明遺構の南西コーナー部を掘り込んでいる。また、第116A号住居跡、第6号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.92m、短軸(4.20)mの長方形と推定される。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は28~41cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー部から南東コーナー部にかけての壁下と、南壁下の一部に巡っている。上幅22~30cm、下幅5~16cm、深さ6~8cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み凹められている。

ピット 2か所(P1~P2)。P1は径36cmの円形、深さ18cm、P2は径46cmの円形、深さ38cmである。どちらも性格は不明である。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで79cm、両袖最大幅147cm、壁外への掘り込みは21cmである。火床部は、火熱を受けてわずかに赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。

遺土層解説

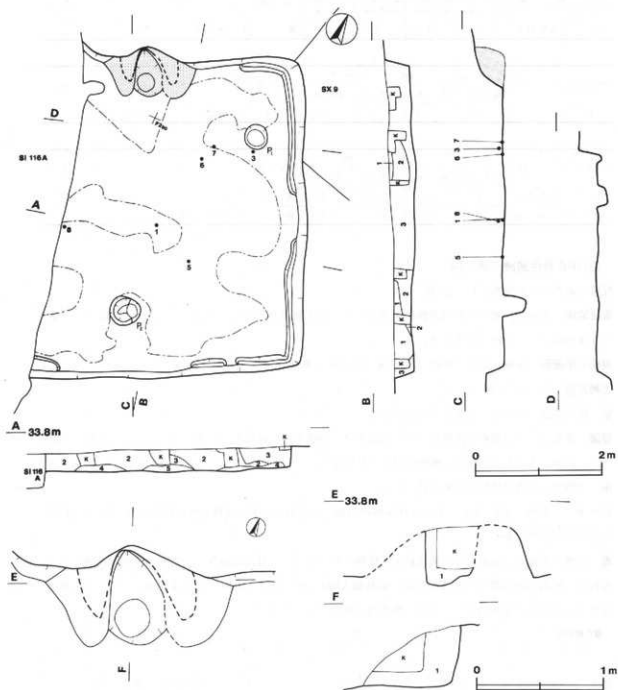
1 赤褐色 焼土・ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 5層からなり、ローム中・小ブロックを多く含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

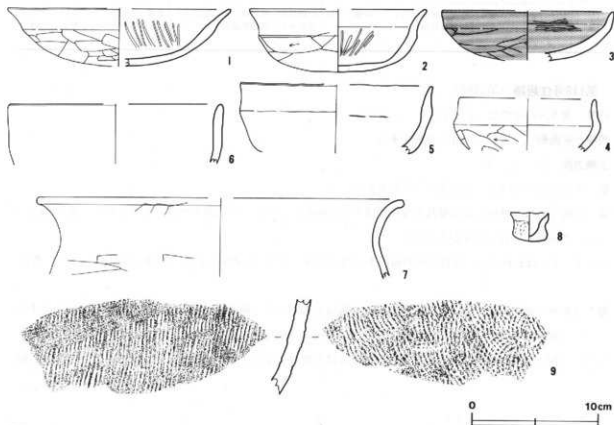
遺物 土師器片166点(坏片147点, 甕片258点), 須恵器片30点(坏片21点, 甕片6点, 蓋片3点)が出土している。覆土下層では, 第34図1の土師器坏が中央部から, 3の土師器坏がP1付近から, 8の土師器ミニチュア土器が中央部から出土している。床面では, 5の土師器坏と6の土師器甕が中央部から, 7の土師器甕が中央部北東寄りから出土している。2, 4の土師器坏は, 覆土中から出土している。9は須恵器甕の体部片で,



第33図 第116B号住居跡実測図

外面縦位の平行叩き、内面同心円当てで具痕が施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。



第34図 第116B号住居跡出土遺物実測図

第116B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	環 土器	A [17.6] B (4.6)	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	雲母・スコリアにぶい橙褐色 普通	P126 40% 覆土中 PL109 二次焼成
2	環 土器	A [14.0] B 5.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き。	長石・石英・雲母・スコリアにぶい橙褐色 普通	P127 40% 覆土中
3	環 土器	A [13.7] B (3.9)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面横位のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母 オリブ黒色 普通	P130 15% 覆土中
4	環 土器	A [10.8] B (4.1)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	石英・雲母・スコリアにぶい黄褐色 普通	P131 15% 覆土中
5	環 土器	A [15.2] B (5.4)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	雲母 オリブ黄褐色 普通	P133 15% 床面 二次焼成
6	壺 土器	A [16.9] B (4.7)	体部から口縁部片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ナデ。	雲母・スコリアにぶい赤褐色 普通	P132 10% 床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 7	甕 土器 器	A [29.0] B (6.2)	体部上位から口縁部片。口縁部は 外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後、ナデ、内面ヘラナデ。	長石・雲母 にふい橙色 普通	P134 5% 床面
8	ニナア7甕 土器 器	A 3.0 B 2.3	平底。体部はわずかに内傾し、口 縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ、外面指頭痕。	雲母 にふい黄橙色 普通	P135 100% 覆土中 PL109

第118号住居跡 (第35図)

位置 調査区の中央部、F 2 j 8 区。

規模と平面形 一辺が3.70mの方形である。

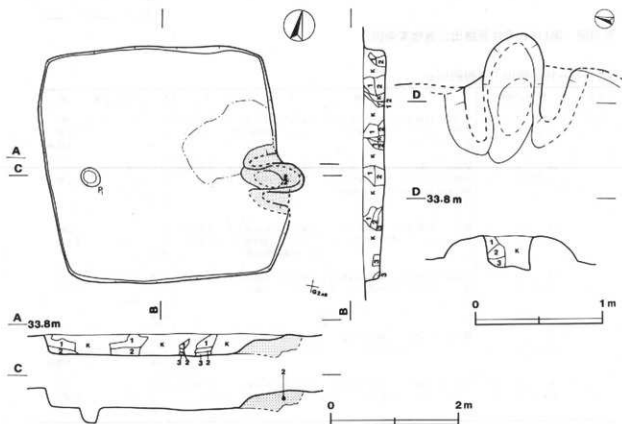
主軸方向 N-75°-E

壁 壁高は22~36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 北側半分は、耕作による擾乱を受けてほとんど残存していない。南側半分は、平坦である。電付近に、わずかに踏み固められた部分が見られる。

ピット P1は長径33cm、短径28cmの楕円形、深さ24cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 東壁やや南寄りに、砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部・袖部は、耕作により擾乱を受け残存している部分は少ない。天井部は崩落している。規模は、煙道部から焚き口部まで105cm、両袖最大幅[115]cm、壁外への掘り込みは29cmである。両袖の内部からは雲母片岩が出土し、補強材に用いられたと思われる。袖の



第35図 第118号住居跡実測図

内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けてわずかに赤変硬化している。覆土部は外傾して立ち上がる。

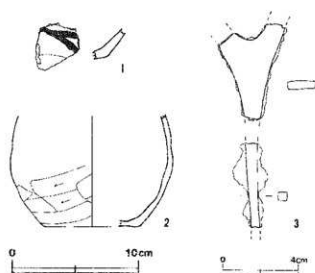
覆土層構成

- 1 褐色 粘土粒子多量、焼土・ローム粒子微量
- 2 暗茶褐色 粘土粒子中量、粘土粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗茶褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック微量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化した腐植層
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化した微量
- 3 褐色 炭化・ローム粒子微量



第36図 第118号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片152点（坏片26点、碗片3点、甕片123点）、須恵器片22点（蓋片1点、坏片21点）、鉄製品1点、縄文土器片7点、鉄滓621.1g、含鉄滓28.2gが出土している。遺物は、ほとんどが細片である。第36図1の土師器坏と3の鉄鉢は覆土中から、2の土師器甕は竈内の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び山上遺物から9世紀後半と考えられる。

第118号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図1	坏 土師器	-	底部から体部片。平底。体部は外傾する。	体部内・外面ロクロナア。体部内面へう過ぎ、黒色洗河。体部外面に患患。	石英にふいぶい褐色 普通	P138 5% 覆土中 PL109
2	甕 土師器	B (R) 8 C 7.4	底部から体部片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	体部外面へう削り、内面ヘラナデ。	石英・雲母・スコリア 灰褐色 普通	P139 30% 竈内

図版番号	器種	寸 法				出土地点	備 考
		長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重量(g)		
3	鉄 鉢	(9.5)	(3.5)	0.5	(22.5)	覆 土 中 M9	PL178

第119号住居跡（第37・38図）

位置 調査区の中央部、F216区。

重複関係 本跡が、第125B号住居跡の南壁を掘り込んでいる。

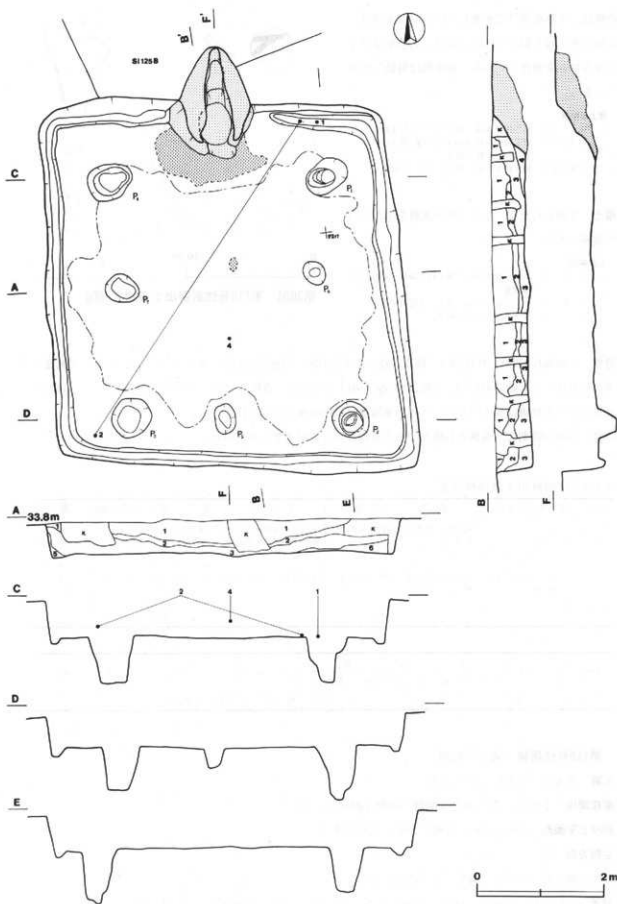
規模と平面形 長軸5.77m、短軸5.71mの方形である。

主軸方向 N-6°-E

壁 壁高は47~66cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅20~44cm、下幅5~24cm、深さ8~14cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部はよく踏み固められている。中央部に、火熱を受け赤変したところがみられる。



第37图 第119号住居跡実測图(1)

ピット 7か所 (P1~P7)。P1~P4は、長径60~71cm、短径48~58cmの楕円形、深さ72~84cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は、長径46cm、短径32cmの楕円形、深さ30cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は、長径40~53cm、短径32~44cmの楕円形、深さ10~18cmである。位置から、補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から突き出し部まで172cm、両袖最大幅134cm、壁外への掘り込みは88cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。吹き口部・火床部・煙道部は、火熱を受けて赤変している。特に、火床部はかなり硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がり、煙出し付近で急に立ち上がる。

覆土層解説

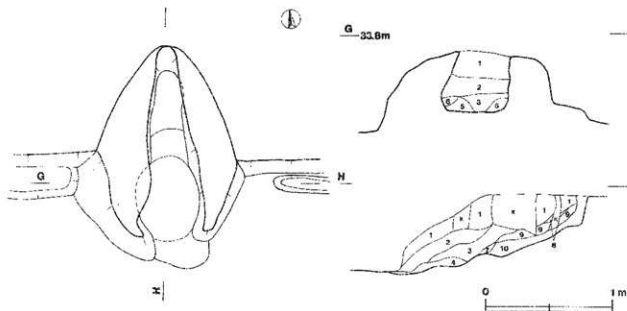
- 1 黒褐色 ローム・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 ローム中ブロック中量
- 7 暗赤褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量
- 8 暗褐色 粘土粒子多量、焼土・ローム粒子微量
- 9 無暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化・粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 10 無暗赤褐色 焼土・炭化・粘土粒子少量、ローム粒子微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子・ローム中ブロック少量、焼土中ブロック・炭化粒子・ローム大ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子・ローム大・中ブロック少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・粘土小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物・粘土小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土・炭化粒子少量、焼土小ブロック・炭化物微量

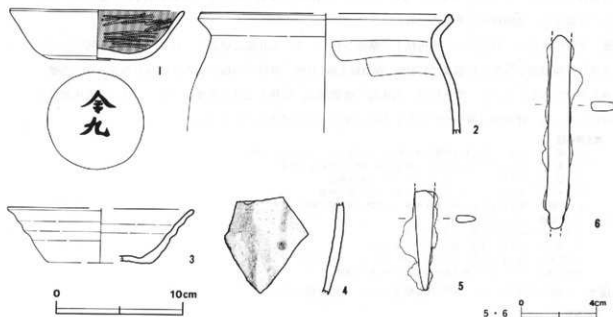
遺物 土師器片206点 (坏片100点、甕片105点、蓋片1点)、須恵器片448点 (坏片130点、碗片9点、甕片250点、瓶片59点)、鉄製品2点、縄文土器片3点、鉄滓264.1g、含鉄滓57.6gが出土している。覆土中層では、第39区4の灰種陶器長頸瓶が中央部から、1の上師器坏が北壁際から正位で出土している。覆土下層では、2の上師器甕が、北壁際と南西コーナー部から出土した破片が接合している。また、5の刀子、6の鉄鎌坐が中



第38図 第119号住居跡実測図(2)

中央部西寄りから出土している。その他、覆土中から3の須恵器環が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀中葉と考えられる。



第39図 第119号住居跡出土遺物実測図

第119号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	土師器 環	A 13.8	口縁部一部欠損。平底。底部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へう磨き。底部回転へう磨き。内面黒色処理。底部外面に墨書。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 良好	P 617 70% 覆土中 PL109 二次焼成
		B 4.0				
		C 7.5				
2	甕 土師器	A [19.6]	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 140 5% 覆土中
		B (9.4)				
3	須恵器 環	A [14.7]	底部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、底部回転へう切り。	長石・石英・雲母・スコリア 浅黄色 普通	P 141 30% 覆土中
		B 4.4				
		C [8.0]				
4	長頸瓶 灰胎陶器	—	体部片。体部は内壁気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。	灰白色 良好	P 387 5% 覆土中 PL109

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	刀子 蓋	(5.3)	(1.0)	0.4	(8.2)	覆土中 M10	PL178
6	鉄 麻 茎	(10.2)	1.0	0.5	(30.3)	覆土中 M11	PL178

第120A号住居跡（第40・41図）

位置 調査区の中央部，F2g3区。

重複関係 本跡が，第120C号住居跡の西側と第120D号住居跡の西壁南寄りを持ち込んでいる。

規模と平面形 長軸4.60m，短軸4.30mのはば方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は30～44cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 東側の一部と南西コーナー部の壁下を除いて巡っている。上幅16～30cm，下幅5～16cm，深さ4～8cmで，断面形はU字状である。

床 平担で，西側は踏み固められている。さらに，竈付近から南壁下にかけての床下2～6cmのところから，踏み固められた床面が検出された。

ピット 5か所（P1～P5）。P1～P4は，径41～54cmの円形，深さ36～50cmである。炭椀と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径16cm，短径30cmの楕円形，深さ26cmである。その位置から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，内袖部が残存している。規模は，煙道部から焚き口部まで93cm，内袖最大幅123cm，壁外への掘り込みは28cmである。袖の内壁は，火熱を受けて赤変している。火床部は，火熱を受けてわずかに赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

覆土 8層からなり，第1～7層まではレンズ状の堆積を示し，自然堆積である。第8層は，ローム小ブロックを多く含むことから，人為堆積（貼床）と考えられる。

土層解説

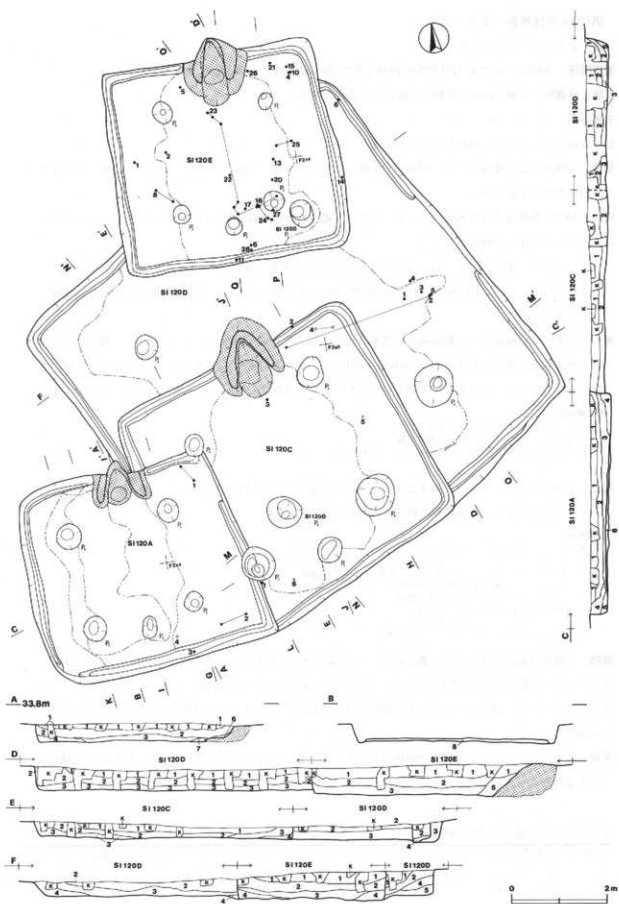
- 1 褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量，焼土・炭化・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量，焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 焼土・ローム・焼土粒子少量，ローム小ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

遺物 土師器片47点（坏片3点，甕片43点），須恵器片8点（坏片6点，碗片1点，甕片1点），土製品1点，鉄滓65.3g，含鉄滓91.6gが出土している。床面では，第42図1の上師器甕が北東コーナー部から，2の須恵器坏が南東コーナー部から，4の土土が南壁付近から出土している。3の須恵器高台付坏は，南壁下の壁溝内から出土している。

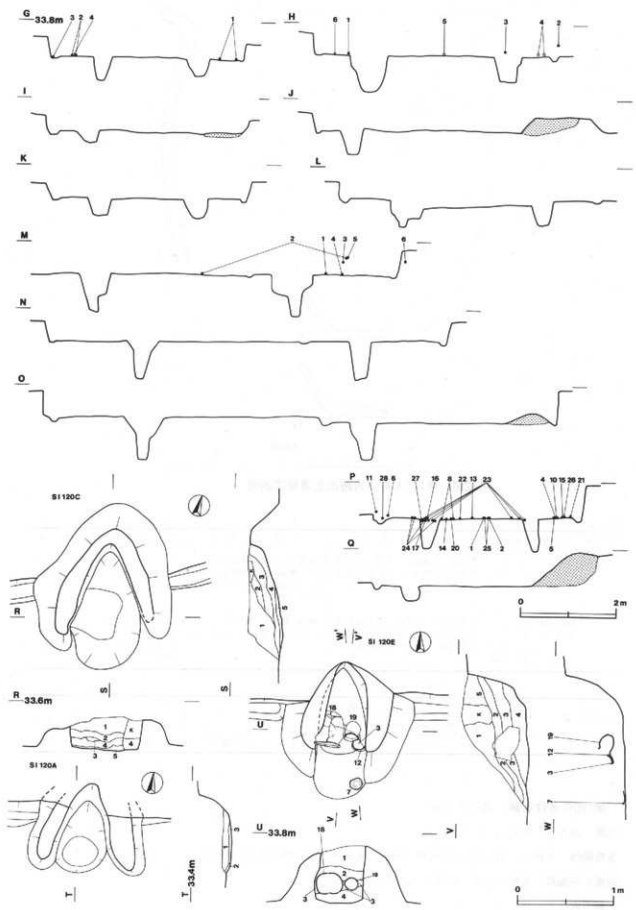
所見 床下からもうひとつの床面が検出され，床の張り替えが行われたと考えられる。時期は，遺構の形態及び出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

第120A号住居跡出土遺物観察表

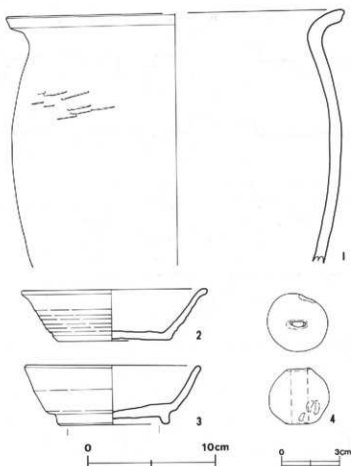
図面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕 土師器	A 126.5 B (10.9)	体部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリアに富み赤褐色着染	F142 30% 未測



第40图 第120A·120C·120D·120E号住居跡実測图(1)



第41图 第120A·120C·120D·120E号住居跡实测图(2)



第42図 第120A号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第42図 2	坏 須恵器	A 14.7	体部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、体部内面ロクロナデ。体部外面工具使用のロクロナデ。底部回転へう切り後、一方方向のへう削り。	石英・雲母 オリブ黒色 良好	P143 70% 床面 PL109
		B 4.6				
		C 8.9				
3	高台付坏 須恵器	A 14.0	高台部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。高台は短く、わずかに外に開く。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転へう削り後、高台貼付け。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色 良好	P144 80% 壁溝内 PL109 二次焼成
		B 4.9				
		D 8.8				
		E 0.8				

図版番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
4	土 玉	2.9	3.2	0.9	27.6	床 面 DP29 100% PL167	

第120C号住居跡 (第40・41図)

位置 調査区の中央部、F 2 g 4 区。

重複関係 本跡は、第120D号住居跡の南西部を掘り込み、第120A号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.60m、短軸5.50mの方形である。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は32~44cmで、外傾してほぼ垂直に立ち上がる。

甕 溝 東壁下を除いて通っている。上幅20~28cm, 下幅6~13cm, 深さ4~10cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は、長径46~88cm, 短径40~80cmの楕円形、深さ50~78cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径57cm, 短径49cmの楕円形、深さ54cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から吹き口部まで173cm, 両袖最大幅143cm, 壁外への掘り込みは77cmである。火床面は、床面を7cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土・粘土粒子少量, 炭化・ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, 粘土粒子少量
- 3 褐色 焼土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子少量

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子少量, 焼土・炭化粒子微量

遺物 土師器片166点(坏片33点, 甕片133点), 須恵器片2点(碗片1点, 甕片1点), 土製品1点, 石製品1点, 鉄製品2点が出土している。覆土中層では、第43回2の土師器坏が北壁際から出土している。覆土下層では、1の上師器坏がP3付近から正位で、3の上師器甕が竈前面から、6の刀子が中央部南側から出土している。床面では、4の上製支脚が北東コーナー部から、5の石製紡錘車が中央部東側から出土している。7の鉄鏝が、P3の覆土中から出土している。

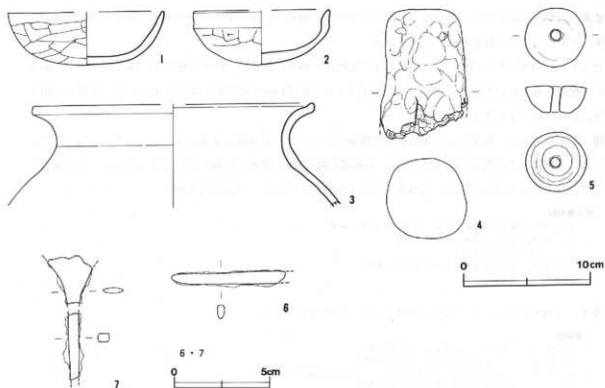
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から7世紀中葉と考えられる。

第120C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43回 1	坏 土師器	A 12.41 B 4.2	体部から口縁部へ欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に凸る。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面へラ削り後、ヘラナデ、内面ナデ。	長石・石英・スコリア に白い褐色 普通	P145 80% 覆土中 PI.109
2	坏 土師器	A 10.81 B 4.3	体部から口縁部計。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に線を伴つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部外面へラ削り、内面放射状のヘラ磨き。	長石・石英・スコリア 均率褐色 普通	P146 40% 覆土中 二次地底
3	甕 土師器	A 22.3 B (7.0)	体部から口縁部計。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面磨ナデ。体部内・外面ナデ。器面瓦れ。	長石・石英・スコリア に白い黄褐色 不良	P147 5% 覆土中

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
4	支脚	(10.2)	(7.0)	-	(422.6)	床 面	DI'30 50%

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	紡錘車	4.8	2.1	0.8	55.0	粘板岩 床 面	Q6 100% PI.176	



第43図 第120C号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第43図 6	刀 子	(6.0)	0.7	0.3	(4.4)	M12	PL178	
7	鉄 錐	(10.2)	1.0	0.5	(30.3)	ピット内	M13	PL178

第120D号住居跡 (第40・41図)

位置 調査区の中央部、F 2 g 5 区。

重複関係 本跡は、第120A号住居跡によって西壁の一部を、第120C号住居跡によって南西部を、第120E号住居跡によって竈周辺を、掘り込まれている。

規模と平面形 長軸8.50m、短軸 (7.74)mのはほぼ方形と推定される。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は31~54cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第120A・120C・120E号住居跡によって掘り込まれている部分を除いた、東壁下で検出されている。上幅18~43cm、下幅4~10cm、深さ6~10cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1~P4は、長径52~86cm、短径48~80cmの楕円形、深さ74~92cmである。

規模と配列から主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

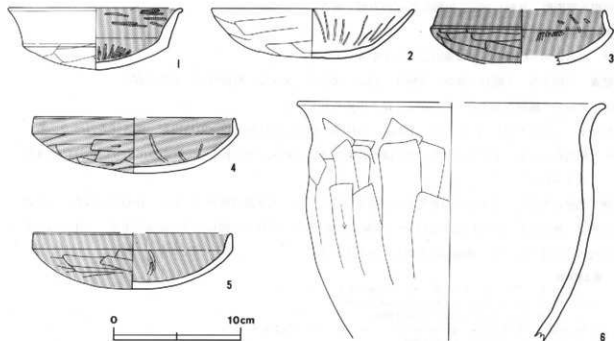
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量

- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
 4 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

遺物 土師器片34点(坏片30点, 甕片4点), 須恵器片1点(甕片1点), 鉄滓91.9g, 含鉄滓81.5gが出土している。覆土中層では, 第44図3, 5の土師器坏が中央部東側から, 6の土師器甕が北東コーナー部から出土している。床面では, 1, 4の土師器坏が中央部東側から出土している。1は, 逆位の状態で出土している。2の土師器坏は, 中央部東側の覆土中層と中央部の覆土下層から出土したものが接合したものである。

所見 竈は, 北壁付近に付設されていたと思われるが, 第120E号住居跡の構築の際に壊されたと考えられる。本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第44図 第120D号住居跡出土遺物実測図

第120D号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計面積(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	坏 土師器	A 13.8 B 4.8	底部から体部一部欠損, 丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後, ナデ, 口縁部, 体部内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P148 85% 床面 PL109
2	坏 土師器	A 16.0 B 3.9	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後, ヘラナデ, 口縁部, 体部内面放射状のヘラ磨き。	石英・雲母・スコリア 鈍い褐色 普通	P149 60% 覆土中 PL109
3	坏 土師器	A [13.2 B (4.3)]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後, ナデ, 内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母・スコリア 黒色 普通	P151 20% 覆土中
4	坏 土師器	A [15.8] B 4.4	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 体部内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母・スコリア 黒色 普通	P150 40% 床面

調査番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第41回 5	坏 土師器	A 15.7 B 4.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は点立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘタ削り、内面ヘタ磨き、内・外面黒色処理。	長石・雲母・スコリア 黒色 普通	P152 覆土中
6	甕 土師器	A 24.4 B 18.8	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘタ削り、内面ナデ。	雲母 にぶい褐色 普通	P153 覆土中

第120E号住居跡（第40・41回）

位置 調査区の中央部、F2e4区。

重複関係 本跡が、第120D号住居跡の北部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.68m、短軸4.40mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は56～69cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周する。上軸17～36cm、下軸4～12cm、深さ5～8cmで、断面形はU字状である。

床 平川で、竈前方部から中央部がよく踏み固められている。

ピット 5か所（P1～P5）。P1～P4は、長径36～48cm、短径30～42cmの楕円形、深さ58～71cmである。規模と配列から柱穴と考えられる。P5は径34cmの円形、深さ31cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。

規模は、煙道部から焚き口部まで143cm、両袖最大幅135cm、壁外への掘り込みは38cmである。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

土層解説

- 1 灰 褐色 ローム・粘土粒子少量、炭土・炭化粒子微量
- 2 灰 褐色 粘土粒子中量、炭土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭土中・小ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
- 5 灰 褐色 粘土粒子中量、炭土粒子微量

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量
- 3 暗 褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 5 暗 褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量、焼土・粘土小ブロック微量

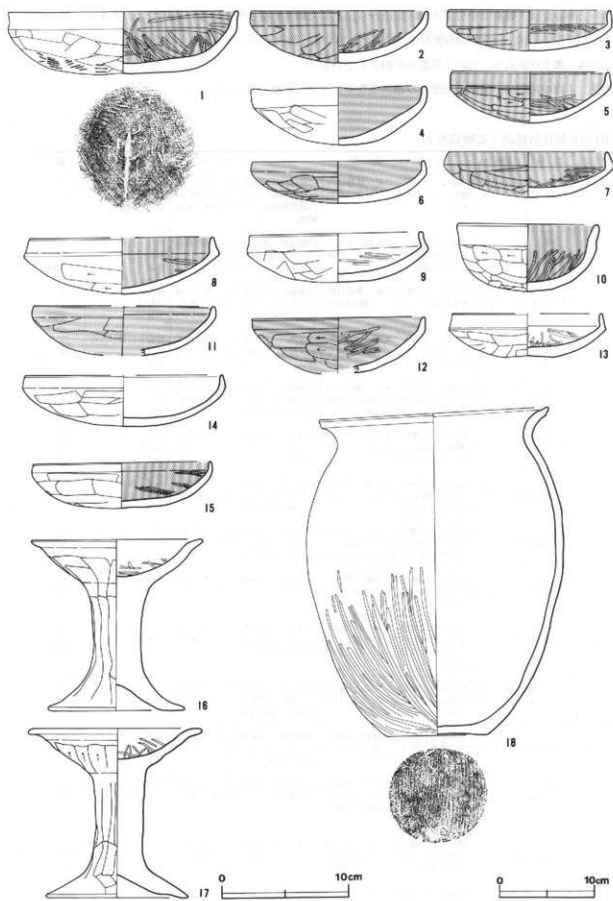
遺物 土師器片839点（坏片130点、高坏片56点、甕片653点）、須恵器片11点（坏片5点、甕片6点）、縄文土器片4点が出土している。第45・46・47回覆土下層では、6、11の土師器坏が南壁際から、16の土師器高坏がP2付近から出土している。6は、造位の状態で確認された。床面では、1の土師器坏が中央部西側から、2の土師器坏が中央部西寄りから、4、10、15の土師器坏が北東コーナー部から、8の土師器坏が中央部南西寄りから、5の土師器坏が竈西袖部付近から、14の土師器坏が東壁際から、13の土師器坏、20、25の土師器甕が中央部東側から、17の土師器高坏、24の土師器甕、27の土師器甕が中央部南東側から、21の土師器甕が北壁際から、22の土師器甕が中央部から、26の土師器甕が竈東袖部付近から、28の土師器ミニチュア土器が南壁際から出土している。2、4、5、10、15は正位で、27は造位で、1は斜位で、20、21、28は横位で出土している。

23の土師器甕は、竈前と中央部向側の床面から出土した破片が接合している。竈内では、火床部から3の土師器杯が正位で、18、19の土師器甕が横位で出土している。焚き口部では、7の土師器杯が正位で出土している。その他、覆土中から9、12の土師器杯が出土している。

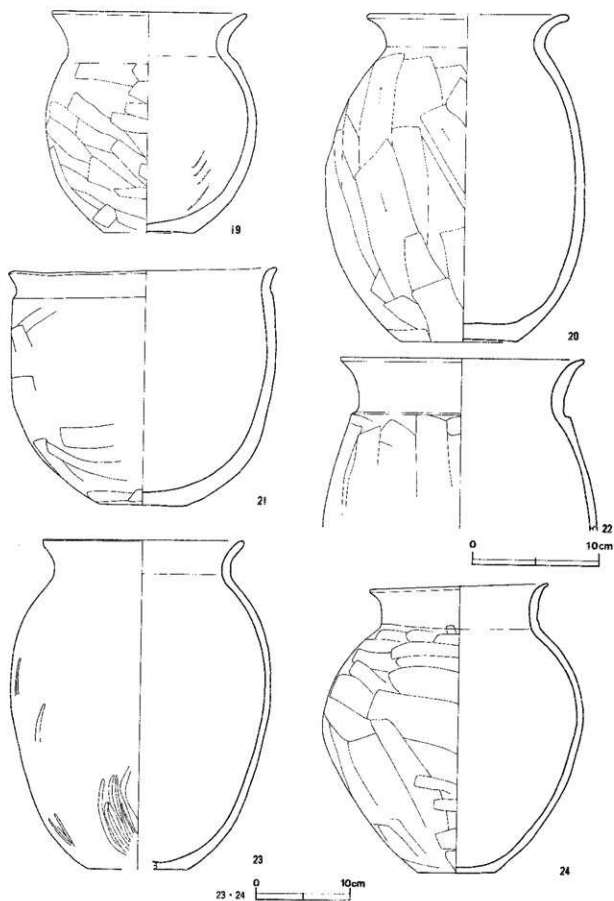
所見 本跡の時期は、遺物の形態及び出土遺物から7世紀前半と考えられる。

第120E号住居跡出土遺物観察表

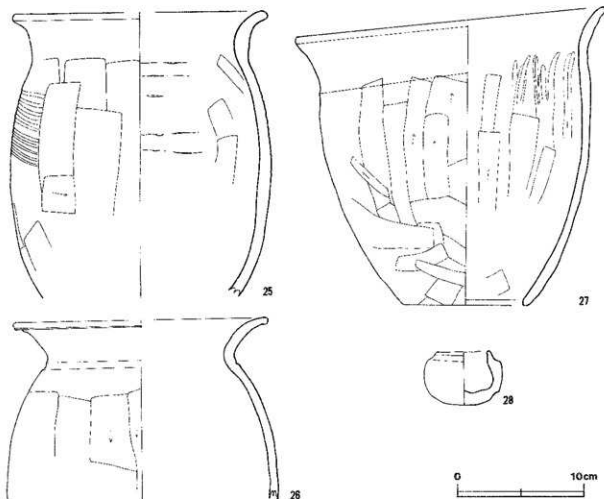
区画番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45区 1	土師器 杯	A 18.2 B 5.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直立的する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、ナゲ、内面へつ磨き。内面黒色処理。底部木炭痕。蓋面剥離。	石英・雲母に多い褐色 普通	P154 床面 PL111 95%
2	土師器 杯	A 14.0 B 4.2	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。蓋面剥離。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P155 床面 PL111 90% 二次焼成
3	土師器 杯	A 12.9 B 3.2	口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部は直立的する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、ナゲ、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母 黒褐色 普通	P162 床面 PL111 95% 二次焼成
4	土師器 杯	A 13.8 B 4.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直立的する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面ナゲ。内面黒色処理。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P156 床面 PL111 90%
5	土師器 杯	A 12.6 B 4.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立的する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、ナゲ、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	長石・雲母・スコリア 褐色 黒色 普通	P163 床面 PL111 95%
6	土師器 杯	A 13.6 B 3.3	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面ナゲ。内・外面黒色処理。	石英・雲母 黒褐色 普通	P157 覆土中 PL111 80%
7	土師器 杯	A 12.6 B 3.6	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、ナゲ、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母 褐色 普通	P164 床面 PL111 90%
8	土師器 杯	A 14.7 B 4.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。内面黒色処理。蓋面剥離。	石英・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P161 床面 二次焼成 60%
9	土師器 杯	A 13.7 B 5.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、ナゲ、内面へつ磨き。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P158 覆土中 PL109 85%
10	土師器 杯	A 11.2 B 3.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部との境にわずかな稜を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面放射状のへつ磨き。内面黒色処理。	長石・雲母 黒褐色 普通	P165 床面 二次焼成 95%
11	土師器 杯	A 11.4 B (3.9)	底部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面ナゲ。内・外面黒色処理。蓋面剥離。	長石・雲母 黒褐色 普通	P167 覆土中 30%
12	土師器 杯	A 13.8 B (4.5)	体部から口縁部片。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	長石・スコリア 黒色 普通	P159 覆土中 PL111 75%
13	土師器 杯	A 11.8 B 3.4	底部から口縁部片。平底。体部は内脣気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り後、ナゲ、内面へつ磨き。内面黒色処理。	雲母・スコリア に多い褐色 普通	P168 床面 25%
14	土師器 杯	A 15.6 B 3.9	体部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直く直立する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面ナゲ。蓋面剥離。	石英・雲母 に多い褐色 普通	P166 床面 40%
15	土師器 杯	A 14.0 B 3.7	底部から口縁部片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部は直く内傾する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。内面黒色処理。	長石・雲母 黒褐色 普通	P169 床面 PL111 75%



第45图 第120E号住居跡出土遺物実測図(1)



第46图 第120E号住居跡出土遺物実測図2)



第47図 第120E号住居跡出土遺物実測図3)

図号	器種	寸法(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 16	高 上 部 器	A 13.5	胴部から環部片。胴部は円筒状で、胴部はハの字状に開く。環部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	環部口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。胴部外面縦位のへラ削り。胴部内面横ナデ後、へラナデ、外面横ナデ。	石灰・雲母・スコリア 棕色 普通	P169 腹上中 PL111
		B 13.5				
		D 10.8				
		E 10.0				
17	高 上 部 器	A 13.8	胴部から環部片。胴部は円筒状で、胴部はハの字状に開く。環部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	環部口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。胴部外面縦位のへラ削り。胴部内・外面横ナデ後、ナデ。胴部内面直縦面。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい棕色 普通	P170 床面 PL111
		B 13.5				
		D 10.0				
		E 11.3				
18	壺 上 部 器	A 24.2	胴部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。頸部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ、外面下位取位のへラ磨き。底部一方向のへラ磨き。	石英・雲母・スコリア 棕色 普通	P171 腹内 PL110
		B 34.4				
		C 10.4				
第46図 19	壺 上 部 器	A 15.4	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。頸部にわずかに稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラナデ。底部へラ削り後、ナデ。器面荒れ。	長石・石英・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P176 腹内 PL109
		B 17.4				
		C 7.2				
20	壺 上 部 器	A 15.9	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部一方向のへラ削り。	長石・石英・雲母・スコリア 棕色 普通	P174 床面 PL111
		B 26.0				
		C 9.1				
21	壺 上 部 器	A 16.2	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。底部へラ削り。	石英・雲母・スコリア にぶい棕色 普通	P175 床面 PL111
		B 18.9				
		C 6.9				

図号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	絵上・色調・地味	備考
第47図 22	壺 十 加 蓋	A 19.8 B (13.3)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に線を打つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ割り、内面ナゲ。	石灰・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P178 床面 25% PL111
23	壺 十 加 蓋	A 21.2 B 34.9 C 110.4	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面は口縁部のへつ割り、内面ナゲ。器面細粒。	石灰・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P173 床面 50% PL110
24	壺 十 加 蓋	A 13.7 B 30.8 C 8.0	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ割り、内面ナゲ。	長石・石灰・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P172 床面 80% PL110
第47図 25	壺 上 加 蓋	A [20.2] B (22.6)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ割り後、横位のへつ割り、内面へつ割り。整結み強。	石灰・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P177 床面 30% PL111
26	壺 十 加 蓋	A 20.21 B (14.2)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ割り、内面ナゲ。	長石・石灰・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P179 床面 15% PL111
27	壺 十 加 蓋	A 29.5 B 23.7 C 9.9	体部一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。無紋式。	口縁部内・外面横ナゲ。体部外面へつ割り、内面へつ割り後、へつ割り。	長石・石灰・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P180 床面 95% PL110
28	ミニチュア壺 土 加 蓋	A 4.1 B 4.2	平底。外部は内彎して立ち上がり、口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナゲ。体部内・外面ナゲ。底部内面拍頭痕。	石灰・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P181 床面 100% PL111

第121号住居跡 (第48図)

位置 調査区の西部、F 2 d 1 区。

重複関係 本跡が、第123 A 号住居跡と第123 B 号住居跡の北西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.40m、短軸3.90mの長方形である。

主軸方向 N - 2° - W

壁 壁高は10～35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー部壁下の一部を除いて巡っている。上幅18～29m、下幅4～12cm、深さ5～8cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、竈周辺から出入り口施設にかけて踏み固められている。耕作による擾乱が、東西に箱状に伸びている。

ピット P1 は径36cmの円形、深さ28cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。両袖部が残存しているが、一部耕作による擾乱を受けている。規模は、舞道部から焚き口部まで95cm、両袖最大幅153cm、壁外への掘り込みは43cmである。竈の内壁は火熱を受けて赤変しているが、硬化はしていない。火床部は、床面を28cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。舞道部の傾斜は全体的に緩やかだが、掘出しに近づくにつれ急になっている。

竈土層解説

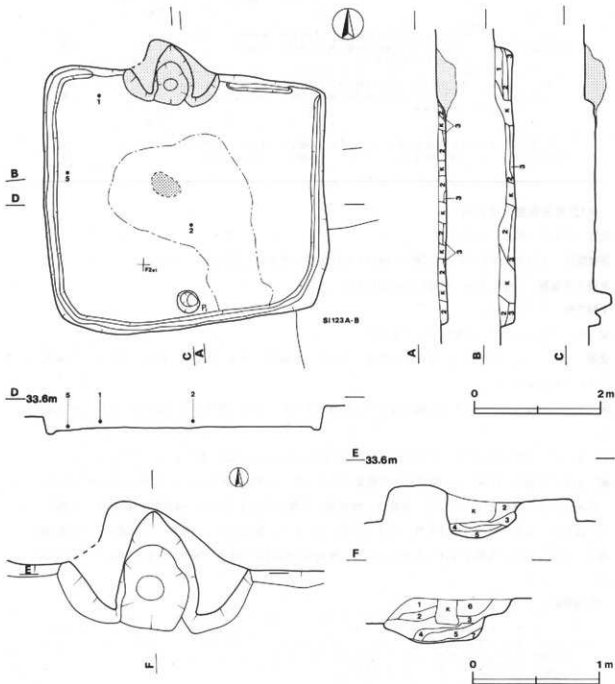
- 1 褐色 ローム殻子中量、炭土小ブロック・炭1・炭化殻子・ローム小ブロック少量、焼土・ローム中ブロック微量
- 2 褐色 ローム殻子中量、炭土小ブロック・焼土殻子・ローム小ブロック・粘土殻子少量、焼土・中ブロック・炭化殻子微量
- 3 赤褐色 焼土殻子多量、炭土・ローム小ブロック・ローム・粘土殻子中量、炭土中ブロック・炭化殻子少量
- 4 極暗赤褐色 焼土殻子多量、炭土中・小ブロック・粘土殻子中量、焼土中ブロック少量
- 5 暗赤褐色 焼土大・中・小ブロック・炭7位子多量、ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 炭土・粘土殻子少量、炭化・ローム殻子微量
- 7 暗赤褐色 炭土殻子多量、ローム殻子多量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

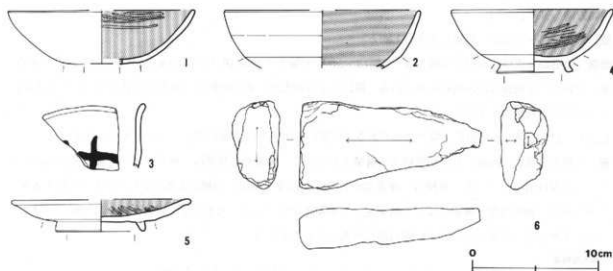
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片266点（坏片66点、甕片200点）、須恵器片25点（坏片6点、碗片3点、蓋片4点、甕片12点）、石製品1点、鉄製品1点、含鉄滓1.7gが出土している。覆土下層では、第49図1の土師器坏が北西コーナー部から、2の土師器坏が中央部から、5の土師器高台付皿が西壁際から、7の鉄鏝が北東コーナー部から出土している。その他、覆土中から3の土師器坏と4の土師器高台付碗と6の砥石が出土している。



第48図 第121号住居跡実測図

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から10世紀前葉と考えられる。



第49図 第121号住居跡出土遺物実測図

第121号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第49図 1	坏 土器	A [14.8] B 4.2 C [6.0]	底部から口縁部片。平底。体部は内壁して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面横位のヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P182 35% 覆土中 二次焼成
2	坏 土器	A [15.6] B (4.6)	体部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。内面黒色処理。	長石・石英・スコリア 黒色 普通	P183 25% 覆土中 二次焼成
3	坏 土器	-	体部から口縁部片。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面黒色処理。体部外面に黒書。	石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P184 5% 覆土中 PL110
4	高台付碗 土器	A 12.8 B 5.1 D 6.0 E 0.8	高台部から口縁部片。体部は内壁して立ち上がり、口縁部に至る。高台はハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部・体部内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、高台貼付け。内面黒色処理。	長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P388 70% 覆土中 PL110
5	高台付皿 土器	A [14.2] B 2.6 D [7.2] E 0.8	高台部から口縁部片。体部と口縁部との境に縦やかな段を持ち、口縁部で外反する。高台はハの字状に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部・体部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼付け。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P185 45% 覆土中 PL110

図版番号	器種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	砥 石	14.4	6.9	3.8	400.5	凝 灰 岩	覆 土 中	Q7 PL174

第122号住居跡（第50区）

位置 洞春区の西部，F 2 c 2区。

規模と平面形 長軸3.95m，短軸3.65mの方形である。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は45～50cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁から南壁にかけて半周する。上幅12～24cm，下幅4～8cm，深さ4～8cmで，断面形はU字状である。

床 平川で，中央部は踏み固められている。耕作による攪乱が，約20cm間隔で東西に溝状に伸び，床面まで達しているため残存部が少ない。

ピット P1は径26cmの円形，深さ22cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部と椀部は，耕作により一部攪乱を受けている。天井部は崩落している。規模は，煙道部から焚き口部まで98cm，両袖最大幅102cm，壁外への張り込みは33cmである。竈の内壁と煙道部は，火熱を受けて赤変硬化している。火床部は，床面を4cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 黄褐色 粘土粒子多量
- 3 にぶい褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化粒子・ローム・大・中ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 粘土粒子多量，ローム粒子・大・中ブロック中量，焼土粒子・炭化物・ローム大ブロック少量，焼土中ブロック微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土中・小ブロック・炭化粒子・ローム・粘土中ブロック少量，ローム大ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土大ブロック・ローム中ブロック・粘土大ブロック中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量

覆土 3層からなり，レンズ状の堆積を示し，自然堆積である。

土層解説

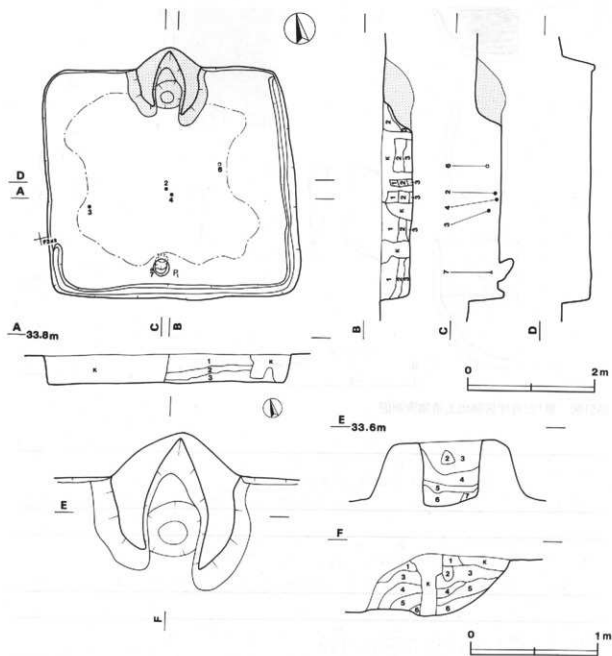
- 1 暗褐色 ローム粒子少量，焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，焼土・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片612点（坏片112点，甕片500点），須恵器片28点（坏片15点，甕片13点），土製品1点，石製品1点，鉄製品4点。鉄滓163.5g，含鉄滓10.7gが出土している。覆土下層では，第51区2の土師器椀，4の土師器鉢が中央部から，3の土師器椀が中央部西側から，6の砥石が中央部東寄りから，7の刀子がP1付近から出土している。その他，覆土中から1の土師器坏，5の上玉，8の不明鉄製品，9の門が出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態及び出土遺物から7世紀と考えられる。

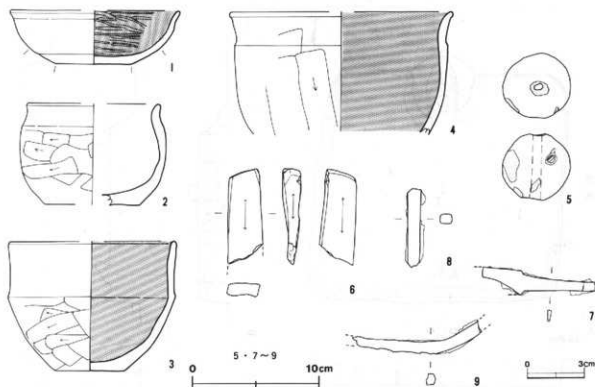
第122号住居跡出土遺物観察表

探検番号	器種	品目値(cm)	器形の特征	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第51区 1	土師器 A	13.4	底部から1縁部片，平底。体部は内壁して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	体部内・外側口ロナテ。底部，体部内面へラ磨き。体部下部回転へラ磨り，底部回転へラ磨り。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スクリア にぶい黄褐色 普通	P187 25% 覆土中 二次焼成
		4.3				
		6.9				
2	土師器 A	110.5	底部から1縁部片，平底。体部は内壁して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外側口ロナテ。体部外面へラ磨り後，ナデ，内面へラナデ，底部一方のへラ磨り。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P188 40% 覆土中 二次焼成
		8.1				
		7.4				



第50図 第122号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 3	陶 土 器	A [13.1] B 10.3 C [5.4]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り、内面ナデ。底部へう削り。内面黒色処理。	長石・雲母にふい橙色 普通	P189 30% 覆土中
4	鉢 土 器	A [17.7] B (9.8)	体部から口縁部片。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反し、端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへう削り、内面ナデ。内面黒色処理。	雲母・スコリアにふい黄褐色 普通	P191 10% 覆土中 PL110 二次焼成



第51図 第122号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第51図5	土玉	3.6	3.6	0.6	41.0	覆土中	DP32 100% PL167

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	砥石	7.5	2.8	1.4	34.4	凝灰岩	覆土中	Q 8 PL174

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	刀子	(6.0)	1.3	0.2	(4.8)	覆土中	M15 PL178
8	不明鉄製品	(4.2)	0.7	0.5	(6.0)	覆土中	M16
9	門	(6.9)	0.7	0.6	(5.5)	覆土中	M18 PL179

第123A・123B号住居跡(第52・53図)

位置 調査区の西部, F2e2区。

重複関係 当初, 1軒の住居跡として調査したが, 床下から踏み固められた床面と竈の痕跡と考えられるものが検出されたことから, 上位のものを第123A号住居跡, 下位のものを第123B号住居跡とした。両住居跡の踏み固められた床面の範囲は, ほぼ同じであるが, 第123B号住居跡の竈の痕跡は, 第123A号住居跡の竈より内側で検出されている。また, 4か所の主柱穴のうち2か所は, すぐ外側にもそれぞれ柱穴が掘られていた。内側の柱穴内の覆土はロームブロックが多く, 埋め戻されたと考えられることから, 外側のものを第123A号住居跡の主柱穴, 内側のものを第123B号住居跡の主柱穴とした。両住居跡は, 第121号住居跡によって北西コー

ナー部を掘り込まれている。

規模と平面形 第123A号住居跡は、長軸6.80m、短軸6.55mの方形である。第123B号住居跡の規模は、竈の位置から、第123A号住居跡よりやや小規模であると思われる。

主軸方向 第123A号住居跡は、N-8°-Wである。第123B号住居跡の主軸方向は厳密には不明であるが、竈の痕跡の位置と踏み固められた床面の範囲及び主柱穴の位置から、第123A号住居跡とほぼ同じである可能性がある。

壁 第123A号住居跡の壁高は25～30cmで、外傾して立ち上がる。第123B号住居跡の壁高は確認されていない。

壁溝 第123A号住居跡は、北西コーナー部壁下を除いて巡っている。上幅20～35cm、下幅6～11cm、深さ6～10cmで、断面形はU字状である。第123B号住居跡の壁溝は、検出されなかった。

床 第123A号住居跡は、半坦で、竈付近から西部にかけてよく踏み固められている。第123B号住居跡の床は、第123A号住居跡の床面の下2～10cmのところからはほぼ同じ範囲で確認された。耕作による擾乱が、東西に線状に伸び、床面まで達している。

ピット 覆上の状況と位置からピットの所属を判断した。8か所(P1～P8)。P1～P4は、長径約50～70cm、短径40～60cmの楕円形、深さ67～90cmである。規模と配列から第123A号住居跡の主柱穴と考えられる。P5～P6は長径約60～70cm、短径約50～60cmの楕円形、深さ80～86cmである。規模、配列、柱穴内の土層から、第123B号住居跡の主柱穴と考えられる。P8は長径32cm、短径25cm楕円形、深さ26cmで、第123B号住居跡の補助ピットと考えられる。P7は長径55cm、短径46cmの楕円形、深さ66cmで補助ピットと考えられるが、どちらの住居跡に伴うピットであるか確認できなかった。

竈 第123A号住居跡の竈は、北壁中央部に砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部と袖部は、耕作により一部擾乱を受けている。天井部は崩落している。規模は、煙道部から羨き口部まで127cm、内箱最大幅111cm、壁外への掘り込みは35cmである。火床部は、かなり火熱を受けて赤変硬化している。土製支脚が、火床部西袖寄りに置かれている。煙道部は緩やかに立ち上がる。また、第123A号住居跡の竈の南側の床下から、粘土や焼土の粒子がかなり検出され、第123B号住居跡の竈があったものと推測される。第123B号住居跡の竈は、第123A号住居跡の構築の際に壊されたと考えられる。

覆土層解説

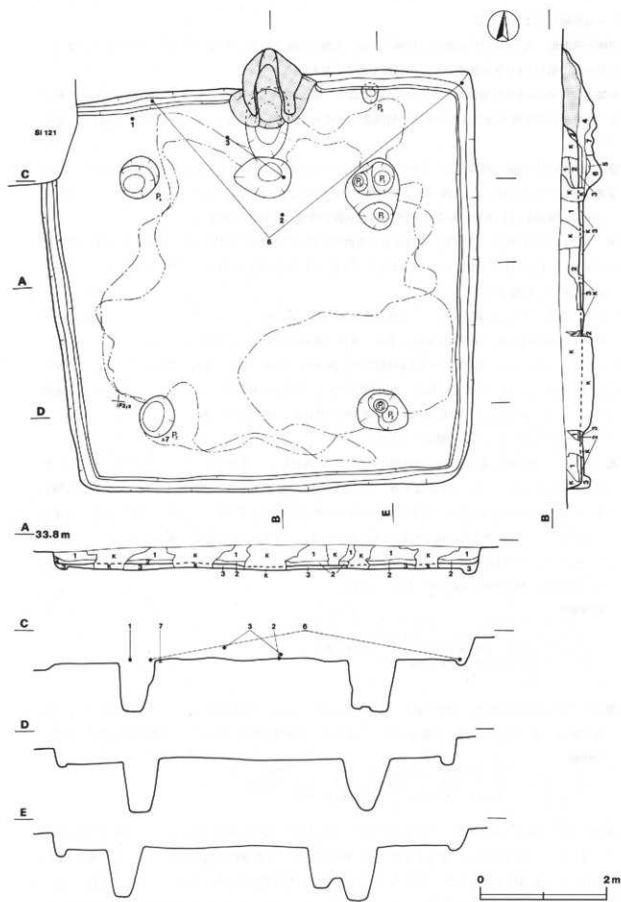
- 1 灰褐色 粘土粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 灰褐色 ローム小ブロック・ローム・粘土粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭土小ブロック少量、焼土粒子微量
- 4 褐色 粘土粒少量、炭化粒子微量

覆土 第123A号住居跡は、2層(第1～2層)からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。第123B号住居跡は、単一層(第3層)であり、ローム小ブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

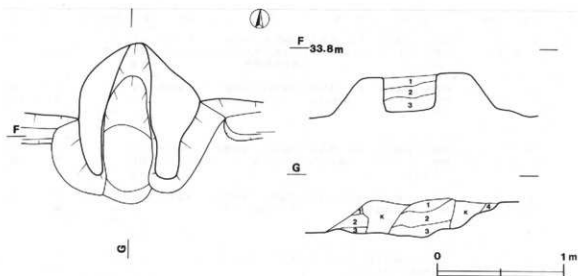
土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム中・中ブロック・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭土粒子微量

遺物 第123A号住居跡からは、土師器片1257点(杯片290点、甕片966点、椀片1点)、須恵器片86点(杯片21点、甕片65点)、鉄製品2点、縄文土器片2点、鉄滓321.3g、含鉄滓274.1gが出土している。覆土下層では、第54図3の土師器杯が竈前面から正位で、1の土師器杯が北壁際から正位で出土している。床面では、2の土師器杯が中央部から、7の鉄滓がP3付近から出土している。6の土師器瓶は、竈西側の北壁際と北東コーナー部の床面から出土した破片が接合している。その他、覆土中から4の土師器杯と5の土師器壺が出土している。



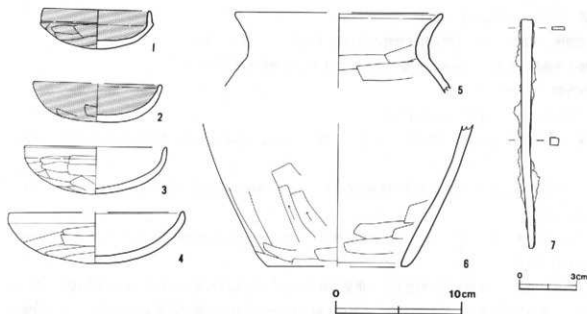
第52图 第123A·123B号住居跡実測图(1)



第53図 第123A号住居跡実測図(2)

第123B号住居跡の遺物は土師器と須恵器の細片であった。

所見 第123A号住居跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から7世紀中葉と考えられる。第123B号住居跡は、第123A号住居跡の貼床の下位にあることから、7世紀中葉以前と推定される。



第54図 第123A号住居跡出土遺物実測図

第123A号住居跡出土遺物観察表

図数番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	土師器 環	A 8.3	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内・外面黒色処理。	石英・雲母 黒褐色 普通	P194 50% 覆土中 PL110
		B 3.1				

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54回 2	坏 土師器	A 10.3 B 3.1	底部から11線部片、丸底。体部は内傾して立ち上がり、11線部は短く直立する。	11線部内・外面横ナデ。体部外面へう割り後、ナデ、内面ナデ、内・外面黒色施装。	石黄・青緑・黒色 普通	P195 30% 床面
3	坏 土師器	A 11.2 B 3.7	底部から11線部片、丸底。体部は内傾して立ち上がり、11線部は短く直立する。	11線部内・外面横ナデ。体部外面へう割り、内面ナデ。	石黄・青緑・スコリア にぶい黄褐色 普通	P193 60% 覆土中 PL110
4	坏 土師器	A 13.8 B 4.0	底部から11線部片、丸底。体部は内傾して立ち上がり、11線部は短く直立する。	11線部内・外面横ナデ。体部外面へう割り後、ナデ、内面ナデ。	石黄・スコリア 褐色 普通	P192 50% 覆土中 PL110
5	甕 土師器	A 16.4 B (6.2)	体部から11線部片。体部上位は内傾し、11線部は外反する。	11線部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面へうナデ。	石黄・石黄・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P196 10% 覆土中
6	甕 土師器	B (11.3) C (11.0)	体部片、11線部欠損。無底式。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面へう割り後、ナデ。	石黄・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P197 10% 床面

図表番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
7	釘	(12.0)	0.7	0.4	(9.6)	床 面 M20	PL178

第124号住居跡 (第55回)

位置 調査区の中央部、F3j4区。

重複関係 本跡は、第4号獨立柱建物跡と第169号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸(4.69)m、短軸(3.92)mであり、長方形と推定される。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は10cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁と西壁の壁下の一部に巡っている。上幅25~30cm、下幅10~14cm、深さ12cmで、断面形はじ字状である。

床 平坦で、壁の前から西壁にかけて踏み固められている。本跡は斜面部に位置し、東部から南部にかけては残存していない。

ピット 2か所(P1~P2)。P1~P2は、長径53~55cm、短径46~47cmの楕円形、深さ96~98cmであり、性格は不明である。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。

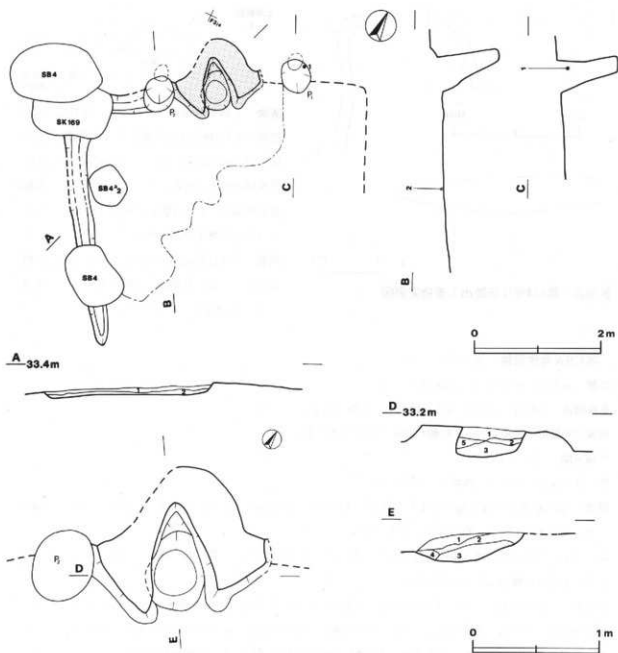
規模は、竈道部から焚き口部まで113cm、両袖最大幅[143]cm、壁外への掘り込みは61cmである。袖の内壁は、火熱を受けて変色している。火床部は、床面を7cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて変色硬化している。

竈道部は外傾して緩やかに立ち上がり、のち角度を変えてほぼ垂直に立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 3 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土・ローム粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

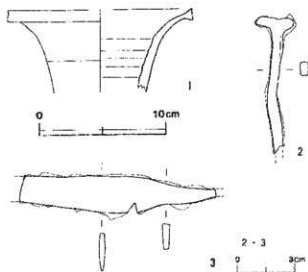


第55図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色画・焼成	備考
第56図 1	長頸瓶 灰釉陶器	A [14.6] B (6.5)	頸部から口縁部片。I1線部は外傾し、肩部を上下に突出させ、断面は三角形を呈する。	口縁部内・外面口クロナデ。	長石 灰白色 良好	P198 10% ピット内PL111 黒笹90号窯様式

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	釘	(6.9)	0.3	0.7	(12.6)	覆土中 M21	PL179
3	刀子	(10.4)	2.0	0.4	(22.8)	覆土中 M35	PL178



第56図 第124号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 層 色 ローム粒子多量、焼土粒下・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・ローム中ブロック少量、炭化物・炭化粒子・ローム大ブロック微量
- 2 層 色 ローム小ブロック少量、炭化物・炭化粒子・ローム大・中ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片60点(坏片39点、甕片21点)、須恵器片7点(坏片1点、甕片6点)、鉄製品1点、鉄滓51.1gが出土している。第56図2の釘は中央部西側の覆土下層から出土している。1の灰軸陶器長頸瓶は、P1の覆土下層から出土している。3の刀子が覆土中から出土している。

所見 本跡は斜面部に位置し、東部と南部が削り取られている。時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

第125A号住居跡(第57図)

位置 調査区の中央部、F 2 d 8 区。

重複関係 本跡は、第125C号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.30m、短軸4.10mのはほぼ方形である。

主軸方向 [N-24°-W]

壁 壁高は33~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第125C号住居跡に掘り込まれた部分と東壁下の一部を除いて、通っている。上幅14~23cm、下幅5~11cm、深さ4~7cmで、断面形はじ字状である。

床 平川で、中央部は踏み固められていたと考えられるが、第123C号住居跡に掘り込まれているため、中央部やや東寄りに確認できるだけである。

ピット 9か所(P1~P9)。P1~P3は、長径26~30cm、短径23~26cmの楕円形、深さ42~70cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P4~P9は径25~41cmの円形、深さ13~43cmであり、性格は不明である。

竈 北壁中央部に付設されていたとみられるが、第125C号住居跡によって壊されている。

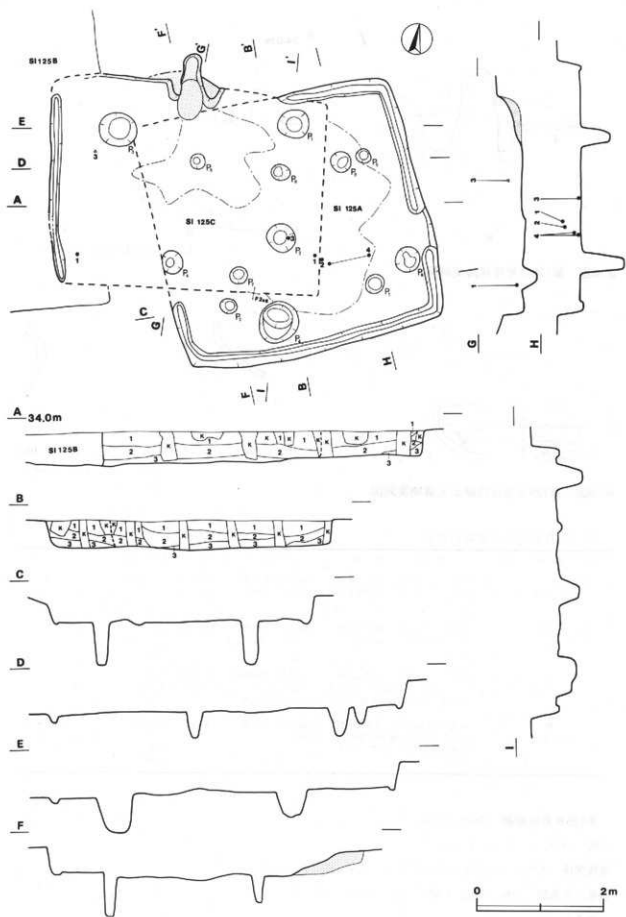
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

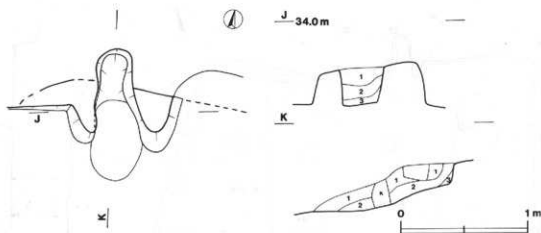
- 1 層 色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 2 層 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土・炭化粒子微量
- 3 層 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム大・中ブロック微量

遺物 土師器片547点(坏片202点、高坏片4点、残片1点、甕片340点)、須恵器片19点(坏片9点、甕片10点)、鉄滓46.1g、含鉄滓102.9gが出土している。覆土上層では、第59図1、2の土師器坏が中央部から出土している。1は、正位の状態で出土している。覆土下層では、3の土師器坏が中央部から、4の土師器甕が中央部南東寄りから出土している。

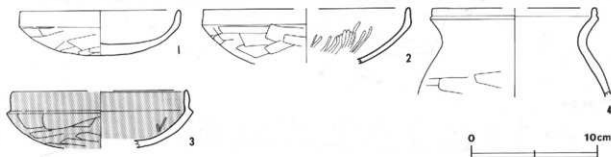
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第57图 第125A·125C号住居跡実測图(1)



第58図 第125C号住居跡実測図(2)



第59図 第125A号住居跡出土遺物実測図

第125A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・変成	備考
第59図 1	坏 土器	A 12.6 B 3.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリアにふい赤褐色 普通	P199 覆土中 PL112
2	坏 土器	A 16.2 B (4.3)	体部から口縁部片。体部は内彎し味に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。	雲母・スコリアにふい赤褐色 普通	P200 覆土中 20%
3	坏 土器	A 13.8 B (4.5)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母 黒褐色 普通	P201 覆土中 20%
4	壺 土器	A 12.8 B (6.8)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。胴部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・雲母・スコリア 灰褐色 普通	P202 覆土中 5%

第125B号住居跡 (第60・61図)

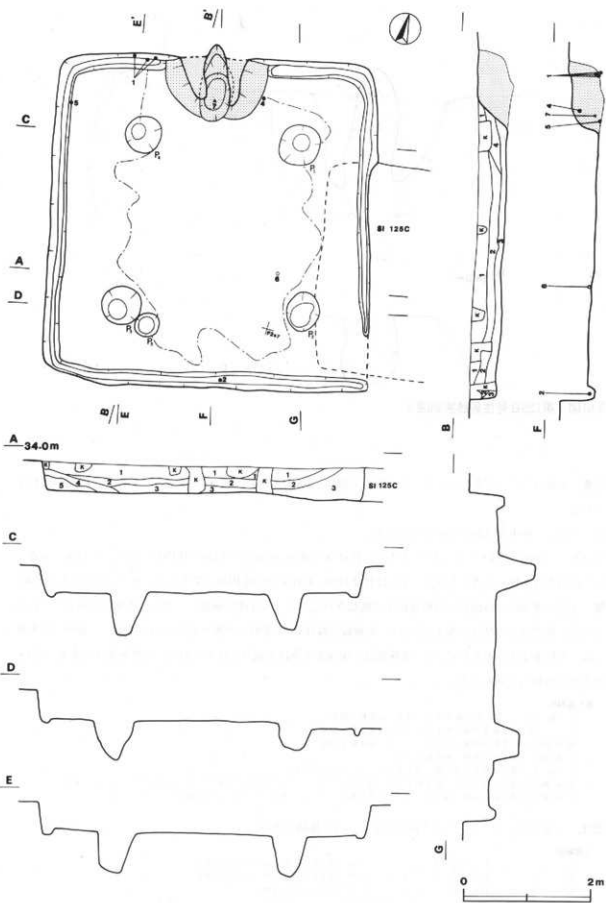
位置 調査区の中央部、F2d6区。

重複関係 本跡は、第125C号住居跡によって掘り込まれている。

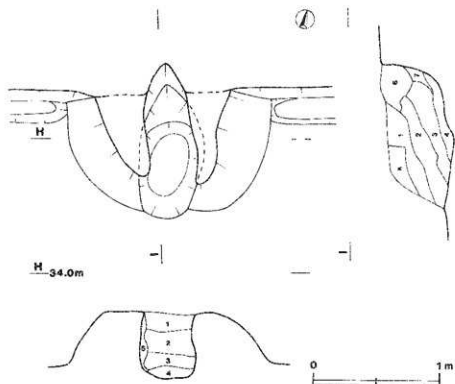
規模と平面形 長軸5.80m、短軸5.10mの長方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は40~45cmで、外傾して立ち上がる。



第60图 第125B号住居跡実測图(1)



第61図 第125B号住居跡実測図(2)

壁溝 南東コーナー部を除いて巡っている。上幅17~30cm, 下幅6~13cm, 深さ5~10cmで、断面形はU字状である。

床 平円で、中央部は踏み回められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は、長径58~68cm, 短径53~64cmの楕円形、深さ40~64cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。P5は長径41cm, 短径37cmの楕円形、深さ30cmであり、性格は不明である。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。周楕は、煙道部から焚き口部まで123cm, 両袖最大幅160cm, 壁外への掘り込みは23cmである。袖の内壁と煙道部は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を4cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰褐色 ローム・粘土粒子少量, 焼土・炭化粒子微量
- 2 褐色 粘土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 粘土粒子少量
- 5 赤褐色 焼土・粘土粒子中量, 焼土中ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 焼土土・中ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

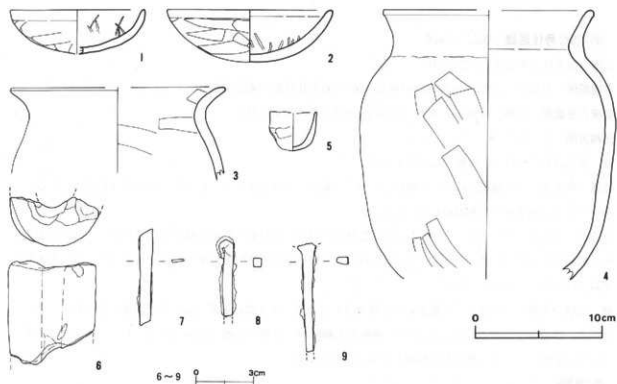
覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土・炭化粒子微量
- 4 赤褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量, 焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・ローム中ブロック微量

遺物 土師器片550点(坏片62点, 甕片488点), 須惠器片10点(坏片7点, 蓋片1点, 甕片2点), 土製品1点, 鉄製品1点, 縄文土器片3点, 弥生土器片1点, 鉄滓124.4g, 含鉄滓232.0gが出土している。覆土上層では, 第62図3の土師器甕が北壁寄りから出土している。床面では, 1の土師器坏が北壁際から, 2の土師器坏が南壁際から正位で, 5の土師器甕のミニチュア土器が北西コーナー部付近から横位で, 6の管状土鍾が中央部南東寄りから出土している。竈内覆土中からは, 4の土師器甕と7の不明鉄製品が出土している。覆土中からは8の不明鉄製品と9の鉄銹が出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から7世紀後葉と考えられる。



第62図 第125B号住居跡出土遺物実測図

第125B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色画・焼成	備考
第62図 1	坏	A 10.6	底部, 口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラ磨き。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P204 95% 床面 PL112
	B	3.4				
2	坏	A 13.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り, 内面放射状のヘラ磨き。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P205 55% 床面 二次焼成
	B	4.1				
3	甕	A [16.4]	底部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後, ナデ, 内面ナデ。	石英・雲母 褐色 普通	P207 10% 覆土中
	B	(21.3)				
4	甕	A [17.0]	底部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ, 内面ヘラナデ。器面荒れ。	石英・雲母 褐色 普通	P206 10% 竈内
	B	(6.8)				
5	ミニチュア甕	A [17.0]	口縁部一部欠損。丸底。体部は外傾し, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部外面ヘラ削り後, ナデ, 内面ナデ。	雲母 黄褐色 普通	P389 90% 床面 PL112
	B	6.8				

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
6	管状土埴	(5.5)	(4.7)	(1.7)	(59.7)	床 面	DP33 30%

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	不明鉄製品	(5.1)	0.8	0.2	(3.1)	壘 内	M22 PL178
8	不明鉄製品	(4.1)	0.9	0.5	(4.1)	覆 土 中	M23
9	鉄 線	(5.7)	0.9	0.4	(3.4)	覆 土 中	M14 PL178

第125C号住居跡(第57・58図)

位置 調査区の中央部, F 2 d 7 区。

重複関係 本跡が, 第125A号住居跡の西部と第125B号住居跡の東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [4.30]m, 短軸 [3.30]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は35~40cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下にのみ確認された。上幅13~17cm, 下幅5~8cm, 深さ8~10cmで, 断面形はU字状である。

床 平坦で, 竈前面が踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P3は, 長径48~61cm, 短径42~55cmの楕円形, 深さ30~62cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P4は長径38cm, 短径32cmの楕円形, 深さ21cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚き口部まで104cm, 両袖最大幅85cm, 壁外への掘り込みは41cmである。火床部は, 火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して急に立ち上がる。

電土層解説

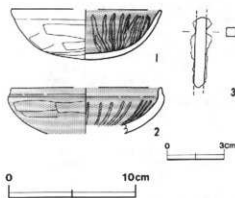
- 1 暗 褐色 粘土粒子少量, 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土・炭化・ローム・粘土粒子少量
- 3 暗 褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量

覆土 3層からなり, レンズ状の堆積を示し, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子ローム中ブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム中ブロック微量

遺物 土師器片68点(坏片17点, 甕片51点), 須恵器片9点(坏片2点, 甕片7点), 鉄製品1点, 縄文土器片2点, 含鉄滓64.9gが出土している。第63図2の土師器坏は, 覆土中から出土している。3の不明鉄製品は, 中央部西側の覆土上層から出土している。1の土師器坏は, 南西コーナー部の覆土下層から出土している。



第63図 第125C号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から7世紀前葉と考えられる。

第125C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	坏 土器器	A 11.8 B 4.0	体部から口縁部片。丸底。体部は内湾して立ち上がり。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へウ倒り。内面放射状のへラ跡。内面黒色焼成。	石英・雲母・スコリアにふいば色普通	P208 層上中 二次焼成
2	坏 土器器	A 11.8 B 3.6	体部から口縁部片。体部は内湾して立ち上がり。口縁部との境に明確な境を持つ。口縁部は鋭く立ち上る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へウ倒り。ナデ。内面放射状のへラ跡。内・外面黒色焼成。	雲母・スコリア 黒褐色 普通	P209 層上中 二次焼成

図版番号	器種	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)		
3	小形鉄製品	(3.7)	0.6	0.5	(3.6)	層上中 M24

第126A・126C号住居跡 (第64・65図)

位置 調査区の中央部、F2c0区。

重複関係 当初、1軒の住居跡として調査したが、4か所の主柱穴のすぐ外側にもそれぞれ柱穴が掘られていることから、外側の柱穴のものを第126A号住居跡、内側の柱穴のものを第126C号住居跡とした。両住居跡の対応する主柱穴の位置は、南東から北西方向に25～80cmしか離れていないこと、第126C号住居跡の竈の表溝、壁溝、踏み固められた床面などが検出されないことから、第126A号住居跡は、第126C号住居跡の建て替えの可能性がある。また、両住居跡は、第126B号住居跡、第9・10号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 第126A号住居跡は、長軸10.25m、短軸10.03mの方形である。第126C号住居跡の規模と平面形は不明であるが、第126C号住居跡の主柱穴が第126A号住居跡の主柱穴より内側に位置していることから、第126A号住居跡より小規模であった可能性がある。

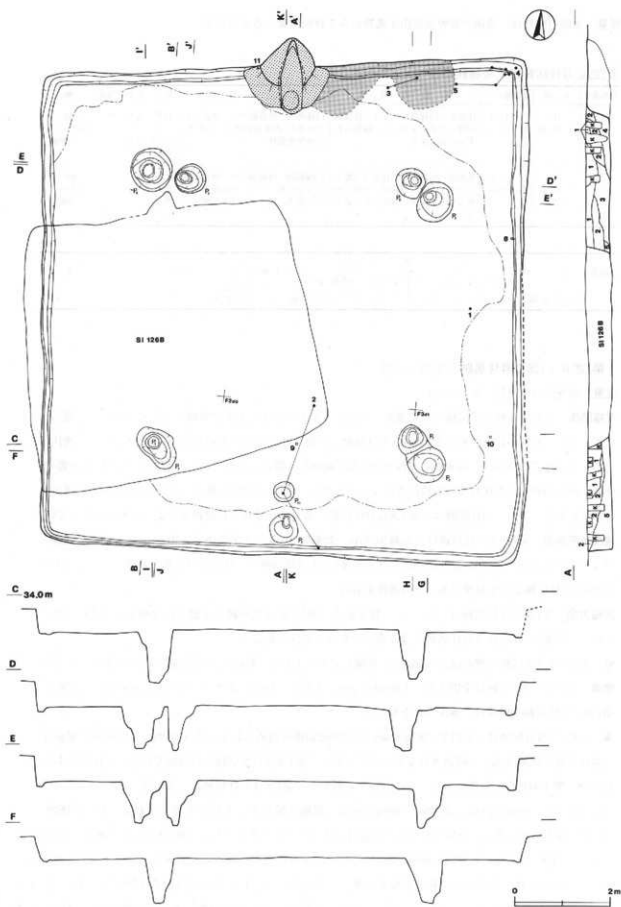
主軸方向 第126A号住居跡は、N-1°-Wである。第126C号住居跡の主軸方向は厳密には不明であるが、主柱穴の位置から第126A号住居跡とほぼ同じである可能性がある。

壁 第126A号住居跡の壁高は51～66cmで、外傾して立ち上がる。第126C号住居跡の壁高は確認されていない。

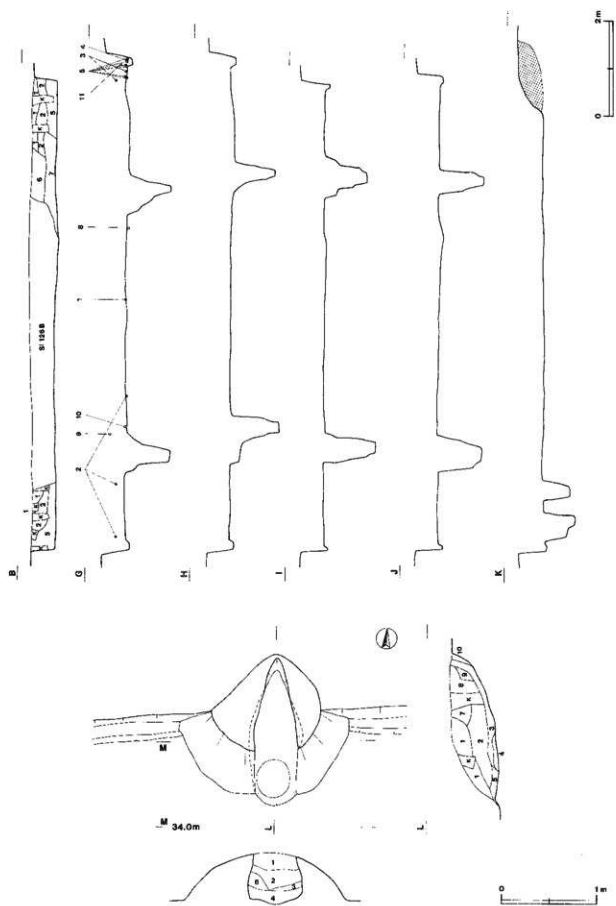
壁溝 第126A号住居跡は全周する。上幅10～33cm、下幅3～18cm、深さ5～9cmで、断面形はU字状である。第126C号住居跡の壁溝は、検出されなかった。

床 第126A号住居跡は、平床で、東部を除いた中央部が踏み固められている。第126C号住居跡の床面は第126A号住居跡の床面下部から確認されなかったことから、第126A号住居跡とはほぼ同じ高さの可能性がある。

ピット 覆土の状況と位置からピットの所属を判断した。第126A号住居跡は、5か所(P1～P5)。P1～P4は、径[60]～83cmの円形、深さ86～108cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径58～60cmの円形、深さ67cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。第126C号住居跡は、5か所(P6～P10)。P6～P9は、長径52～86cm、短径[50]～73cmの楕円形、深さ90～95cmである。土層はいずれも褐色で、ロームブロックやローム粒子が極めて多い。したがって、P6～P9の主柱穴が埋め戻され、その後新しくP1～P4の主柱穴がつけられたと考えられる。P10は、径42cmの円形、深さ57cmである。主柱穴と同様に、P5が埋め戻されて新しくつくられた。出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第64图 第126A・126C号住居跡実測图(1)



第65图 第126A·126C号住居跡实测图(2)

竈 第126A号住居跡は、北壁中央部に砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで157cm、両袖最大幅177cm、壁外への掘り込みは57cmである。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。第126C号住居跡の竈は、その痕跡が検出されないことから、第126A号住居跡の竈が、第126C号住居跡の段階から使用されていたか、同位置で造り替えが行われた可能性がある。

覆土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・粘土粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化材・ローム大ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土・ローム粒子中量、焼土・ローム小ブロック・粘土粒子少量
- 4 暗 褐色 焼土小ブロック・炭化物中量、焼土中ブロック・ローム小ブロック・粘土粒子少量
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、粘土粒子微量
- 6 に近い赤褐色 焼土大・中ブロック・粘土粒子中量、ローム小ブロック少量
- 7 黒 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック・粘土粒子微量
- 8 灰 褐色 粘土粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック少量
- 9 灰 褐色 ローム小ブロック・粘土粒子少量、焼土小ブロック少量
- 10 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

覆土 第126A号住居跡は7層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。第126C号住居跡は、第126A号住居跡の床面と同じ高さと考えられるため、覆土は存在しない。

土層解説

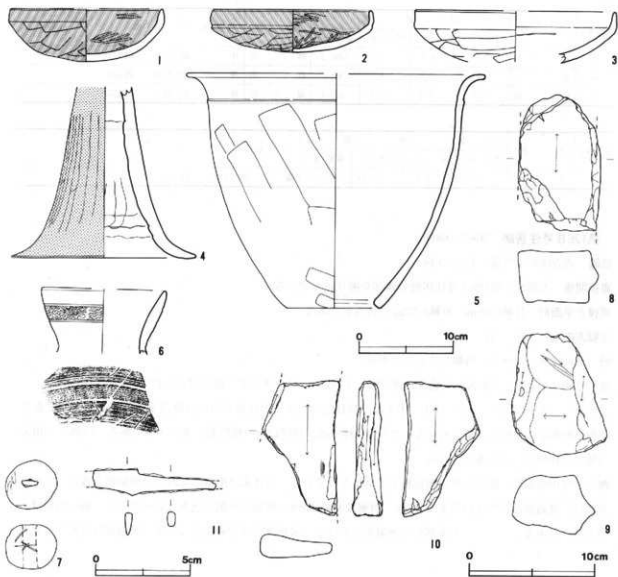
- 1 暗 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム大・小ブロック少量、焼土小ブロック・ローム中ブロック・粘土粒子微量
- 4 暗 褐色 焼土小ブロック・粘土中ブロック・粘土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、ローム大・中ブロック微量
- 6 暗褐色 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 7 暗 褐色 ローム大・小ブロック少量、焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量

遺物 第126A号住居跡からは、土師器片1283点（坏片201点、甕片1066点、高坏片16点）、須恵器片68点（坏片38点、蓋片3点、甕片27点）、土製品1点、縄文土器片8点、鉄滓674.6g、含鉄滓222.1gが出土している。覆土上層では、第66国9の紙石が南側から出土している。床面では、1の土師器坏、10の磁石が東壁付近から、8の磁石が東壁際から、3の土師器坏が北壁際から、4の土師器高坏、5の土師器甕が北東コーナー部から出土している。室内では、11の刀子が出土している。2の土師器坏は、中央部南側と南壁際の覆土中層と中央部南寄りの床面から出土した破片が接合している。その他、覆土中から6の須恵器提梁、7の土玉が出土している。第126C号住居跡からは、遺物は出土していない。

所見 第126A号住居跡の時期は、遺物の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。第126C号住居跡の時期は、第126A号住居跡より古いことから6世紀後葉には近い時期と推定される。

第126A号住居跡出土遺物観察表

国庫番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66国9 1	坏 土師器	A 12.0 B 4.2	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨り、内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	灰褐色 黒色 普通	P210 85% 床面 PL112
2	坏 土師器	A 12.4 B 3.4	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に横を持つ。口縁部はわずかに内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨り、内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	灰褐色 黒色 普通	P211 80% 覆土中・床面
3	坏 土師器	A 16.0 B (4.0)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ磨り、内面ナデ。	赤褐色 普通	P212 80% 床面



第66図 第126A号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 4	高 坏 土 器	B (13.5) D 14.6	脚部片。脚部は円筒形で、裾部で大きく開く。	脚部外面履位のヘラ削り様、ナデ、内面ナデ。外面赤彩。脚部内面輪積み痕。	赤土・スコリア 褐色 普通	P214 50% 床面 PL112
5	瓶 土 器	A [31.4] B 24.8 C 10.0	底部から口縁部片。無底式。体部は内壁気味に立ち上がり、口縁部との境に線を付す。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P215 40% 床面
6	提 瓶 須 器	A [10.0] B (5.1)	頸部から口縁部片。頸部は外傾し、口縁部に至る。	口縁部、頸部内・外面クロナデ。口縁部外面に2本の線を付す。その間に6本の襷指波状文が施されている。	長石 灰色 良好	P216 15% 覆土中 PL112

図版番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	土 玉	2.4	2.7	0.3	16.1	覆 土 中 DP35 100% PL167	

図取番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
8	砥 石	10.7	6.6	4.1	406.2	砂 岩 床 面	Q 9 PL174	
9	砥 石	9.7	7.7	4.7	361.0	砂 岩 覆 上 中	Q10 PL174	
10	砥 石	10.6	6.0	2.4	142.7	凝 灰 岩 床 面	Q11 PL174	

図取番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
11	刀 子	(6.5)	1.4	0.4	0.3	竈 内	M25 PL178

第126B号住居跡 (第67・68図)

位置 調査区の中央部，F2c9区。

重複関係 本跡が，第126A号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.06m，短軸5.32mの長方形である。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は46～50cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，P4から出入り口施設に伴うピット(P5)にかけてよく踏み固められている。

ピット 5か所(P1～P5)。P1～P4は，長径52～62cm，短径48～54cmの楕円形，深さ38～44cmである。規模と配列から柱柱穴と考えられる。P5は長径51cm，短径43cmの楕円形，深さ50cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，煙道部から焚き口部まで123cm，両袖最大幅159cm，壁外への掘り込みは40cmである。袖の内壁は，火熱を受けて赤変している。火床部から煙道部にかけて，火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

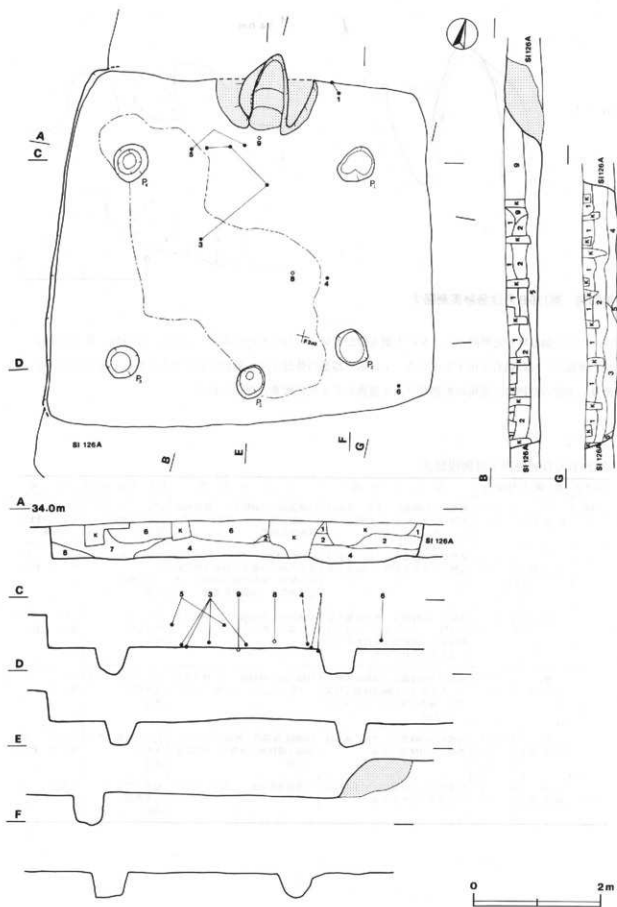
- 1 暗 褐 色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・粘土粒子微量
- 2 暗 褐 色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土中ブロック・炭化物・新土小ブロック・粘土粒子微量
- 3 灰 褐 色 粘土粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック微量
- 4 暗 赤 褐色 焼土小ブロック中層，粘土粒子少量，炭化物微量
- 5 暗 赤 褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化・粘土粒子微量

覆土 9層からなり，レンズ状の堆積を示し，自然堆積である。

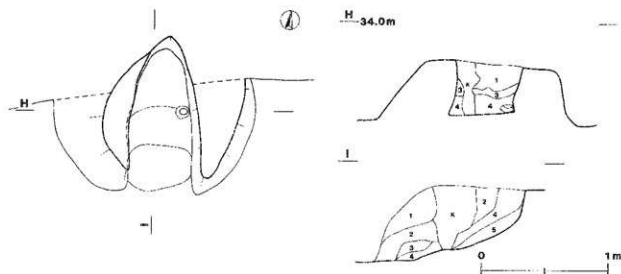
土層解説

- 1 暗 褐 色 焼土・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム中・小ブロック・粘土粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・ローム中ブロック微量
- 3 暗 褐 色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量，焼土中・小ブロック微量
- 4 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
- 5 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 6 暗 赤 褐色 ローム小ブロック中層，焼土粒子少量，焼土小ブロック・粘土小ブロック微量
- 7 暗 褐 色 ローム小ブロック中層，ローム中ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
- 8 暗 褐 色 ローム粒子中層，ローム中・小ブロック少量
- 9 暗 褐 色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量

遺物 土師器片615点(坏片185点，高坏片1点，斐片429点)，須恵器片39点(坏片22点，蓋片1点，斐片16点)，土製品2点，石製品1点，縄文土器片1点，鉄滓92.9g，含鉄滓0.7gが出土している。覆土上層では，第69図5の須恵器坏が竈内袖部付近から出土している。覆土下層では3の上師器蓋が竈前面と中央部から，4の上師器蓋が中央部東寄りから，6の須恵器蓋が南東コーナー部から，8の土玉が中央部から出土している。床面で



第67图 第126B住居跡実測图(1)



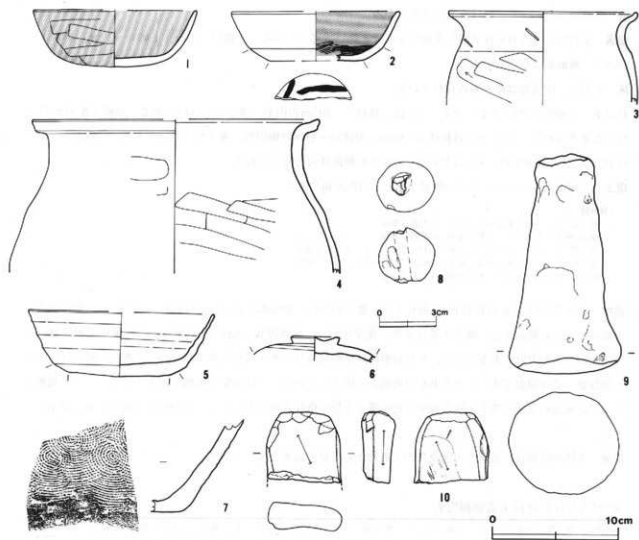
第68図 第126B号住居跡実測図(2)

は、1の土師器環が北壁際から、9の上製支脚が竈突き口部付近から出土している。その他、覆土中から、2の土師器環、10の砥石が出土している。7は須恵器甕の体部片で、外面に同心円当てが痕が施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

第126B号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	寸測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	環土師器	A [13.0] B 4.5	底部から口縁部片、丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ。内面ナデ。内・外面褐色気理。	長石・スコリアに多い黄褐色普通	P218 75% 覆土中 PL112 二次焼成
	環土師器	A [13.4] B 3.9 C [7.1]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部内面へつ削り。外面下部同軸へつ削り。底部同軸へつ削り。底部外面黒色。内面黒色処理。	長石・石英・スコリアに多い橙褐色普通	P217 20% 覆土中 PL112
3	蓋土師器	A 13.0 B (7.4)	外部から口縁部片。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。蓋部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り。内面ナデ。	長石・雲母明赤褐色普通	P220 35% 覆土中 PL112
	蓋土師器	A [22.8] B (12.2)	外部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。蓋部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ。内面へつ削り。	長石・石英・雲母明赤褐色普通	P221 5% 覆土中
5	環須恵器	A [14.8] B 5.1 C 8.0	底部から口縁部片。平底。体部は外彎し、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端同軸へつ削り。底部同軸へつ削り。	長石・石英・雲母明赤褐色良好	P222 53% 覆土中 PL112
	須恵器	B (1.9) F 3.8 G 0.5	つまみから大片部片。つまみは扁平なボタン状を呈する。	大片部外面同軸へつ削り。内面ロクロナデ。	石英・雲母灰黄褐色良好	P223 15% 覆土中



第69図 第126B号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
図版9	土玉	2.8	3.0	0.7	20.5	覆土中	DP34 100% PL167
9	支脚	17.3	8.9	-	916.2	床面	DP36 100% PL172

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
10	砥石	5.5	5.7	2.7	119.4	砂岩	覆土中	Q12 PL174

第127A号住居跡 (第70図)

位置 調査区の中央部, F 3 e 3 区。

重複関係 本跡は, 第127B・127D号住居跡, 第8・10号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.95m, 短軸6.85mの方形である。

主軸方向 [N - 2° - W]

壁 壁高は20～50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 第127B・127D号住居跡と重複する部分を除いて巡っている。上幅12～22cm、下幅6～12cm、深さ4～10cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 7か所（P1～P7）。P1～P4は、径42～[70]cmの円形、深さ45～56cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5～P7は長径47～60cm、短径34～44cmの楕円形、深さ29～59cmである。位置から、P5はP2の、P6はP3の、P7はP4の、それぞれ補助柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 焼土・ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物 土師器片1052点(坏片114点、蓋片1点、甕片937点)、須恵器片130点(坏片85点、蓋片19点、甕片26点)、土製品2点、石製品1点、縄文土器片3点、鉄滓163.5g、含鉄滓502.9gが出土している。覆土上層では、第71図5の土玉が中央部東寄りから、6の石製紡錘車が北西コーナー部から出土している。覆土下層では、1の土師器甕、2の須恵器坏、4の土玉が中央部から出土している。2は逆位の状態で出土している。3の須恵器蓋は、中央部南東側の覆土上層と南壁付近の覆土下層の破片が嵌合している。7の軽石は覆土中から出土している。

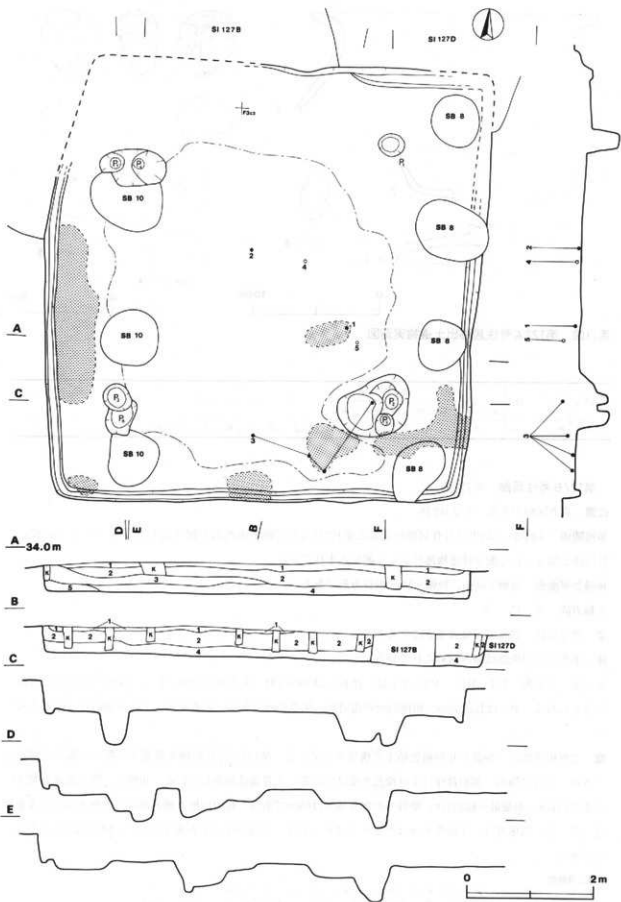
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から8世紀前後と考えられる。

第127A号住居跡出土遺物観察表

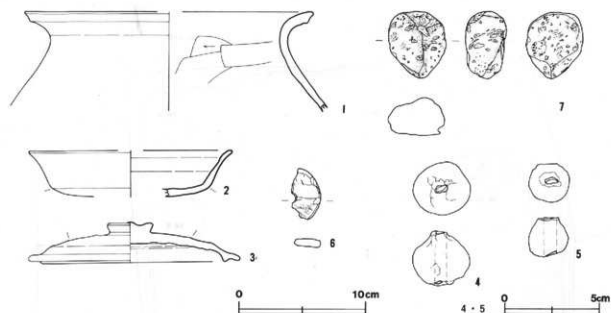
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	土師器	A 122.7 B (7.6)	体部上位から口縁部片。口縁部は外反し、底縁は外方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英・炭形・スコリアにふい黄褐色 普通	P225 覆土中
2	須恵器	A 16.1 B (3.7)	底面から口縁部片。平底。体部は外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底面回転ヘラ削り。	長石・石英・玄母 灰白色 普通	P226 覆土中
3	須恵器	A 16.7 B 3.2 D 3.6 G 0.8	ボタン状のつまみが付く。天井部は等形をしている。口縁部内側に短いかえりが付く。	天井部回転ヘラ削り；口縁部内・外面ロクロナデ。	長石・石英・玄母 灰黄色 良好	P227 覆土中 PL112

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
4	土	2.9	3.0	0.7	19.5	覆土中	DP37 100% PL167
5	玉	2.2	2.1	0.7	8.1	覆土中	DP38 100% PL167

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
6	紡錘車	(4.0)	0.6	0.8[(7.3)	粘板岩	覆土中	Q13 40% P1,176



第70图 第127A号住居跡実測图



第71図 第127A号住居跡出土遺物実測図

図取番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第71図7	鉢	5.3	4.6	3.3	14.3	流紋岩	覆土中	Q15 PL175

第127B号住居跡 (第72図)

位置 調査区の中央部, F 3 b2 区。

重複関係 本跡が, 第127A号住居跡の北部と第127D号住居跡の南西部を掘り込んでいる。また, 第127C号住居跡と第9・10号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.80m, 短軸5.10mの長方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は10~45cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

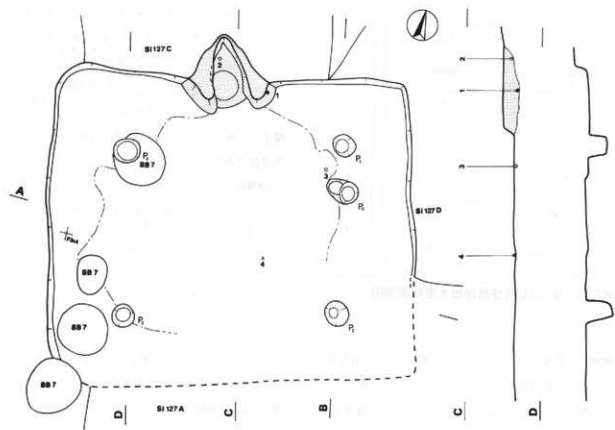
床 平坦で, 中央部は踏み固められている。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は, 径35~43cmの円形, 深さ30~63cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。P5は長径50cm, 短径33cmの楕円形, 深さ45cmである。位置から, P1の補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。第127C号住居跡を構築する際に, 竈の上部が削平され, さらに袖の一部が耕作により攪乱を受けている。天井部は崩落している。規模は, 煙道部から焚き口部まで111cm, 両袖最大幅151cm, 壁外への掘り込みは69cmである。袖の内壁と煙道部は, 火熱を受けて赤変硬化している。火床部は, 床面を6cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

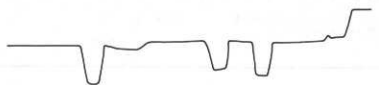
- 1 褐色 ローム粒子中量, 粘土粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 濃い赤褐色 焼土中ブロック・焼土・粘土粒子中量, 炭化・ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 3 褐色 焼土小ブロック・粘土粒子少量, 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土・粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土大・中ブロック微量



A 34.0m



B



0 2m

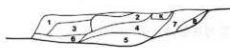
E 34.0m



F

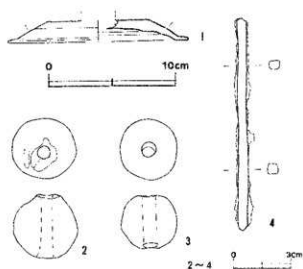


G



0 1m

第72图 第127B号住居跡实测图



第73図 第127B号住居跡出土遺物実測図

- 5 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
 6 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック・粘土粒子微量
 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土中ブロック・ローム中ブロック・ローム・粘土粒子微量
 8 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子微量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子微量

遺物 土師器片54点（坏片10点、甕片44点）、須恵器片11点（坏片2点、蓋片1点、碗片3点、甕片5点）、土製品2点、鉄製品1点が出土している。第73図3の土玉が中央部北東側の覆土下層から出土している。4の不明鉄製品が中央部の床面から出土している。竈内では、1の須恵器蓋が東輪部から、2の土玉が煙道部から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

第127B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	蓋 土師器	A [14.4] B (1.7)	土舟部から口縁部片。頂部は平出で口縁部内側に短いかえりが付く。	土舟部外面斜転へう割り。内面ロクロナデ。	石灰・赤鉄・スクリアにふくまれた褐色普通	P228 20% 竈内

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
2	土玉	3.4	3.4	0.6	33.7	竈内 DP39	100% PL167
3	土玉	2.8	3.0	0.6	25.1	覆土上 DP40	100% PL167

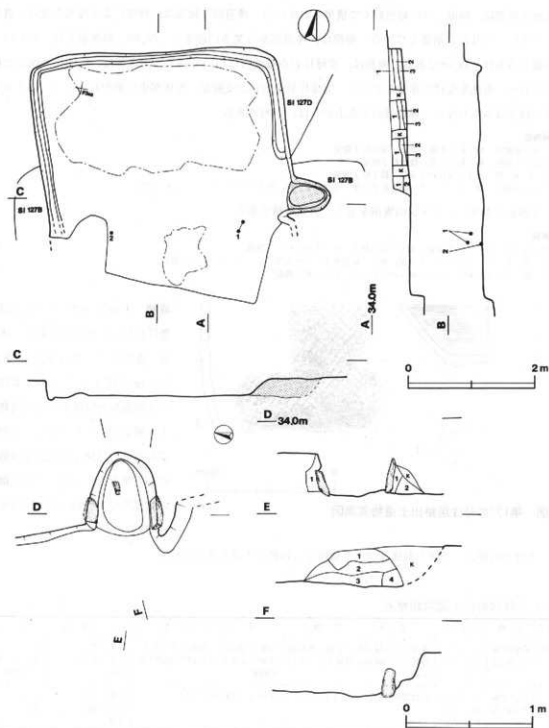
図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	不明鉄製品	(11.2)	0.5	0.6	(11.0)	床面 M27	PL178

第127C号住居跡（第74図）

位置 調査区の中央部、F 3 b 2 区。

重複関係 本跡は、第127B号住居跡の北部と第127D号住居跡の南西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.90m、短軸(2.40)mの長方形と推定される。



第74図 第127C号住居跡実測図

主軸方向 N-72°-E

壁 壁高は20~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁から北壁を通して西壁にかけて半周する。上幅13~22cm、下幅3~13cm、深さ3~6cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、北側半分は踏み固められている。南側半分は、第127B号住居跡の上部に貼床して構築されており、軟弱である。

覆 東壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部と袖部は、耕作により擾乱を受け、遺存状態はよくない。天井部は崩落している。規模は、煙道部から焚き口部まで [66]cm、両袖最大幅 [110]cm、壁外への掘り込みは [48]cmである。両袖は、雲母片岩を補強材に用いている。火床部は、床面を3cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。雲母片岩を用いた支脚が、火床部奥に置かれている。あまり火熱を受けた様子はみられない。煙道部の立ち上がりは、不明である。

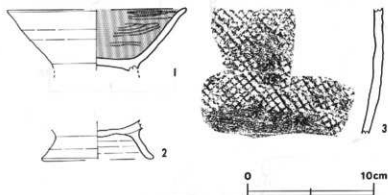
覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 粘土粒子中量、焼土・炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 粘土粒子中量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土・炭化粒子少量、粘土粒子微量
- 4 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量、焼土中ブロック・ローム粒子微量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量



第75図 第127C号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片206点(坏片33点、甕片173点)、須恵器片49点(坏片16点、蓋片3点、甕片30点)、含鉄滓303.1gが出土している。第75図1の土師器高台付腕が中央部東側の覆土上層から出土している。2の土師器足高台付腕が中央部南西側の床面から出土している。3は土師器甕の体部片で、外面に格子叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から10世紀中葉と考えられる。

第127C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	高台付腕 土師器	A [14.2] B (4.9)	底部から口縁部片。平底。体部は外傾し、口縁部は外反する。高台欠損。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。内面へラ磨き。内面黒色処理。器面割磨。	石英・雲母にぶい褐色 普通	P231 45% 覆土中 PL112 二次焼成
2	高台付腕 土師器	B (3.0) D [8.8] E 2.0	高台部片、高台はハの字状に開く。	高台内・外面ロクロナデ。	石英・雲母にぶい褐色 普通	P232 10% 床面

第127D号住居跡 (第76・77図)

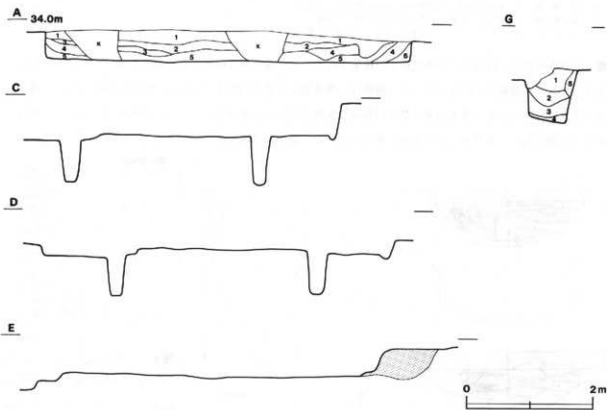
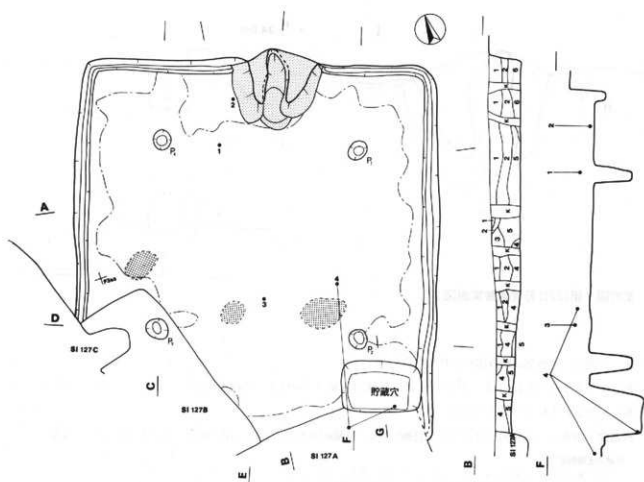
位置 調査区の中央部、F 3 a 3 区。

重複関係 本跡は、第127A・127B・127C号住居跡、第8号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

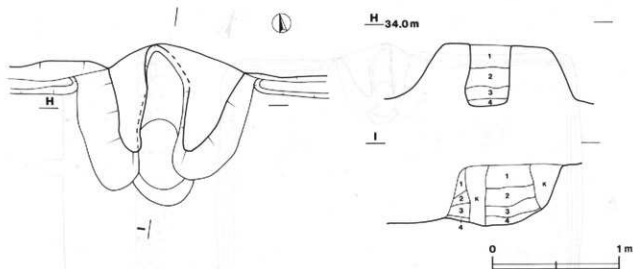
規模と平面形 長軸5.78m、短軸(5.72)mの方形と推定される。

主軸方向 N-23°-E

壁 壁高は15~50cmで、外傾して立ち上がる。



第76图 第127D号住居跡实测图(1)



第77図 第127D号住居跡実測図2

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

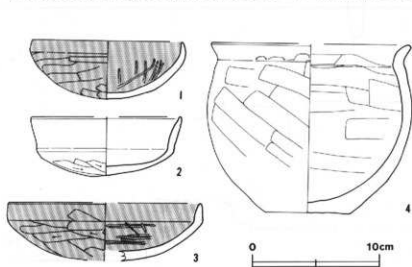
ピット 4か所 (P1~P4)。P1~P4は、長径33~38cm、短径26~33cmの楕円形、深さ62~78cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、長軸128cm、短軸80cmの長方形で、深さ83cm、断面形は長方形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、ローム中ブロック微量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。煙道部は耕作により攪乱を受けている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで128cm、両袖最大幅140cm、壁外への掘り込みは21cmである。袖の内壁と焚き口部は、火熱を受けて赤変硬化している。火床部は、床面を2cmほど掘りくはめており、火熱を受けわずかに赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。



第78図 第127D号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土大・小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土粒子微量
- 4 褐色 焼土粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化・ローム粒子微量

覆土 6層からなり、ローム中・小ブロックを含み、不自然な堆積を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム砂子中量, ローム中・小ブロック少量, 焼土・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 3 黄褐色 ローム砂子中量, 焼土・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム砂子多量, ローム中・小ブロック少量, 炭化物・炭化粒子微量
- 5 黄褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子・炭化物・ローム中・小ブロック・ローム砂子少量, 炭化粒微量
- 6 暗褐色 ローム砂子中量, 焼土粒子微量

遺物 土師器片352点(坏片74点, 甕片278点), 須恵器片8点(坏片3点, 甕片5点), 含鉄滓28.4gが出土している。覆土上層では, 第78図1の土師器坏が中央部北寄りから正位で, 3の土師器坏が中央部から出土している。覆土下層では, 2の土師器坏が竈西袖部付近から出土している。4の土師器甕は, 中央部東寄りの覆土上層と南東コーナー一部の覆土下層と貯蔵穴の覆土下層から出土した破片が接合している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。

第127D号住居跡出土遺物観察表

図説番号	器種	寸法(cm)	器形の特徵	手法の特徵	粘土・色調・焼成	備考
第78図 1	坏 土師器	A 12.0	口縁部・部欠損。丸底。体部は内 壁して立ち上がり, 口縁部はわず かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後, ナデ。内面ヘラ磨き, 内・外面黒色処理。	赤母 黒褐色 普通	P233 覆土中 PL112
		B 4.6				
2	坏 土師器	A [12.0]	底部から口縁部片。丸底。体部は 壁やかに内壁し, 口縁部との境に 線を打つ。口縁部は外傾し, 底部 は上方にあわずにつまみ上げられ ている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り, 内面ナデ。	長石・赤母・スコ リア 別赤褐色 普通	P235 覆土中
		B 4.7				
3	坏 土師器	A [15.2]	底部から口縁部片。丸底。体部は 内壁して立ち上がり, 口縁部は直 立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り, 内面ヘラ磨き。内・外 面黒色処理。	長石・赤母・スコ リア 黒色 普通	P234 覆土中
		B [4.6]				
4	甕 土師器	A [15.8]	底部から口縁部片。平底。体部は 内壁して立ち上がり, 口縁部は外 反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ヘラ削り脱, ナデ。底部ヘラ 削り。	石英・赤母 明赤褐色 普通	P237 覆土中・貯蔵穴 内 PL112
		B 18.4				
		C [6.6]				

第128A・128B号住居跡(第79図)

位置 調査区の西部, F1b0区。

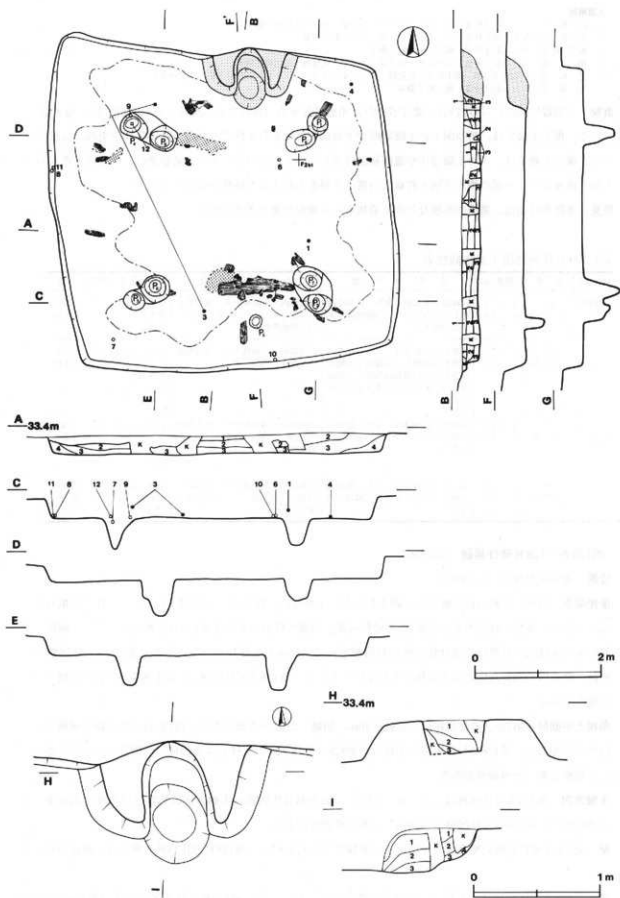
重複関係 当初, 1軒の住居跡として調査したが, 4か所の主柱穴のすぐ外側にもそれぞれ柱穴が掘られていることから, 外側の柱穴のものを第128A号住居跡, 内側の柱穴のものを第128B号住居跡とした。両住居跡の対応する主柱穴の位置は, ほぼ住居跡の対角線上に35~55cmしか離れていないこと, 第128B号住居跡の竈の痕跡, 踏み固められた床面などが検出されないことから, 第128A号住居跡は, 第128B号住居跡の建て替えの可能性がある。

規模と平面形 第128A号住居跡は, 長軸5.40m, 短軸5.22mの方形である。第128B号住居跡の規模と平面形は不明であるが, 第128B号住居跡の主柱穴が第128A号住居跡の主柱穴より内側に位置していることから, 少し小規模であった可能性がある。

主軸方向 第128A号住居跡は, N-0°である。第128B号住居跡の主軸方向は厳密には不明であるが, 主柱穴の位置から第128A号住居跡とほぼ同じである可能性がある。

壁 第128A号住居跡の壁高は20~35cmで, 外傾して立ち上がる。第128B号住居跡の壁高は, 確認されていない。

床 第128A号住居跡は, 平坦で, 中央部は踏み固められている。第128B号住居跡の床面は第128A号住居跡の床面下部から検出されなかったことから, 第128A号住居跡とほぼ同じ高さの可能性はある。



第79图 第128A·128B号住居跡实测图

ビット 覆土の状況と位置からビットの所属を判断した。第128A号住居跡は、5か所(P1～P5)。P1～P4は、長径32～46cm、短径30～44cmの楕円形、深さ40～48cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径20cmの円形、深さ29cmである。位置から出入り1施設に伴うビットと考えられる。第128B号住居跡は、4か所(P6～P9)。P6～P9は、長径45～48cm、短径33～45cmの楕円形、深さ35～62cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

竈 第128A号住居跡は、北壁中央部のやや東寄りに砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部は、耕作により一部攪乱を受けている。両袖部も攪乱を受け、ほとんど残存していない。規模は、煙道部から焚き口部まで[96]cm、両袖最大幅[152]cm、壁外への掘り込みは[102]cmである。火床部は、床面を2cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は攪乱を受けているが、緩やかに立ち上がりと推定される。第128B号住居跡の竈は、その痕跡が検出されていないが、第128A号住居跡の竈が、第128B号住居跡の段階から使用されていたか、同位置で造り替えが行われた可能性がある。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 粘土粒中量、焼土粒子少量、炭化粒少量
- 2 暗赤褐色 焼土・粘土粒中量、焼土小ブロック・炭化粒少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化・粘土粒少量
- 4 ぶい率面 焼土粒中量、粘土粒少量、焼土小ブロック・炭化粒・ローム小ブロック・ローム・白色粒少量

覆土 第128A号住居跡は4層からなり、ローム小ブロック・ローム粒子を多く含むことから人為堆積と考えられる。第128B号住居跡は、第128A号住居跡の床面と同じ高さと考えられるため、覆土は存在しない。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒中量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒少量
- 2 褐色 焼土・炭化・ローム粒少量、ローム小ブロック少量
- 3 褐色 焼土・炭化・炭化粒・ローム小ブロック・ローム粒少量
- 4 褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒・ローム小ブロック少量

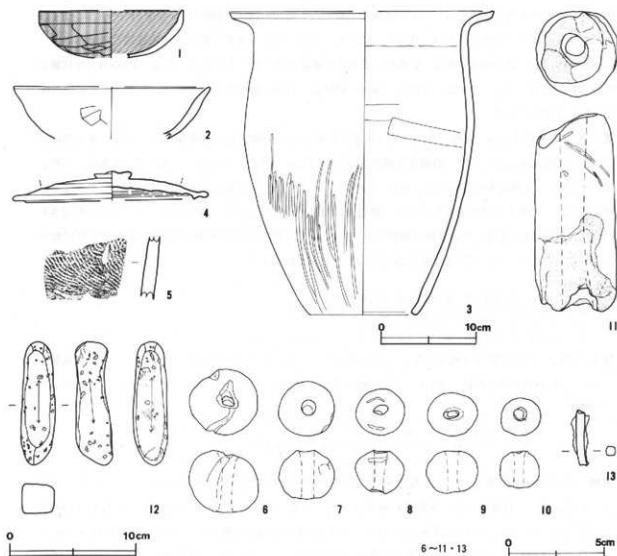
遺物 第128A号住居跡から、土師器片464点(坏片88点、甕片376点)、須恵器片15点(坏片15点)、土製品6点、石製品1点、鉄製品1点、含鉄滓8.9gが出土している。覆土下層では、第80図1の上師器坏が中央部南東寄りから、6の土玉が中央部北東寄りから、9の土玉が中央部北西側から、10の土玉が南壁際から、11の管状土鉢が西壁際から、12の瓦石が中央部北西寄りから出土している。3の土師器瓶は、中央部北側の覆土上層と中央部南側の覆土下層から出土した破片が接合している。床面では、4の須恵器蓋が北東コーナー部から正位で、7の土玉が南西コーナー部付近から、8の土玉が西壁際から出土している。その他、覆土中から2の土師器坏と13の不明鉄製品が出土している。5は須恵器甕の体部片で、外面に同心円当てが痕が施されている。

胎土に密母を含む。第128B号住居跡は、遺物が出土していない。

所見 第128A号住居跡は、覆土下層に焼土塊がみられ、床面が火熱を受け赤変していることから、焼土家屋と考えられる。第128A号住居跡の時期は、遺物の形態及び出土遺物から7世紀後葉と考えられる。第128B号住居跡の時期は、第128A号住居跡に建て替えられていることから、7世紀後葉より若干前と推定される。

第128A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手状の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 1	坏 土師器	A 11.5 B (3.8)	底部から1線部片。先底。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘケ削り。内面ナデ。内・外面肌色処理。	長石・密母・スコリア 灰黄褐色 普通	P238 覆土中
2	坏 土師器	A 15.6 B (4.1)	体部から口縁部片。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘケ削り。内面ナデ。	密母・スコリア 淡黄褐色 普通	P238 覆土中



第80図 第128A号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 3	甌 土師器	A [27.8] B 32.0 C 11.0	底部から口縁部片。無底式。作部は縁やかに内彎し。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。作部外面へラ磨き、内面ヘラナデ。	石英・雲母・スクリア にふい褐色 普通	P240 50% 覆土中 PL112
4	壺 須恵器	A [15.5] B 2.4 F 3.0 G 0.7	つまみ部から口縁部片。つまみは扁平なボタン状で、天井部は能く丸い。口縁部内側に短いかえりが付く。	口縁部、天井部内・外面口クロナデ。天井部上位回転へラ削り。	長石・石英・雲母 灰色 良好	P241 85% 床面 PL112

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考		
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		備	考	
6	土玉	3.2	3.7	0.6	(28.5)	覆土中	DP41	95%	PL167
7	土玉	2.6	2.9	0.8	(20.6)	床面	DP42	95%	PL167
8	土玉	2.2	2.6	0.7	(11.7)	床面	DP43	95%	PL167
9	土玉	2.3	2.7	0.8	12.3	覆土中	DP44	100%	PL167
10	土玉	1.9	2.1	0.7	8.0	覆土中	DP45	100%	PL167

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
11	管状土鏡	(10.4)	4.3	(1.4)	(202.6)	覆土中	DP46 90% PL170

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
12	砥石	9.7	2.8	3.1	129.8	砂岩	覆土中	Q16 100% PL174

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
13	不明鉄製品	(3.0)	0.4	0.5	(2.6)	覆土中	M28

第129号住居跡(第81図)

位置 調査区の西部、F1j2区。

規模と平面形 長軸4.94m、短軸4.87mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は7~29cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。耕作による攪乱が、約20cm間隔で東西に縞状に入っている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は、長径22~33cm、短径17~24cmの楕円形、深さ40~51cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径20cmの円形、深さ38cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部と袖部は、耕作により攪乱を受け残存している部分が少ない。天井部は崩落している。規模は、煙道部から焚き口部まで [106] cm、両袖最大幅 [130] cm、壁外への掘り込みは18cmである。袖の内壁は火熱を受けて赤変硬化している。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けわずかに赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層観察

- 1 褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量
- 2 暗赤褐色 焼土・ローム粒子中量、焼土・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・ローム小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 焼土・ローム・粘土粒子少量、炭化物微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量

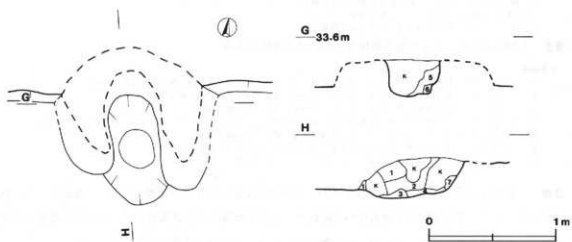
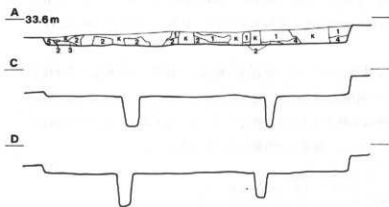
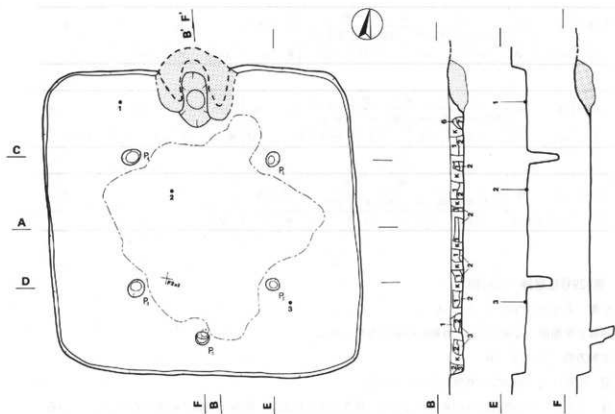
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層観察

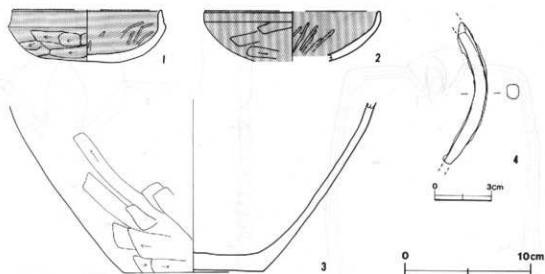
- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、炭化・白色粒子微量
- 4 明褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック少量、焼土中ブロック微量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大ブロック中量、白色粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック・粘土中ブロック少量

遺物 土師器片430点(坏片70点、甍片360点)、須恵器片12点(坏片5点、甍片7点)、鉄製品1点、鉄滓7.9gが出土している。第82図1の土師器坏が北壁付近、2の土師器坏が中央部北寄り、3の土師器甍が中央部南東側のいずれも床面から出土している。竈内覆土中からは、4の不明鉄製品が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から7世紀前半と考えられる。



第81图 第129号住居跡实测图



第82図 第129号住居跡出土遺物実測図

第129号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	坏 土器	A [11.8] B 4.3	底部から口縁部片。平底。体部は内壁して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	石英・スコリア 黒褐色 普通	P242 床面 45% PL113
2	坏 土器	A [13.9] B (4.1)	体部から口縁部片。体部は緩やかに内壁して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。内・外面黒色処理。	長石・スコリア 黒褐色 普通	P243 床面 10%
3	甕 土器	B (13.4) C [11.0]	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へつ削り、内面ナデ。底部へつ削り。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P244 床面 10%

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	不明鉄製品	(7.4)	0.6	0.7	(12.8)	竈内	M29

第130号住居跡 (第83図)

位置 調査区の西部, E2 j4区。

規模と平面形 長軸3.77m, 短軸3.34mの長方形である。

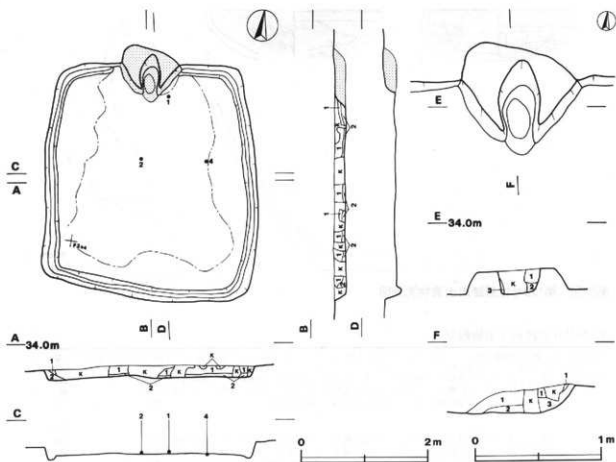
主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は15~25cmで、緩やかに立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅18~25cm, 下幅5~8cm, 深さ4~6cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部はよく踏み固められている。耕作による攪乱が、東西に溝状に入っている。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部も一部攪乱を受けている。規模は、煙道部から焚き口部まで76cm, 両袖最大幅98cm, 壁外への掘り込みは16cmである。袖の内壁は、火熱を受けてわずかに赤変している。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。



第83図 第130号住居跡実測図

覆土層解説

- 1 暗褐色 焼土・炭化・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 焼土・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土・粘土粒子少量、ローム粒子微量

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

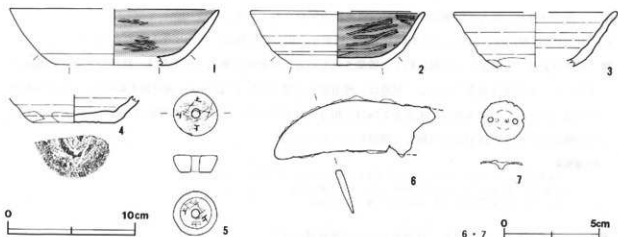
- 1 褐色 ローム・白色粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土中・小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム・白色粒子中量、焼土粒子・ローム中ブロック微量

遺物 土師器片545点（坏片100点、甕片445点）、須恵器片44点（坏片35点、甕片9点）、石製品1点、鉄製品1点、銅製品1点、鉄滓6.8g、含鉄滓14.4gが出土している。覆土下層では、第84図1の土師器坏が竈東袖部付近から出土している。2の土師器坏は中央部、4の須恵器坏は中央部東側の床面から出土している。その他、覆土中から3の須恵器坏、5の石製紡錘車、6の鎌、7の不明銅製品が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

第130号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	土師器 坏	A [16.4] B 4.4 C [9.0]	体部から口縁部片。体部は外縁して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部。体部外面ロクロナデ、内面ヘラ磨き。体部下縁回転ヘラ削り。内面黒色処理。	石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P245 覆土中



第84図 第130号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 2	坏 土器器	A [13.8] B 4.3 C [7.1]	底部から口縁部片。平底。体部は内厚気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面口ロナデ、内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	石英・雲母・スコリア 灰白色 普通	P246 20% 床面
3	坏 須恵器	A [13.0] B (4.4)	体部から口縁部片。体部から口縁部にかけて、外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰白色 良好	P247 5% 覆土中
4	坏 須恵器	B (2.2) C [6.6]	底部から体部片。平底。体部はわずかな丸みを持ち、外方に立ち上がる。器壁は厚い。	体部内・外面口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。底部ヘラ記号。	石英 灰黄色 良好	P391 5% 床面

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
5	紡錘車	3.4	1.4	0.7	28.9	滑石	覆土中	Q18副書「上」 100% PL176

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
6	鎌	(8.5)	2.6	0.3	(19.9)	覆土中	M30 PL177

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	不明銅製品	2.2	0.3	0.2	(1.1)	覆土中	M31 PL179

第131号住居跡 (第85図)

位置 調査区の中央部、F2a6区。

規模と平面形 長軸3.25m、短軸3.08mの方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高は27~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁下の西側半分を除いて巡っている。上幅13~23cm、下幅3~8cm、深さ6~7cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、竈から出入り口施設にかけて、よく踏み固められている。

ピット P1は径24cmの円形、深さ34cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。煙道部・袖部・火床部は、耕作により一部攪乱を受けている。天井部は崩落している。規模は、煙道部から焚き口部まで111cm、両袖最大幅142cm、壁外への掘り込みは51cmである。火床部は、床面を7cmほど掘りくぼめている。火床部から煙道部まで、よく火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して階段状に立ち上がる。

竈土層解説

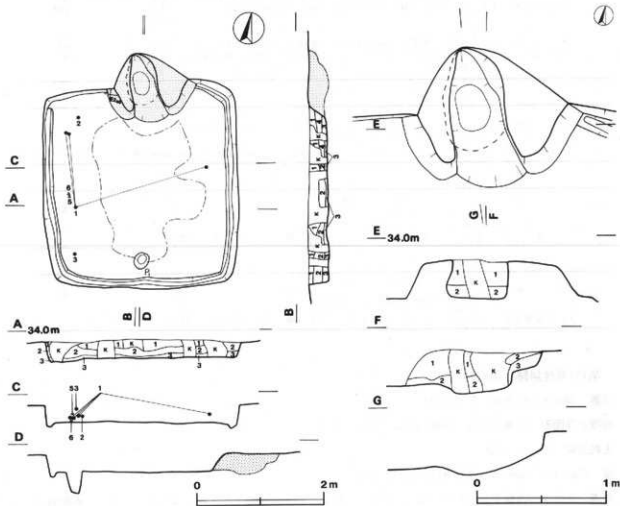
- 1 にいり赤褐色 粘土粒子中量、焼土・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子中量、炭化・ローム粒子微量
- 3 灰褐色 粘土粒子中量、焼土・炭化粒子少量、炭化物微量

覆土 4層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・ローム大・中ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム大ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土中ブロック少量、焼土大ブロック・炭化物・ローム中ブロック微量

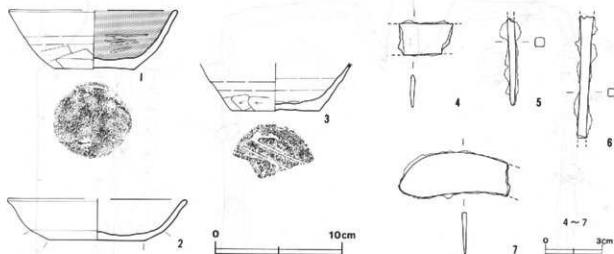
遺物 土師器片285点（坏片50点、甕片235点）、須恵器片55点（坏片23点、蓋片1点、甕片31点）、鉄製品4点が出土している。覆土上層では、第86図3の須恵器坏が南西コーナー部から正位で、5の釘が西壁付近から出土している。覆土下層では、2の土師器坏が北西コーナー部付近から出土している。1の土師器坏は、中央部



第85図 第131号住居跡実測図

西側の覆土下層と中央部東側の覆土上層から出土した破片が接合している。床面では、6の鉄鎌茎が西壁付近から出土している。その他、覆土中から4の刀子、7の不明鉄製品が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀中葉と考えられる。



第86図 第131号住居跡出土遺物実測図

第131号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 1	环 土師器	A [13.3] B 4.8 C 6.2	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナテ、内面ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ削り。底部二方向のヘラ削り。底部ヘラ記号。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリアに多い黄褐色普通	P248 40% 覆土中 PL113 二次焼成
2	环 土師器	A [12.2] B 3.2 C 7.4	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	石英・雲母赤褐色普通	P249 35% 覆土中 二次焼成
3	环 須恵器	B (3.7) C [6.9]	底部から体部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナテ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。ヘラ記号。	長石・石英・雲母灰黄色普通	P250 35% 覆土中 二次焼成

図版番号	器種	計測値				出土地点	備	考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	刀子	(2.9)	1.6	0.2	(3.7)	覆土中	M32	PL178
5	釘	(4.4)	0.4	0.5	(2.9)	覆土中	M34	PL179
6	鉄鎌茎	(6.5)	0.8	0.4	(6.7)	床面	M33	PL178
7	不明鉄製品	(6.0)	2.2	0.2	(13.4)	覆土中	M67	PL177

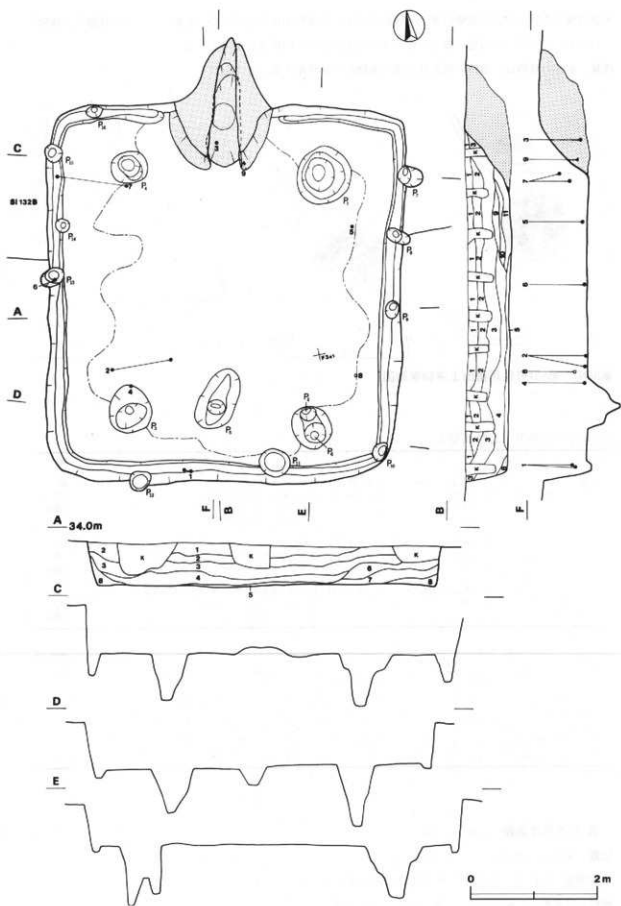
第132A号住居跡 (第87・88図)

位置 調査区の中央部、E2j0区。

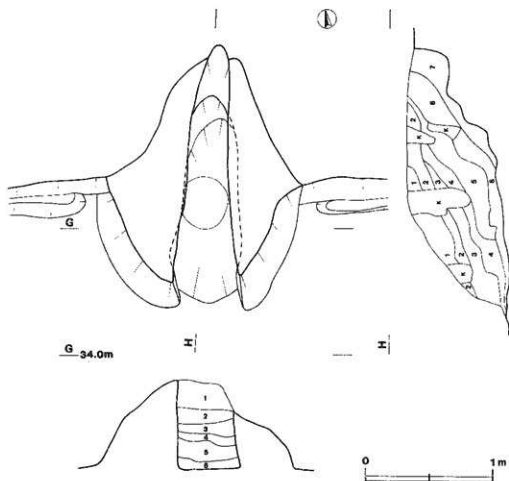
重複関係 本跡が、第132B号住居跡の南部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.00m、短軸5.62mの方形である。

主軸方向 N-14°-E



第87图 第132A号住居跡实测图



第88図 第132A号住居跡実測図(2)

壁 壁高は74～110cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅21～38cm、下幅5～17cm、深さ7～18cmで、断面形はじ字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 16か所 (P1～P16)。P1～P4は、長径60～90cm、短径51～84cmの楕円形、深さ70～84cmである。

規模と配列から支柱穴と考えられる。P5は長径101cm、短径57cmの楕円形、深さ52cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は径 [55]cmの円形、深さ95cmである。位置から、P2の補助柱穴

と考えられる。P7～P16は、長径22～50cm、短径19～44cmの楕円形、深さ34～46cmで、位置から補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで205cm、両袖最大幅158cm、壁外への掘り込みは106cmである。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は、火床部から緩やかに立ち上がり、上面で平坦部をもち、さらに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 焼土・炭化・ローム・粘土粒子少量
- 2 灰褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック・ローム・粘土粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 4 灰褐色 粘土粒子多量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 焼土粒子多量、粘土粒子少量、焼土中ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量、粘土粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム・粘土粒子中量、炭化粒子微量

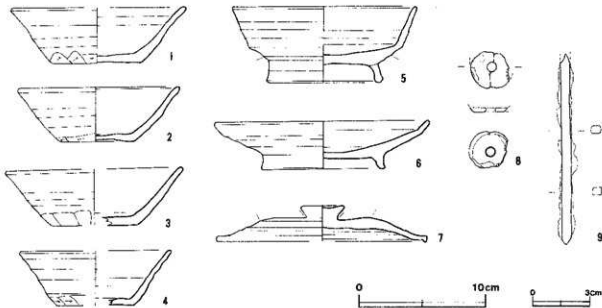
覆土 11層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

1	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土・炭化粒子・ローム中ブロック少量、焼土中・小ブロック・炭化物・ローム大ブロック微量
2	褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土・炭化粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・ローム中ブロック微量
3	黄褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量、焼土大・中ブロック・炭化物・ローム大ブロック・粘土中ブロック微量
4	褐色	ローム粒子中量、焼土中・小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック少量、炭化物・粘土小ブロック微量
5	暗褐色	ローム粒子中量、焼土・ローム小ブロック少量、炭化物・粘土小ブロック微量
6	暗褐色	ローム粒子多量、焼土・ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土大・中ブロック・ローム中ブロック微量
7	褐色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、焼土・炭化粒子微量
8	暗褐色	ローム粒子中量、焼土大ブロック・焼土粒子・ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
9	暗赤褐色	ローム粒子多量、焼土・炭化粒子・ローム・粘土小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化物微量
10	近い赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・粘土中ブロック中量、焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・粘土大ブロック少量、炭化物微量
11	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム中ブロック・粘土中・小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化物微量

遺物 土師器片554点（坏片43点、高坏片1点、甕片510点）、須恵器片379点（坏片166点、盤片4点、蓋片46点、碗片21点、甕片142点）、石製品1点、鉄製品1点、縄文土器片1点、鉄洋40.4g、含鉄洋58.0gが出土している。覆土上層では、第89図7の須恵器蓋が西壁際から出土している。覆土中層では、1の須恵器坏が南壁際から、8の石製紡錘車が東壁際から、9の釘が竈東袖部付近から出土している。覆土下層では、2の須恵器坏が中央部南西側から、4の須恵器坏がP3付近から、5の須恵器坏が東壁付近から斜位で出土している。床面では、6の須恵器高台付甕が西壁際から出土している。竈内からは、3の須恵器坏が覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、遺物の形態及び出土遺物から9世紀前葉と考えられる。



第89図 第132A号住居跡出土遺物実測図

第132A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	須恵器 坏	A 4.0	底部から口縁部。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面口ロナテ、体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、二方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 淡黄色 青褐色	P252 55% 履土中 PL113 二次焼成
		B 4.4				
		C 7.0				
2	須恵器 坏	A 12.9	口縁部、体部内・外面口ロナテ、体部下端手持ちヘラ削り。底部一方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 黄灰色 良好	P253 80% 履土中 PL113	
		B 4.3				
		C 5.7				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考	
第89回 3	坏 須志器	A 14.0	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削り。底部方向のヘラ削り。	石英・雲母 灰白色 良好	P254 25%	
		B 4.5					P254 25%
		C 7.0					
4	坏 須志器	A 12.1	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、体部下端手持ちヘラ削り。底部一方のヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰黄色 良好	P253 15%	
		B 4.4					
		C 6.6					
5	高台付坏 須志器	A 14.6	口縁部一部欠損。高台は長く、ハの字状に開く。体部は外傾し、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、底部同軸ヘラ削り後、高台削り。	長石・石英・雲母 灰黄色 良好	P236 80%	
		B 6.0					PL113
		D 5.2					
		E 1.5					
6	高台付坏 須志器	A 17.0	高台部から口縁部片。高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で角度を変えて外傾する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ、底部同軸ヘラ切り後、高台削り。	石英・雲母 暗灰黄色 良好	P10 73%	
		B 3.8					PL113
		D 9.8					
		E 1.0					
7	釜 須志器	A 16.6	つまみ部から口縁部片。扁平な鐘型球形のつまみが付く。上部がわずかに広む。天井部は低く丸く、口縁部は短く折り返す。	口縁部、天井部内・外面ロクロナデ。天井部短軸ヘラ削り。	長石・石英 灰色 良好	P257 25%	
		B 2.9					
		F 3.5					
		G 1.1					

図版番号	器種	計測値				右	型	出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
8	轆轤車	3.0	0.4	6.7	(4.1)	粘板	智度土中	Q19 30%	PL176

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
9	鉄 鍬	(10.1)	6.3	0.4	(11.9)	覆土中	M37

第132B号住居跡 (第90回)

位置 調査区の中央部、E2i0区。

重複関係 本跡は、第132A・133号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸8.38m、短軸7.95mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は29~37cmで、外傾して立ち上がる。

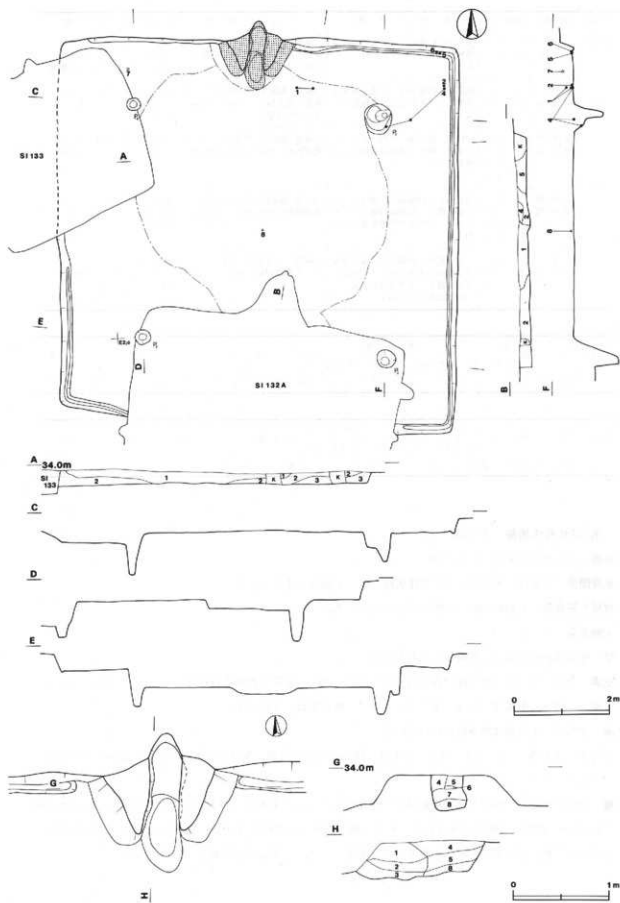
壁溝 第132A・133号住居跡に掘り込まれた部分、及び、北壁の西側半分を除いて、壁下で確認されている。

上幅12~32cm、下幅2~7cm、深さ4~5cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)。P1~P4は、径28~62cmの円形、深さ60~95cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。規模は、煙道部から焚き口部まで145cm、両軸最大幅117cm、壁外への掘り込みは42cmである。竈の内壁は、火熱を受けて一部赤変している。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。



第90图 第132B号住居跡実測图

覆土層解説

- 1 暗 褐 色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・粘土粒子微量
- 3 褐 色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・粘土粒子微量
- にふい赤褐色 焼土小ブロック・焼土・粘土粒子少量、焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗 褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土・粘土粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム粒子微量
- 7 暗 赤 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、焼土大・中ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 8 暗 赤 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、焼土大・中ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

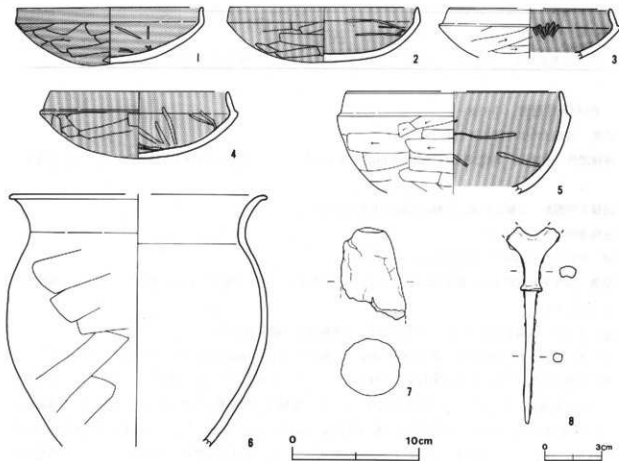
覆土 5層からなり、ローム中・小ブロックやローム粒子を多く含んでいることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム大・中ブロック微量
- 3 明 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子・ローム大ブロック微量
- 4 褐 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 5 褐 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土・炭化粒子微量

遺物 土師器片214点(坏片28点、甕片186点)、須恵器片4点(坏片4点)、土製品1点、縄文土器片1点、含鉄滓28.2gが出土している。覆土上層では、第91図7の土製支脚が北西コーナー部付近から出土している。覆土下層では、1の土師器坏が東壁付近から、2の土師器坏が北東コーナー部から出土している。床面では、5の土師器坏と6の土師器甕が北東コーナー部の壁際から、8の不明鉄製品が中央部から出土している。4の土師器坏は、P1の覆土上層と北東コーナー部の床面から出土した破片が接合している。その他、覆土中から3の土師器坏が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後葉と考えられる。



第91図 第132B号住居跡出土遺物実測図

第132B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	形態の特徴	手法の特徴	粘土・色料・焼成	備考
第91図 1	土師器	A 14.6	底部から口縁部片。丸底。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母・スコリア 黒褐色	P251 55% 覆土中 PL113
		B 4.5				
2	土師器	A 15.0	体部から口縁部片。丸底。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母・スコリア にふい褐色 普通	P258 85% 覆土中 PL113
		B 4.3				
3	土師器	A (12.9)	体部から口縁部片。体部は縦やかに立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内面黒色処理。	長石・雲母 にふい褐色 普通	P261 10% 覆土中
		B (3.9)				
4	土師器	A 14.0	体部から口縁部片。丸底。体部は内摩して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	雲母・スコリア 明雲褐色 普通	P259 80% 覆土中・床面 二次地或 PL113
		B 3.3				
5	土師器	A (17.1)	体部から口縁部片。体部は内摩して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。体部外面鉛筆痕。内面黒色処理。	雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P260 20% 床面 PL113 二次地或
		B (8.1)				
6	土師器	A (20.4)	体部から口縁部片。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ。内面へラナデ。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P262 10% 床面
		B (20.0)				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	土師器	(7.3)	5.2	-	(121.7)	覆土中	DP47 30%

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	不明鉄製品	(19.3)	2.8	0.5	(13.7)	床面	M68 PL178

第133号住居跡 (第92図)

位置 調査区の中央部、E 2 h 9 区。

重複関係 本跡が、第132B号住居跡の北西部を掘り込んでいる。また、第134A号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.72m、短軸3.47mの方形である。

主軸方向 N-19°-W

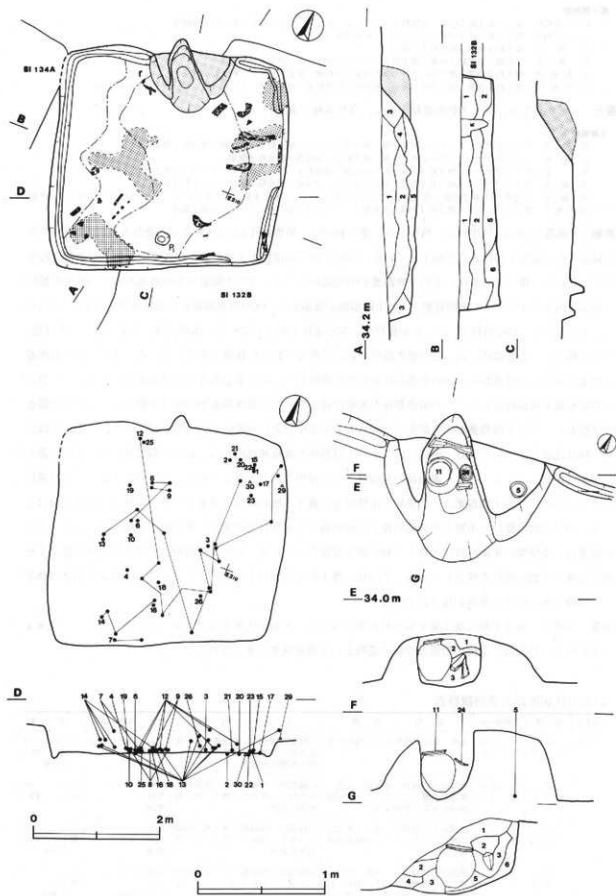
壁 壁高は21~52cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁下と南壁下の一部を除いて巡っている。上幅13~21cm、下幅3~11cm、深さ5~10cmで、断面形はJ字状である。

床 平田で、竈前から出入り口ピットにかけてと西壁付近が踏み固められている。

ピット P1 は径22cmの円形、深さ22cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部はほとんど崩落しているが、かなり火熱を受けて赤変硬化したブリッジ状の部分が残存している。規模は、擁道部から焚き口部まで117cm、両軸最大幅133cm、壁外への掘り込みは26cmである。竈の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を3cmほど掘りほめており、火熱を受けてわずかに赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がり、のち角度を変えてほぼ垂直に立ち上がる。



第92图 第133号住居跡実測图

覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土・焼土粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土・焼土粒子中量、炭化・ローム粒子微量
- 3 赤褐色 焼土粒子多量、焼土粒子少量
- 4 暗褐色 炭化物・炭化粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量、焼土中・小ブロック少量、炭化物・炭化・ローム・焼土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム・焼土粒子微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

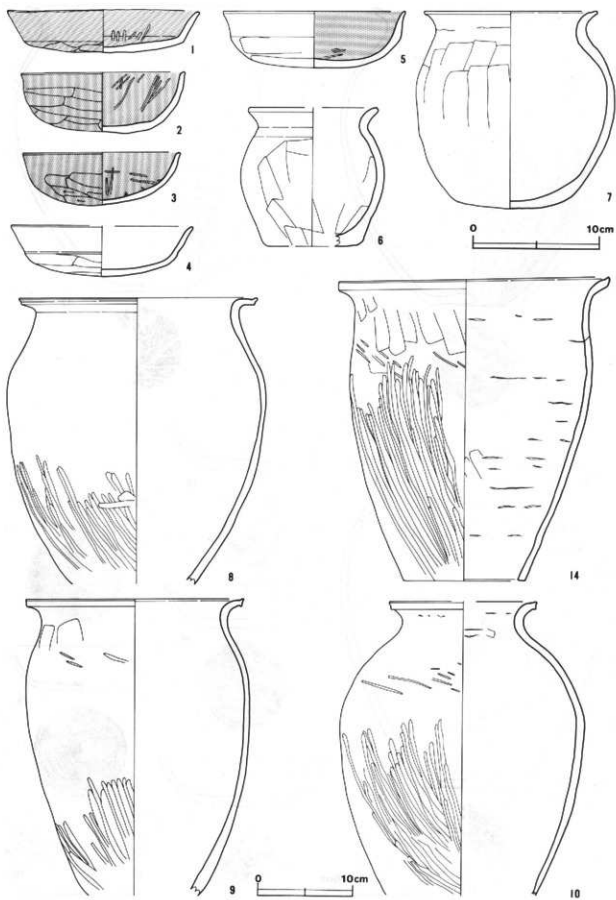
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物・炭化・ローム粒子微量
- 5 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化材・ローム中ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片500点(坏片18点、椀片2点、甕片480点)、須恵器片13点(坏片5点、甕片8点)、土製品1点、鉄製品1点、赤土上器片8点が出土している。第93・94・95回覆土上層では、29の不明鉄製品が東壁付近から出土している。覆土下層では、6の土師器甕が中央部から、3、4の土師器坏が中央部から、19の須恵器坏が中央部北西寄りから、8の土師器甕、9の土師器甕が竈前から、26の須恵器蓋が中央部南側から出土している。3、4が正位で、19が斜位で、8、9が横位で、26が逆位で出土している。床面では、北東コーナー部付近で、下から順に1の土師器坏、15、22の須恵器坏が正位で重なり合った状態で出土している。また、20の須恵器坏が北東コーナー部付近から、16の須恵器坏が中央部南側から、18の須恵器坏が中央部南寄りから、2、21の須恵器坏が竈東袖部付近から、20の須恵器坏が東壁付近から、23の須恵器蓋が中央部東側から、25の須恵器蓋が北壁際から、10の土師器甕が中央部から、30の刀子が東壁付近から出土している。17、18、20、21、23は正位で、16は逆位で出土している。竈内では、5の土師器坏が竈東袖部内から、11の土師器甕、24の須恵器蓋が竈口中から出土している。5は、竈口部の補強材として使用されたと考えられる。5、11は正位で、24は逆位で出土している。13の土師器甕は、中央部と南壁付近の覆土下層の破片と北東コーナー部付近の破片が接合している。12の土師器甕は、南側と中央部の覆土下層の破片と北壁付近の覆土上層の破片が接合している。7の土師器甕は、南壁際の床面の破片と覆土上層の破片が接合している。14の土師器甕は、中央部南側の覆土上層の破片と覆土下層の破片が接合している。その他、覆土中から28の上玉が出土している。27は須恵器甕の体部片で、外面に同心円当てが具が施されている。

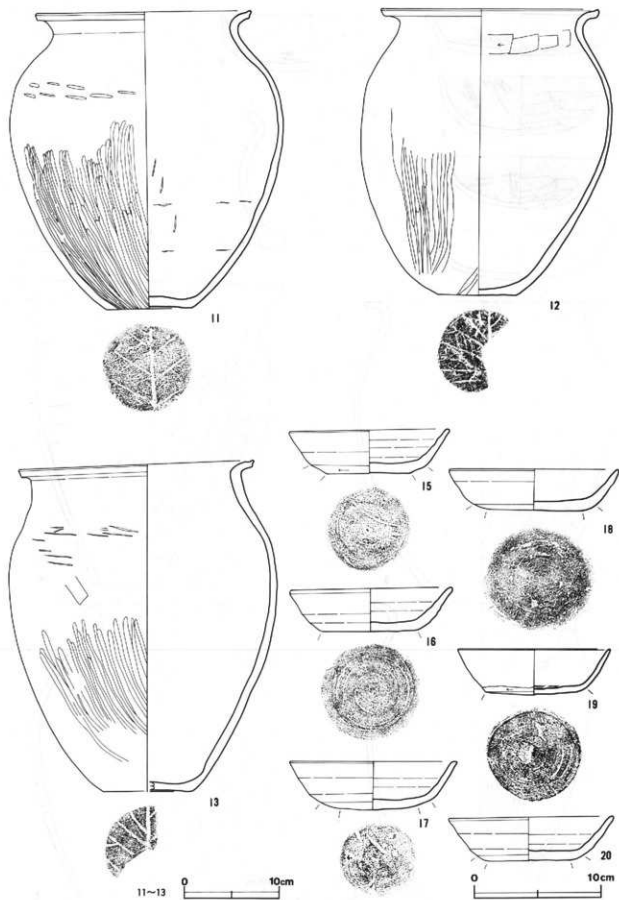
所見 本跡は、覆上下層に焼土塊や炭化材が多くみられ、床面が火熱を受け赤変していることから、焼失家屋と思われる。時期は、遺物の形態及び出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

第133号住居跡出土遺物観察表

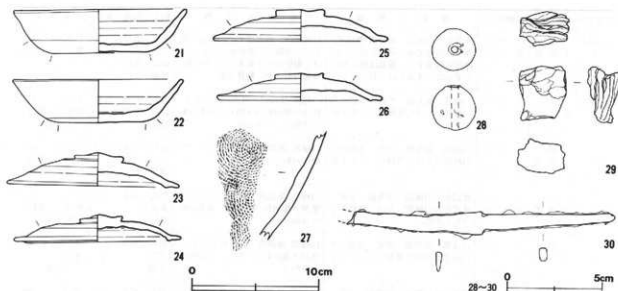
図番番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第93図 1	坏 土師器	A 15.3 B 5.4	丸底、体部は外傾し、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面横ナデ、体部内面へう磨き。底部へう磨り。内・外面灰色処理。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P264 床面 PT.113 二次焼成
2	坏 土師器	A 12.9 B 4.8	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ、体部外面へう磨り。内面へう磨き。内・外面灰色処理。	雲母・スコリア 褐色 普通	P270 床面 PL113
3	坏 土師器	A 12.5 B 4.3	底部から口縁部片、丸底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう磨り。内面へう磨き。内・外面灰色処理。	石英 にぶい黄褐色 普通	P271 覆土中 PL113 二次焼成
4	坏 土師器	A [14.4] B 4.0	底部から口縁部片。丸底。体部は底や口内傾して立ち上がり、口縁部との境に接を持つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう磨り。内面ナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P274 覆土中 二次焼成



第93图 第133号住居跡出土遺物実測図(1)



第94图 第133号住居跡実測图(2)



第95図 第133号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 5	坏 土器器	A 14.4 B 4.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内面黒色処理。器面荒れ。	石英・雲母にふい黄褐色普通	P273 60% 甕内 PL114 二次焼成
6	羹 土器器	A [10.3] B 11.0 C [7.9]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラナデ。	石英・長石・雲母黒褐色普通	P263 20% 覆土中 PL114
7	羹 土器器	A 13.7 B 15.7	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。器面剥離。	石英・雲母にふい褐色普通	P286 75% 覆土中・床面 PL114
8	羹 土器器	A 25.1 B (30.5)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下半縦方向のへラ磨き、内面ナデ。	石英・雲母・スコリアにふい褐色普通	P283 75% 覆土中 PL115
9	甕 土器器	A 13.0 B (31.5)	底部から口縁部片。無底式。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位縦方向のへラ磨き、内面ナデ。	石英・雲母にふい黄褐色普通	P284 70% 覆土中 PL114
10	羹 土器器	A [15.7] B (31.2)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のへラ磨き、上位へラ当て痕。体部内面ナデ。輪積み痕。	長石・石英・雲母・スコリアにふい褐色普通	P285 40% 床面 PL114
第94図 11	羹 土器器	A 22.9 B 31.6 C 9.0	体部。口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位から下位にかけて縦方向のへラ磨き。体部上位へラ当て痕。体部内面ナデ。輪積み痕。底部木炭痕。	長石・石英・雲母・スコリア普通	P280 95% 甕内 PL115
12	羹 土器器	A 23.0 B 31.0 C 8.4	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部はわずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位から下位にかけて縦方向のへラ磨き。内面へラナデ。底部木炭痕。	長石・石英・雲母・スコリア褐色普通	P282 60% 覆土中 PL115
13	羹 土器器	A 25.0 B 34.9 C [9.1]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位から下位にかけて縦方向のへラ磨き。体部上位へラ当て痕。体部内面ナデ。底部木炭痕。	長石・石英・雲母・スコリアにふい黄褐色普通	P281 70% 覆土中 PL115

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第93回 14	瓶 土 師 器	A 26.7	体部から口縁部一部欠損。無底式。体部は内彎気味に立ち上がり。口縁部は外反する。肩部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位へラ削り。中位から下位にかけて腹位のへラ磨き。へラ磨て痕。体部内面ナデ。輪轆み痕。	石英・雲母・スコリア 灰 青褐色 青褐色	P287 80% 覆土中 PL115
		B 32.2				
		C 12.9				
第94回 15	坏 須 恵 器	A 12.6	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転へラ削り。底部回転へラ削り。へラ記号。	長石・石英・雲母 灰 良好	P265 95% 床面 PL113
		B 3.5				
		C 6.4				
16	坏 須 恵 器	A 12.9	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 灰 良好	P267 85% 床面 PL113
		B 3.5				
		C 7.3				
17	坏 須 恵 器	A 13.3	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転へラ削り。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 灰 良好	P272 75% 床面 PL114
		B 4.0				
		C 7.3				
18	坏 須 恵 器	A 13.4	正造型一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転へラ削り。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 黒色 普通	P268 85% 床面 二次焼成
		B 3.5				
		C 8.0				
19	坏 須 恵 器	A 12.1	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 灰オリーブ色 良好	P278 90% 覆土中 PL114
		B 3.7				
		C 7.4				
20	坏 須 恵 器	A 13.0	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転へラ削り。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 スコリア 暗灰黄色 普通	P266 90% 床面 PL113 二次焼成
		B 3.5				
		C 6.3				
第95回 21	坏 須 恵 器	A 13.8	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転へラ削り。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 黒色 普通	P269 80% 床面 PL113 二次焼成
		B 3.5				
		C 7.5				
22	坏 須 恵 器	A 13.3	体部から口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転へラ削り。底部回転へラ削り。	長石・石英・雲母 灰 良好	P277 75% 床面 PL114 二次焼成
		B 3.5				
		C 6.9				
23	蓋 須 恵 器	A 13.6	口縁部一部欠損。ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は直形をしている。口縁部内面に凹凸かえりを持つ。	天井部外面回転へラ削り。内・外面クロコナテ。	長石・雲母 灰黄褐色 普通	P275 90% 床面 PL114 二次焼成
		B 2.6				
		F 3.9 G 0.8				
24	蓋 須 恵 器	A 13.2	口縁部一部欠損。ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は直形をしている。口縁部内面に凹凸かえりを持つ。	天井部外面回転へラ削り。内・外面クロコナテ。	石英・雲母・スコリア 灰黄褐色 普通	P279 95% 覆土中 PL114 二次焼成
		B 2.2				
		F 3.4 G 0.6				
25	蓋 須 恵 器	A 13.8	つまみ部から口縁部片。ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は直形をしている。口縁部内面に凹凸かえりを持つ。	天井部外面回転へラ削り。内・外面クロコナテ。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	P276 65% 床面 PL114 二次焼成
		B 2.5				
		F 3.8 G 0.5				
26	蓋 須 恵 器	A 13.0	口縁部一部欠損。ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は直形をしている。口縁部内面に凹凸かえりを持つ。	天井部外面回転へラ削り。内・外面クロコナテ。	長石・石英・雲母 淡黄色 良好	P186 95% 覆土中 PL114 二次焼成
		B 2.2				
		F 3.8 G 0.4				

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
28	土 瓦	2.4	2.3	0.4	11.1	覆土中 DP48	100% PL167

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
29	不明鉄製品	(2.9)	(2.6)	(1.8)	(20.5)	覆土中	M38
30	刀 子	(14.2)	1.3	0.4	(14.0)	床 面	M69 PL178

第134A号住居跡（第96・97図）

位置 調査区の中央部，E 2 i 8 区。

重複関係 本跡が，第133・134B号住居跡を掘り込んでいる。また，第134C・134D号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.40m，短軸4.24mの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は55～65cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅18～49cm，下幅3～13cm，深さ4～10cmで，断面形はU字状である。

床 半畳で，竈前から南壁にかけて，よく踏み固められている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1～P4は，長径46～62cm，短径38～47cmの楕円形，深さ57～88cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。規模は，煙道部から焚き口部まで115cm，両袖最大幅138cm，壁外への掘り込みは60cmである。火床部は，床面を5cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変している。煙道部は外傾し，のち角度を変えてほぼ垂直に立ち上がる。

竈土層解説

- 1 焼 色 焼土・炭化・ローム粒子微量
- 2 灰 褐色 粘土粒子中量，焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 にふい褐色 粘土粒子中量，焼土・炭化粒子微量
- 4 暗 赤 褐色 焼土粒子中量，炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
- 5 暗 赤 褐色 焼土・炭化・粘土粒子少量
- 6 暗 赤 褐色 粘土粒子少量，焼土小ブロック・焼土・炭化粒子微量

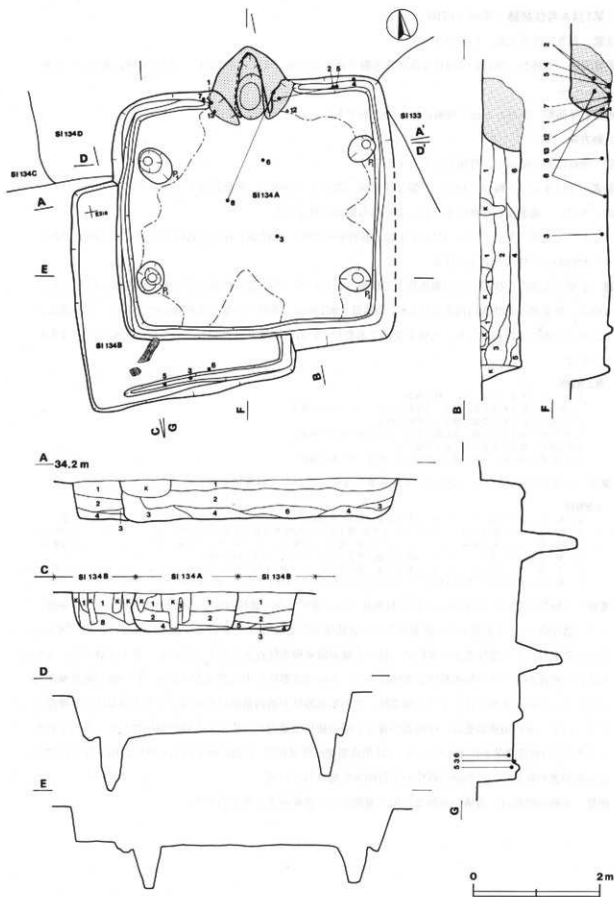
竈土 6層からなり，ローム小ブロックを多く含むことから人為堆積と考えられる。

土層解説

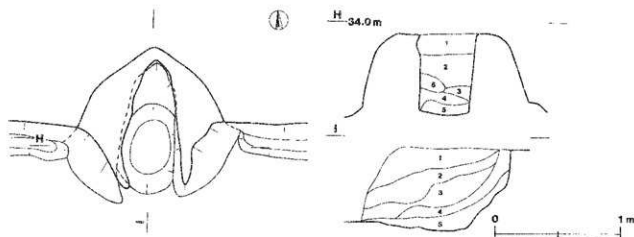
- 1 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量，焼土・炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化物微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土・炭化物・炭化粒子少量，焼土小ブロック・炭化材・ローム小ブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土・炭化粒子・ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化物微量
- 4 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土・炭化粒子少量
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土大ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック少量，焼土中ブロック・炭化物微量
- 6 暗 褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土中ブロック少量，焼土中ブロック・炭化粒子・ローム中ブロック少量

遺物 土師器片571点（坏片96点，高台付坏片1点，蓋片1点，甕片473点），須恵器片100点（坏片38点，蓋片1点，甕片61点），土製品1点，鉄製品3点，含鉄滓323.5gが出土している。覆土中層では，第98図4の須恵器坏が北東コーナー部付近から逆位で，12の手鐲が竈東袖部付近から出土している。覆土下層では，3の土師器坏が中央部から，5の須恵器坏が北壁際から，6の須恵器坏が中央部北寄りから，13の鐲が竈西袖部付近から出土している。床面では，1の土師器坏，7の須恵器坏が竈西袖部付近から，2の土師器坏が北壁際から出土している。8の須恵器甕は，中央部の覆土下層の破片と竈内から出土した破片が接合している。その他，覆土中から，14の鉄鎌茎が出土している。9は須恵器甕の体部片で，外面に同心円当てが施されている。10，11は須恵器甕の体部片で，外面に縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は，遺構の形態及び出土遺物から9世紀後半と考えられる。



第96图 第134A·134B号住居跡実測图(1)

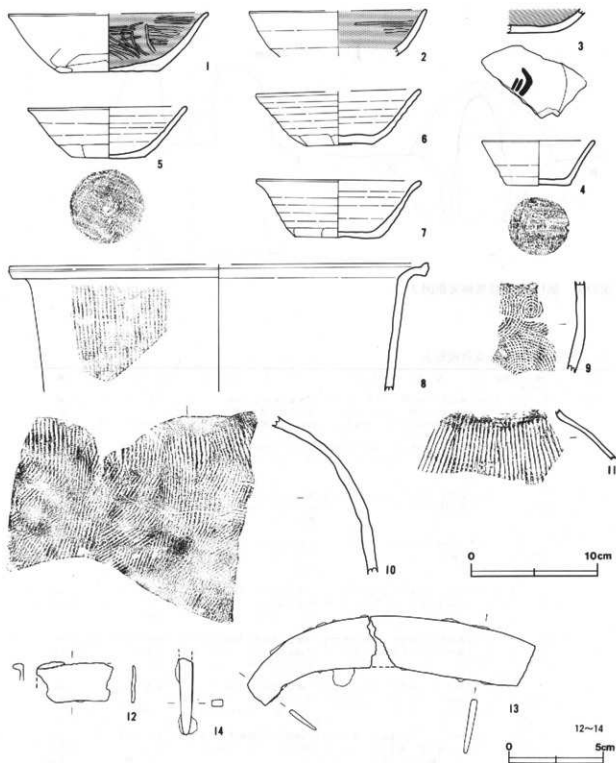


第97図 第134A号住居跡実測図(2)

第134A号住居跡出土遺物観察表

図面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	土器 上腹部	A 15.8	体部から口縁部片。平底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部外面下縁ヘラ削り、内面ヘラ削き。内面黒色処理。	石英・雲母・スクリア 淡黄褐色 普通	P288 床面 二次焼成
		B 4.6				
		C 7.6				
2	土器 上腹部	A 14.0	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラ削き。内面黒色処理。	石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P289 床面 一次焼成
		B (3.6)				
3	土器 底部	—	底部から体部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部内面ヘラ削き。内面黒色処理。底部磨光。	窯母 にぶい褐色 普通	P291 甕土中
4	土器 胴部	A 8.9	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部一方のヘラ削り。底部ヘラ削り。	長石・石英 灰オリープ色 良好	P293 甕土中 PL115
		B 3.6				
		C 5.0				
5	土器 胴部	A 12.6	体部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下縁ノコギリヘラ削り。底部・方向のヘラ削り。	石英・雲母・スクリア 灰褐色 良好	P294 甕土中 PL115
		B 4.0				
		C 5.6				
6	土器 胴部	A 12.1	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下縁ノコギリヘラ削り。底部・方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P295 甕土中
		B 4.2				
		C 5.3				
7	土器 胴部	A 13.0	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下縁ノコギリヘラ削り。底部ヘラ削り。方向のヘラ削り。	石英・雲母・スクリア 灰褐色 良好	P296 床面
		B 4.6				
		C 6.6				
8	土器 胴部	A 33.1	体部上位から口縁部片。体部は外方に緩やかに灣きながら立ち上がる。口縁部は強く外反する。底部は外上方につきま上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位の平行削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スクリア にぶい褐色 良好	P292 甕土中・甕内 二次焼成
		B (10.1)				

図面番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
12	土器 小鉢	(2.2)	(4.0)	0.2	(4.3)	甕土中 M40	PL177
13	土器 鉢	(15.4)	2.8	0.3	133.85	甕土中 M39	PL177
14	土器 鉢	(4.0)	0.7	0.4	(2.7)	甕土中 M41	PL178



第98図 第134A号住居跡出土遺物実測図

第134B号住居跡（第96図）

位置 調査区の中央部、E 2 i 8 区。

重複関係 本跡は、第134A号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.56m、短軸3.30mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は52~55cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南東コーナー部下から南壁下にかけて巡っている。上幅 [13]~22cm、下幅 5~13cm、深さ 8~10cmで、断面形はU字状である。

床 平田で、踏み固めた部分は見られない。

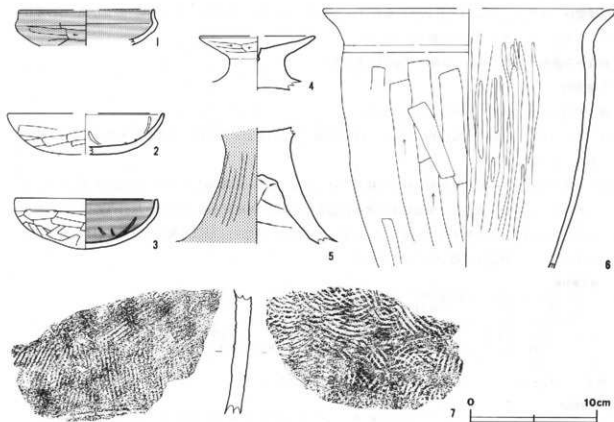
覆土 8層からなり、ローム中・小ブロックを多く含むことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック少量、焼土小ブロック・ローム大ブロック微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・ローム大ブロック少量、焼土中ブロック微量
- 3 暗褐色 炭化粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大・中ブロック微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、炭化物微量
- 6 暗褐色 焼土・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 7 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量、炭化物・ローム小ブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック中量、炭化物・ローム大・中ブロック少量

遺物 土師器片10点(焼片10点)が出土している。覆土下層では、第99図2の土師器環が中央部東側から、6の土師器瓶が南壁際から横位で出土している。床面では、3の土師器環と5の土師器高環が南壁際から出土している。3は、逆位の状態で出土している。その他、覆土中から1の土師器環、4の土師器高環が出土している。7は須恵器甕の体部片で、外面縦位の平行叩き、内面同心円当て具痕が施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から7世紀中葉と考えられる。



第99図 第134B号住居跡出土遺物実測図

第134B号住居跡出土遺物観察表

採取番号	部 種	計測値(cm)	部 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第99回 1	坏 土師器	A 10.8 B (2.3)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り、内面ナデ。内・外面両面色処理。	長石・雲母 黒色 普通	P297 10% 覆土中
2	坏 土師器	A 12.4 B 3.2	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に直る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り、内面へう削り。	長石・スコリア にふいぶ褐色 普通	P298 30% 覆土中 二次焼成
3	坏 土師器	A 11.2 B 4.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直上する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後ナデ。内面へう削り。内面黒色処理。	雲母 にふいぶ褐色 普通	P292 95% 床面 PL115
4	坏 土師器	A 9.2 B (4.2) E (2.3)	胴部から口縁部片。胴部は下段への字状に大きく開く。坏部は外傾し、口縁部に直る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へう削り後ナデ。内面ナデ。胴部外側ナデ。胴部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にふいぶ褐色 普通	P299 50% 覆土中 PL116
5	坏 土師器	B (8.2)	胴部片。胴部は下方への字状に大きく開く。	胴部外面縦位のへう削り後ナデ。内面へう削り。胴部内・外面横ナデ。胴部外面赤褐色。	石英・雲母 赤褐色 普通	P300 30% 床面
9	瓶 土師器	A (23.2) B (20.5)	底部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへう削り、内面縦位のへう削り。	石英・雲母・スコリア にふいぶ褐色 普通	P301 30% 覆土中

第134C号住居跡 (第100図)

位置 調査区の中央部、E 2 h 7 区。

重複関係 本跡が、第134A号住居跡の北西コーナ一部、第134D号住居跡のほぼ全体、および第135B号住居跡の南東コーナ一部をそれぞれ覆り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.45m、短軸3.35mの方形である。

主軸方向 N-86°-E

壁 壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 第134D号住居跡の上部は跣床である。全体に平坦で、第134D号住居跡の上部の跣床部分を除いた中央部は踏み固められている。

竈 東壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部は削平され、ほとんど残存していない。規模は、煙道部から焚き口部まで106cm、両袖最大幅(59)cm、壁外への削り込みは64cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を6cmほど削りくぼめており、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

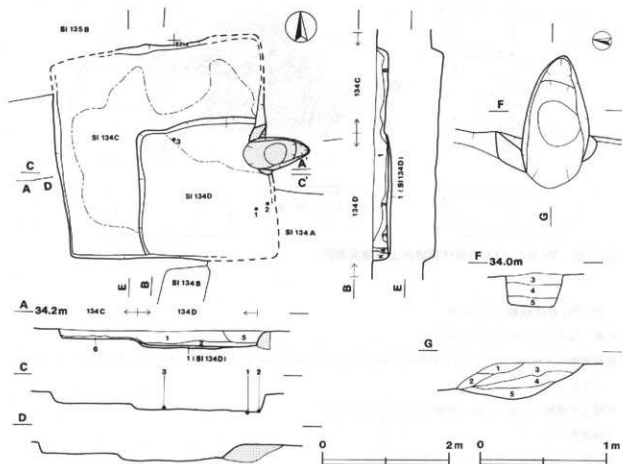
覆土層解説

- 1 暗 褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 2 灰 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗 赤 褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 4 にふいぶ褐色 焼土大ブロック・焼土中量・焼土中・小ブロック・炭化物少量、炭化粒子・ローム・粘土粒子微量
- 5 にふいぶ褐色 焼土大ブロック・焼土中量・焼土中・小ブロック・炭化物少量、炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土・炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム中・小ブロック微量
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 6 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量



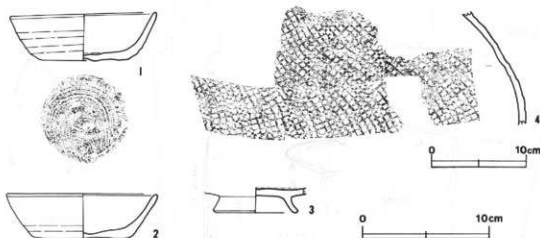
第100図 第134C・134D号住居跡実測図

遺物 土師器片139点(坏片27点, 高台付坏片1点, 甕片111点), 須恵器片18点(坏片7点, 高台付坏片1点, 盤片1点, 甕片9点), 鉄滓9.0g, 含鉄滓4.6gが出土している。床面では, 第101図1の土師器坏が東壁付近から逆位で, 2の土師器坏が東壁際から出土している。4は土師器甕の体部片で, 外面に格子叩きが施されている。

所見 本跡は, 第134D号住居跡の東壁と南壁を利用し, 北側と西側を拡張して構築された住居と思われる。時期は, 遺構の形態及び出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

第134C・134D号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	坏 土師器	A 11.6 B 3.9 C 6.9	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	長石・雲母・スコリアにふい黄橙色 普通	P303 90% SI-134Cの床面 二次焼成 PL116
2	坏 土師器	A 11.9 B 3.7 C 7.5	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて外傾する。	口縁部, 体部内・外面ロクロナデ。底部器面荒れ。	長石・雲母・スコリアにふい黄橙色 普通	P304 70% SI-134Cの床面 二次焼成 PL116
3	高台付柄 土師器	B (1.9) D 6.7 E 1.3	高台部から底部片。高台はハの字状に開く。	底部内面へう磨き。高台貼付け。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリアにふい黄橙色 普通	P307 20% SI-134Dの床面



第101図 第134C・134D号住居跡出土遺物実測図

第134D号住居跡（第100図）

位置 調査区の中央部，E 2 h 8 区。

重複関係 本跡が，第134A号住居跡の北西コーナー部を掘り込んでいる。また，第134C号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.25m，短軸2.15mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は25cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦で，西側と北東部を除いて踏み固められている。

覆土 単一層であり，覆土が浅いため，堆積状況は明確でない。

土層解説

1 層 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片 8点（坏片 8点）が出土している。第101図3の土師器高台付碗が北壁付近の床面から出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態及び出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

第135A号住居跡（第102図）

位置 調査区の中央部，E 2 g 7 区。

重複関係 本跡が，第135B号住居跡の東部と第136C号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.46m，短軸3.36mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は55cmで，外傾して立ち上がる。

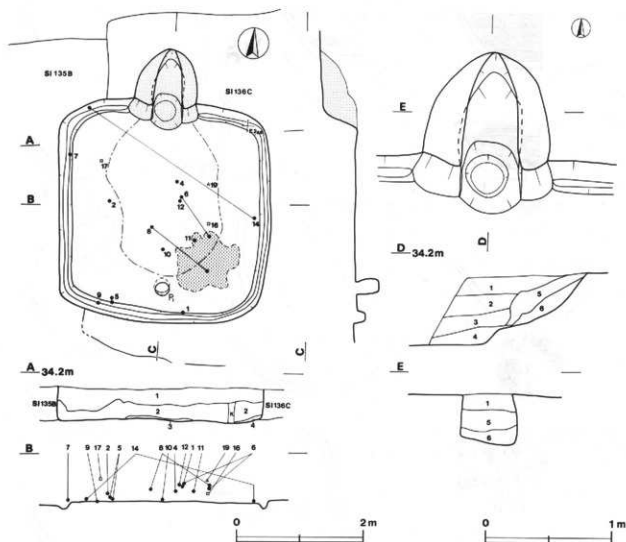
壁溝 全周する。上幅16～21cm，下幅3～11cm，深さ9～18cmで，断面形はU字状である。

床 平坦で，中央部は踏み固められている。

ピット P1は径22cmの円形，深さ35cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に，砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，両袖部が残存している。

規模は，煙道部から焚き口部まで127cm，両袖最大幅109cm，壁外への掘り込みは81cmである。火床部は，火熱



第102図 第135A号住居跡実測図

を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

電土層解説

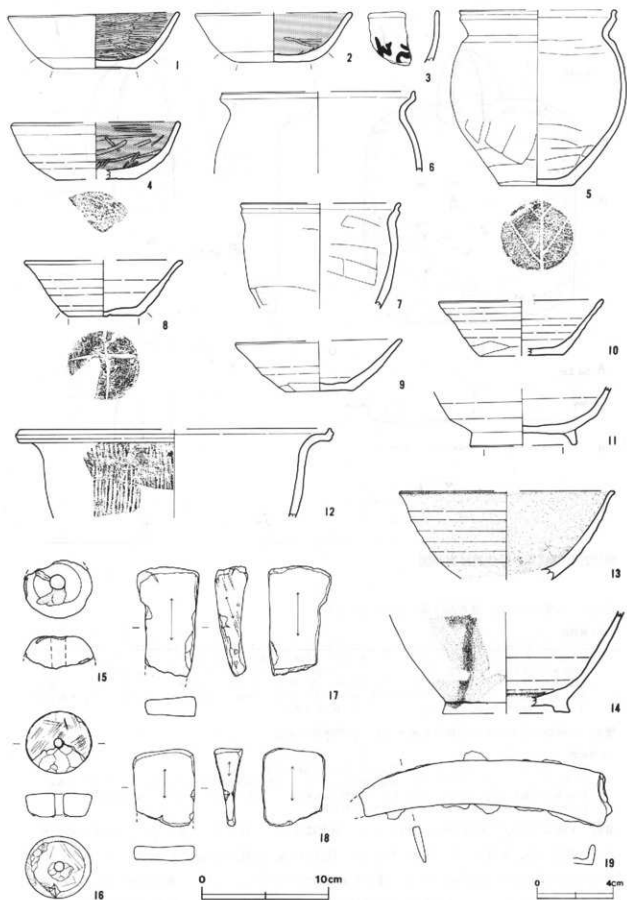
- 1 暗 褐色 粘土粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 粘土粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 極暗赤褐色 焼土・粘土粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 極暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化・粘土粒子少量、焼土大・中ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 極暗赤褐色 焼土大ブロック・焼土・粘土粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 6 暗 褐色 焼土粒子・ローム中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量

覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 極暗褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 4 暗 褐色 焼土粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片920点(坏片200点、甕片720点)、須恵器片140点(坏片45点、蓋片7点、高坏片2点、甕片86点)、石製品3点、鉄製品1点、縄文土器片2点、鉄滓205.4g、含鉄滓86.0gが出土している。覆土上層では、第103図17の砥石が中央部西側から、19の鎌が中央部東寄りから出土している。覆土中層では、1の土師器坏が南壁際から逆位で、2の土師器坏が中央部西側から、4の土師器坏、6の土師器甕、11の須恵器高台付碗、12の須恵器甕が中央部から、8の須恵器坏が中央部と中央部南西側から、16の石製紡錘車が中央部東寄りから出



第103图 第135A号住居跡出土遺物実測図

土している。覆土下層では、5の土師器甕が南壁際から逆位で、7の土師器甕が西壁際から、10の須恵器環が中央部南寄りから逆位で、14の灰釉陶器長頸瓶が北西コーナー部と西壁際から、18の砥石が中央部南側から出土している。床面では、9の須恵器環が南壁際から出土している。その他、覆土中から3の土師器環、13の灰釉陶器碗、15の管状土鐮が出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

第135A号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施成	備考
第103回 1	土師器 環	A 13.6 B 4.5 C 5.4	平底。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面横長のヘラ跡き。内面黒色処理。体部下層、底部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母にふい・黄褐色普通	P308 100% 覆土中 PLJ16 二次焼成
2	土師器 環	A [12.4] B 3.9 C [5.7]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面ヘラ跡き。内面黒色処理。体部下層、底部回転ヘラ削り。	長石・石英・雲母にふい・黄褐色普通	P309 40% 覆土中 二次焼成
3	土師器 環	-	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面ヘラ跡き。内面黒色処理。体部外面磨き。	石英・スコリアにふい・黄褐色普通	P310 5% 覆土中 PL116
4	土師器 環	A [13.4] B 4.5 C [5.4]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面ヘラ跡き。底部ヘラ削り、内面黒色処理。	石英・雲母にふい・黄褐色普通	P316 15% 覆土中 二次焼成
5	土師器 甕	A [12.2] B 13.9 C 5.6	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面土反ナデ、ト反ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。底部本磨き。	雲母 灰褐色 普通	P311 60% 覆土中 PL116
6	土師器 甕	A [15.4] B (6.4)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。器面北反。	石英・雲母にふい・黄褐色普通	P312 10% 覆土中
7	土師器 甕	A [12.4] B (8.3)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。輪組み肌。	長石・石英・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P313 10% 覆土中
8	須恵器 環	A [12.4] B 4.4 C 5.6	底部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り、底部ヘラ記号。	石英 灰色 良好	P314 40% 覆土中 PL116
9	須恵器 環	A [12.2] B 4.0 C [5.4]	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下層手持ちヘラ削り。底部・方向のヘラ削り。	長石・石英・雲母 暗灰色 良好	P317 40% 床面 二次焼成
10	須恵器 環	A [13.0] B 4.4 C [6.4]	底部から口縁部片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下層手持ちヘラ削り。底部ヘラ削り兼ナデ。	石英・雲母・スコリアにふい・黄褐色良好	P315 40% 覆土中 二次焼成
11	高台付須恵器 瓶	B (4.5) D [10.4] E 1.2	高台部から体部片。高台はへの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り機、高台磨付け。	石英 黄灰色 良好	P318 20% 覆土中
12	須恵器 瓶	A [24.6] B (7.0)	体部上位から口縁部片。体部は緩やかに外方に開きながら立ち上がる。口縁部は体部にほぼ直角に外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面縦位の平行叩き。内面ナデ。	長石・石英・雲母にふい・黄褐色良好	P319 5% 覆土中 二次焼成
13	灰釉陶器 碗	A [17.0] B (7.0)	体部から口縁部片。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。	石英 灰白色 良好	P305 5% 覆土中 出雲9号焼成式

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・位置・焼成	備 考
第103図 14	長頸瓶 灰胎陶器	B (8.0) D 10.0 E 0.9	底部から体部片、短い高台が付く。 体部は内壁欠味に立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部高 台貼付け後、ナデ。	石美 灰白色 良好	P306 5% 覆土中 PL116 黒標90号宮様式

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
15	管状土銭	(1.8)	(3.7)	0.8	(13.1)	覆土中	DP49 10%

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		径 (cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
16	紡錘車	5.2	1.9	0.8	47.4	凝灰岩	覆土中黒標	Q22 80% PL176

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
17	瓶 石	8.7	3.0	2.6	104.0	凝灰岩	覆土中	Q23 PL171
18	瓶 石	6.1	4.8	2.2	64.6	凝灰岩	覆土中	Q24 PL171

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
19	罐	(13.2)	2.8	0.4	(35.1)	覆土中	M42 PL177

第135B号住居跡 (第104・105図)

位置 調査区の中央部、E 2 g 6 区。

重複関係 本跡は、第134C・135A・136C号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.26m、短軸 [6.10]mの方形と推定される。

主軸方向 N-6°-W

壁 壁高は43~55cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁下を除いて巡っている。上幅17~32cm、下幅4~12cm、深さ4~9cmで、断面形はU字状である。

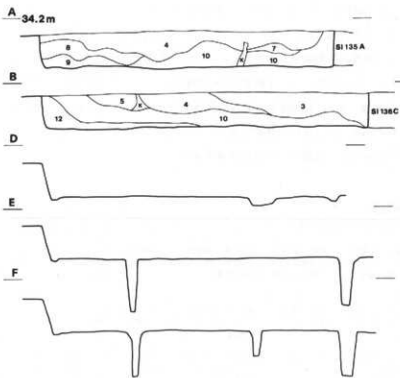
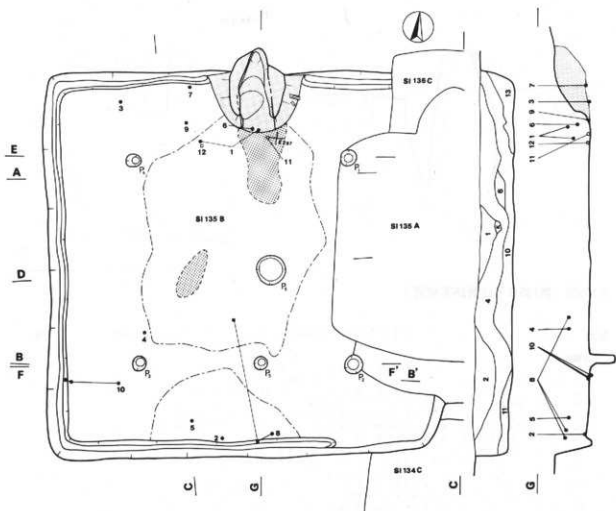
床 平坦で、中央部及び出入り口施設に伴うピットと内壁の間が踏み固められている。

ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P4は、径20~29cmの円形、深さ70~86cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は径22cmの円形、深さ40cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は径47cmの円形、深さ13cmであるが、性格は不明である。

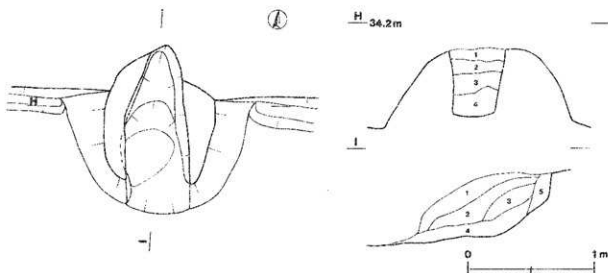
竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで134cm、両袖最大幅150cm、壁外への掘り込みは39cmである。両袖部の中から土師器製の体部片が出土している。これらは、袖の補強材として使用されたと思われる。袖の内壁と煙道部は、火熱を受けて赤変している。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がり、のち角度を変えて外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 粘土・炭化・粘土粒子少量、炭土小ブロック微量
- 2 灰 褐色 粘土粒子中量、炭土小ブロック・粘土・炭化粒子微量
- 3 灰 褐色 粘土粒子多量、炭土粒子微量
- 4 赤 赤褐色 粘土粒子中量、炭化・粘土粒子少量
- 5 にぶい赤褐色 粘土粒子中量、炭土粒子少量、炭化粒子微量



第104图 第135B号住居跡実測图(1)



第105図 第135B号住居跡実測図(2)

覆土 13層からなり、ロームブロックを含み不自然な堆積を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

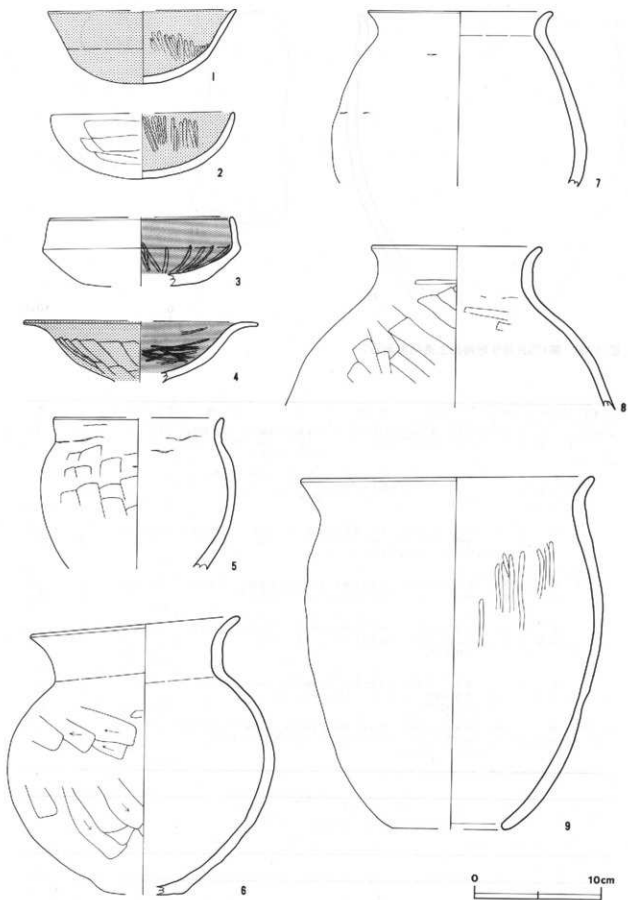
- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土・炭化・ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 4 褐色 炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 6 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック微量
- 8 暗褐色 焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 10 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・ローム中・中ブロック微量
- 11 暗褐色 炭化物・炭化・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
- 12 暗褐色 炭化・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・ローム中・小ブロック微量
- 13 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量

遺物 土師器片381点(杯片36点、高杯片5点、甕片340点)、須恵器片4点(杯片3点、甕片1点)、土製品1点、石製品1点、縄文土器片3点、含鉄滓51.0gが出土している。第106・107図覆土上層では、1の上師器杯、6の上師器甕が竈前面から、4の上師器高杯が中央部西側から、8の土師器甕が中央部と南壁際から、5の土師器甕が南壁付近から出土している。床面では、2の土師器杯が南壁際から、3の上師器杯が北西コーナー部付近から、7の上師器杯、9の土師器甕、12の石製紡錘車が竈西袖部付近から、10の上師器甕が中央部南側から、11の土製支脚が竈前面から出土している。6は正位の状態出土している。

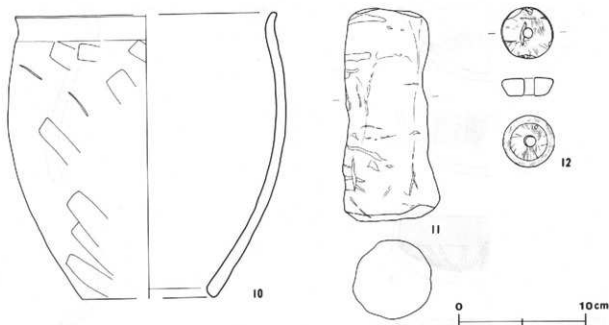
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。

第135B号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	寸法(mm)	器形の特徵	手法の特徵	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	杯 土師器	A [14.9]	底部から口縁部片。丸底。体部は内壁して立ち上がり、口縁部との境に深い切を穿つ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へウ磨き。内・外面赤胎。体部外面彩色面剥離。	長石・スコリア 赤褐色 青褐色	P321 30% 覆土中 PI.116 二次焼成
		B 5.8				
2	杯 土師器	A [14.5]	底部から口縁部片。丸底。体部から口縁部にかけて内壁する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へウ磨き。ナデ。内面へウ磨き。内面赤胎。	玄母 灰褐色 青褐色	P322 30% 床面 二次焼成
		B 5.2				
3	杯 土師器	A [14.4]	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて横やかに内壁し、口縁部との境に浅く切を穿つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面放射状のヘラ磨き。内面灰色焼成。	長石・石英・雲母 に白い赤褐色 青褐色	P323 30% 床面 二次焼成
		B (5.6)				



第106图 第135B住居跡出土遺物実測図(1)



第107図 第135B号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 4	高土師器	A [18.6] B (4.9)	坏部片。坏部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り、内面へつ磨き。内面黒色処理。外面赤彩。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P324 30% 覆土中 二次焼成
5	壺土師器	A [13.6] B (12.0)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ、内面ナデ。輪積み痕。	長石・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P328 15% 覆土中
6	壺土師器	A 16.5 B 22.2 C [6.0]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り、内面ナデ。器面荒れ。	長石・石英・雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P325 80% 覆土中 PL116
7	壺土師器	A 14.5 B (13.8)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。輪積み痕。	長石・石英・雲母 にふい黄褐色 普通	P326 60% 床面 PL116
8	壺土師器	A 13.4 B (13.7)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア にふい黄褐色 普通	P327 20% 覆土中
9	瓶土師器	A [23.3] R 28.1 C [9.2]	体部から口縁部一部欠損。無底式。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へつ磨き。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P329 80% 床面 PL116
第107図 10	瓶土師器	A [20.6] B 22.5 C [10.6]	底部から口縁部片。無底式。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ削り後、ナデ、内面ナデ。	石英・雲母・スコリア にふい黄褐色 普通	P330 20% 床面

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
11	支脚	16.9	7.5	-	(866.2)	床面	DP50 95% PL172

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
12	紡錘車	4.1	1.4	0.8	40.4	滑石床面	Q25 100% PL176	

第136A号住居跡 (第108図)

位置 調査区の中央部, E 2 g 8 区。

重複関係 本跡が, 第136B・136C・136D号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.61m, 短軸(3.27)mの長方形と推定される。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は20~29cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下の一部に巡っている。上幅11~15cm, 下幅3~7cm, 深さ6cmで, 断面形はU字状である。

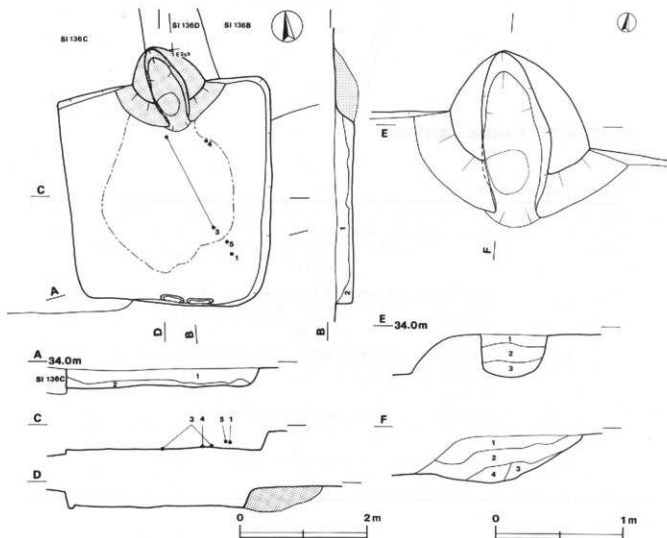
床 平坦で, 中央部は踏み固められている。

竈 北壁中央部に, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両袖部が残存している。

規模は, 煙道部から突き口部まで140cm, 両袖最大幅173cm, 壁外への掘り込みは60cmである。火床部は, 床面を8cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けわずかに赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 2 極暗褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, 焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量



第108図 第136A号住居跡実測図

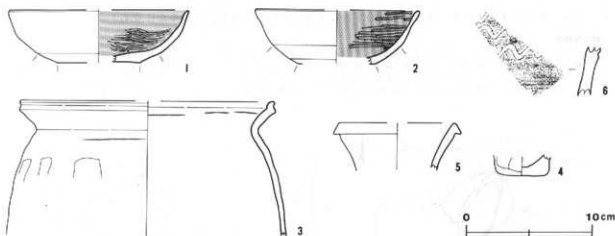
覆土 2層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
 2 暗褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片420点(坏片59点, 高坏片1点, 甕片360点), 須恵器片44点(坏片44点), 縄文土器片1点, 鉄滓7.8g, 含鉄滓35.1gが出土している。覆土下層では, 第109図1の土師器坏が中央部南東側から, 5の須恵器長頸瓶が中央部東側から出土している。床面では, 3の土師器甕が竈前面と中央部南東寄りから, 4の土師器ミニチュア土器が中央部北東寄りから出土している。その他, 覆土中から2の土師器坏が出土している。6は須恵器甕の体部片で, 1本の波状文が3段に施されている。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



第109図 第136A号住居跡出土遺物実測図

第136A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 1	坏 土師器	A [14.2] B 4.1 C [6.6]	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部, 体部外面ロクロナデ。内面横位のヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P331 15% 覆土中 二次焼成
2	坏 土師器	A [13.0] B (4.2) C [6.0]	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部外面ロクロナデ。内面横位のヘラ磨き。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	石英・雲母・スコリア 橙色 普通	P332 10% 覆土中 二次焼成
3	甕 土師器	A [20.2] B (20.6)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は外反している。端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ナデ。	石英・雲母にふい褐色 普通	P333 10% 床面
4	ミニチュア 土師器	B (1.8) C 3.8	底部から体部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後、ナデ、内面ナデ。底部ヘラ削り。	石英・雲母にふい黄褐色 普通	P334 20% 床面
5	長頸瓶 須恵器	A [9.2] B (3.7)	頸部から口縁部片。頸部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部, 頸部内・外面ロクロナデ。	長石・石英にふい赤褐色 良好	P335 5% 覆土中 PL116

第136B号住居跡 (第110図)

位置 調査区の中央部、E 2 f 9 区。

重複関係 本跡が、第136D号住居跡を掘り込んでいる。また、第136A号住居跡によって掘り込まれている。

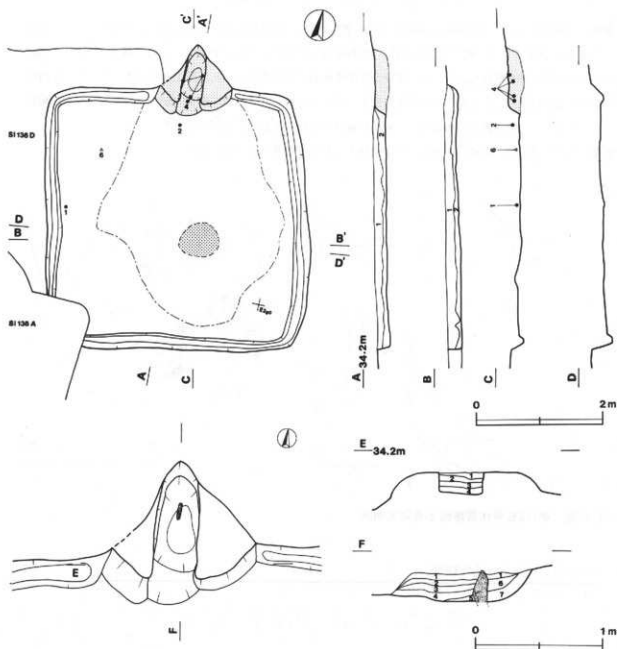
規模と平面形 長軸4.14m、短軸4.10mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は12~23cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第136A号住居跡によって掘り込まれている南西コーナー部を除いて巡っている。上幅12~29cm、下幅5~14cm、深さ5~8cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。



第110図 第136B号住居跡実測図

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで114cm、両袖最大幅124cm、壁外への掘り込みは66cmである。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変している。雲母片岩の支脚が、火床部奥に置かれている。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化・ローム・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化・ローム・粘土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物・炭化・粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化・粘土粒子微量
- 6 暗褐色 焼土中ブロック・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 7 褐色 焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

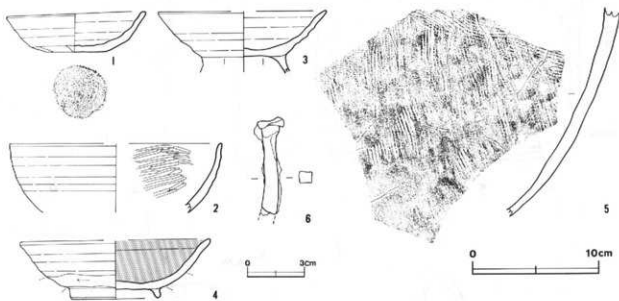
覆土 2層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム大・中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片119点（坏片90点、高坏片5点、甕片24点）、須恵器片43点（坏片18点、高坏片1点、蓋片2点、甕片22点）、鉄製品1点、縄文土器片1点、鉄滓98.5g、含鉄滓43.3gが出土している。覆土上層では、第111図1の土師器坏が西壁付近から、2の土師器坏が竈前面から出土している。覆土下層では、4の土師器高台付碗が中央部北側から、6の釘が中央部北西側から出土している。その他、覆土中から3の土師器高台付碗が出土している。5は須恵器甕の体部片で、外面に縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から10世紀中葉と考えられる。



第111図 第136B号住居跡出土遺物実測図

第136B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 1	土師器	A 11.0	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへう削り。底部回転糸切り。	石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P336 70% 覆土中 二次焼成
		B 3.2				
		C 4.4				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手造の特徴	胎土・包調・焼成	備考
第111図 2	杯 土師器	A [16.8] B [5.4]	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナテ。内面へう磨き。	石英・雲母 褐色 普通	P337 覆土中 二次焼成
3	高台付横 十師器	A [13.4] B [4.8] E [1.3]	高台部から口縁部片。高台はハの字状に開く、体部から口縁部にかけて緩やかに内彎する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ、底部回転糸切り後、回転へう磨り、高台貼付け。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 良好	P338 覆土中 二次焼成
4	高台付横 土師器	A [15.1] B 4.7 D 7.1 E 0.8	高台部から口縁部片。高台部は短く、わずかに開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナテ。体部下部回転へう磨り。底部回転糸切り後、回転へう磨り。高台貼付け。内面褐色処理。	石英・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P339 覆土中 二次焼成

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	容積(g)		
6	釘	[3.1]	1.5	0.6	[11.7]	覆土中	M43 PI179

第136C号住居跡(第112図)

位置 調査区の中央部、E 2 g 8 区。

重複関係 本跡が、第135B・136D号住居跡を掘り込んでいる。また、第135A・136A号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.80m、短軸5.70mの方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は34~57cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下と出入口ピット付近を除いて通っている。上幅12~33cm、下幅4~12cm、深さ3~10cmで、断面形はじ字状である。

床 平坦で、竈前から主柱穴P2の手前まで踏み固められている。

ピット 7か所(P1~P7)。P1~P4は、長径33~64cm、短径32~48cmの楕円形、深さ35~53cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径48cm、短径41cmの楕円形、深さ40cmである。位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は、径48cmの円形、深さ27cmであり、P7は、長径54cm、短径43cmの楕円形、深さ27cmである。位置から、どちらも補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂漉じりの褐色結上で構築されている。天井部は別崩し、東軸部が現存している。規模は、煙道部から突き11部まで[59]cm、両軸最大幅[80]cm、壁外への掘り込みは29cmである。東軸の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を3cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がり、のち外傾して立ち上がる。

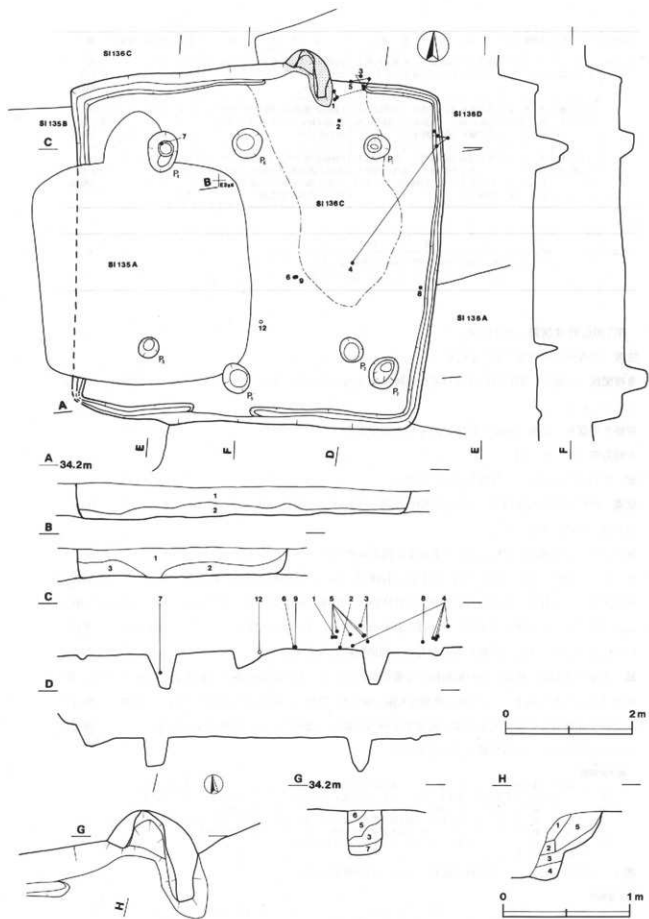
覆土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒少量、焼土大・中・小ブロック・焼土・炭化粒・ローム大・中・小ブロック微量
- 3 褐色 焼土中・小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 褐色 焼土小ブロック・焼土粒・炭化物・炭化粒・ローム小ブロック・ローム粒少量
- 5 暗赤褐色 焼土大・中・小ブロック・焼土粒少量、炭化物・炭化・ローム・粘土粒少量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土・粘土粒子少量、炭化粒少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量

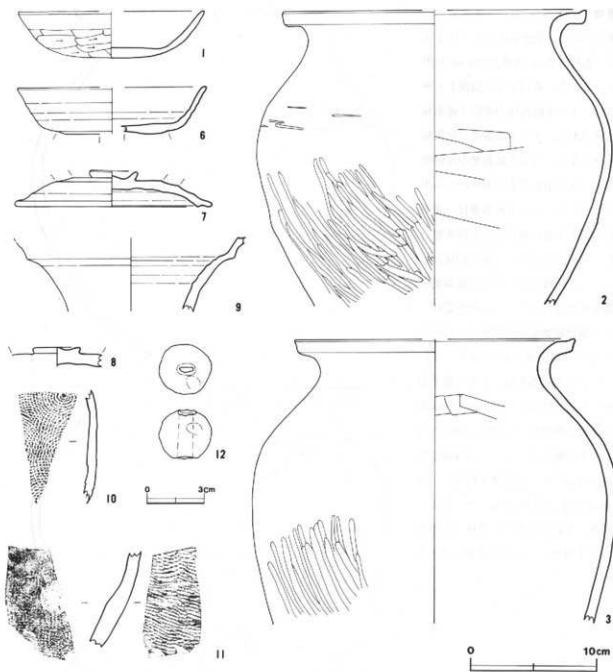
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒・炭化物・ローム中・小ブロック・ローム粒少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量、焼土粒・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量



第112图 第136C号住居跡実測图



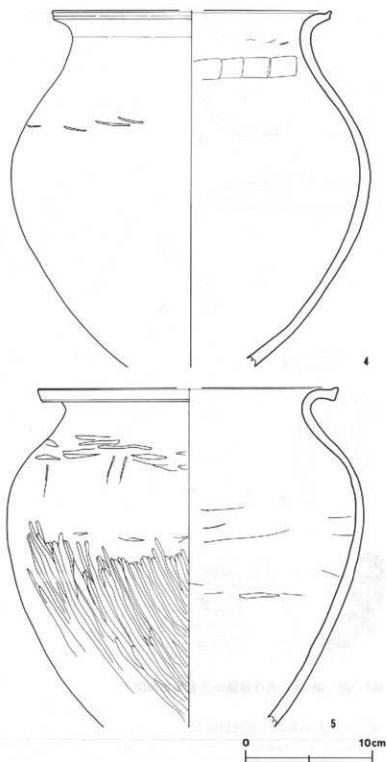
第113図 第136C号住居跡出土遺物実測図(1)

第136C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	坏 土器	A [14.7] B 3.7	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	石英・雲母にふい褐色 普通	P340 40% 覆土中 PL117
2	甕 土器	A [24.0] B (23.3)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き、内面へラナデ。	長石・石英・雲母にふい黄褐色 普通	P342 40% 床面 PL117
3	甕 土器	A [22.2] B (22.5)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ磨き、内面へラナデ。	石英・雲母にふい赤褐色 普通	P345 35% 覆土中

遺物 土師器片522点(坏片52点, 爨片470点), 須恵器片12点(坏片10点, 蓋片2点), 含鉄滓126.6gが出土している。第113・114図覆土上層では, 1の土師器坏が逆位で竈東袖部付近から, 5の土師器爨が竈東袖部付近から, 3の土師器爨が北壁際から, 8の須恵器蓋が東壁際から出土している。4の土師器爨は, 東壁際の覆土上層の破片と中央部東側の覆土下層から出土した破片が接合している。床面では, 2の土師器爨が竈東袖部付近から, 6の須恵器坏と9の須恵器爨が中央部から, 12の土玉が中央部南寄りから出土している。7の須恵器蓋は, P4の覆土中層から斜位で出土している。10は須恵器爨の体部片で, 外面に同心円当て具痕が施されている。11は須恵器爨の体部片で, 外面格子目叩き, 内面同心円当て具痕が施されている。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から8世紀前葉と考えられる。



第114図 第136C号住居跡出土遺物実測図2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 4	土師器 爨	A [22.0] B (28.3)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。端部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ, 内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 褐色 普通	P344 35% 覆土中

図説番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・変成	備 考
第114図 5	虎 土 師 器	A 23.7 B (26.8)	外部から口縁部片。内部は内壁して立ち上がり。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。外部外面へタ磨き、内面ヘラナデ。	長石・石英・スロリア 棕色 普通	P341 覆土中 PL117
第113図 6	坏 須 志 器	A (15.0) B 3.2 C (8.6)	底部から口縁部片。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナデ。底部回転ヘラ磨り。	長石・石英・雲母 灰白色 良好	P346 床面
7	番 須 志 器	A 15.3 B 2.9 F 3.7 G 0.8	口縁部一部欠損。ボタン状のつまみが付く。天井部は皿形をしている。口縁部内面に壁いかりが付く。	口縁部、天井部内・外面クロコナデ。天井部回転ヘラ磨り。	長石・石英・雲母 灰白色 良好	P347 ピット内PL117
8	番 須 志 器	B (1.5) F 3.7 G 0.5	つまみから天上部片。扁平なボタン状のつまみが付く。	天井部回転ヘラ磨り。	長石・石英・雲母 にふい費棕色 良好	P348 覆土中
9	番 須 志 器	B (5.7)	頸部から口縁部片。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部との境に段を持つ。口縁部は外反する。頸部欠損。	口縁部、頸部内・外面クロコナデ。	石英・雲母 灰白色 良好	P349 床面

図説番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
12	土 土	2.6	2.8	0.7	18.3	床 面	DPS1 100% PL167

第136D号住居跡 (第115図)

位置 調査区の中央部。R 2 F 9 区。

重複関係 本跡は、第136A・136B・136C号住居跡によってそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [5.28]m、短軸4.75mの長方形と推定される。

主軸方向 N-16°-W

壁 壁高は42~47cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁下と竈の両側の一部で検出されている。上幅14~26cm、下幅5~10cm、深さ5~14cmで、断面形はU字状である。

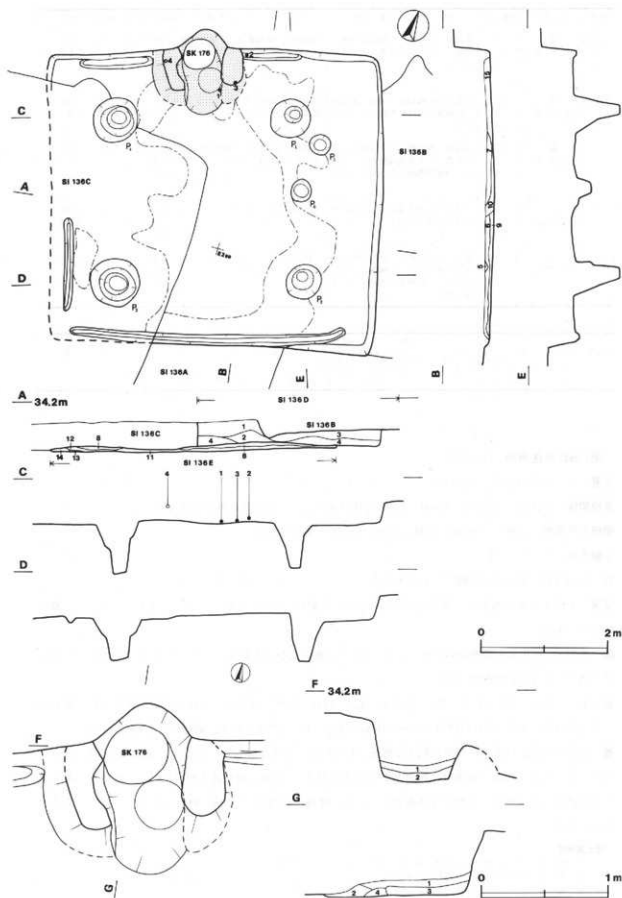
床 平坦で、中央部が踏み固められている。さらに、竈付近から南壁下にかけての床下7~13cmのところから、踏み固められた床面が検出された。

ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P4は、径55~78cmの円形、深さ67~83cmである。規模と配列から土柱穴と考えられる。P5・P6は径31~34cmの円形、深さ [16]~27cmであり、補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に砂瀝じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落している。両袖部は削平され、基部が残っているだけである。規模は、煙道部から焚き口部まで135cm、両袖最大幅 (144)cm、壁外への掘り込みは23cmである。火床部は、火熱を受け赤変している。煙道部は第176号土坑に掘り込まれており、立ち上がりは不明である。

出土層解説

- 1 暗褐色 ローム・粘土粒少量、洗粒後・ローム小ブロック微量
- 2 明褐色 粘土粒少量、洗粒後微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック少量、洗土後・ローム小ブロック微量
- 4 暗赤褐色 洗土粒中量、粘土粒少量



第115图 第136D号住居跡実測图

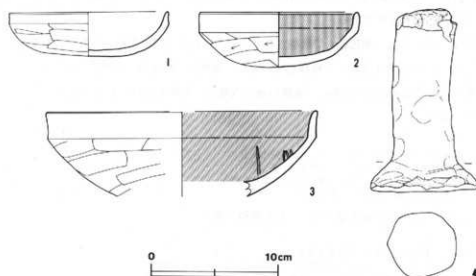
覆土 15層からなり、第1～4層まではレンズ状の堆積を示し、自然堆積である。第5～15層は、ローム大・中・小ブロックを多く含むことから、人為堆積（貼床）と考えられる。

土層解説

1	褐色	色	ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
2	暗褐色	色	炭化粒子少量、焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
3	褐色	色	炭化・ローム粒子少量、炭化物・ローム中・小ブロック微量
4	褐色	色	ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック微量
5	褐色	色	ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
6	暗褐色	色	ローム大・中ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
7	褐色	色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量
8	暗褐色	色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
9	暗褐色	色	炭化物・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量
10	暗褐色	色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム粒子微量
11	暗褐色	色	ローム大・中ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
12	褐色	色	ローム大ブロック中量、ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
13	暗褐色	色	ローム大・中・小ブロック少量、炭化・ローム粒子微量
14	褐色	色	ローム大ブロック中量、ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
15	褐色	色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム大・中・小ブロック微量

遺物 土師器片126点(坏片18点、甕片107点、瓶片1点)、須恵器片4点(坏片3点、甕片1点)、土製品1点、鉄滓12.5g、含鉄滓5.4gが出土している。覆土上層では、第116図4の土製支脚が甕西袖部付近から出土している。覆土下層では、2の土師器坏が北壁際から正位で出土している。甕内では、1の土師器坏が覆土下層から横位で、3の土師器坏が火床部から出土している。

所見 床下からもうひとつの床面が検出され、床の張り替えが行われたと考えられる。時期は、遺構の形態及び出土物から6世紀後葉と考えられる。



第116図 第136D号住居跡出土遺物実測図

第136D号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	坏 土師器	A 12.6 B 3.5	体部から口縁部一部欠陥。丸底。体部は内壁して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P350 80% 甕内 PL117 二次焼成
2	坏 土師器	A 12.6 B 3.5	底部から口縁部片。丸底。体部は内壁して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。底部一方向の擦痕有り、内面黒色処理。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P351 60% 覆土中 PL117 二次焼成

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第116図 3	坏 土師器	A 24.4 B 6.7	体部から口縁部片。体部は内側気 味に立ち上がり、口縁部との境に 線を付す。口縁部はわずかに外反 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へう張り、内面へう巻き。内面弘 色気味。	石膏・雲母・スコ リア にぶい褐色 普通	P352 15% 圈内 二次焼成

図版番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
4	文 壺	14.6	13.4	-	(497.9)	覆 土 中 DP52 90% PL172	

第137号住居跡（第117図）

位置 調査区の中央部、E2j6区。

規模と平面形 長軸3.65m、短軸3.38mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は40~48cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅16~43cm、下幅4~16cm、深さ6~11cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部はよく踏み固められている。

ピット 3か所（P1~P3）。P1は、径32cmの円形、深さ14cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2~P3は長径46~72cm、短径36~63cmの楕円形、深さ17~25cmであり、当住居跡に伴う柱穴と考えられるが、性格は不明である。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。耕作による根腐が、北西から南東に向かって幅状に伸びており、特に、火床部はほとんど残存していない。規模は、煙道部から焚き口部まで113cm、両袖最大幅144cm、壁外への掘り込みは30cmである。東側の袖の内壁は、火熱を受けてかなり赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 にぶい赤褐色 粘土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 3 灰 褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 4 暗 赤 褐色 粘土粒子少量、焼土・炭化粒子微量

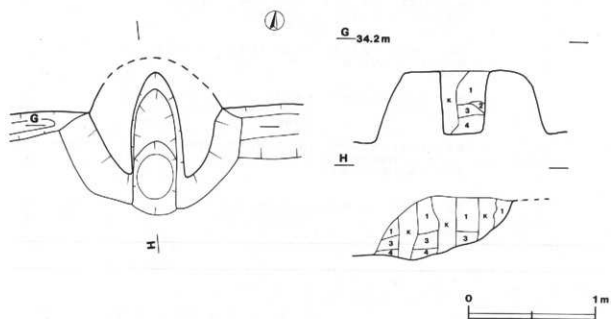
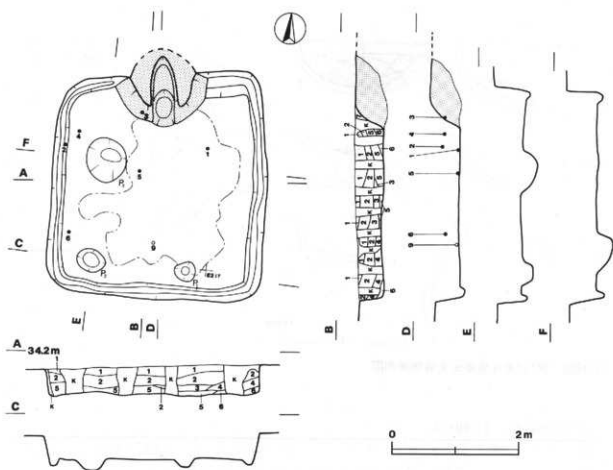
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

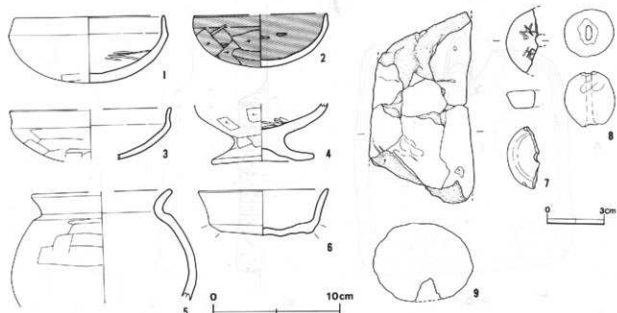
- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗 褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 5 暗 褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量、炭化物微量
- 6 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 7 暗 褐色 粘土粒子少量、焼土・炭化粒子微量

遺物 土師器片760点（坏片134点、高坏片3点、甕片623点）、須恵器片24点（坏片9点、甕片15点）、土製品3点、鉄製品1点、縄文土器片2点、鉄滓8.7g、含鉄滓40.7gが出土している。覆土上層では、第118図2の上師器坏が西壁際から、3の上師器坏が東西袖部付近から、4の上師器高坏と6の須恵器坏が包壁付近から出土している。6は、斜位の状態で出土している。覆土下層では、9の上製支脚が中央部南側から出土している。床面では、1の上師器坏が中央部北東側から正位で、5の上師器甕が中央部から出土している。その他、覆土中から8の土玉、7の上製紡錘車が出土している。

所見 本跡の時期は、遺物の形態及び出土遺物から7世紀前半と考えられる。



第117图 第137号住居跡実測图



第118図 第137号住居跡出土遺物実測図

第137号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第118図 1	土師器	A 11.9	体部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ振り後、ナデ。内面へつ磨き。	雲母・スコリアにぶい褐色 普通	P353 70% 床面 二次焼成
		B 5.2				
2	土師器	A [10.6]	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ振り、内面ナデ。内・外面黒色処理。	長石・雲母・スコリア 黒褐色 普通	P354 30% 覆土中
		B 4.3				
3	土師器	A [12.8]	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ振り、内面ナデ。	長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P355 20% 覆土中 二次焼成
		B (4.0)				
4	高土師器	B (4.7)	脚部から坏部片。脚部は下位でハの字状に大きく開く。	坏体部外面へつ振り、内面へつ磨き。脚部、胴部外面へつ振り。胴部内面横ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア 明褐色 普通	P356 60% 覆土中 PL117
		D 8.2				
		E 1.9				
5	土師器	A [11.0]	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を持つ。口縁部は緩やかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へつ振り後ナデ、内面ナデ。	雲母・スコリアにぶい赤褐色 普通	P357 30% 床面 PL117
		B (8.8)				
6	土師器	A 10.3	底部から口縁部片。平底。体部はわずかに外反して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面口クロナデ。体部下端回転へつ振り。	長石・石英・雲母・スコリア 良好	P358 70% 覆土中 PL117
		B 3.6				
		C 7.3				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
7	紡錘車	(2.3)	1.5	[0.8]	(17.8)	覆土中	DP22刺書 40% PL171

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
8	土玉	2.9	2.7	0.3	(17.4)	覆土中	DP53 70%
9	支脚	(15.2)	(8.3)	-	(525.7)	覆土中	DP54

第138A号住居跡 (第119図)

位置 調査区の西部, E 2 g 3 区。

重複関係 本跡が, 第139号住居跡の南西部を掘り込んでいる。

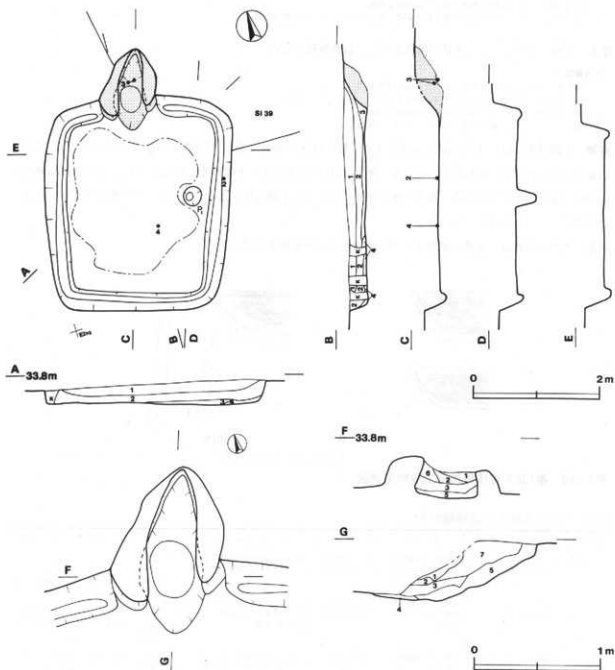
規模と平面形 長軸3.30m, 短軸2.92mの長方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は25~35cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅28~33cm, 下幅6~16cm, 深さ6~11cmで, 断面形はU字状である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められている。



第119図 第138A号住居跡実測図

ピット P1 は長径31cm, 短径27cmの円形, 深さ30cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚き口部まで127cm, 両袖最大幅85cm, 壁外への掘り込みは71cmである。袖の内壁と煙道部は, 火熱を受けてかなり赤変硬化している。火床部は, 床面を7cmほど掘りくぼめており, 火熱を受け赤変硬化している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化・ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化・ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土・ローム・粘土粒子少量, ローム小ブロック微量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子中量, 焼土・炭化粒子微量
- 7 灰褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量

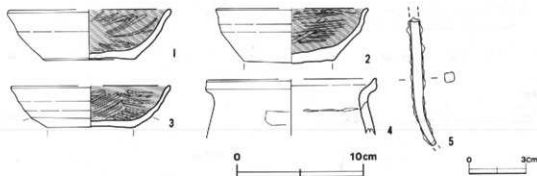
覆土 4層からなり, レンズ状の堆積を示し, 自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化・ローム粒子少量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 焼土・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

遺物 土師器片533点(坏片79点, 高坏片1点, 甕片447点, 甌片6点), 須恵器片61点(坏片16点, 甕片45点), 鉄製品1点, 鉄滓49.5gが出土している。床面では, 第120図4の土師器甕が中央部から, 2の土師器坏が東壁際から逆位で出土している。竈内の覆土下層から, 3の土師器坏が出土している。その他, 覆土中から1の土師器坏と5の釘が出土している。

所見 本跡の時期は, 遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



第120図 第138A号住居跡出土遺物実測図

第138A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	坏 土師器	A 13.0	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部外面ロクロナテ, 内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	雲母・スコリア 褐色 普通	P359 45% 覆土中 二次焼成
		B 4.0				
		C 7.0				
2	坏 土師器	A 12.0	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部, 体部外面ロクロナテ, 内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。内面黒色処理。	石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P361 70% 床面 PL117 二次焼成
		B 4.3				
		C 7.0				
3	坏 土師器	A 12.7	底部から口縁部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部, 体部外面ロクロナテ, 内面ヘラ磨き。体部下端回転ヘラ切り。底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 暗赤褐色 良好	P362 50% 竈内 二次焼成
		B 3.3				
		C 6.7				

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120回 イ	土師器 土師器	A〔13.5〕 B〔4.3〕	体部上位からL線部片。口縁部は 外反し、裾部は上方にわずかにつ まみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 へつ張り横ナデ、内面ナデ。輪襷 み肌。	長石・石英・雲母・ スコリア にふいば色 普通	P360 10%

図説番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
5	釘	(6.8)	0.5	0.5	(5.3)	覆上中	M47 PL179

第138B号住居跡 (第121・122図)

位置 調査区の西部、E 2 g 2 区。

重複関係 本跡が、第138C号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.50m、短軸4.95mの長方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は10～35cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平沢で、窪付近と東壁下が部分的に踏み固められている。第138C号住居跡の覆土上部に貼られた床面は軟弱で、ロームブロックが部分的に見られるだけである。

ピット 2か所(P1～P2)。P1は、径28cmの円形、深さ37cmである。P2は、長径34cm、短径29cmの楕円形、深さ34cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色結土で構築されている。煙道部・火床部・袖部は、耕作により一部覆土を受けている。天井部は崩落している。規模は、煙道部から焚き口部まで75cm、両袖最大幅122cmで、壁外へは掘り込まれていない。東袖部の内壁は、火熱を受けて一部赤変硬化している。火床部は、床面を3cmほど掘りくぼめており、わずかに赤変硬化している。煙道部は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 灰褐色 粘土粒子少量、炭土・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 粘土粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子微量
- 5 灰褐色 粘土粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量

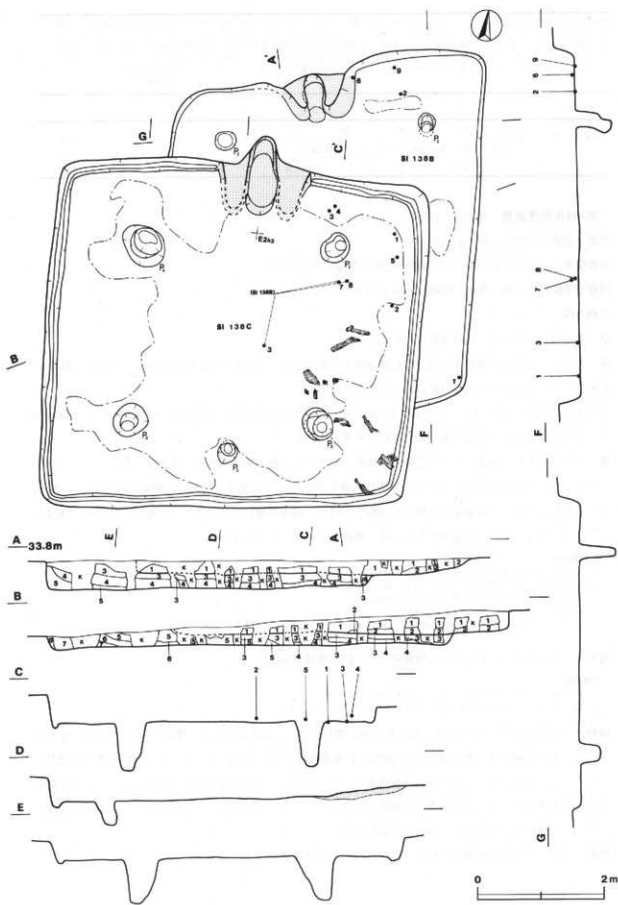
覆土 2層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

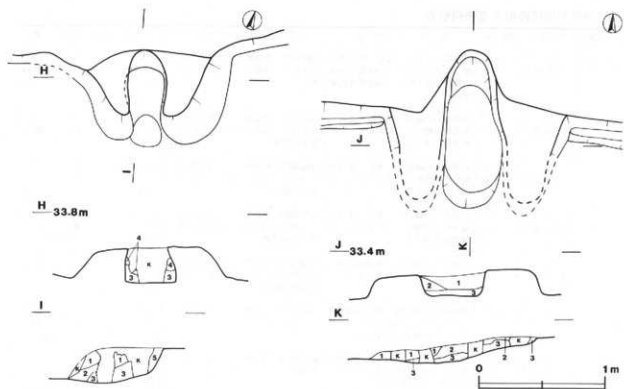
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片195点(坏片48点、高坏片2点、甕片145点)、須恵器片6点(甕片6点)、鉄滓40.4gが出土している。覆土下層では、第123図6の土師器坏が竈東袖部付近から正位で、7、8の土師器甕が中央部から出土している。床面では、1の土師器坏が南東コーナー部から、2の土師器坏が北壁付近から、3の土師器坏が中央部南西側から、9の土師器甕が北壁際から出土している。1は正位で、2は逆位で、9は横位で出土している。その他、覆土中から4、5の土師器坏が出土している。

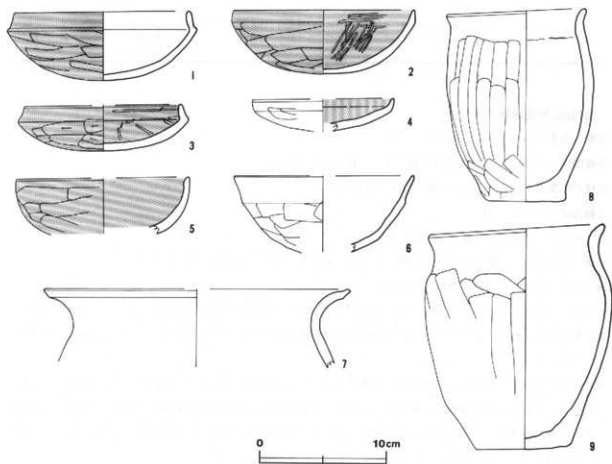
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後半と考えられる。



第121图 第138B·138C号住居跡実測图(1)



第122图 第138B号住居跡実測图(2)



第123图 第138B号住居跡出土遺物実測图

第138B号住居跡出土遺物観察表

西暦番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地文	備考
第125回 1	坏 土師器	A 14.8	口縁部一部欠損。尖底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境に明確な段を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。外面黒色処理。	雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P363 95% 床面 PL117
		B 3.4				
2	坏 土師器	A 14.2	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	石英・雲母・スコリア 灰青褐色	P364 85% 床面 PL117
		B 5.1				
3	坏 土師器	A 12.4	底部から口縁部片。丸底。体部は緩やかに内傾して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。内・外面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア 灰青褐色	P365 70% 床面
		B 3.5				
4	坏 土師器	A 11.2	底部から口縁部片。丸底。体部は緩やかに内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内面黒色処理。器面割傷。	長石・雲母 褐色 不良	P369 40% 二次焼成
		B (2.6)				
5	坏 土師器	A 13.6	底部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内・外面黒色処理。	石英・雲母 黒色 普通	P367 10% 敷土中
		B (4.4)				
6	坏 土師器	A (14.2)	体部から口縁部片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部との境に段を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、ナデ、内面ナデ。	雲母・スコリア にぶい赤褐色 不良	P366 70% 敷土中 PL117 二次焼成
		B (6.0)				
7	兼 土師器	A (24.2)	体部1位から口縁部片。口縁部は外反し、肩部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P370 5% 敷土中
		B (6.2)				
8	兼 土師器	A 11.0	口縁部一部欠損。底部は平底で、突出する。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。鋭稜あり。底部へラ削り。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P371 90% 敷土中 PL117
		B 15.3				
		C 6.2				
9	兼 土師器	A 14.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P372 80% 床面 PL117
		B 17.9				
		C 7.3				

第138C号住居跡(第121回)

位置 調査区の西部、E2h1区。

重複関係 木跡は、第138B号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.92m、短軸5.42mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 高さ20~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅15~31cm、下幅4~9cm、深さ3~10cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は、長径50~75cm、短径38~59cmの楕円形、深さ69~78cmである。規模と配列から土柱穴と考えられる。P5は径32cmの円形、深さ37cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。袖部上面は、第138B号住居跡の構築の際に削平されたものと思われる。規模は、煙道部から焚き口部まで126cm、両袖最大幅148cm、壁外への掘り込みは48cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変硬化している。火床部は、床面を4cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変硬化している。煙道部も赤変硬化し、立ち上がりは緩やかである。

覆土層解説

- 1 褐色 ローム・粘土粒子少量, 焼土・炭化粒子微量
 2 褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化物微量
 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量

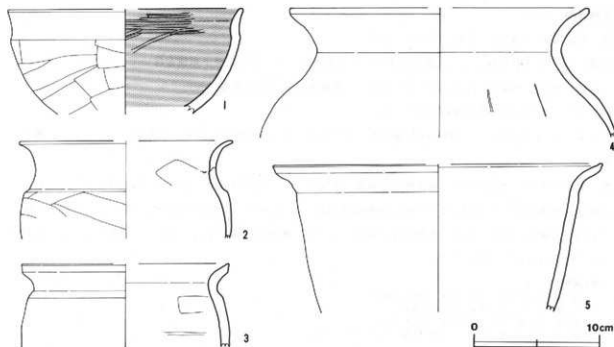
覆土 6層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化物微量
 4 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
 5 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土・炭化粒子微量
 6 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土・炭化粒子微量
 7 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量
 8 褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片 8点(坏片7点, 甕片1点), 須恵器片1点(甕片1点)が出土している。覆土下層では、第124図4の土師器甕が北壁付近から、2の土師器甕、5の土師器甕が西壁付近から出土している。床面では、1の土師器坏が北東コーナー部付近から、3の土師器甕が北壁付近から出土している。

所見 本跡は、東部の覆土下層に炭化材や焼土塊がみられることから、焼失家屋と思われる。時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀中葉と考えられる。



第124図 第138C号住居跡出土遺物実測図

第138C号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	坏 土師器	A [18.0] B (8.3)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	長石・石英・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P373 40% 床面 二次焼成
2	甕 土師器	A [16.7] B (7.7)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部内面一部ヘラナデ。体部外面ヘラ削り、内面ナデ。輪襷み痕。	長石・石英・雲母・スコリア 黄橙色 普通	P376 10% 覆土中

図版番号	器 種	寸法値(cm)	形 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第124図 3	壺 土 師 器	A [16.3] B (6.6)	体部から口縁部片、体部は内等気味に立ち上がり、口縁部は外反する。頸部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外両横ナデ。体部外面ナデ。内面ヘウナデ。	長石・石英 褐色 普通	P.377 覆土中
4	壺 土 師 器	A [23.8] B (10.2)	体部から口縁部片、体部は内等気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外両横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・雲母 スコリア 褐色 普通	P.374 覆土中
5	瓶 土 師 器	A [26.0] B (11.7)	体部から口縁部片、体部は外翻し、口縁部はわずかに外反する。頸部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外両横ナデ。体部内・外面ナデ。内・外面無色処理。	長石・石英・スコリア 黒褐色 普通	P.375 覆土中

第139号住居跡 (第125図)

位置 調査区の西部、E 2 f 3区。

覆層関係 本跡は、第138A号住居跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.95m、短軸3.76mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は30~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第138A号住居跡によって掘り込まれている南西コーナー部と北壁下東側を除いて、壁下を巡っている。

上幅19~28cm、下幅8~12cm、深さ4~8cmで、断面形はU字状である。

床 平垣で、中央部は踏み固められている。

ピット P1は長径22cm、短径19cmの楕円形、深さ35cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。大井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から狭き口部まで90cm、両袖最大幅142cm、壁外への掘り込みは19cmである。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けか変している。煙道部は緩やかに立ち上がり、傾出し部付近で角度を変えてほぼ垂直に立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗 褐色 粘土粒子少量、炭上・炭化粒子微量
- 2 灰 褐色 粘土粒子多量、焼土粒少量
- 3 灰 褐色 粘土粒子中量、炭上・炭化粒子少量
- 4 暗 赤褐色 炭上粒子中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック微量

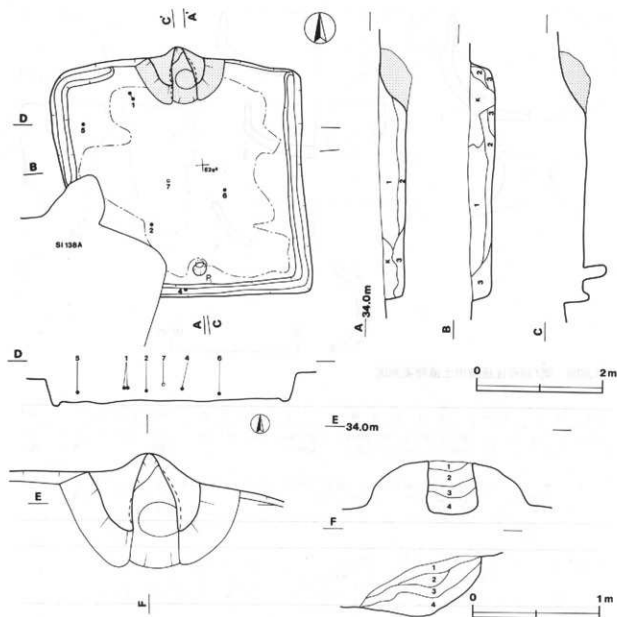
覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量

遺物 土師器片180点(坏片54点、壺片126点)、須恵器片10点(坏片8点、壺片2点)、石製品1点、縄文土師器片1点、含鉄滓50.0gが出土している。覆土上層では、第126図1の土師器坏が竈西袖部付近から、2の土師器坏が中央部南西側から、4の土師器坏が南壁際から、7の砥石が中央部から出土している。覆土下層では、5の上師器高坏が西壁付近から、6の土師器甕が中央部から出土している。その他、覆土中から3の土師器坏が出土している。

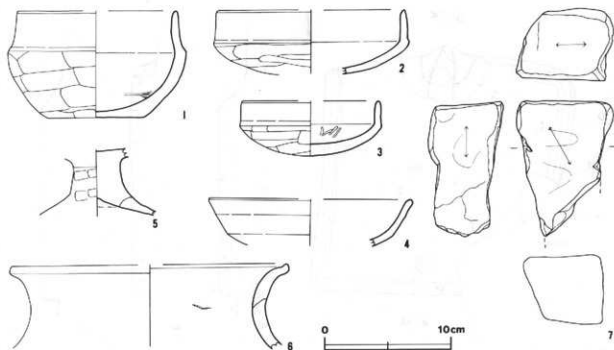
所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後半と考えられる。



第125図 第139号住居跡実測図

第139号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地成	備考
第126図 1	坏 土器	A [12.5] B 8.4 C 7.6	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。底部へラ削り後、ナデ。	長石・石英・スコリア にふい橙色 普通	P378 60% 覆土中 PL118 二次焼成
2	坏 土器	A [12.5] B (8.4)	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石・石英・スコリア にふい橙色 普通	P379 40% 覆土中 二次焼成
3	坏 土器	A [15.8] B (3.7)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面口口ナデ。	雲母・スコリア にふい橙色 普通	P380 30% 覆土中 二次焼成
4	坏 土器	A [10.6] B 4.3	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面へラ磨き。	長石・石英・スコリア にふい橙色 普通	P381 30% 覆土中 二次焼成



第126図 第139号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第126図 5	高土師器	B (5.3) E (4.4)	脚部及び裾部片。脚部は凹筒状で裾部でハの字状に大きく開く。	脚部外面へウ削り。裾部内面ナデ。輪襖み痕。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P382 40% 履土中 PL118 二次焼成
6	粟土師器	A [21.6] B (6.7)	口縁部片。口縁部は外反し、端部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。輪襖み痕。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P383 10% 履土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	砥石	10.7	7.8	5.7	535.3	砂岩	履土中	Q29 PL174

第140号住居跡 (第127図)

位置 調査区の西部, E 2 i l 区。

規模と平面形 長軸3.55m, 短軸3.35mの方形である。

主軸方向 N-0°

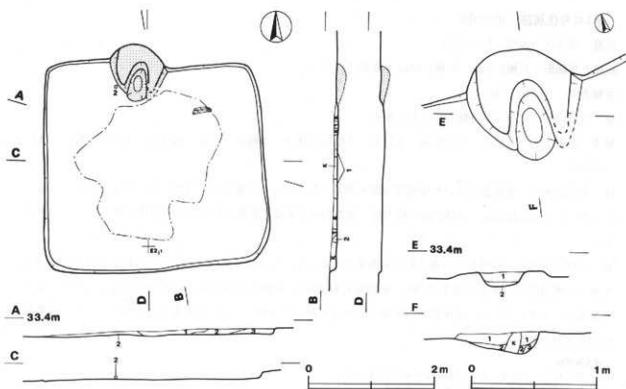
壁 壁高は2~8cmである。上部が削平されて低いため、立ち上がりの角度は明確にはわからない。

床 平坦で、中央部は踏み固められている。

竈 北壁中央部に、砂じりの褐色粘土で構築されている。袖部上面は削平されており、遺存状態はよくない。規模は、煙道部から焚き口部まで64cm, 両袖最大幅85cm, 壁外への掘り込みは1cmである。火床部は、床面を12cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土・炭化・ローム・粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, 炭化・ローム粒子微量
- 3 褐色 焼土・ローム粒子少量, 炭化粒子微量



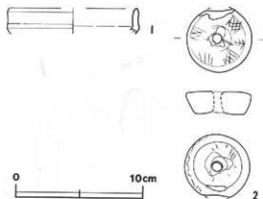
第127図 第140号住居跡実測図

覆土 3層からなるが、覆土が浅いため、堆積状況は明確でない。

土層解説

- 1 層 色 黄土・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 2 層 色 黄化・ローム粒子少量、焼土粒子・ローム中・小ブロック微量
- 3 層 色 炭化・ローム粒子微量

遺物 土師器片194点（坏片21点、甕片173点）、須恵器片3点（甕片3点）、石製品1点、縄文土器片1点、鉄滓48.4g、含鉄滓7.7gが出土している。第128図1の土師器坏は、覆土中から出土している。2の石製紡錘車は、竈西袖部付近の床面から出土している。



第128図 第140号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、時期判定できる遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、古墳時代後期と考えられる。

第140号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	坏 土師器	A [10.0] B (2.0)	体部上位から口縁部片。体部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	スコリアにぶい橙色 普通	P393 10% 覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
2	紡錘車	5.2	1.8	0.7	(64.8)	粘板岩床面	Q33級別 90% PL176	

第141号住居跡 (第129図)

位置 調査区の西部, E 2 f 2 区。

規模と平面形 長軸3.05m, 短軸2.94mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は22~47cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下から南壁下にかけて巡っている。上幅16~36cm, 下幅3~14cm, 深さ3~4cmで, 断面形はU字状である。

床 凹凸があり, 北東部を除いた中央部は踏み固められている。北東部は, 耕作による攪乱を受けている。

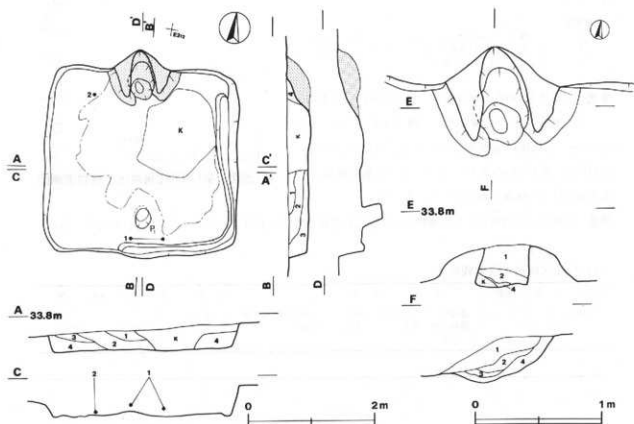
ピット P1は長径32cm, 短径25cmの楕円形, 深さ33cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に, 砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚き口部まで79cm, 両袖最大幅118cm, 壁外への掘り込みは30cmである。袖の内壁は, 火熱を受けて赤変している。火床部は, 床面を6cmほど掘りくぼめており, 火熱を受け赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土・炭化粒子少量, 炭化物微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量

覆土 4層からなり, レンズ状の堆積を示し, 自然堆積である。



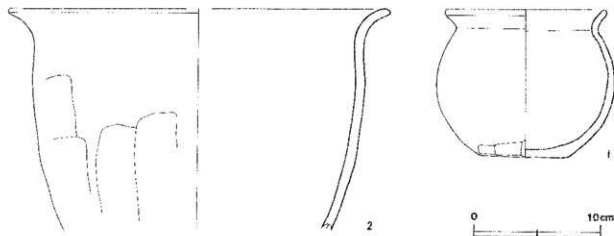
第129図 第141号住居跡実測図

土層解説

- 1 褐色 ローム大・小ブロック・ローム粒子中量、炭土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土・炭化・ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量
 3 明褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭土・炭化粒子微量
 4 褐色 ローム粒子中量、炭土粒子少量、炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量

遺物 土師器片40点(坏片5点、焼片35点)が出土している。第130図1の土師器甕が南壁付近の覆土上層から出土している。2の土師器甕が北西コーナー部付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、時期判定できる遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、6世紀と推えられる。



第130図 第141号住居跡出土遺物実測図

第141号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第130図	甕 土師器	A 12.5	底唇から口縁部片、平底。体部は内身して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。器面花れ。	長石・石英・雲母に多い粒色雲母	P305 60% 覆土中 PL118
		B 11.7				
		C 7.0				
2	甕 土師器	A [29.9]	体部から口縁部片。体部は緩やかに内身しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のへラ削り、内面ナデ。	長石・石英 灰黄褐色 雲母	P204 20% 覆土中
		B (17.4)				

第142号住居跡(第131図)

位置 調査区の東部、E3 j7区。

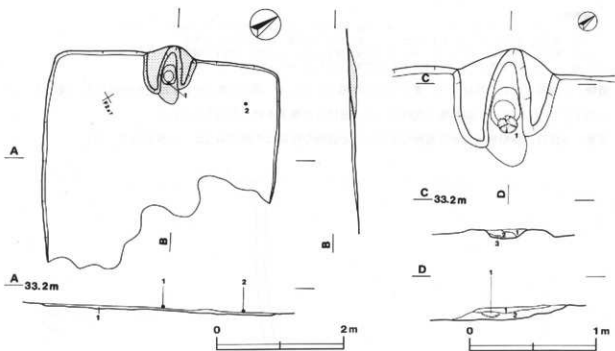
規模と平面形 斜面部で東側半分が削平されていることから、規模と平面形は明確ではないが、残存している壁や床面から一辺が3.71mの方形と推定される。

主軸方向 N-56°-W

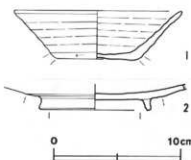
壁 壁高は3~6cmで、緩やかに立ち上がる。

床 平垣で、踏み固めた部分はみられない。南東部は、削平されて残存していない。

竈 北西壁中央部に、砂泥じりの褐色粘土で構築されている。竈の上部は、削平されて残存していない。板模は、煙道部から突き上部まで92cm、阿輪最大幅84cm、壁外への掘り込みは17cmである。火床部は、火熱を受けて赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。



第131図 第142号住居跡実測図



第132図 第142号住居跡出土遺物実測図

覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化・ローム粒子少量、焼土中ブロック微量
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量

覆土 単一層であり、堆積状況は明確でない。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片20点（壺片20点）、須恵器片5点（坏片3点、高台付坏片2点）が出土している。第132図2の須恵器高台付皿が北コーナー部付近の覆土下層から出土している。壺内からは、1の須恵器坏が正位で出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

第142号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	坏 須恵器	A 13.2	底部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り。	長石・石英 明艶灰色 普通	P 296 90% 壺内 PL118 二次焼成
		B 3.8				
		C 6.6				
2	高台付皿 須恵器	B (2.1)	高台部から口縁部片。高台はハの字状に開く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面クロコナテ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、高台貼付け。	長石・石英 灰黄褐色 普通	P 297 60% 覆土中 PL118
		D 8.6				
		E 0.9				

第144号住居跡（第133図）

位置 調査区の中央部、E 2 e 6 区。

重複関係 本跡は、第45号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.12m、短軸4.05mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

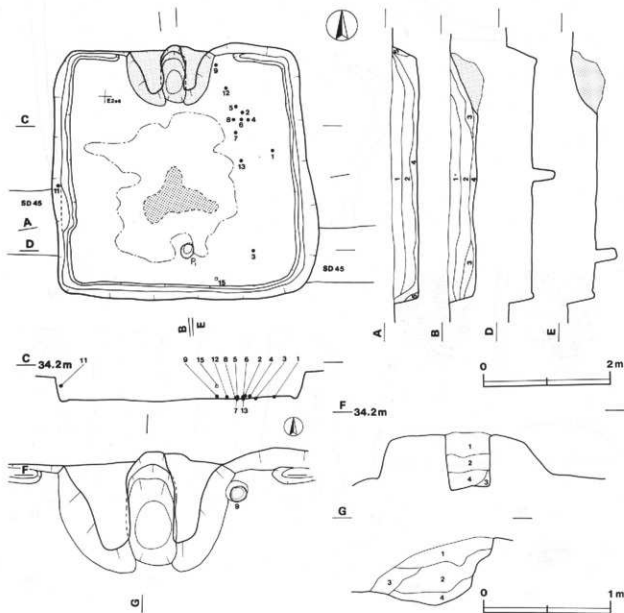
壁 壁高は39~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅12~38cm、下幅4~12cm、深さ3~4cmで、断面形はU字状である。

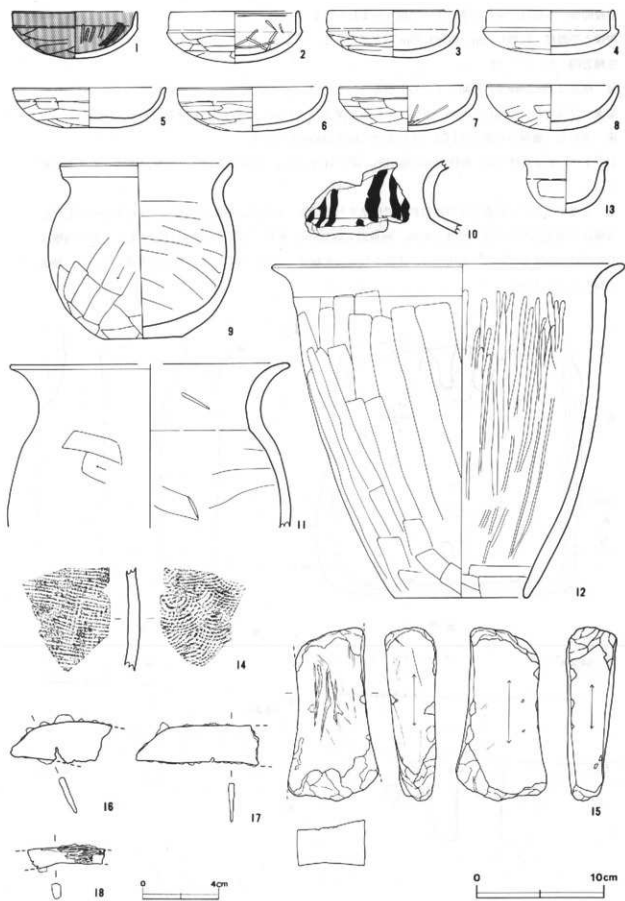
床 平坦で、竈前から出入り口ピットにかけて踏み固められている。

ピット P1は長径23cm、短径19cmの楕円形、深さ34cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から吹き口部まで90cm、両袖最大幅135cm、壁外への掘り込みは11cmである。袖の内壁は、火熱を受けて赤変している。火床部は、床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変している。煙道部は外傾して立ち上がる。



第133図 第144号住居跡実測図



第134图 第144号住居跡出土物実測図

覆土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化物・炭化・ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 暗褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化物・炭化・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 焼土・ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 5層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 3 暗褐色 焼土・炭化粒子少量、ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量

遺物 土師器片576点（坏片85点、高台付坏片3点、甕片488点）、須恵器片14点（甕片14点）、石製品1点、鉄製品1点、縄文土器片2点が出土している。覆土上層では、第134面11の上師器甕が内椀際から、15の磁石が南壁付近から出土している。覆土下層では、2、4、5、6、8の上師器坏が中央部北東側から、9の土師器甕、12の土師器甕が竈東輪部付近から出土している。2、6、8、11は正位の状態、4、5は逆位の状態、12は横位の状態で出土している。床面では、1の上師器坏が東壁付近から、3の土師器坏が中央部南東側から、7の土師器坏が中央部北東側から、13のミニチュア土器が中央部東側から出土している。1、3、7は正位の状態、13は逆位の状態で出土している。その他、覆土中から10の土師器甕、16、17の鏝、18の刀子蓋が出土している。14は須恵器甕の体部片で、外面格子印き、内面同心円当て具痕が施されている。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から7世紀中葉と考えられる。

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第134面 1	坏 土師器	A 10.0	丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り後、ナデ、内面へウ磨き。内・外面黒色焼成。	長石・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P398 100% 覆土中 PL118 二次焼成
		B 3.7				
2	坏 土師器	A 10.2	口縁部一部欠損。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り、内面へウ磨き。	雲母・スコリア に多い黄褐色 普通	P399 95% 覆土中 PL118 二次焼成
		B 4.1				
3	坏 土師器	A 10.2	口縁部一部欠損。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り、内面ナデ。	尖母 明赤褐色 普通	P400 95% 床面 PL118 二次焼成
		B 3.8				
4	坏 土師器	A 10.0	底部から口縁部片。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り、内面ナデ。器面滑。	石英・雲母・スコリア に多い黄褐色 普通	P401 70% 覆土中 二次焼成
		B 3.5				
5	坏 土師器	A 12.0	体部から口縁部一部欠損。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り後、ナデ、内面ナデ。	石英・雲母・スコリア に多い赤褐色 普通	P402 90% 覆土中 PL118 二次焼成
		B 3.1				
6	坏 土師器	A 11.8	口縁部一部欠損。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り、内面ナデ。	雲母・スコリア に多い黄褐色 普通	P403 90% 覆土中 PL118 二次焼成
		B 3.5				
7	坏 土師器	A 10.8	口縁部一部欠損。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り、内面放射状のへら磨き。	石英・雲母・スコリア に多い黄褐色 普通	P404 90% 床面 PL118 二次焼成
		B 3.5				
8	坏 土師器	A 10.5	体部、口縁部一部欠損。丸底、体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ丸削り、内面ナデ。	長石・石英・雲母・スコリア に多い褐色 普通	P405 90% 覆土中 PL118 二次焼成
		B 3.5				

図取番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・装成	備 考
第134図 9	甕 土 師 器	A 13.7 B 14.0 C 6.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内 斡して立ち上がり、口縁部は外反 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り、内面ヘラナデ。底部ヘ ラ削り後、ナデ。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P408 95% 覆土中 PL118
10	甕 土 師 器	-	口縁部片。口縁部は外反する。端 部欠損。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部外 面に雲雲。	石英・雲母・スコ リア にぶい黄褐色 普通	P407 5% 覆土中 PL118
11	甕 土 師 器	A [22.3] B (12.9)	体部から口縁部片。体部は内斡気 味に立ち上がり、口縁部は外反す る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後、ナデ。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・ スコリア 明赤褐色 普通	P406 10% 覆土中
12	甕 土 師 器	A 27.7 B 26.5 C 10.5	体部から口縁部一部欠損。笠取式。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 縦位のヘラ削り、内面縦位のヘラ 削り。体部内面下端ヘラ削り。	石英・雲母 にぶい黄褐色 普通	P409 95% 覆土中 PL118
13	ミニチュア 土 師 器	A 6.6 B 4.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 斡して立ち上がり、口縁部は外反 する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 ヘラ削り後、ナデ。内面ナデ。	雲母・スコリア 棕色 普通	P410 95% 床面 PL118 二次焼成

図取番号	器 種	計 測 値				石 質	出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
15	甕 土 師 器	13.6	7.2	4.1	432.8	凝 灰 岩	覆 土 中	Q35 PL174

図取番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
16	鉢	(5.3)	2.2	0.4	(7.5)	覆 土 中	M49 PL177
17	鉢	(5.4)	2.1	0.3	(10.3)	覆 土 中	M70 PL177
18	刀 子 茶	(4.1)	1.0	0.5	(4.4)	覆 土 中	M73 PL178

第145A号住居跡 (第135・136図)

位置 調査区の中央部、E2d8区。

重複関係 当初、1軒の住居跡として調査したが、床下から踏み固められた床面と壕溝が検出されたことから、上位のものを第145A号住居跡、下位のものを第145B号住居跡とした。4か所の主柱穴は、すぐ外側にもそれぞれ柱穴が掘られていた。内側の柱穴内の覆土はロームブロックが多く、埋め戻されたと考えられることから、外側のものを第145A号住居跡に伴う主柱穴、内側のものを第145B号住居跡に伴う主柱穴とした。また、第145A号住居跡は第44号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.92m、短軸6.91mの方形である。

主軸方向 N-0°

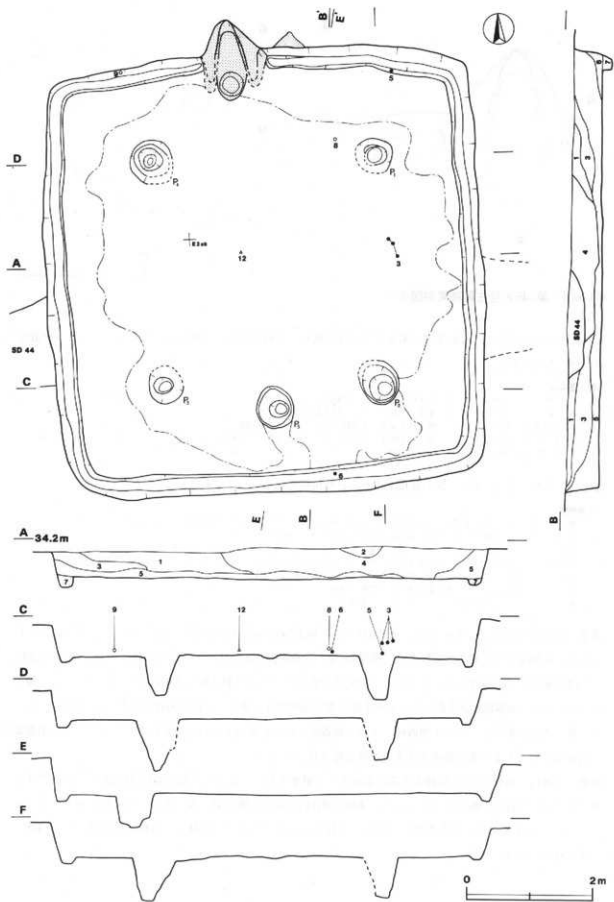
壁 壁高は49~76cmで、緩やかに立ち上がる。

壁溝 全周する。上幅25~44cm、下幅8~21cm、深さ6~16cmで、断面形はU字状である。

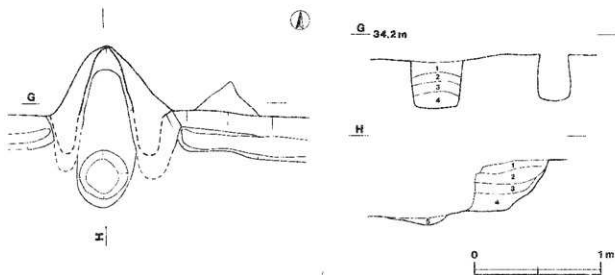
床 平床で、中央部は踏み固められている。

ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は、長径60~75cm、短径52~68cmの楕円形、深さ48~82cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径32cm、短径27cmの楕円形、深さ50cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。袖部は削平され、東袖部の一部が残存しているだけである。天井部は崩落している。規模は、煙道部から焚き口部まで127cm、両袖最大幅 [10]cm、壁外への



第135图 第145A号住居跡実測图(1)



第136図 第145A号住居跡実測図(2)

掘り込みは51cmである。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて変色している。竈道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 紫 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化・ローム粒子微量
- 2 暗 褐色 焼土小ブロック・焼土・炭化・ローム・粘土粒子微量
- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・炭化・ローム粒子微量
- 4 暗 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗 赤褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量

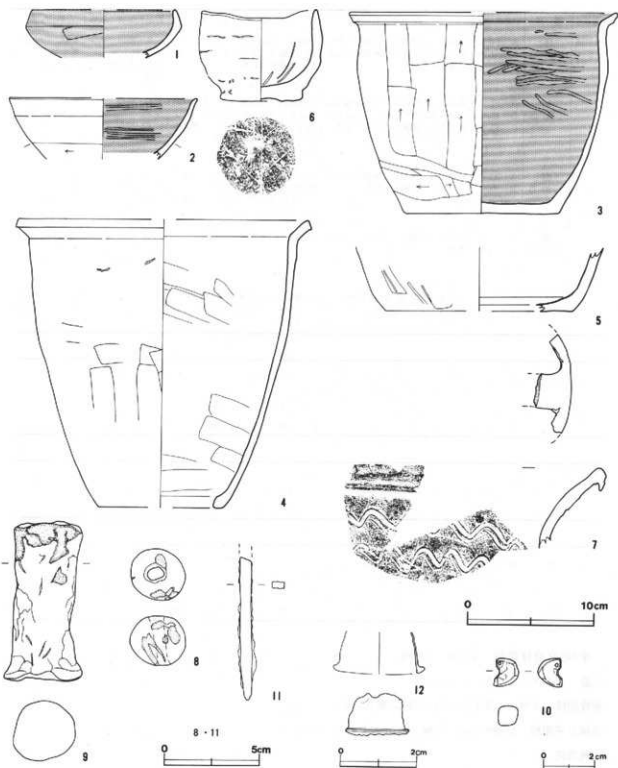
覆土 7層からなり、レンズ状の地積を示し、自然地積である。

土層解説

- 1 紫 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 4 暗 褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 紫 色 焼土・ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック微量
- 6 暗 褐色 焼土・ローム・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 紫 色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片1850点(坏片385点、甕片1465点)、須恵器片56点(坏片43点、甕片13点)、土製品2点、石製品1点、鉄製品1点、縄文土器片3点、鉄滓90.4g、含鉄滓98.2gが出土している。覆土中層では、第137図3の上師器甕が中央部東側から、8の上玉が中央部北側から、9の土製支脚が北壁際から出土している。覆土下層では、5の土師器甕が北壁際から、6の手捏土器が南壁際から横位で、12の銅鈴が中央部から出土している。その他、覆土中から1、2の上師器坏、4の上師器甕、10の石製勾玉、11の釘が出土している。7は須恵器甕の口縁部片で、1本2条の縞描波状文が2段に施されている。

所見 本跡は、第145B号住居跡の上部に貼床をして構築されていること、第145B号住居跡の支柱穴のすぐ外側にそれぞれ支柱穴が掘られていること、本跡が第145B号住居跡の東・西・南の三方の壁を掘り込んでいることから、第145B号住居跡を拡張して構築した住居跡と考えられる。時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀後半と考えられる。



第137図 第145A号住居跡出土遺物実測図

第145A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第137図 1	坏 土器	A [11.4] B (3.8)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へタ削り、内面ナデ。内・外面黒色処理。	雲母 黒褐色 普通	P412 25% 覆土中

図版番号	器 種	計測値(cm)	形 容 の 特 徴	手 法 の 着 眼	胎土・色調・地成	備 考
第139図 2	環 土師器	A 14.8 B (4.8)	体部から口縁部片。体部は内腹気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面ロクロナデ。内面へラ磨き。体部下溝面へラ磨り。内面黒色処理。	石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P411 25% 覆土中 二次地成
3	罎 土師器	A 21.4 B 15.9 C 12.2	底部から口縁部片。平底。体部は内腹気味に立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位から下位にかけて縦位のへラ磨り下位横位のへラ磨り。体部内面へラ磨き。底部多方向のへラ磨り。内面黒色処理。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P412 70% 覆土中 PL118
4	瓶 土師器	A 23.0 B 23.7 C (9.8)	底部から口縁部片。無底式。体部は外傾し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面上位横位の平行削き。中位から下位にかけてへラ磨り。体部内面へラナデ。	雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P414 30% 覆土中 二次地成
5	瓶 土師器	B 15.0 C 14.6	底部から体部片。多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面へラ磨り。内面ナデ。	石英・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P415 5% 覆土中 二次地成
6	手押土器 土師器	A 9.1 B 7.3 C 6.5	口縁部一部欠損。体部は内腹して立ち上がり、口縁部に至る。底部は突出する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部外面輪破み痕。底部木炭灰。	長石・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P416 95% 覆土中 PL118 二次地成

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	径 (cm)	孔径(cm)	重量(g)		
8	土 甕	2.7	2.9	0.8	(19.6)	覆土中	DP55 90% PL167
9	支 脚	12.8	6.2	-	(401.5)	覆土中	DP31 95% PL172

図版番号	器 種	計 測 値					石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
10	匂 玉	1.1	1.0	0.8	0.1	1.2	磁 土	覆土中 Q27 99%	

図版番号	器 種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
11	釘	(7.4)	0.6	0.4	(6.0)	覆土中	M50 PL179
12	銅 鈴	(1.1)	(2.4)	0.1	(0.4)	覆土中	M71 PL179

第145B号住居跡(第138・139図)

位置 調査区の中央部、E2 d8区。

重複関係 本跡は、第145A号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.49m、短軸5.21mの長方形である。

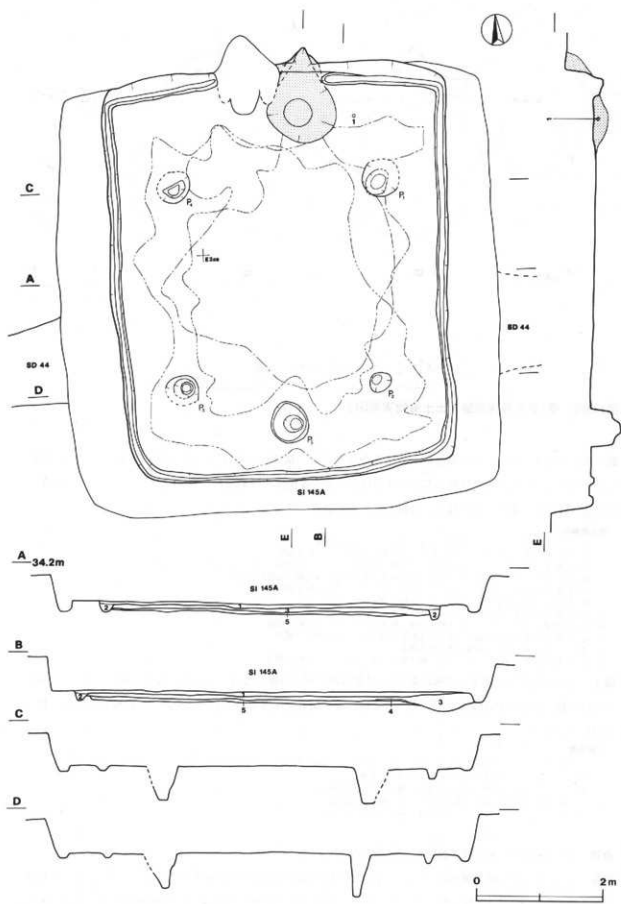
主軸方向 N-0°

壁 壁高は57~72cmで、外傾して立ち上がる。

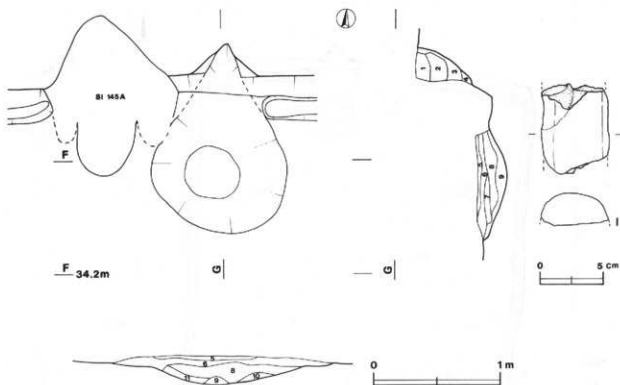
壁溝 全周する。上幅13~36cm、下幅4~12cm、深さ5~14cmで、断面形はU字状である。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。その床下約5cmのところから平坦で踏み固められた部分が検出され、さらにその床下約3~5cmのところからも平坦で踏み固められた部分が検出された。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は、長径36~[62]cm、短径30~60cmの楕円形、深さ55~66cmである。規模と配列から主柱穴と考えられる。P5は長径63cm、短径70cmの楕円形、深さ35cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第138图 第145B号住居跡実測图(1)



第139図 第145B号住居跡・出土遺物実測図(2)

竈 北壁中央部に砂混じりの褐色粘土で構築されている。袖部は、第145A号住居跡の構築の際に削平され、残存していない。火床部と壁外の部分だけが残存する。規模は、煙道部から焚き口部まで [150]cm、壁外への掘り込みは25cmである。煙道部は、外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 焼土中・小ブロック・焼土・炭化・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化・ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・ローム中ブロック少量、焼土中ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化・ローム粒子微量
- 7 暗赤褐色 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック微量
- 8 暗赤褐色 焼土・ローム・粘土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化・粘土粒子少量、ローム小ブロック微量
- 10 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 11 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化・粘土粒子少量、焼土・ローム粒子微量

覆土 5層からなり、第1～2層は第145A号住居跡に対する貼床となっている。また、第3～4層は、第145B号住居跡に対する貼床となっている。さらに、第5層も貼床となっており、全部で3段階の床の張り替えが行われている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム大・小ブロック少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック多量、焼土小ブロック微量
- 4 灰褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 5 明褐色 ローム中・小ブロック多量、焼土小ブロック微量

遺物 第139図1の土製支脚が竈付近の床面から出土している。

所見 第145A号住居跡の貼床の下から、第145B号住居跡の貼床が2層検出されている。第145B号住居跡を拡張したものが第145A号住居跡であることから、第145B号住居跡の時期は、9世紀後葉以前と推定される。

第145 B号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第139図1	支脚	(7.1)	5.3	-	(101.7)	床面	DP56 10%

第147号住居跡 (第140図)

位置 調査区の西部, E 2 d 3 区。

規模と平面形 遺構の北側と南側が削平されているため, 正確な規模や平面形は不明であるが, 長軸2.48m, 短軸 [2.20]m の長方形と推定される。

主軸方向 N-85°-E

床 平坦で, 西側は踏み固められている。北側と南側の一部が, 削平されている。

竈 東壁中央部に構築されている。煙道部・袖部は削平されており, 火床部のみ残存する。規模は, 煙道部から焚き口部まで [63]cm, 壁外への掘り込みは [43]cm と推定される。火床部は, 床面を3cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けわずかに赤変している。

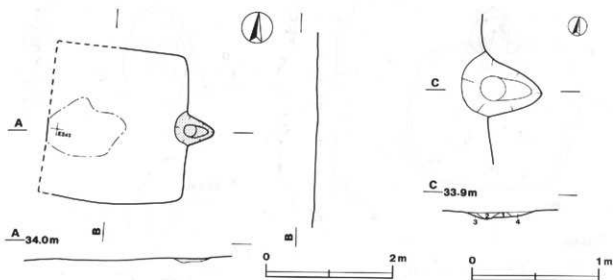
竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土小ブロック中量, 焼土・粘土粒子少量
- 2 赤灰色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中・小ブロック・粘土粒子少量
- 3 灰赤色 焼土・ローム・粘土粒子中量
- 4 暗赤灰色 焼土・ローム小ブロック・粘土粒子少量, 焼土粒子微量

覆土 覆土は, ほとんど残っていない。

遺物 非常に少なく, 土師器片28点 (壺片28点) が出土しているのみで, 図示できるものはない。

所見 出土遺物が少なく遺構の遺存状態もよくないため, 時期不明である。



第140図 第147号住居跡実測図

第148号住居跡 (第141図)

位置 調査区の西部, E 2 c 1 区。

規模と平面形 長軸2.72m, 短軸2.30m の長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は17~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、竈前から住居中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで101cm、両袖最大幅91cm、壁外への掘り込みは58cmである。袖の内壁は、火熱を受けて一部赤変している。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受け赤変しているが、硬化はしていない。火床部からは、土師器甕（口縁部欠損）と土師器杯（ほぼ完形）を逆位に重ね、支脚とした遺物が出土している。下部の甕の中には、焼土粒子を多量に含む暗赤褐色の土が確認された。煙道部は緩やかに立ち上がる。

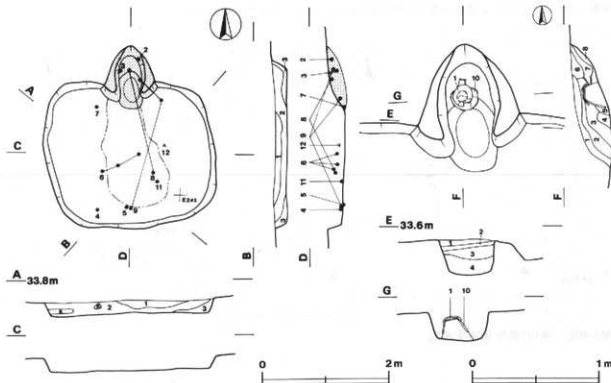
竈土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土大・中・小ブロック・炭化物・炭化・ローム・粘土粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム大・小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化・ローム・粘土粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子少量、焼土中・小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 7 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化・ローム・粘土粒子微量
- 8 に近い赤褐色 炭化粒子・ローム大・中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積を示し、自然堆積である。

土層解説

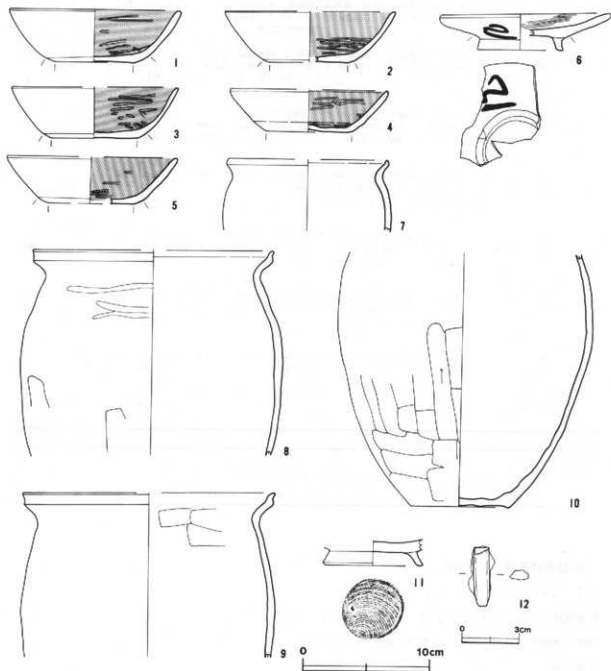
- 1 黒褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量



第141図 第148号住居跡実測図

遺物 土師器片358点（坏片8点、甍片350点）、須恵器片7点（坏片4点、甍片3点）、鉄製品1点、縄文土器片1点が出土している。第142図6の土師器高台付皿は、中央部の覆土上層から出土している。覆土下層では、7の土師器甍が竈西袖部付近から、11の須恵器高台付坏が中央部南寄りから、12の不明鉄製品が中央部東寄りから出土している。床面では、5の土師器坏が南壁付近から、4の土師器坏が南西コーナー部付近から出土している。竈内では、1、2の土師器坏が覆土上層から、3の土師器坏、10の土師器甍が覆土中層から出土している。8の土師器甍は、中央部の覆土上層の破片と竈内の破片が接合している。9の土師器甍は、中央部北側の覆土下層の破片と中央部南側の床面の破片と竈内の破片が接合している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



第142図 第148号住居跡出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・装束	備 考
第148図 1	坏 土 師 器	A 13.6 B 1.1 C 6.2	底部、口縁部 部欠損。体部は内 壁気味に立ち上がり、口縁部に至 る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内 面へう磨き。体部下端回転へう磨 り。底部回転へう磨り。内面黒色 施装。	赤灰・スコリア 明赤褐色 普通	P417 25% 遺内 PL119 二次焼成
2	坏 土 師 器	A 13.5 B 4.0 C 6.0	底部から口縁部片、平底。体部は 内壁気味に立ち上がり、口縁部に 至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内 面へう磨き。体部下端回転へう磨 り。底部回転へう磨り。内面黒色 施装。	石灰・雲母 にふい・褐色 普通	P418 25% 遺内 二次焼成
3	坏 土 師 器	A [13.2] B 4.0 C [6.8]	底部から口縁部片、平底。体部は 内壁気味に立ち上がり、口縁部に 至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内 面へう磨き。体部下端回転へう磨 り。底部回転へう磨り。内面黒色 施装。	石灰・雲母 褐色 普通	P419 25% 遺内 二次焼成
4	坏 土 師 器	A [12.5] B 3.4 C [6.7]	底部から口縁部片、平底。体部は 外傾して立ち上がり、口縁部に至 る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内 面へう磨き。底部回転へう磨り。 内面黒色施装。	長石・雲母 褐色 普通	P421 25% 遺内 二次焼成
5	坏 土 師 器	A 13.4 B 3.7 C [6.6]	底部から口縁部片、平底。体部は 外傾して立ち上がり、口縁部に至 る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内 面へう磨き。体部下端回転へう磨 り。底部回転へう磨り。内面黒色 施装。	石灰・雲母・スコ リア 褐色 普通	P420 25% 遺内 二次焼成
6	高台付 土 師 器	A 13.5 B 3.0 D [6.8] h 0.8	高台部から口縁部片。高台はハの 字状に開く。体部は外方に開いて 立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内 面へう磨き。体部下端回転へう磨 り。高台貼付け。外面黒色。	雲母 にふい・褐色 普通	P422 30% 履土中 PL116 二次焼成
7	実 土 師 器	A 12.6 B (5.8)	体部から口縁部片。体部は内壁し て立ち上がり、口縁部は外反する。 底部はわずかに外上方につまみ上 げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	石灰・雲母 にふい・褐色 普通	P426 10% 履土中
8	実 土 師 器	A 119.2 B (16.2)	体部から口縁部片。体部は内壁し て立ち上がり、口縁部は外反する。 底部は外上方につまみ上げられて いる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面 上位へう磨き。中位へう磨り。内 面ナデ。器底欠れ。	長石・石灰・雲母 明赤褐色 普通	P423 25% 履土中・遺内
9	実 土 師 器	A 29.0 B (13.0)	体部から口縁部片。体部は内壁気 味に立ち上がり、口縁部は外反す る。底部は外上方につまみ上げら れている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面へう磨り後、ナデ。器底欠れ。	長石・石灰・雲母 にふい・黄褐色 普通	P424 15% 履土中・床面・ 竈内
10	実 土 師 器	B (20.0) C 7.8	底部から体部片、平底。体部は内 壁して立ち上がる。	体部外面へう磨り。内面ナデ。器 底欠損。	長石・石灰・雲母 赤褐色 普通	P425 40% 履内
11	高台付 環 忍 器	B (2.1) D 7.9 E 1-1	高台部片。高台はハの字状に開く。	底部回転軸切り後、高台貼付け。	雲母 灰白色 良好	P428 10% 履土中

図版番号	器 種	計 測 値			出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
12	小形瓦製品	(3.1)	0.5	0.5	(4.2)	履 土 中 MS1

第149号住居跡 (第143図)

位置 調査区の西部、E 2 b2 区。

重複関係 本跡は、第39・53号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.55m、短軸3.22mの方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は36~48cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下の東寄りを除いて巡っている。上幅13~32cm, 下幅3~10cm, 深さ3~6cmで, 断面形はU字状である。

床 平坦で, 中央部は踏み固められている。

ピット P1は径30cmの円形, 深さ28cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部に, 砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 両袖部が残存している。規模は, 煙道部から焚き口部まで107cm, 両袖最大幅117cm, 壁外への掘り込みは63cmである。火床部は, 床面をわずかに掘りくぼめており, 火熱を受けわずかに赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

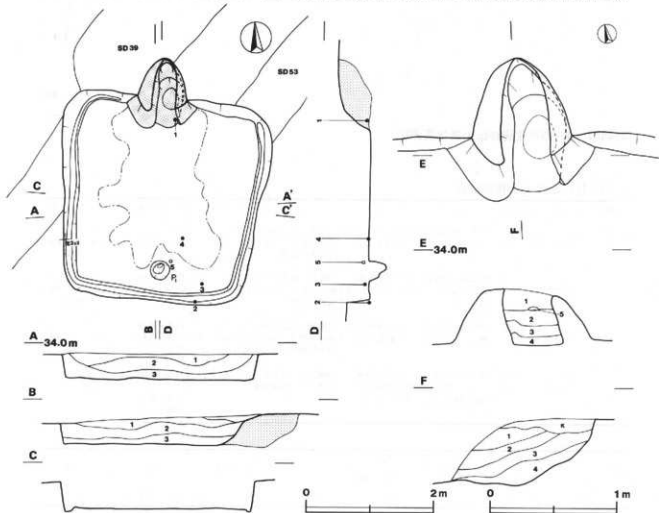
- 1 褐色 焼土小ブロック・焼土・炭化粒子・ローム中・小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土大ブロック中量, 焼土中・小ブロック少量, 炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 4 極暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム・粘土粒子微量
- 5 暗赤褐色 粘土粒子少量, 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

覆土 3層からなり, ローム小ブロックを含み不自然な堆積を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土・炭化粒子微量

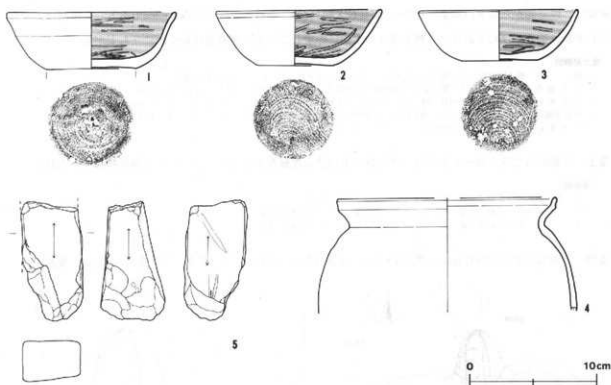
遺物 土師器片468点(坏片18点, 甕片450点), 須恵器片16点(坏片2点, 蓋片2点, 甕片12点), 石製品1点,



第143図 第149号住居跡実測図

鉄滓11.0gが出土している。覆土下層では、第144図3の土師器杯が南壁付近から正位で、5の砥石がP1付近から出土している。床面では、2の土師器杯が南壁際から横位で、4の土師器甕が中央部南寄りから出土している。竈内では、1の土師器杯が覆土下層から正位で出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態及び出土遺物から9世紀後葉と考えられる。



第144図 第149号住居跡出土遺物実測図

第149号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第144図 1	杯 土師器	A 13.5 B 4.4 C 7.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面へラ磨き。底部回転へラ磨り。内面黒色処理。	雲母・スコリアにふい・褐色 普通	P427 100% 竈内 PL119 二次焼成
2	杯 土師器	A 13.2 B 4.6 C 6.0	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面へラ磨き。底部回転糸切り。内面黒色処理。	長石・雲母にふい・褐色 普通	P428 95% 床面 PL119 二次焼成
3	杯 土師器	A 12.7 B 4.0 C 6.0	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部外面ロクロナデ、内面へラ磨き。底部回転糸切り。内面黒色処理。器面滑磨。	石英・雲母にふい・黄褐色 普通	P429 95% 覆土中 PL119 二次焼成
4	甕 土師器	A [17.4] B (9.0)	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。器面滑磨。	長石・石英・雲母・スコリアにふい・褐色 普通	P430 5% 床面

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	砥石	9.6	5.0	4.6	277.3	砂岩	覆土中	Q38 PL174

第150A号住居跡（第145区）

位置 調査区の西部，E2a2区。

重複関係 本跡が，第150B号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.16m，短軸4.65mの長方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 壁高は53～73cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁下と南東コーナー部を除いて通っている。上幅14～37cm，下幅3～15cm，深さ4～10cmで，断面形はU字状である。

床 平土で，中央部から西壁にかけて踏み固められている。

ピット 4か所（P1～P4）。P1～P4は，径46～58cmの円形，深さ34～50cmである。規模と配列から支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部に，砂泥じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，向袖部が残存している。規模は，竈道部から焚き口部まで103cm，向袖最大幅160cm，壁外への掘り込みは36cmである。火床部は，火熱を受け赤変している。竈道部は外傾して立ち上がる。

覆土層解説

- 1 灰褐色 粘土・砂子中量，焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土・粘土粒子少量，焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 3 灰褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量，粘土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土・炭化・ローム粒子微量
- 5 灰褐色 粘土粒子少量

覆土 3層からなり，レンズ状の堆積を示し，自然堆積である。

土層解説

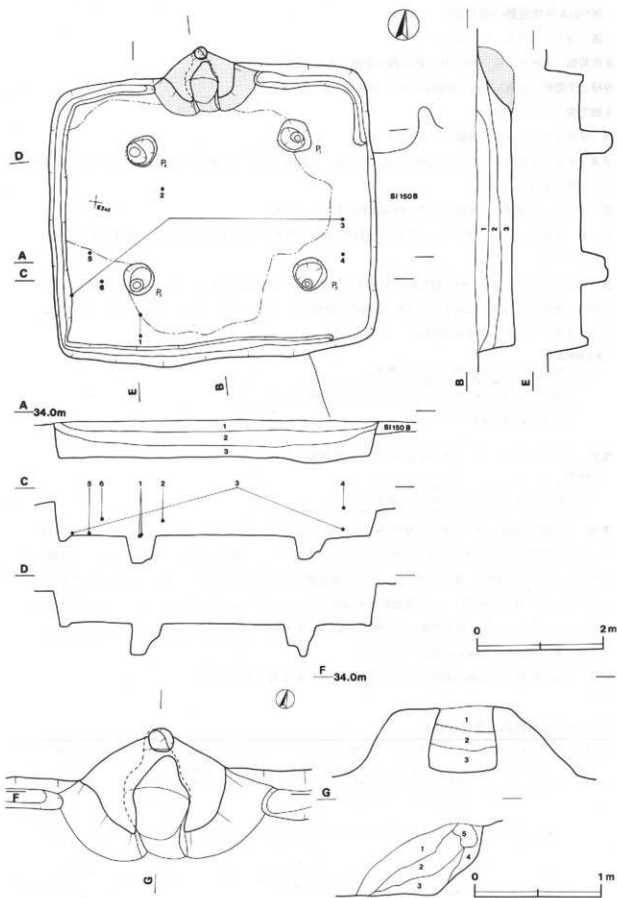
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量

遺物 土師器片390点（坏片100点，甕片290点），須恵器片56点（坏片17点，蓋片10点，甕片29点），石製品1点，縄文土器片2点，鉄滓161.5g，含鉄滓78.2gが出土している。覆土上層では，第146区4の須恵器蓋が東壁付近から出土している。覆土中層では，2の土師器甕が中央部北西寄りから，6の須恵器蓋が西壁寄りから出土している。覆土下層では，5の須恵器蓋が西壁付近から出土している。床面では，1の土師器坏が南壁付近から出土している。3の須恵器蓋は，西壁際の覆土下層の破片と東壁付近の覆土中層の破片が接合している。その他，覆土中から7の磁石が出土している。

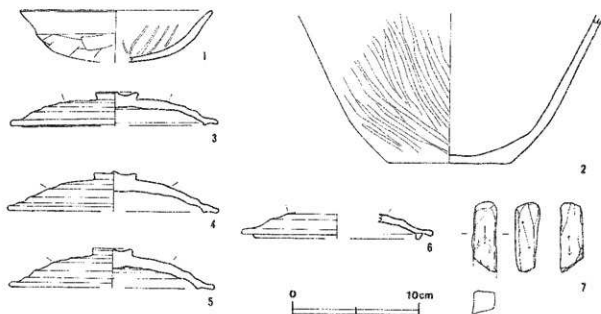
所見 本跡の時期は，遺構の形態及び出土遺物から8世紀前半と考えられる。

第150A号住居跡出土遺物観察表

区画番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第146区 1	坏 土師器	A 35.2	底部から口縁部片。丸底。体部は内傾して立ち上がり，口縁部との境に線を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り，内面放射状のヘラ磨き。	雲母・スコリア 褐色 普通	P431 60% 塚田 PL119
		B (4.2)				
2	甕 土師器	B (11.6)	底部から体部片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨き，内面ナデ。底部二方向のヘラ磨き。	長石・石英・雲母・スコリア 灰白色 普通	P432 15% 覆土中
		C 9.9				
3	甕 須恵器	A 16.4	つまみ部から口縁部片。ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は皿形をしていて，口縁部内面に冠いかりを持つ。	天井部外面四輪ヘラ削り，内・外面ロクロナデ。	石英・雲母・スコリア 灰白色 普通	P433 10% 覆土中 PL119
		B 2.6				
		D 3.4				
		G 0.6				



第145图 第150 A号住居跡实测图



第146図 第150A号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第146図 4	須恵器	A [16.6]	つまみ部から口縁部片、ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は煎形をしている。口縁部内面に短いかえりを持つ。	天井部外面回転へう削り。内・外面口クロナデ。	石灰・雲母 灰青色 良好	P434 覆土中
		B 3.1				
		F 3.3				
		G 0.6				
5	須恵器	A [16.2]	つまみ部から口縁部片、ボタン状の扁平なつまみが付く。天井部は煎形をしている。口縁部内面に短いかえりを持つ。	天井部外面回転へう削り。内・外面口クロナデ。	灰石・石英 灰青色 良好	P435 覆土中
		B 3.1				
		F 3.2				
		G 0.5				
6	須恵器	A [15.2]	口縁部片。口縁部内面にかえりを持つ。	天井部外面回転へう削り。内・外面口クロナデ。	灰緑・石英 に濃い灰青色 貫通	P436 覆土中
		B (2.0)				

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	甌	5.5	2.0	1.9	33.4	砂	層十中	Q39 P1.174

第150B号住居跡(第147図)

位置 調査区の西部、E 2 a 3区。

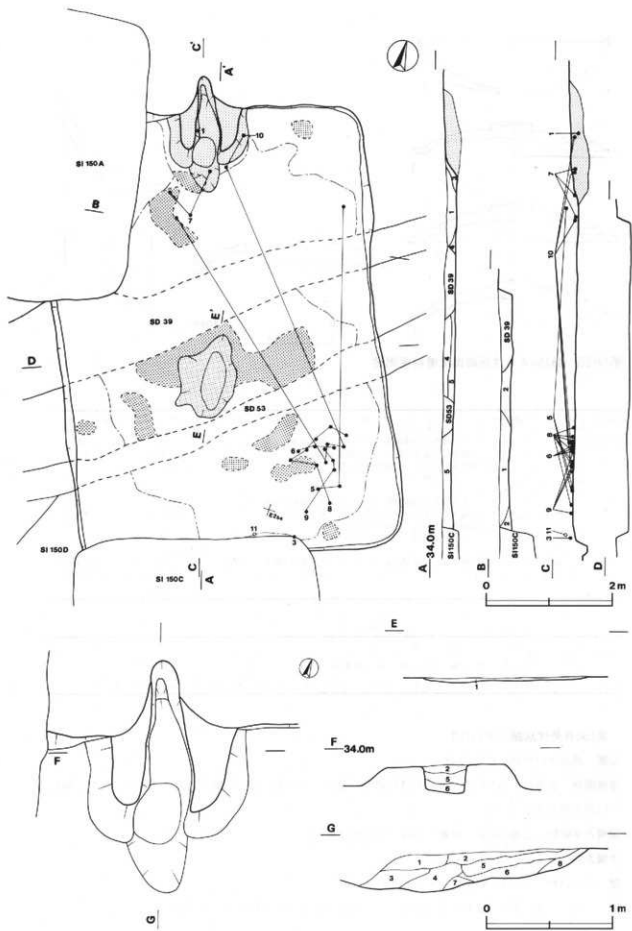
重複関係 本跡は、第150A・150C号住居跡及び第39・53号溝によって掘り込まれている。また、第150D号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸7.09m、短軸5.12mの長方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は18~23cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、溝に掘り込まれた部分を除いて、中央部はほぼ踏み固められている。



第147图 第150B号住居跡実測图

竪 北壁中央部に、砂混じりの褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、両袖部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで183cm、両袖最大幅127cm、壁外への張り込みは57cmである。火床部は、床面を約12cm張りくぼめており、火熱を受け赤変している。煙道部は緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土・炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 粘土粒子多量、焼土・炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土粒子少量
- 7 赤褐色 焼土粒子多量、焼土中ブロック中量、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土・ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 5層からなり、ローム中・小ブロックを多く含んでいることから人為堆積と考えられる。

土層解説

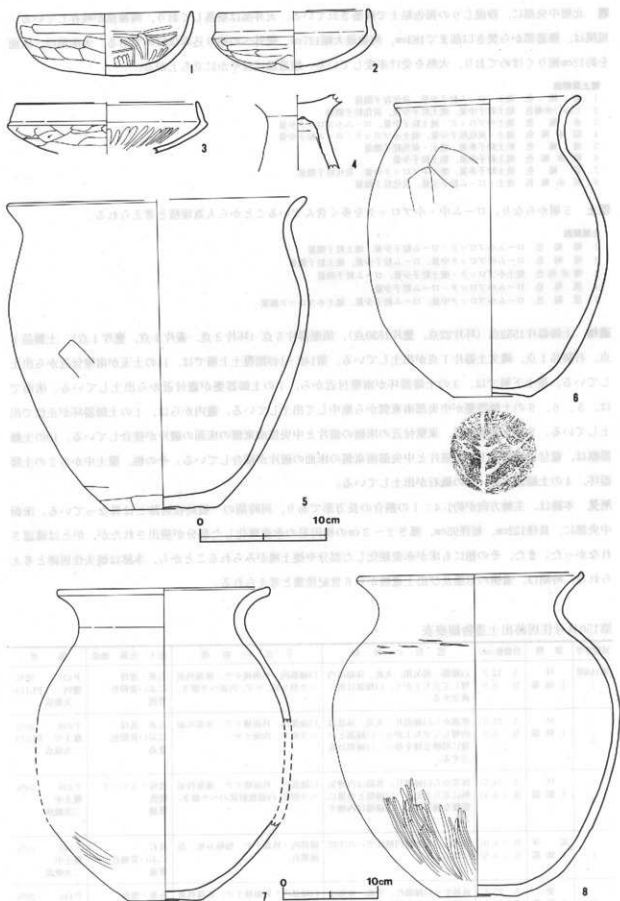
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量

遺物 土師器片1552点（坏片22点、甕片1530点）、須恵器片5点（坏片3点、蓋片1点、甕片1点）、土製品1点、石製品1点、縄文土器片1点が出土している。第148・149層覆土上層では、11の土玉が南壁付近から出土している。覆土下層では、3の土師器坏が南壁付近から、7の土師器甕が竈付近から出土している。床面では、5、6、9の土師器甕が中央部南東側から集中して出土している。竈内からは、1の土師器坏が正位で出土している。8の土師器甕は、東壁付近の床面の破片と中央部南東側の床面の破片が接合している。10の土師器甕は、竈付近の覆土上層の破片と中央部南東側の床面の破片が接合している。その他、覆土中から2の土師器坏、4の土師器高坏、12の砥石が出土している。

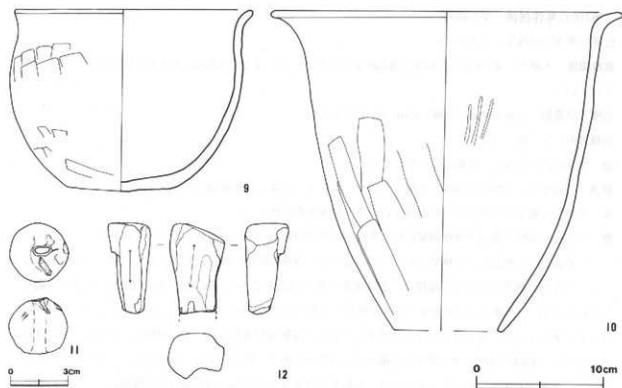
所見 本跡は、主軸方向が約1.4:1の割合の長方形であり、同時期の一般的住居跡とは異なっている。床面中央部に、長径132cm、短径95cm、深さ2～3cmの楕円形の赤変硬化した部分が検出されたが、かとは確認できなかった。また、その他にも床が赤変硬化した部分や焼土塊がみられることから、本跡は焼土住居跡と考えられる。時期は、遺構の形態及び出土遺物から6世紀後半と考えられる。

第150B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148層	1 土師器	A 13.7	口縁部一部欠部。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は広く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツ張り後、ナデ、内面へツ磨き。	石英・雲母にぶい黄褐色普通	P437 95% 覆土中 PL119 二次焼成
		B 3.6				
2	土師器	A 112.0	底部から口縁部片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線を挟つ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツ削り、内面ナデ。	石英・雲母にぶい黄褐色普通	P438 50% 覆土中 PL119 二次焼成
		B 5.0				
3	土師器	A 14.3	底部から口縁部片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線を挟つ。口縁部は内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツ削り、内面放射状のへツ磨き。	雲母・スコリアにぶい褐色普通	P439 10% 覆土中 二次焼成
		B (4.1)				
4	高土師器	B (6.0)	脚部片。脚部は円筒状でハの字状に開く。	脚部内・外面ナデ。輪詰め状。器面荒れ。	長石にぶい黄褐色普通	P440 10% 覆土中 二次焼成
		E (4.5)				
5	土師器	A 23.8	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へツ削り後、ナデ、内面ナデ	石英・雲母にぶい褐色普通	P441 90% 覆土中・床面
		B 24.5				
		C 8.5				



第148図 第150B号住居跡出土遺物実測図(1)



第149図 第150B号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第148図 6	甕 土師器	A 19.7	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後、ナデ、内面ナデ。底部木葉痕。器面荒れ。	長石・石英・スコリア に、ぶい褐色 普通	P442 65% 床面 PL119
		B 31.5				
		C 8.1				
7	甕 土師器	A 22.6	体部から口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P443 30% 覆土中
		B [14.2]				
		C 7.8				
8	甕 土師器	A 24.0	体部から口縁部一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ、下位へラ磨き、内面ナデ。底部一方向のへラ磨き。輪積み痕。	石英・雲母 にぶい褐色 普通	P441 85% 床面 PL119
		B 34.0				
		C 8.1				
第149図 9	甕 土師器	A 18.8	底部から口縁部片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。底部へラ削り。	長石・雲母 明赤褐色	P445 60% 床面 PL119
		B 14.5				
		C 8.4				
10	甕 土師器	A 27.8	底部から口縁部一部欠損。無底式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。器面荒れ。	石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P446 80% 覆土中・床面 PL120
		B 25.4				
		C [8.6]				

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
11	土玉	2.9	3.1	0.8	25.8	覆土中 DP57 100%	PL167

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
12	砥石	7.1	4.3	3.6	104.3	凝灰岩	覆土中 Q40	PL174